創立100周年記念事業

日本列島 中央分水嶺 踏査報告書

2007年1月

社団法人 日本山岳会

狩勝峠出発点（北海道支部）

前回の踏査テープにタッチ
（北海道支部）

吹雪がやみ樹氷の朝を迎える（北海道支部）

知駒岳のアンテナ群（北海道支部）

県境峠付近から秋田女神山を望む（秋田支部）

稜線上のブナの巨木（青森支部）

見梨峠の分水嶺公園（岩手支部）

白髭山湿地（秋田支部）

1037m 付近の分水嶺尾根
を踏査中(山形支部)

白髪山（しらひげやま）
から南方関山峠方面分
水嶺を望む
（宮城支部）

藪山グレードで、特上の密藪
（首都圏山岳地理クラブ）

栂森越しに蔵王を望む(福島支部)

幕営地出発時の記念写真
（首都圏アルパインスクキーラブ）

破風岳から毛無峠への分水嶺(首都圏丹水会)

P1706 より枯木山分岐（左側）方向を望む
（首都圏科学委員会）

ダム工事道路に繋がる国有林入口ゲート
（首都圏休山会）

越後沢山頂上直下で(越後支部)

八ヶ岳を望む稜線(山梨支部)

盤石のみになった三角点
(静岡支部)

(静岡・山梨支部)

大弛峠でバトンタッチ(静岡・山梨支部)

夏沢峠付近の風力発電(信濃支部)

スキー、ワカン、スノーシューと様々ないでたちで小鉢盛山を越え、鉢盛山を往復した。
(東海支部)

分水嶺最高所　乗鞍剣ヶ峰で踏査完了を祝う（富山支部）

三国岳と小野村割岳の間にある大杉
（京都支部）

太平洋側は桧の植林帯、日本海側は二次林
その間の分水嶺を歩く（岐阜支部）

小野村割岳で踏査完了を祝して万歳（京都支部）

かぎ形ピークから見た屏風山（石川支部）

上根峠(広島支部)

若丸山へ(福井支部)

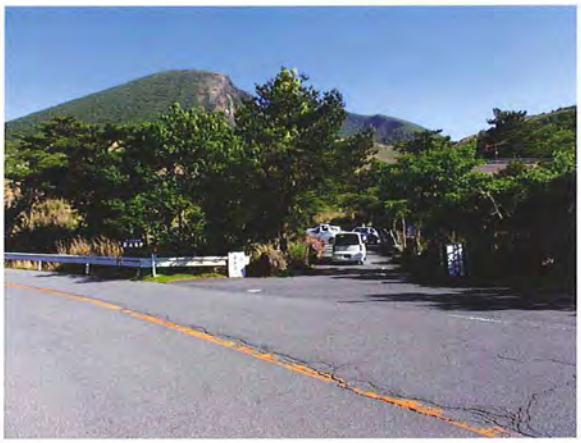
974.4m 峰の東稜線(広島支部)

高谷川が日本海方面写真上部にと瀬戸内海方面
写真左にとに分かれる所(関西支部)

犬狭峠でサポート隊とともに(山陰支部)

風師山より関門海峡を隔てた火の山方面（北九州支部）

分水嶺踏査達成（熊本支部）



韓国岳を望む（宮崎支部）

分水嶺上の越流堤（東九州支部）

スズタケを分け山頂の英彦山神社へ（福岡支部）

創立100周年記念事業

日本列島
中央分水嶺

踏査報告書

2007年2月

社団法人 日本山岳会

はじめに

中央分水嶺踏査委員会委員長　石　田　要　久

日本山岳会は2005年10月14日に創立100周年を迎えるに当り、記念事業の一つとして会員の全員参加を目標に、「中央分水嶺踏査」を企画した。この全長約5000kmに及ぶ中央分水界の踏査は、まさに本会ならではの全国的規模で進められ、実際の踏査開始から完遂までには実に3年有余の歳月を要したが、ここに報告書刊行の日を迎えることができた。

日本列島は、知られる通り三分の二以上が山地である。北海道、本州、九州の山々に降った雨水や雪解け水がやがて合わさり流れ行きつく先を、日本海か、太平洋（オホーツク海及び瀬戸内海）かに分けている分水界は、おおむねこれら列島の中央に背骨のように続いているため、中央分水嶺と呼ばれることが多い。

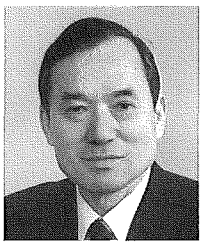
この線を国土地理院発行の日本地図に、描き入れるところから始めた。北は北海道の宗谷岬から、南は九州の佐多岬にいたる、そのおおよそ5000km余りの線に沿って、気候の変化は大きく、四季は多様、世界有数の豪雪地帯あり、あるいは思いもかけない低地の分水界、移動する分水界さえあることを知った。中央分水嶺上に踏み跡を残すには、藪をわけ道なき道を行くこともしばしばであり、参加者達のこれまでの山行経験や技術に加えて、新兵器（GPS）の導入が完遂を援けた。

山岳会創立以来、継承発展させてきた近代登山の精神を堅持して成し遂げられた数々の最高峰、未踏峰の登山活動と比べる時、この分水嶺踏査は地味な活動にみえる。しかしながら平均年齢60余歳を数えるこの会の会員達が、みな登山の原点にたちかえり、山岳会が本来目指しているパイオニア精神を自ずからに発揮した活動そのものであったと言える。

踏査の過程は、植生や地形、水利の現状をじかに観察し、担当地域の自然界を見直す得がたい機会であったと思われる。かつて栄えた峠越えの径や、山奥に残る海に因む地名、分水嶺を挟んだ生活の相違…などなど文化的にも興味深い問題は多い。それら貴重な事柄がここ報告編及び記録編（CD-ROM）に収めてある。読者がこの膨大な資料をひもとき活用して下さることを大いに期待し、この後の貴重な比較対象資料にされることと信じている。

厳しいコースも数多くあったなかで、お互いに協力しあい安全登山を心がけて事故も無く完遂出来たことを共に歓びあい、おわりに、様々な形でこの報告書作製にご協力いただいた方々に心よりお礼を申し上げたい。

巻頭言



日本山岳会会長　平　山　善　吉

日本山岳会は、2005年10月、創立100周年をむかえた。これを記念していくつかの事業を企画した中の一つが、この日本列島中央分水嶺踏査計画である。この計画は、北は北海道の宗谷岬から、南は九州の佐多岬まで、延長約5000kmに及ぶルートに足跡を印すという壮大なものである。

2001年11月、科学委員会によって出されたこの提案を、正式に記念事業として実施に移す段階からみれば、完遂までに5年の歳月を要し、本会会員が「全員参加」をモットーに、出来るだけ多くの会員に参加を呼びかけて行なった実際の踏査は、まさに三年余りに及んだ。

本書は、各支部や同好会の諸氏が闘志をもってこの踏査を進めてきた山行記録にとどまらず、その過程で調査観察を通し得られた成果を記している。いざ日本列島の脊梁へ実際に踏み入ってみると、未踏の山、未知の峠などもあり、踏破は勿論、位置の測定、確認には多くの困難を伴ったと聞いている。藪に覆われた行く手と強烈な藪こぎ、それを避けて積雪期にと、何回もの試行を要した山域の記録も多い。踏査は1,090名の会員と、本計画に賛同され共に歩いた一般の方々326名の協力によって達成することができた。

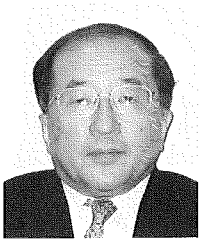
私自身、この踏査で北海道の他いくつかの支部の方々と、分水嶺の一部を歩く機会を得た。 また広島支部と山陰支部に跨る分水界上の古道を、地元の人々が私達の踏査計画にあわせて、甦らせ整備して下さった。謂うならばその分水嶺新道を支部会員と共に歩いた時は、山岳会のこの踏査事業と社会との繋がりを思い、嬉しく感じたものである。

踏査にあたっては科学兵器ともいうべき全地球方位測定器（GPS）が使用された。全グループはこれを持ち歩くことで、道なき道を行く援けになっただけでなく、客観的にも正確な足跡を地図上にしるすことが出来た。今回の調査記録については、国土地理院をはじめ、多くの専門家や興味をもつ方々に高く評価されるものと期待している。

特異な分水界をめぐるエピソードは数々あり、歴史を偲ばせる峠の変遷を見聞きし、新しい発見・発掘など、山の文化を学んだ踏査でもあった。ヒマラヤの高峰や世界の未知の地域に較べれば規模は小さくとも、今回の踏査で、日本列島にある未知の山域を踏み、新たな知見を得たことは、本会が本来目指すパイオニア精神の発露として大きな意義があるものと信じている。

あらためてこの計画の実施に尽力された支部、委員会、同好会など関係の皆さんと共に本書の刊行を喜びたい。

祝辞　中央分水嶺踏破に寄せて



国土地理院長　藤　本　貴　也

日本山岳会100周年記念事業「日本列島中央分水嶺踏査」のご成功おめでとうございます。北は北海道、宗谷岬から南は九州、佐多岬までおよそ5000kmにもおよぶ道程を踏破された偉業に、心より敬意を表します。

中央分水嶺とは雨水を太平洋側と日本海側に分ける境界だとうかがっています。「分水嶺」と同様の言葉として「分水界」がありますが、この分水界は「二つ以上の河川の流れを分ける境界」（広辞苑より）で分水線とも言われており、分水嶺とは「分水界となっている山脈。分水山脈」（同）を意味しているとのことです。中央分水嶺は山国日本を縦断するいわば背骨に当るわけですから、険しい山岳地帯が延々と続くばかりと思われますが、必ずしもそうではなく、兵庫県石生や岐阜県ひるがの高原では、一つの川が太平洋へ注ぐ流れと日本海に注ぐ流れとに分かれる分水地点があるそうです。

わたしたち国土地理院は、二万五千分一地形図やその作成の基礎となる三角点を通じてこの興味の尽きない中央分水嶺と深い関係があります。実際、今回の踏査事業に際し、ルートの確定等に二万五千分一地形図を多用してくださり、また数多くの三角点を確認して頂きました。

明治時代、国土地理院の前身である陸地測量部は、国の骨格形状を定めるため三角点の位置を正確に求める基準点測量を実施しました。現在の衛星測位とは違って、山頂などの見通しのきく場所にいくつも三角点を置いて相互の距離や角度を測る測量でした。一等三角点の場合は柱石の重さが89kgもあり、それを担いで山頂まで登った先人たちの苦労には想像を絶するものがあります。

最近では携帯用GPS測量機器などで、誰もが容易に自分の位置をリアルタイムで知ることが可能となりました。また、コンピュータの性能向上により、標高データと地図や写真を組み合わせて、分水嶺上空を飛行するフライトシミュレーションも簡単に行えるようになりました。コンピュータ画面上にバーチャル空間を構築し、いながらにして鳥になった気分を味わえる時代となってきています。しかし、このような新技術の世の中であっても、場所に関連する利用価値の高い詳細な情報の多くは、人の手によってはじめて得られるものです。

今回の踏査事業で、実際に中央分水嶺の詳細なルートを調査され、机上の想像やコンピュータでは得られない数多くの成果が得られたことと思います。三角点や地形図に関する情報など今回の成果は、私たち国土地理院の仕事にも活用させていただきます。それ以上に登山者にとって貴重な情報となることと思います。

中央分水嶺上に点々と続く三角点は、踏破された皆さんに何を語りかけたのでしょうか。これから報告書をひもとくことを楽しみにし、ここにあらためて壮大な事業の達成をお祝い申しあげます。

日本列島　中央分水嶺　踏査報告書

目　次

はじめに……石田要久　3

巻頭言……平山善吉　4

祝辞　中央分水嶺踏破に寄せて……藤本貴也　5

分水嶺踏査の意義……近藤善則　10

中央分水嶺踏査はこうして始められた……藤本慶光　12

中央分水嶺踏査は実施段階へ……森　武昭　14

総説　日本の大分水界……小疇　尚　16

解説　簡易 GPS 受信機による記録と踏査……宮崎紘一　21

余話　藪の中にあった宝物……福山美知子　24

北海道ブロック

総括　北海道中央分水嶺踏査の 3 年間……新妻　徹　28

北海道中央分水嶺 1132km 完全踏査……鈴木貞信　29

解説　アイヌ語の山名……高澤光雄　31

北海道支部　道北地区……32

道東地区……34

公募踏査・十勝岳と美瑛岳に参加して……宮津公一　35

道央地区……36

道南地区……38

余話　中央分水嶺送迎運転手として……藤内英夫　40

東北ブロック

青函トンネルを歩き抜ける……柳下棟生　42

青森支部　津軽地区……高橋、大久保、中村　44

秋田支部　奥羽北地区……佐々木民秀　46

余話　中央分水嶺と街道が織りなす峠の歴史模様……松田和弘　49

岩手支部　奥羽北地区……松田和弘　50
宮城支部　奥羽南地区……高橋二義　52
山形支部　奥羽南地区……渡辺　誠　54
余話　幻の小山田道路（猪野沢新道）……渡辺　誠　56
余話　水中分水嶺の横川堰……渡辺　誠　57
福島支部　会津地区……武藤、平野　58

関東甲信越ブロック

首都圏Ⅰ　山岳地理クラブ……北野忠彦　62
余話　御用邸まで巻き込んだ山名問題……遠山元信　63
山遊会……永田弘太郎　64
00会……佐藤允信　65
科学委員会……箕岡三穂　66
公募による踏査登山……向野、平野　67
アルパインスキークラブ……高原三平　68
山の自然学研究会……関　清　ほか　69
ゆきわり会……皆川恵男　70
越後支部　上越地区……横山征平　ほか　71
首都圏Ⅱ　つくも会……芹沢敏夫　73
01会……上野美裕　74
丹水会……國見ゆみ子　75
山げらの会……山げらの会　76
余話　分水嶺踏査　発祥の地？……近藤善則　76
山想倶楽部……西田和夫　77
解説　浅間山について……近藤善則　78
アルパインスケッチクラブ……冨樫、沼田　80
九五会……江口欣也　81
緑爽会……横山　隆　82
三水会……塩澤　厚　83
休山会……鈴木秀郎　84

静岡支部　甲信地区……山内真行 85
余話　衛星移動通信サービスを活用した情報伝達の試み……藤本慶光 86
山梨支部　甲信地区……深沢健三 87
信濃支部　信濃地区……中野和郎 89
フィナーレ踏査……分水嶺踏査委員会　北野、福山 91

中部ブロック

東海支部　木曾地区……堀　文昭 94
余話　峠の今昔……西山秀夫、堀　文昭 96
余話　分水嶺の自然環境、植生について……堀江召浩 98
富山支部　飛騨地区……木戸繁良 100
岐阜支部　飛騨地区……堀　義博 102
余話　お役人気質、今昔……堀　義博 104
余話　町村合併と分水嶺……近藤善則 105
福井支部　越前地区……宮本数男 106
余話　福井の山々と水……宮本数男 108
石川支部　越前地区……大庭保夫 110
余話　天狗党が越えた蠅帽子峠……大庭保夫 112

近畿・中国ブロック

京都支部　丹波地区……磯部　純 116
関西支部　丹後地区、東中国地区……金井良碩 118
余話　分水嶺の最低点……久保三朗 119
余話　支部の活動は四国の分水嶺踏査へ……金井良碩 121
山陰支部　中国地区……藤井信一郎 122
広島支部　西中国地区……佐々木弘磨 124
余話　西中国山地に「分水嶺新道」開通……兼森志郎 127
余話　本州西南端の山々……井上　佑 129
そして関門海峡をわたると……関口興洋 131
余話　関門トンネルを歩く……関口興洋 132

九州ブロック

北九州支部　山口地区……原、西村、磯野 134
北九州地区……板倉健一 136
地下にかくれた分水界　平尾台……板倉健一 136
解説　地表の分水界と地下の分水界……小疇　尚 137
福岡支部　北九州地区……浦　一美 138
東九州支部　東九州地区……飯田勝之 140
峠と山と湖……飯田勝之 142
自衛隊演習場内を踏査……飯田勝之 144
内匠の池と大船山の流域変更……飯田勝之 145
熊本支部　中九州地区……本田誠也 146
分水嶺の峠　三つの峠のメモから……本田誠也 148
宮崎支部　南九州地区……児島実照 150
本土最南端佐多岬への道……内山憲一 152

資料編

資料 1.　「中央分水嶺踏査登山」計画書 …… 156
資料 2-1.　中央分水嶺踏査担当区間 …… 159
2-2.　〃　首都圏担当区間 …… 159
資料 3-1.　山行報告書 …… 160
3-2.　山行報告書記入に当って …… 161
資料 4.　踏査率の推移 …… 162
資料 5.　G.P.S 測定データの比較表……宮崎紘一 163
資料 6.　踏査距離，参加日数，参加者数 …… 166
資料 7.　参加者氏名 …… 168
資料 8.　踏査を報ずる新聞記事 …… 178
資料 9.　全国分水嶺(界)サミット ……藤本慶光 179
資料 10.　添付した CD-ROM の内容について ……森　武昭 181
資料 11.　英文 Summary ……M. Fukuyama 182

あとがき……福山美知子
広告

分水嶺踏査の意義

分水嶺踏査委員会　近　藤　善　則

日本列島の中央分水嶺を歩き繋ぐという大イベントとなった創立100周年記念事業は、踏査が進むにつれて、なんとか途切れることなく完踏しようという、日本山岳会の伝統に息づくチャレンジ精神をむき出しにしたエネルギーの塊の動きに変わっていった。目標を一つに、これほどまでに多くの会員が参加し、総力を挙げた“山登り”が100年の歴史のなかであっただろうか？

この事業に企画から完了までフルに参加できた幸せを、今しみじみと感じている。

☆

山歩きの途上、冷たい湧き水にのどを潤し水の有難さを感じるとき　フと…・

我慢できなくなって木々の繁みに小キジを放ち、安堵のため息に　フと…

雲行きが悪くなり、ポツリポツリと来はじめたとき　フと…

———どこへ流れていくのだろう？

そんな素朴な思いから分水嶺に興味を持ち、地形図に線を引き、連なる山頂や峠をリストアップし、一覧表を作ってみたり、自分なりの地図を描いて、登山計画の羅針盤にしていた。分水嶺という言葉は、比喩的に色々な場面で使われているが、実際の分水嶺はどこを通って、どう連なっているのだろうか？分水嶺のこちら側とあちら側との交流は？生活に違いがあるのだろうか？　そんな好奇心から分水嶺を山登りのテーマとして、日本各地を訪ねていた。時に、想像していたものと大きく異なった風景に驚かされたり、或いは地元の方との思いがけない触れあいがあったり、地図にない道に紛れ込んだりしながら、断片的な興味がいつの日か日本列島の分水嶺を歩き繋ぎたいという思いに変わっていった。

一個人で歩き通すほどの体力も時間もないとしたら、大勢で分担したらどうだろう？と漠然と考えていた時、科学委員会の前理事、森武昭、藤本慶光、両氏から、この分水嶺踏査を100周年記念事業として提案するよう勧めがあり、事業委員会への提案に至った。

約5千キロの距離を歩くに要する時間の予測や段取りなど、全く見当もつかないまま、駅伝や聖火リレーなどの連想から、何かを受け継いで歩き通すことも考えていた。しかし北と南から同時にリレー方式で繋いでいくとしても、現実的には不可能である。そこで区域を細分し、全国の会員が同時進行で進める事を骨子にして、実行委員会で実施案を纏めていった。

分水嶺の殆んどは登山道のない、殆んど人の入らない未知の山域が多い。地元でしか判らない情報も多い。そこで出来るだけ各支部の活動地域を基準に、車の入れる場所で区切って担当域を決めたが、結果としてかなり分担量の不均衡が出てしまった。特に北海道支部の担当区間は1千キロにも及び、負担が大きすぎる危惧があったが、幸いにもいち早く「必ずやり通す！」との宣言を聞くにおよび、それは大きな推進力となった。

踏査内容は過去に行われた各支部の県境踏査などの記録を参考にして、多くの会員が参加できる日本山岳会の記念事業としてふさわしい在り方を考え、色々な面から踏査の内容を検討したが、できるだけ参加者に負担をかけない最低限の内容に絞られた。

地図上に山頂、峠、三角点などのポイントにナンバーを付け、分水嶺上の三角点の確認

をする、人口施設、地形図との相違点を記す、植生や地形などについてコメントする、と同時にGPSによる経緯度の測定値を統一した書式で報告してもらう事にした。それ以外は、登山形態などそれぞれの支部に全てお任せしたが、結果的には支部による取組み方の違いや地域性がでて、面白い結果になったのではないだろうか。

☆

分水嶺という境界は、地形的な水の流れを決める境界だけでなく、自然界の生き物や、人々の生活とも大きく係わり、日々刻々変化している事に気づかせてくれた。かつて分水嶺を越えて交流のあった古道は、草むらの中に消え、いまは痕跡すら見当たらない所もあり、今は立派なトンネルが開通して経済活動の一端を担い、その時間的距離が大幅に短縮されている。分水嶺の多くが国境や自治体の境界として人間生活を整えている。自然に境界があるはずも無いのに人間が勝手に境界を作っていて、争いが絶えないところもある。

踏査内容の一つ、三角点の現況調査を通じて普段当り前のように使っている地形図がどのようにして作られたのかを改めて教えられ、地図のない時代の測量登山がいかに大変な事業であったかという事を知った。

そして何よりも、我々の先輩が100年前にどのような思いで山に向ったか？登山道のない灌木の密集している中で、先人の気概の一端でも垣間見たことは大きな収穫であった。

自然環境の面では、乾燥化が進み、無残な枯木の里山や湿原の植物の変化を眼の辺りにし将来を不安に感じたり、廃れたはずの鉱山跡に少しずつ緑が戻っている現況に安堵したりしながら、まさに自然は生きている事を実感した。

☆

さて、ここに踏査の全貌を纏めた報告書ができあがった。将来、一時代の日本列島の状況を知る上で、計り知れない貴重な体験や現況がたくさん記されている。ひとつひとつの報告書の裏側には、書きつくせない多くの事実や苦労の裏話がたくさんあると思う。

実際にはなんとか歩き一本の線で繋ぎたいという思いが先にたち、目的とした自然環境や人文的な詳しい調査には手がまわらず、ルートを辿ることだけに力を費やしたきらいも否めない。しかし見方を変えれば、さまざまなテーマを得た踏査であり、これからが本当の始まりであるともいえる。

今まで知られていない古道の発見があり、貴重な植生の発見があり、不思議な地形を観る事ができ、大パノラマが展開されたり….

これらのテーマをこれから本格的な調査にとりかかる機会と捉えることが出来るのではないだろうか。分水嶺を通じてさまざまな問題にも目を向けはじめたという貴重な機会であったと思う。

☆

日本列島の水系の境界（分水嶺）を列島周囲の海域で線引きすれば、今回全国会員が担当した中央分水嶺は、細長い日本列島を日本海側と太平洋側に2分する1本の線であり、それは日本の分水嶺のほんの一部である。中央分水嶺から分岐するそれぞれの地域の分水嶺が無数にある。そこにはまだまだ知り得ていない地域も沢山残されているはずで、これからのテーマとして日本列島の分水嶺を隈なく踏査し、現状の姿を後世に伝えるという大きなテーマが得られたのではないだろうか。

そういう意味では　始まりの一歩とも言える。そして次の節目に、再び全国を踏査する機会が作れるのなら、日本列島が環境面や社会面で現在とどう変わっているのか、その姿をつぶさに観たいものと思う。

中央分水嶺という一本の線は我々の未来の山に対する思いを、多少なりとも再考する絶好の機会だった言える。大げさに言えば、日本山岳会の日本の山に対する再認識のための事業ではなかったのだろうか。

中央分水嶺踏査はこうして始められた

分水嶺踏査委員会　藤　本　慶　光

踏査の端緒

日本山岳会創立100周年記念事業の国内登山の部として取り組んできた「中央分水嶺踏査」の端緒は、今にして思えば2000年7月1日、2日に、科学委員会が主催した「上信国境の大分水嶺と高山植物を探る」というテーマの探索山行にあったのではなかろうか。

上信越高原の地蔵峠をベースに大分水嶺上にある湯の丸山と籠の塔山に登った。宿舎の「ロッジ花紋」がまさに大分水嶺の線上に建っており、“屋根の左右に降った雨水はそれぞれ違った水系に流れて日本海と太平洋に流れ込む”と聞いて「ほー」と感じいり、分水嶺に対する興味が芽生えたように思われる。

この二年前、1998年に科学委員会主催の談話会「大分水嶺に高山植物を訪ねる」では、列島中央部を走る分水嶺が、風土や文化を二分し、水利係争まで惹起していることを学び、分水嶺踏査によって日本を見る目が拡げられるものという認識ができていた。

100周年記念事業への提案

探索山行を実施した2000年頃、日本山岳会では、来る2005年10月の創立百周年を記念するにふさわしい事業を提案するようにと、各委員会に指示が出ていた。

科学委員会の委員で、前記談話会の講師をつとめた近藤善則会員は、日本で有数の分水嶺研究者であるが、永年にわたって蓄積した豊富なデータは、A3判25枚に綴じられていた。そこには日本列島全土の中央分水嶺を表す一本の太い直線上に、分水嶺上にある山や峠の名前が標高とともに記入され、そこから水がどの川に流れ込み、やがて大きな川となり日本海と太平洋に流れていくか、そうした詳細な内容が緻密に克明に記入されていた。またそれらのデータ表も作成済みであった。

科学委員会は近藤会員から、この中央分水嶺の全国的規模での調査の提案を受けて以降、議論を重ねた末、記念事業が目指すところの「出来るだけ大勢の会員が参加できる企画」に合致する、なおかつ科学委員会が目標とする科学的な視野をもった登山が試行できる、そして何よりも我々山岳会の目指している、今まで誰もやっていないパイオニアワークと認め得る企画、という結論に達した。当時の100周年記念事業プロジェクトに2001年11月9日付で提案した調査内容を見ると、

1．分水嶺上にある山頂や峠の位置の測定
2．そこでの環境調査
3．分水嶺にいたるルートの状況調査
4．分水嶺上の歩行可能調査

が挙げてあり、中央分水嶺上を完全踏査するなどとは書かれていない。まだ先の見通しの立たない、手探りの状態であったことがよく伺える。

提案が採択されるまで

2002年5月18日開催の全国支部長会議でこの踏査について上記提案内容を説明したところ、各支部長から活発なご意見を頂いた。調査は二の次にして踏査を優先すべきだ、会員の年齢が高くなっているから藪漕ぎや長距離の縦走は困難だ、ポイント的にピーク到達を目指すべきだ、分水嶺上には良い山などない、藪山を歩くのは自然保護上も問題がある、到達する山をしぼるべきだ、等々全般的にこの計画に対して否定的なご意見が多かった。2002年の年次晩餐会前の支部長会議においても、引き続いて様々なご意見をいただいた。

そうした経緯を経て、100周年記念事業プ

ロジェクトへの提案は国内登山枠で承認され、2003年6月、記念事業委員会が正式に発足、行事実行委員会の下の登山委員会に属する「中央分水嶺踏査委員会」と位置づけられた。

計画書を作る

2003年8月に作成した「中央分水嶺踏査登山計画」がその後の活動の骨子となっている。この計画書は、前書きで「日本山岳会の現状を踏まえて無理のない範囲で、一つの旗の下に出来るだけ多くの区間を、なるべく多くの会員で踏査することを目指す」と述べてあり、それまでに寄せられた多くの意見を反映した計画書であることを謳っている。目的、登山計画、調査活動、スケジュール案、本部の体制の項目からなり、実際の踏査については

A．登山道が整備されていて、それほどの困難さを伴わない区間

B．ある程度の藪こぎやザイルの使用などによりなんとか行けるであろう区間、または積雪期なら行けるであろう区間

C．とても歩行は困難な区間

の三区間に分類し、A区間は100％歩き、B区間は可能な限り歩くかまたはスキーで滑り、Cは線としては省くが、途中にあるピークや峠は点として可能な限り登ることとした。

この年10月25日に、創立100周年記念事業の全体概要を説明するための、日本山岳会としては初めての試みであった理事会、評議員会、支部長会議の三者合同会議が東京で開催された。その席上、中央分水嶺踏査計画についても上記の計画書に基づいて説明したが、概要説明の後の討議では分水嶺に関する質疑が最も多く、この計画に対する多くの人々の関心の強さと盛り上がりを感じた。殊に踏査区間について難易度を以って三つに分類し柔軟に対応していく方針が、多くの方々に受け入れられたものと思えた。年次晩餐会当日の支部長会議など、機会あるごとに計画内容をご説明した。

全体のコースを25の支部と、首都圏ⅠおよびⅡの計27区画に分割し、担当区間を決めるなど、実施上の概要については、実行委員会事務局長、森武昭氏の、これに続く報告に委ねたいと思う。

シンポジウムの開催

分水嶺踏査を提案した科学委員会は、毎年テーマをかかげてシンポジウム等を開いているが、2003年度は2月に開催される日本山岳会支部事務局担当者会議の日程に合わせて、2004年2月21日に、中央分水嶺踏査委員会との共催で（後援：国土交通省国土地理院）「中央分水嶺踏査について」と題しシンポジウムを開催した。各支部の事務局担当者とともに、分水嶺担当責任者の出席も要請した。

前国土地理院院長、星埜由尚氏は分水嶺の定義や三角点、数値地図のことなどを分かりやすく話して下さった。「日本分水嶺」の著者、堀公俊氏が「中央分水嶺、ここが面白い！」と題して興味深い話をされ、先行して分水嶺を踏査していた北海道支部の新妻支部長からはその経験談も聞くことができた。講師を中心としたパネルディスカッションでは、分水嶺に関心を持って参加した一般聴衆も多く、満席の会場から発言も次々と出て、大変活気のあるものであった。

分水嶺担当責任者会議とGPSの講習

その翌22日、日本山岳会の集会室に分水嶺担当責任者が集まり、中央分水嶺踏査委員会のメンバーと踏査の実施について熱心な討議をした。全国規模で実施される大きな計画だけにいろいろと意見の交換がなされた。会議終了後山岳会の屋外に出て、GPSの操作についての講習を受けた。このたびの踏査ではGPSの活用による場所の特定やルートのトレースなどが期待されていて、各支部宛に一台のGPSが支給されていたのでこれの使用に習熟することが大切であった。

二日間の討議や講習を経験して全国に帰られた担当責任者と、それを支える事務局担当者の十分な理解が得られたからこそ、その後の踏査の積極的な展開が可能になったと思う。返り見て、この二日間の出来事によって本格的に計画にはずみがつき、刺激となり踏査活動は全国的な規模で一斉に始められた。

中央分水嶺踏査は実施段階へ

分水嶺踏査委員会事務局長　森　　武　昭

踏査実施の基本方針

「中央分水嶺踏査について」と題して2004年2月21日に開催されたシンポジウムと、翌日の各支部分水嶺担当責任者会議において、実施に向けて以下のような基本方針を確認した。

（1）　実施にあたっては、支部長会議での検討結果を踏まえて、分水嶺委員会で作成した、「計画の概要」[資料1]に基づいて行う。

（2）　各支部の担当区間は分水嶺委員会からの提案を基にして隣接する支部間で調整する。この点について踏査開始後、当初の担当区間には支部間の調整により若干の変更があったが、最終的には[資料2-1]のように分担した。

（3）　1山行につきA4判1枚の山行報告書を提出することとし、その書式は分水嶺委員会提案の通りとした[資料3-1，-2]。なお、報告書は当初Word版を予定していたが、資料整理の利便性などを考慮して、2004年3月にExcel版に変更し、各支部に通知するとともに、ホームページからダウンロードできるようにした。

（4）　提出された山行報告書は、分水嶺委員会事務局で整理の上、ホームページに随時掲載することにした。

次に、首都圏担当の2区間については、同好会・委員会に呼びかけ、2004年3月22日に会合をもった。その結果、事前にとった担当区間の希望アンケート結果をもとにして、[資料2-2]のように分担することにした。その他については、支部分水嶺担当者会議で確認した内容と同じ要項で行うことにした。

地形図とGPS

以上の2つの会議を踏まえて、担当区間及びそのアプローチに関わる国土地理院発行の2万5千分の1地形図を本部負担で一括購入して配付した。その総数は約590枚に達した。また、踏査のポイントとなるGPSも各支部に1台を支給した。首都圏については、2台のGPSを日程にあわせて各同好会・委員会に貸与することにした。

山行報告書と踏査進捗状況

これらの経過を経て、2004年4月から本格的に踏査が開始され、山行報告書が逐次分水嶺委員会あてに送付されてきた。多くの支部からはe-mailで送付され、事務処理の簡素化に役立った。ホームページでは地図上に分水嶺の線を青色で引き、踏査が完了すると赤色に変わるため、進捗状況がよく分かると好評であった。今回のプロジェクトでは、IT（情報技術）を出来る限り利用するようにしたことが大きな支えの一つとなった。

一方、進捗状況や各支部・同好会・委員会の取り組みぶりを会員に伝えるために、会報「山」の担当者と協議して、隔月で見開き2頁のスペースを割いていただき、2004年7月号から2006年5月号まで、その都度踏査率を明記するとともに、25の全支部と14の同好会・委員会の担当者に執筆していただいた。

会報で示された踏査率の推移を示したのが[資料4]である。これは山行報告書が提出さ

れ、ホームページに掲載された段階での数字である。この図からも判るように、登山道のない区域が多いため、積雪が固まった3～5月の残雪期に踏査が進んでいることが分かる。

点から線へ

[資料1]の計画書でも分かるように、当初は分水嶺をすべて線で結ぶことは困難視され、“できる範囲で”踏査しようとの合意のもとにスタートを切ったが、各支部・同好会・委員会の努力によって踏査率が高くなるとともに、全踏査完了への期待が高まっていった。

そこで、2005年3月にアンケートを実施したところ、全支部から線で結ぶよう最大限努力する旨の回答を得ることができた。なお、広島支部からは、担当区間の東半分については、昭和63年6月から平成6年7月にかけて会員が中心となって分水嶺をすでに踏査した実績があるので、今回はピークや峠などのチェックポイントをGPSで測定するにとどめたい旨の意思表示があり、以前の踏査の際の報告書が提出された。本書でも参考資料としてCD-ROMに転載することにした。

踏査のフィナーレ

100周年事業全体の中での制約もあって、当初予定していたより1ヶ月遅れて2006年6月に、分水嶺委員会と信濃支部との共催で、一般会員にも呼びかけて、三峰山～鷲ヶ峰でフィナーレ踏査を実施し（参加者80名）、区切りをつけることにした。その後、若干残った区間を当該支部と分水嶺委員会委員が協力して、踏査を続行した。そして、藪の勢いが弱まり、葉が落ちて見晴らしがきくようになった10月に難関箇所の踏査を終え、ついに11月4日、列島全土にわたる正真正銘の踏査完了、フィナーレの日を迎えた。

思えば各支部・同好会・委員会に所属する会員諸氏の並々ならぬ努力によって、立入り禁止区間を除き、北の宗谷岬から南の佐多岬までを会員の歩みにより線で繋ぐことができたことになる。直接踏査に参加された会員・非会員はもとより、踏査を陰で支えて下さったサポート要員にも、感謝の意を込めて会長名の参加証を贈ることにした。

最終報告書の刊行

一方、本プロジェクトの成果を永く後世に伝えるためにも最終報告書を出版することにした。各支部・同好会・委員会に原稿を執筆してもらうとともに、編集者から特集記事の依頼を行った。これらを取り纏めたものが本書である。また、提出された山行報告書は総計1032枚に達した。これらの貴重な資料は、CD-ROMに収めることにした。

実施概要は以上の通りであるが、これらの作業を担当した分水嶺委員会（創立百周年記念事業委員会傘下の一委員会）では、担当理事（委員長）のもとで、事務局長を中心に支部担当、企画担当、ホームページ担当、最終報告書担当、広報担当を設けて作業を十数名の委員で分担した。当初、顧問として小倉茂暉元副会長に就任していただき、各支部に分水嶺担当責任者を選んでもらい、東京で一堂に会して会議を開催することなど、多くの貴重なアドバイスをいただいた。このプロジェクトがようやく軌道に乗り始めた2004年6月に故人となられてしまったことが大変残念である。

なお、上記[資料1～4]は巻末の資料編に掲載してあります。

総説

日本の大分水界

小疇　尚

はじめに、地学の立場から、分水界とは、分水界はどのように出来あがるのか、そして日本の分水界は、地球規模でみると、どのような特徴があるのかを学んでおきたい。日本山岳会会員が全国規模で総力をあげて踏査に取り組んだ、中央分水嶺の位置づけである。

さまざまな分水界

地表に降った降水は、一部が地面から直接あるいは植物に吸い上げられてから大気中に蒸発散し、気体として上空にもどっていく。残りはじかに地表を流れるか、一度地中に浸透しても泉で湧き出て、いずれ川に集まり海へと流下する。ある川に水が集まってくる範囲をその川の流域、あるいは集水域という。それぞれの川の流域は一線で画されて互いに接している。その流域の境界が分水界である。

日本のような湿潤気候地域では、川は下流に向かうにしたがい支流を合わせて水量を増し、やがて海に注いで終わる。一つの本流に集まるすべての支流、枝沢からなる河川の系統を水系あるいは河系という。したがって、分水界は各水系の境界であるともいえる。川には本流と支流の別があり、それぞれ流域をもっているので、分水界という場合は一般に水系の境界をさし、同じ水系内の本流と支流や支流どうしの間のものを副分水界という。そして、別の海に注ぐ水系の境を結んだ大きな境界を大分水界、日本には存在しないが七大洋に注ぐ水系を分ける大陸規模のものを、特に大陸分水界ということがある。

大きな川は山地に源を発することが多いので、海から遠く離れた流域の最奥部や、本流の源流域にある峰や山脈を分水嶺ということも多い。例えば、カナディアンロッキー・コロンビアアイスフィールドのスノードーム山は北極海、太平洋、大西洋に注ぐ三つの水系の分水嶺、日本では甲武信ヶ岳は信濃川水系の千曲川、富士川水系の笛吹川と、荒川水系の分水嶺という類である。自然の障壁となるような大きな山脈は、昔からしばしば領土や行政区の境になっていたので、地方によっては国境稜線とか県界尾根などと呼ばれることがある。

また、最も高く険しい山脈を何々の屋根と形容することも多い。確かにその山稜は屋根のように両斜面に降る水を分けているが、大分水界とは一致していないことが少なくない。それこそ「日本の屋根」日本アルプスは、飛騨、木曾、赤石の三山脈ともに日本列島の大分水界とは無関係である。よく知られているように、インド洋と南シナ海の大陸分水嶺は「世界の屋根」ヒマラヤ山脈ではなく、その北に横たわるトランスヒマラヤである。ヒマラヤがトランスヒマラヤからの川の流路を横切る位置に後から隆起を始め、川がその流路を侵食しつづけて主脈を貫通しているからである。そのようにして形成された山地を横切る谷を先行谷といい、日本列島でも日本海に注ぐ川に多くの例がある。

大分水界は明瞭な山稜であるとは限らない。オーストラリア大陸の東縁にはその名も「大分水嶺山脈」が存在し、大陸分水界をなしているが、その頂部には隆起前に形成され

たほとんど真平らな準平原が広く分布していて、その上に街があり道路が走っている。最高峰コジウスコ山北方のクーマ空港の滑走路は、タスマン海とインド洋の大陸分水界をまたいでいて、一方の端に立つと他の端が地平線の向こうにかくれて見えない。北海道の千歳空港は太平洋と日本海の大分水界上にあるが、はたして滑走路が弓なりにたわんでいるかどうか確かめてみたいものである。

山稜ではなく直線状に延びる谷中の鞍部が分水界になっているものを谷中分水界という。糸魚川－静岡構造線沿いの姫川と農具川、天竜川と釜無川の間の分水界など、断層に沿って形成された断層谷にはごく普通にみられる。また一つの川が別の水系に属する二つの川に分れた変わった分水界、水中分水界もある。兵庫県加古川上流の氷上回廊とよばれる幅1kmたらず海抜100m弱の細長い谷底平野では、高谷川が瀬戸内海に注ぐ加古川と若狭湾に入る由良川の二つの水系に分流している。世界的には南米ギアナ高地西方のオリノコ川が上流で分流し、一方のカシキアレ川がアマゾン水系につながっている例がよく知られている。ヨーロッパやアラスカなどでは、大陸分水界上の湿原や湖から別の二つの水系に属する川が流れ出ている例もある。

水系の発達と分水界の確立

大地が隆起すると地表の傾斜が増して水が流れ、川が生れて谷が刻まれる。そのなかで最も多くの水量を獲得した川は、他よりも河床を深く侵食し、谷幅を広げて脇の流れを支流としてとりこみ、徐々に水系を発達させていく。樹が成長するにともなって幹から枝が分かれ、さらに小枝の先から梢が伸びるように、水系も最上流部では谷頭が細かく分かれて山地斜面を侵食し、それを後退させる。水系の伸張と川の谷頭侵食という現象である。その一方では下流から小さな枝谷が広い谷に吸収統合されて姿を消していくので、上流ほど小さな枝分かれが多く下流ほど支流が少ない水系が出現する。

水系の発達の過程で、隣りあう水系の谷壁斜面が接するようになると、分水界が明瞭になってくる。その場合、一方の水系の側が他方より傾斜が急であったり、降水量が多かったり、岩が脆かったりすると、そちら側の侵食が速やかに進んで分水界が反対側の方へ移動する。例えば糸魚川- 静岡構造線の断層崖を刻む釜無川支流の大武川は、甲斐駒ヶ岳から鳳凰三山まで北西－南東方向にまっすぐ延びていたと思われる山稜を大きく切り崩し、野呂川上流の北沢の谷頭を削り取って、摩利支天の岩壁を出現させた。白馬岳では、大雪渓にかつて存在していた氷河が、白馬岳から杓子岳にまっすぐ延びていた尾根を削り取って、杓子岳、葱平両圏谷の氷河を取り込んだため、分水界が西側に屈曲している。そのようなところでは分水界が削り取られた側に大きく湾曲し、かつての谷底跡が風隙（ウィンドギャップ）といわれる鞍部になっている。似たような例は、四国山地や紀伊山地でも多数知られている。このような現象を分水界の移動といい、両斜面の侵食がつりあうまで変化がつづく。

分水界の移動の一種に、河川の争奪がある。これは一方の水系に属する川が、横合いから谷頭を延ばしてきた別水系の川に流水を奪われて、そこから上流が以前とは別の水系に組み込まれる現象である。争奪がおこると、上流を奪いとった川はその地点で直角に曲がって、争奪の肘という地形が出現し、その上流側で谷が深く侵食される。争奪の肘の対岸には流水を奪われて水が涸れた元の川底が風隙となって残り、川は無能河川化して谷が埋め立てられる。河川争奪は全国に多数の例があるが、比較的低い小起伏の山地や丘陵地などに特に多い。

火山活動も分水界の移動をもたらす。阿蘇や屈斜路などの径20km以上におよぶ大カル

デラの出現前と後では、分水界の位置が大きく変わったであろうことは容易に想像できる。東北地方や北関東の分水界のなかには、過去の火山活動の遺産を受け継いでいるところが少なくないと思われる。例えば、浅間山と榛名山の北側を流れる利根川水系の吾妻川の上流は、それらの火山活動によって流路が塞がれて湖ができ、東に排水されるようになる前には、西に流れて信濃川水系に属していたとみられる。また、碓氷峠と軽井沢の高度差は10mほどしかないので、将来もし浅間山が噴火して大量の噴出物を南麓に堆積させるようなことがあれば、同じようなことがおこって、現在信濃川流域になっている南軽井沢一帯が利根川の流域に変わるかもしれない。

ほかに、地殻変動、山崩れなどの斜面崩壊も、河川流路の変更やそれにともなう分水界の移動をもたらすが、比較的小規模のものが多い。先にあげた河川争奪には断層の活動や土地の傾動など、地殻変動が原因になっていると考えられるものが少なくない。

日本には例がないものに、氷河の作用と乾燥地域でおこる砂の堆積による流路の変更がある。北米のミズーリ川はかつて北に流れてハドソン湾に注いでいたが、大陸氷床の発達にともなって行く手をさえぎられ、南に転じてミシシッピ川に流れ込むようになったし、大陸氷床の下で氷蝕谷の谷頭が侵食されて、山地を横断する貫通谷が形成されたスコットランドやスカンディナヴィア山地などでは、分水界の移動が随所でおこった。砂の堆積による流路変更で最もよく知られている例は、中国内陸の幻の湖ロプノールであろう。

日本列島の大地形の骨組みと大分水界

日本の主な川の流域と分水界は、図1のようになっている。日本列島は最大幅300km程度の、細長く山の多い島の連なりであるから、川の長さが一般に短かく、河川勾配が急で、降水量が多いこと、地質が比較的もろいことも相俟って川の侵食が激しい。そのため新しい火山地などを除けば、地殻変動の激しい地域でも各河川の水系と分水界は早くから出来上がっていて、数十万年前の第四紀半ば過ぎにはほぼ現在の形になっていたと考えられる。図を大観すると大分水界は島の並びにおおむね調和して島のほぼ中央を走っており、さほど複雑ではないことがわかる。しかし川の源流域をなす山地・山脈は切れ目なく連綿と連なっているわけではなく、地域によって長短があり配列方向も異なる。それに重なって火山が分布しているので、大分水界が山脈の並びと調和していない地域もある。

日本列島は、一本の単純な弧状列島すなわち島弧ではなく、北からエゾ山系、千島弧、東北日本弧、西南日本弧、伊豆－小笠原弧、琉球弧の六つのカマボコ状の細長い高まり、すなわち島弧のつながりから成り立っている。

それぞれの島弧の胴体に相当する部分では、大きな山脈や谷などの地形の配列が島弧の延長方向に並行し、大分水界もそれにほぼ沿っている。しかし二つないし三つの島弧が接続する部分では、大きな山脈や谷などの地形が、交わる各弧の延長方向とその挟角の二等分角の方向に並んで、島の長軸と斜交している。そのため島弧の接合部分では、大分水界の走りが山脈の軸の方向と必ずしも一致せず、複雑になっている。そのような日本の大分水界を地域ごとに概観すると、次のようにまとめられるであろう。

北海道　北海道は太平洋、日本海、オホーツク海の三つの流域に分かれている。日本海とオホーツク海の大分水界は、宗谷岬から宗谷丘陵－北見山地の主稜線を南下して、石狩山地東端の三国山にいたる。オホーツク海と太平洋の大分水界は知床半島から摩周、屈斜路、阿寒各カルデラの外輪山北縁を通り、北

見山地南東縁をへて三国山で前記の分水界に合する。この二つの大分水界は地形の大勢にほぼ調和している。もうひとつの太平洋と日本海の大分水界は、三国山から石狩山地－十勝岳火山群の峰筋を通って日高山脈の北端をかすめた後、西に方向を変えて夕張山地とその西縁の、南北方向に延びる山地・丘陵列を次々に横切っている。この部分はサハリンからつづくエゾ山系の高まりと千島弧の接合部で、分水界が地形の大勢に従っていない。石狩低地から西の半島部は東北日本弧と千島弧の接合部で、分水界は支笏洞爺火山地域と渡島半島のこまかく分かれた山塊をつないで屈曲している。なお、石狩低地帯は約4万年前に大爆発した支笏カルデラの火砕流が海を埋め立てたところで、その最高部が太平洋側と日本海側の大分水界になっている。

東北地方　東北地方は大地形の配列が比較的単純で、東から北上－阿武隈山地、奥羽山脈、出羽山地－朝日飯豊山地－越後山地の3列の山並が、島弧の外形に沿ってほぼ南北に併走している。東北地方から北関東にかけての大分水界は、龍飛崎から津軽半島、中央の奥羽山脈をへて帝釈山地まで南下して、尾瀬ヶ原西方の至仏山で北に転じた後、越後山

図1　日本の主要河川と分水界（高橋裕、阪口豊（1976）：日本の川．科学、46、488-499p.）

脈南部の主稜線を通っている。火山が奥羽山脈上に分布していることもあり、全体に大地形の並びにきわめてよく調和している。なお、日本海に注ぐ各河川は西側の山地列を横切って先行谷を形作っている。

中部地方　中部地方は東北日本弧、西南日本弧、伊豆・小笠原弧の三つの島弧が交わるところで、日本列島の最高所であるが、日本アルプスの飛騨、木曾、赤石の各山脈が北北東－南西に並んで雁行するなど、大地形の配列が複雑で主要な山脈の延びる方向が本州島の外形に沿っていない。そのため大分水界は中部山岳地域の大山脈を通らずに、複雑に屈曲している。すなわち越後山脈南部から関東山地中央部の甲武信ヶ岳まで南下し、そこから西にまがり奥秩父山地の主脈、八ヶ岳から霧ヶ峰を経て塩尻峠で糸魚川・静岡構造線を横切る。そこから木曽駒ヶ岳の北までV字状にいったん南下した後北上し、乗鞍岳から両白山地に移ってその主稜線を西にたどって、伊吹山地北端の三国ヶ岳にいたっている。

中国地方　中国山地は日本の脊梁山地のなかで最も低く、大分水界も海抜100m足らずの本州最低の氷上回廊をはじめ低いところが多い。数段の侵食小起伏面が分布して川の勾配が小さく、東部の丹波高原、丹後山地では南北と東西、西部の冠山山地では北東－南西と北西－南東の、断層や地層の走行など地質構造に影響された格子状の水系が発達し、大分水界もそれを反映して複雑に屈曲している。しかしその大部分は中国山地の主稜線を通っている。新しい地質時代の隆起の軸が北に偏っているため、大分水界は南に大きく張り出した江の川流域の部分をのぞいて、全体に日本海寄りになっている。なお、丹波高原では多数の河川争奪が知られている。

九州　九州は南北に長い島であるが、山地は北部では東西、南部では北東－南西方向に並び、両者の間の中央部が阿蘇、九重などの火山地域になっている。太平洋と東シナ海の大分水界は、北部では南北方向の断層で細かく分断さ（切ら）れた筑紫山地東端部の低い小山塊の山稜をつないで英彦山の南までおおむね南北に連なり、その南で火山地域に入って九重連山から阿蘇外輪山東縁につづく。同外輪山の南で九州山地の主脈に移った後、霧島火山、高隈山地を通り、佐多岬までほぼ島の中央を走っている。全体に新しい火山を通る部分が多い。

このように日本の大分水界は、大勢において列島のほぼ中央の脊梁山地にそって延びている。しかし複数の島弧が交わる北海道南部、中部地方では島の長軸方向と山脈の並びが斜交していて、大分水界は各山地の山稜を通らずにそれを横切るか、あるいはそれをさけて走っている。カマボコ状に盛り上がって、ほぼその中軸が大分水界になっている島弧に、斜め横方向からの圧縮力が加わって別の島弧が接合し、島弧の軸に斜交する山脈が生まれたからである。九州では琉球弧と西南日本弧が交わっているが、その角度が小さく、島の中央に大きな火山が並び、大分水界はそれをつないでいるので、上記二地域のような大地形との不調和は目立たない。

解説

簡易GPS受信機による記録と踏査

分水嶺踏査委員会　宮崎紘一

GPSの機能と測定記録

分水嶺踏査を計画するにあたり、ハンディGPS受信機を活用して踏査地点を記録するとともに、登山道のない藪こぎ地帯で現在位置を把握し踏査の一助にすることとした。そこで踏査の主力である全国の各支部に一台づつ、ハンディGPS受信機(ガーミン社　イートレック　レジェンド日本版)を配置した。

GPSはアメリカが運用している全地球測位システムのことで、船舶や航空機などの航法機器で地球の軌道上を回る複数の人工衛星の電波を受信し位置を測定するものである。「イートレック　レジェンド」受信機には20万分の1に相当する日本全国の地形図が読み込まれており、地形図上に主要地点の地点名と現在地点が表示されるようになっている。この地図は市街地の道路、河川などは明示されているが、山岳地帯は空白であり、主な山の頂上の位置と山名、主な山小屋の位置と名前などが表示されるだけである。

そのためオプションの2万5千分の1地形図をインストールできる機能をもち、インストールすれば山岳地帯でも地形図の中に現在位置が表示され、ナビゲーション機能を使用して目標の方向と距離が分かり、ルートファインディングの助けになると期待された。

受信機は現在位置をリアルタイムで測定表示するほか、目標地点との位置関係などを表示するナビゲーション機能、電波を受信している衛星の状態を表示する機能、測定位置データを記録し連続線として表示する軌跡機能などを有している。位置データは3次元で表示され、水平方向は緯度・経度は0.1秒単位、標高はm単位で表される。

踏査開始に当たり説明会を開いて機器使用の理解に努めが、全国の支部が集まる機会が少なく充分な時間は取れないと考えられたので現在位置を確実に記録することを主眼に説明し、その他の機能は取扱説明書に期待することとした。実際は取扱説明書が難解で、ナビゲーション機能など受信機のもつ機能を充分に活用できなかったと思われる。もう一つの機能、辿ったルートの軌跡を記録することも、データの利用にはパソコンとのリンクが必要であり、活用するには至らなかった。一部の人たちがカシミール(パソコンのソフト)を使用して踏査ルートの軌跡図を作成し報告書に添付していた(図3)。準備期間が充分あれば、分水嶺全体の踏査軌跡を記録して地形図に表示し、壮観な踏査地形図ができたことと思われる。

ハンディGPS受信機

記録は踏査ルート上の主要点の位置を測定し、測定記録として所定の記録用紙に記入することとした。5000kmに及ぶ分水嶺踏査の記録用紙は北海道支部だけでも250部になり全報告記録は1000部を越していて、1報告書に平均4箇所測定があるとすると約4000箇所以上を数える分水嶺上の位置が記録されたことになる。日本全国の山岳地帯にわたって、一つの目的のため同一機種で測定した記

録は他にはないだろうと思われる。

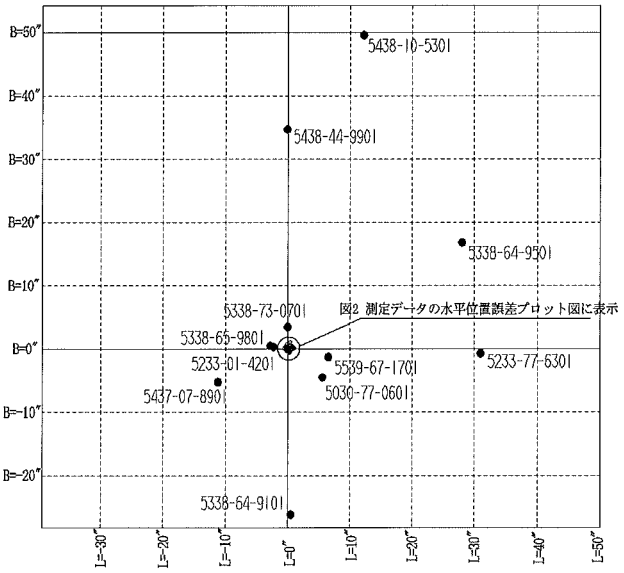
測定結果の解析

これらの記録位置を位置座標の明確な三角点での測定記録と比較検証してみることとし膨大な記録の中から各支部5～7点を任意に選出し合計123点の比較表を作成した。データを整理してみると、受信機の設定の違いが数箇所見受けられた。測地系の設定が指定した世界測地系(WGS84)ではなく、日本測地系(TOKYO)に設定して測定したものが4点あった。また、位置の表示単位を一般的である報告書のフォーマット、000° 00′ 00.0″(hddd° mm′ ss.s″)でなく、000° 00.000′(hddd° mm.mmm′)に設定記録されている点が6点あったが、それぞれ測地系と単位を換算して使用した(表1備考欄に測地系換算、単位変更と記入)。

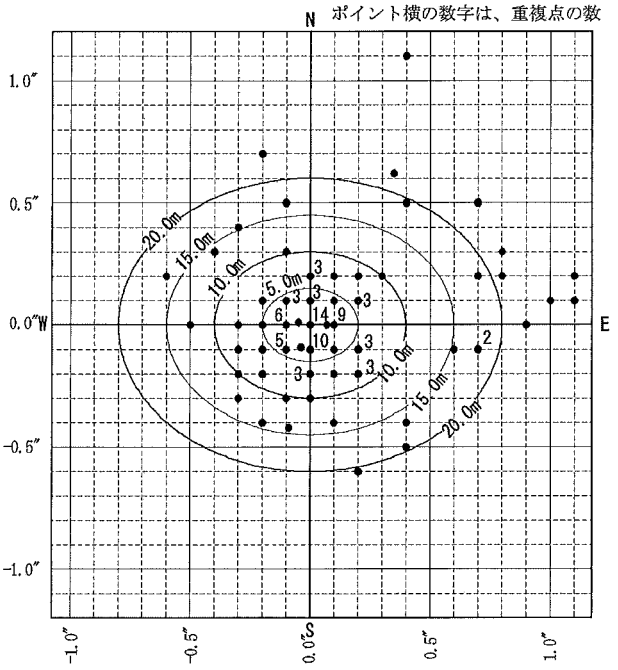
また受信機は、位置の表示が緯度・経度については0.1秒で、標高は1mまでになっているが、報告された位置記録を見ると、緯度経度の表示が1秒で丸められている記録がかなりあった（丸め方不明）などデータとしての統一性にかける嫌いがあるが報告データをそのまま使った。

表1[資料編5-1～3]は三角点の位置と報告書の測定値と比較し測定差を緯度・経度・標高別に計算表示したもので、表中の基準点コードは、国土地理院のコードNO.で、点名は三角点の名称、報告地名は報告書に記載されている地点名称を表す。測定値の差は緯度経度が0.1秒・標高が0.1m単位で表示した。緯度の1秒に当たる距離は、緯度により変るから換算が複雑になるので秒単位で比較した。

水平位置の測定差の分布を記したものが図1で、測定差の大きなものが11ヶ所で中心から離れて表示されている。緯度・経度は角度で表されているが距離換算すると日本周辺では緯度は1秒が約30.8mで、経度の間隔は北端が狭く南に下がるほど広くなっているので、今回の踏査範囲でみると北側の北緯44度で1秒が約22.3mで、南側の北緯31度で26.5mと差があるが、平均値の24.4mで整理した。図2は、図1で中心付近に重なって表示されている差の少ない測定点を拡大プロットしたもので、ポイントの横の数字は重複点の数を表示した。楕円は中心からの距離を表した。



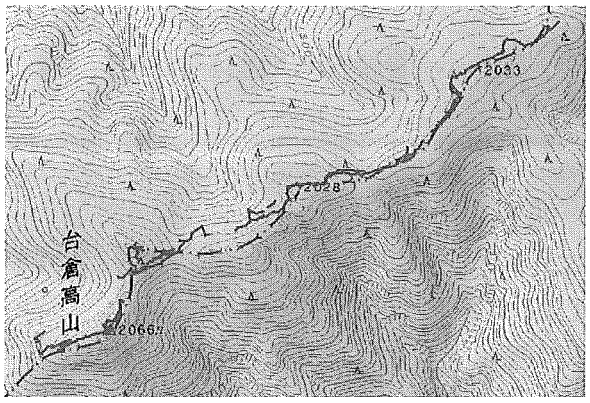
（図1） 測定データで誤差の大きい点のプロット図



（図2） 測定データの水平位置誤差プロット図

それを整理したのが表2で、約67.2%が10m以内にまとまっている。標高は表3で、90.2%が10m以内にまとまっていて、機器の取扱いの習熟度を考えるとGPSの信頼性の高さが証明されている。

データの中に測定誤差の大きいものがある原因を推定すると、地形などの影響により補足衛星の不足による誤差などのほかに、測定値の誤読と誤記、使用法の不慣れなどが原因と考えられる。誤読・誤記はGPSでウエイポイントとして記録し読み合わせるか、パソコンにダウンロードすれば防げる誤差である。その他GPSは、衛星の電波を受信した直後は安定しないデータを表す傾向があり、電源を入れてデータ表示を始めた直後や、ポケットや首から提げた状態でのデータは誤差の大きい恐れがあるから注意する必要がある。できれば終始安定して受信している状態を保って測定するためには、電源を入れたままザックの雨ふたや肩にアンテナを上向きに固定して歩くとよい。今回の踏査記録から見ると、多数の人たちが簡単な説明会と打ち合わせだけの後で収集したデータとしては充分な精度を保っており、GPSシステムの信頼性の高さが改めて証明されたと思う。使用法を習熟すればますます可能性が広がるだろう。



(図3) 1/5万図に重ねた軌跡
軌跡の線が切れているのは、受信が断続した箇所。

(表2) 測定データの誤差(水平位置)

	データ数	%
5m以内	56	45.9%
10m以内	26	21.3%
15m以内	8	6.6%
20m以内	10	8.2%
40m以内	12	9.8%
40m以上	10	8.2%
合計	122	100.0%

(表3) 測定データの誤差(標高)

	データ数	%
5m以内	87	71.3%
10m以内	23	18.9%
15m以内	8	6.6%
20m以内	3	2.5%
40m以内	1	0.8%
40m以上	0	0.0%
合計	122	100.0%

可能性と今後の課題

登山の記録の面からは、軌跡のデータを取ることにより三次元の位置に時間を加えた4次元の記録が残せるので試してみると良い。特に国内のようには地形図がそろっていない海外の登山では利用価値が大きいと思われる。

GPSの記録ではないが多数の三角点現状の報告があり大部分が正常であるが、標柱がなくなる等機能を失っていると思われるものが数点報告されている。北アルプスや南アルプスのように異状の有る三角点が少ないのは森林帯が多いことによるのだろうか。整理ができれば全国に渡る三角点の現状報告がまとまるのだが、今後の課題としたい。

余話

藪の中にあった宝物

分水嶺踏査委員会　福山美知子

日本列島中央分水嶺の踏査区域全体を通して、正確な踏査のために、登山道のない道なき道を行き、藪漕ぎを強いられなかった区間はほとんどなかった。思い出すだけでも藪との闘いは苦しい。しかし、そこに登山の原点をみる思いもあった筈である。

藪入りと藪漕ぎは大違い

日本にはかつて、盆と正月に奉公人や嫁が休みを貰って実家に帰る習慣があった。それは“藪入り”と言われていたが、この言葉は「休日」の意味に変化した。

中央分水嶺の踏査で藪に入ったけれどもそれは藪入りではなく、藪漕ぎ！　誰もが藪を睨み、藪を掻き分け掻き分け、藪に喘ぎ苦しめられた。藪からは、その悲痛な叫びが聞こえてくるようだ。

ヤブ、やぶ、藪、籔…どう書いてみても、あの物凄さは紙に載せられない。藪を抜けてみれば、馴染みの登山着はあちこち破られて、皮膚には血のにじむ掠り傷、大切な眼鏡を飛ばされた人もあった。藪漕ぎ用ゴーグル、手袋の差入れもあったが、なかなか手強い相手。そして数々の名セリフが生まれた。

熟練の医者いわく、“こりゃー俺よりひどい藪だぁー”(福島支部)。藪から棒ならぬ“藪から掘り出した分水嶺”(山陰支部)などなど、皆の顔をほころばしたものである。

藪の正体について

報告書にあるように、踏査の実施に際して我々を困らせるのは、ヤブ漕ぎの時間査定の難しさである。予想以上に時間を要したという記述が多い。これだけ悩まされたヤブである。ヤブについて、植物の専門家に少し教えて戴いた。素人の疑問にわかりやすく答えて下さったのは、青森大学大学院の藤田均教授で、伺った主な事柄を以下にお伝えしたい。

まず笹とは

ササはタケと同じで、木でも草でもない。草は1年から数年で枯れるし、木は毎年毎年太っていくけれども、笹や竹は稈（かん）という各節の中に成長点があって、稈毎に上下に伸びるだけで、太さはタケノコの根元の太さ以上に太らない（うらやましい！）。だから木ではないといえる。稲科のため中に空洞があるのも特徴。稈の数はタケノコの段階で決まっており、新しく出来ることはない。全ての稈が伸びきったところで成長は止まるが、大人のタケに伸びきるまでに10日か1ヶ月足らずしか時間がかからず、桿の成長が終わると初夏から初秋にかけて地下茎の成長が続く。数ヘクタールの集団がすべて同じ一族で、地下茎で何本もつながっている。寿命は40年とも60年とも。だから草でもないわけ。

タケとササの違いは、学術上は同じ仲間だが、一般的に言われている違いとして、ササは1年ほどタケノコの皮が枝先についているが、タケの方は数日で地上に落ちてしまう。また、太く4m以上に高くなるのがタケ、小柄なのがササという見方もある。

北東北や北海道でタケノコというと、チシマザサのタケノコを言い、2～3日遅れの15cmほどちょっと伸び過ぎのタケも、稈の根元側は柔らかくて食べられる。またモウソウチクは灰汁（あく）抜きが必要でも、チシマザサのタケノコにはあくがなく、そのままでタケノコ御飯になる。北東北ではチシマザサの筍取りが文化のようになっていて、5～

6月には多くの人が山にタケノコ取りに入り、道に迷うとか、タケノコが好きな熊に襲われる等の遭難騒ぎがあるくらいである。

生える場所は

ササ、木というものは、年間降雨量が800mm以上の所に生える。もちろん水浸しのような川の中や湿原を除いて。日本の全国平均降雨量は1750mm、雨の少ない岡山市でも、1140mm、長野市でも900mmであるから、日本中、木が生えることになる。日本で、亜熱帯林から、常緑広葉樹林（暖帯林）、落葉広葉樹林（温帯林）、亜寒帯針葉樹林というように、森林のタイプが異なっているのは、気温差が原因である。この気温差の原因としては、北緯24度から45.5度まで南北に2400kmほど長く伸びる日本の地形が原因の1つで、北海道から沖縄までの年平均気温差は20℃ほどになっている。また日本列島は本州を始め列島の中央部に南北に山脈が走っており、標高差100m上がるごとに0.6℃ずつ気温が下がることも、原因(その2)になっている。例えば屋久島で、下から亜熱帯林、暖帯照葉樹林、温帯落葉広葉樹林、亜高山帯樹林、高山帯植物（高山植物帯）と異なった森林タイプにしているのは、この標高差である。

「高山の岩場、及び尾根筋に、ササが生えるのは何故か？」とお尋ねしたところ――谷川岳で藪を漕いだ経験や、八甲田山や白神山でよく目にするところであるが、ササも生えているけれど、ダケカンバやブナが同じくらい生えている。九州霧島でも、ササ以上にミヤマキリシマ（ツツジ科）が生えている。

尾根筋に生えるのはササだけではなく、たまたま木と競争をして、上に遮る木がなかったために、ササが生えることができたと言う方が正確である。一旦ササが生えれば、ブナなどの稚樹が大きくなるために必要な光を、今度はササが遮ってササだけが生えていく。

その強さの秘密は？と問われれば、考えられることは地下茎で殖えるということである。いま九州でスギやヒノキ林にタケが侵入して困っているというニュースがよく新聞に出ているが、それと同じで、ササもタケと同じように、群体を作り地面を覆うため、他の木の林に侵入することもある。他の木がササよりも背丈が高いうちは特に影響が無くても、一度倒れて、そのギャップ（倒れた後の光の当たる空間）にササが地下茎を伸ばして侵入すれば、元あった大きな木の稚樹更新を妨げることができる。それが強さであろう。

藪漕ぎ

日本の森林の将来に影響は

まず問題はないと言える。何十万年という時代を、ブナにしてもササ以外の樹種は太陽の光をササと争って、今その姿があるわけで、地球温暖化によるモウソウチクの北上化は少しばかりは心配であるが、尾根筋におけるササの侵入が将来活発化することはないと思われる。別の言い方をすれば、ササは40年から60年に一度花を咲かせて結実して、数ヘクタール単位で一斉に枯れていく。その時、ネズミなどがその実の多くを食べたり、他の大木が生長して、ササの芽生えを抑えたとすると、ササはその地域から姿を消すと考えられるからである。その後何年か経ち、わずかなギャップに芽生えたササが、他の大木の中に侵入して行くには、また数百年を要すると

思われる。このように何度も繰り返して現在の尾根の植生があるわけで、その場所、場所では変わっていても、全体としての比率は昔からさして変わってはいないと考えられる。

藪の森における効用は

表土の侵食を抑えるという大変な効用を持っている。木が育つことで表土ができ、表土があって始めて木なりササなりが育ち、表土が無いと木は育たず森は無くなってしまう。足尾銅山の跡地は表土が流れ去って岩登りのゲレンデになっているが、林野庁が何十年も緑化を試みていても成功していない現状をみれば、このことに納得がいくことと思う。

このように、大切な表土の流出を押さえることが重要であり、表土の浸食を防止する上で、木でも草でもシダでも良いのであるが、何かが表土の上を覆っている必要がある。

特に尾根筋から表土が流出すると、固い地盤だけになり、降った雨が直ぐ両側に流れ落ちてしまい乾燥地化する。一旦そうなると回復には谷筋の何倍もの時間を要する。このため、林業ではスギの人工林地でも、伐採に際して尾根筋は伐らないようにしている。伐れない場所には始めからスギを植えないから、結果として尾根筋には自然に生えてきた広葉樹が残る。スギ林の場合なら下刈りをするのでササが無くなるが、そうでない所にはササが入りやすい。このことも、尾根筋にササが多い原因の１つになっていると言える。

このように、大切な尾根筋を雨の浸食から守るために、地下茎でつながり合って面的に尾根を覆うようなササの性質は非常に役に立っているということになる。

藪を見る目

植生という面からここまで伺ってみると、何やら落ち着いた気持で藪を思い出すことができるというものである。

また、日本では仏教徒が山林に入って修行される話は折に触れ聞くところであるが、修行者の書物にある、「山林斗藪」という言葉に思わず共感を覚え、うなずいたのであった。「人蹤、蹊絶えたり（ジンショウ、ミチ絶えたり）」とは、若い頃好んで”山水を渉覧”したという、かの空海の文中の一節。この言葉に遭遇した時に受けた鮮烈な印象こそは、今度の分水嶺踏査“藪漕ぎ”の経験なくしては得られないものと受け止めている。

ヨーロッパ風のアルピニズムのもとで発展してきた日本の近代登山であるが、それ以前に、頂上を目指すというより、山を歩き、山に深く分け入って、山と一体になって思索を深めてきた先人達の足跡がかつてあったことに思い到った分水嶺踏査でもあった。

出来ないことを敢えて行なうことを譬えて「藪に馬鍬」といわれる。踏査を始めた頃の雲行きから懸念された「藪蛇」になることなく、文字通り藪と闘い“藪から分水嶺”を五千人の力で掘り出せたことに対し、いま藪はおとなしく祝福を贈ってくれるに違いない。

思えば、日本語には藪の語彙が多いようである。この拙文が参加者の藪漕ぎの労を少しでも癒してくれることを願ってやまない。

※篠の子：篠竹、細く長い竹の種類。五月の季語。
味噌仕立 篠の子の香 際だてり

支部報告編

北海道ブロック

総括

北海道中央分水嶺踏査の3年間

新妻　徹

中央分水嶺の北海道関係の資料が、本部から「ドサッ」と届いた。2万5千分の1「地図」で184枚と中央分水嶺へのアプローチを含めると250枚を越すボリュームである。長谷川雄助事務局長が日曜大工となり、道北、道央、道東、道南の棚を作り、引き出しに収納するのに10日間を要した。この地図名を探し出し、リストアップするのにはJR札幌駅ビル5Fの旭屋書店に何回も通い、1枚1枚をつないで、トレース・タクティクスを考えた。

① 登山コースのほとんど期待できない、登山道のない山域のアプローチ
② ロック・クライミングのテクニックを必要とする岩壁班の編成
③ 日帰りハイク的な山域のリストアップ
④ ブッシュ漕ぎ未経験者への対応
⑤ 冬山ラッセル未経験者への対応
⑥ 1泊2日以上のトレース班の編成
⑦ GPS操作講習会の緊急性
⑧ 車による見送り班・出迎え班の編成
⑨ ドライバーの確保とガソリン代の負担
⑩ 遭難対策委員会の設置

課題は多く、未解決のまま1年目（2004年）の1月2日、長谷川雄助・漆崎隆・新妻徹の3名は厳寒の宗谷岬に立った。とにかく行動を起こし、「支部長は本気である」という姿勢を示すことに徹した。

1回の山行で、10kmのトレースができれば、100回の踏査行で完了する。偵察を含めて1年間に40回の踏査行を実施すれば、3年間で完了する計画であったが、土・日曜の悪天候が多く、ウイークディはリタイア組しか行動できず、年間行事との関係もあり、メンバー編成で苦労した。

たとえば、2004年2月14～16日、白神岬踏査（新妻徹、長谷川雄助、畠山迪子、大崎勝子）では、3日100mという笑うに笑えぬ珍記録もある。道北・道東・道南・道央の4地区分担としても、会員・会友が札幌・小樽の道央圏に集中しているため、道北や道南地区の踏査に札幌から出向くケースも多くなり、2年目（2005年）から全員参加の大前提が困難となってきた。しかし時代の流行で普及したスノーシューの活用で、冬山初心者のトレース参加を容易にした。

1年間に6回発行している「支部だより」の効果も大きい。踏査状況がリアルであり自主的に行動し始めたグループもあり心強かった。指導法に非指示法（ノン・デレクティブ・メソッド　non directive method）があり、略して「ノンデレ」と呼んでいるが、メンバーから「支部長は飲んでれ！」と言われて、そのユーモアとゆとりに安心し、これは完踏できると予感したのだった。

東京高輪プリンスホテルでの100周年祝賀会で皇太子殿下のテーブルに呼ばれ、北海道支部の活動を高く評価していただき光栄であった。北海道から出席した会員の感動は帰道して仲間に伝わり、その冬の踏査で80％をオーバーする実施率となった。

全国高校野球選手権大会で粘り強く頑張り、2回も優勝した駒沢大学苫小牧高等学校野球部の3年間の活躍が、良い活性化の効果を上げていると思う。甲子園の話題が中央分水嶺の踏査行でも聞かれ、北海道の会員は元気づけられた。

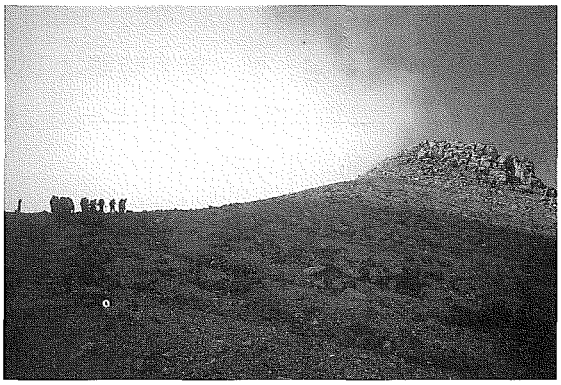
実は、北海道内には日本列島中央分水界の中で標高が最も低い20m程の台地がある。それは千歳空港の一帯であって、ちょうど2本の滑走路上を中央分水界が横断していることになる。如何せん、立入禁止である。フェ

ンスに沿って踏査せざるをえなかった。他に、宗谷岬の丸山レーダー基地、追分の自衛隊演習場など、ハードルの高いフェンスは踏査不可能であり、コモン・センスを以って望見に留めたのである。

3年目（2006年）は残っている未踏査エリアの整理となったが、メンバーの表情は明るく、歴史を作ることに参加できた誇りに満ちていた。3年間の実参加者160名の踏査ストーリィが，北海道の貴重な不滅のヒストリィを完成した。

時は今　雪稜つらなる分水嶺

ホロカメットク山から南方へのびる中央分水嶺 1920m



十勝岳へ迫る

「北海道中央分水嶺 1132 km」完全踏査

高きを以って厳しさを低きを以って難しさを知る

鈴木貞信

当支部担当の宗谷岬から白神岬までの区間距離1132kmは、日本列島中央分水嶺全体の20％強に相当する。全道を道北、道東、道央(東)、道央(西)、道南の5ブロックに分け踏査を進めた。

2003年11月30日に第1回の踏査実行委員会を開催し、新妻徹支部長以下三役、中村喜吉実行委員長他によりブロック担当、実施計画案等を策定。このうち夏道があるのは僅か118kmのみで、90％が積雪期内踏査となるため、予定を早め、2004年1月2日から踏査を開始した。

踏査登山実施計画概要を作成し、分水嶺踏査特集号として支部だより2月号(No28)及び、3月号(No29)は、内容の大半が分水嶺の踏査計画と実施状況であった。8月29日には「中央分水嶺公募登山」を十勝岳を中心に、首都圏からの4名を含む18名の参加を得て実施した。

2005年6月には中央分水嶺踏査記録特集号として「1100kmの軌跡」が発行された。その後も踏査実施と並行して、実行委員会を開き実施計画・踏査状況について支部だよりにその都度「お知らせ」として掲載した。

「フィナーレ登山」は、「道東」が2005年8月21日に美瑛冨士を中心に芳賀前副会長、森分水嶺事務局長ら40名の参加を頂き、翌週には「道央」が「百周年記念山行」を兼ねてクオベツ山で平山会長、田邊副会長と本州支部会員を含む40名の参加を得て実施した。「道北」は2006年3月18～20日に幌尻山からイソサンヌプリ山迄の約60kmを3班に分け、計11名が同時展開方式で実施した。「道南」は同年4月30日に白神岬で、平山会長、本州支部会員を含む25名が、本道最南端の踏査を行って完結した。

分水嶺踏査のブロック別実施結果

ブロック	踏査回数	延べ日数	踏査距離
道北	37	59	360.1km
道東	27	45	169.2km
道央（東）	37	48	168.9km
道央（西）	29	30	158.1km
道南	71	85	275.9km
合計	201 回	267 日	1132.2km

延べ参加者 968 名、延べ踏査時間は 1533 時間 45 分、実参加人数はサポーター、一般市民も含め 160 名となった。

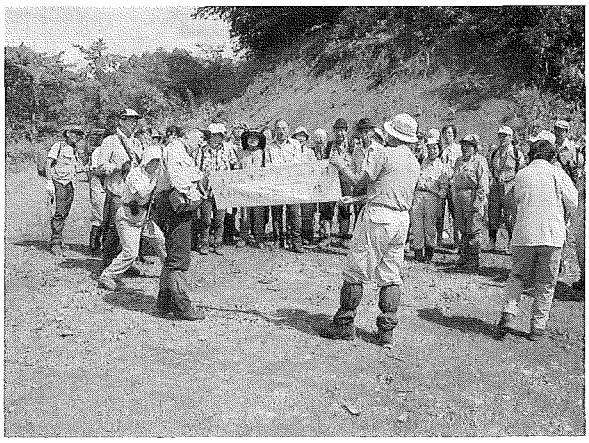
分水嶺上の踏査総距離の最長は、男性が漆崎隆 260km、女性では漆崎裕子 234km で、夫婦揃っての活躍が光っている。100km 以上が 13 名に上る。又、踏査回数では新妻支部長の 52 回が最多で、20 回以上が 13 名であるが、アプローチや林道調査などの回数を含めると、何れも気力・体力・努力に頭の下がる思いである。

踏査に際し、林道の除雪状況や駐車場などの事前調査、下見を行なったが、猛吹雪、ホワイトアウト、雪崩や滑落の危険、時には熊との遭遇などのため踏査を断念、途中で引き返すなど、自然の厳しさや危険に真剣に立ち向う試練の多い山行も経験した。

多くの会員の車での送迎、特に藤内、畠山(廸)を含むサポートグループの支援も大きい。こうした会員・会友の積極的な参加を頂き、宗谷岬から白神岬迄を一人一人が足を使い一本の線に繋ぐことが出来た事に改めて感謝申し上げ、無事故での 2 年半に亘る 1132km の完全踏査達成の感激を共に分かち合いたいと思う。

この 100 周年記念分水嶺踏査は、支部の団結、会員相互の交流を深め、会員・会友の絆を強める上でも大変有意義であった。また冬山の登山技術の向上にも大いに貢献したものと思う。そして分水嶺踏査でなければ登らなかったであろう山や、行かなかったであろう奥深い山域の稜線に足を踏み入れ、貴重な体験、新しい発見や記録を残す事が出来て、大変嬉しく思う。

道東フィナーレ登山
美瑛冨士避難小屋前で(8 月)



道央フィナーレ登山兼百周年記念山行
クオベツ山無名峠で合唱(8 月)

解説

アイヌ語の山名

北海道支部　高澤光雄

北海道の山名はもともと先住民族のアイヌ語によって語り継がれていたもので、幕末に蝦夷地を探検調査した松浦武四郎著「東西蝦夷地山川取調図」万延元（1860）年によっても明らかである。北海道庁が明治23～30年（1890～97）年にかけて発刊した「北海道実測図」（20万分の1）の地名の多くはアイヌ語由来のカタカナ地名を採用している。

陸軍参謀本部陸地測量部によって、北海道の5万分の1地形図作製のために測量が開始されたのは大正元年である。アイヌ語地名をそのまま撰点した三角点に付すのは困難であったので、陸地測量部では明治34年4月に「三角測量法式草案」を発布。それには「北海道ニ在テハ既定ノ名称アルモノニハ其侭之ヲ用ヒ然ラサルモノハ土音ヲ静聴シ之ヲ漢字ニ改撰シ成ル可ク雅字ヲ嵌メテ命名ス可シ仮令ハ蝦夷上音＜オキナイ＞岳ヲ翁居岳ト名クルカ如シ」とあって、測量時の点の名称が山名となっているものも多い。

地形図に地名を付すに当たっては、地元市町村に「地名調書」の提出を求めた。従って名称は三通りある。地形図に記載された名称、静聴したアイヌ語名、測量時の報告書「点の記」に記載した三角点の名称である。

先住民族の生活圏はコタン（集落）単位で散在し、それぞれが自分たちのイオル（生活圏）を守ってきた。従って場所を指す山や川の名称は、特定の場所であっても、どの地域に行っても共通語で呼ばれていて、個々の名称は少なかったと思われる。自分たちの住んでいる場所から見て、一番高い山がポロシリ（大きな山、親山）であり、海辺であっても小高い山は、沖合から見た場合は重要な道標となるのでポロシリなのである。収穫の多い山や、酒やイナウ（木幣）をあげて大事にする山もポロシリで、北海道でポロヌプリやポロの付く山が19座あることからもうなずける。

伝承文学のアイヌ叙事詩ユーカラに、ポロシリとかトミサンペチなど幾つかの山が謡われている。また、伝説の山としてオプタテシケ山（槍がそれていった山）、チトカニウシ山（我等がいつも矢を射る所）や、山争いの伝説もあるが、もとは狩猟の場所であった。

山に対する考え方も、土地が隆起した高い場所ではなく、あくまでも生活の糧を与えてくれるのが山であって、ときには熊や鹿などのけものたちが山里に下り、肉食や毛皮をもたらしてくれる。繁茂する樹木は焚き木や住居に、木の皮は織物となる。春には山菜が、秋には木の実が稔るのが山であり、これほど豊かな自然に恵まれ、うまく付き合っていたとは、現世からみれば羨ましき限りである。

こんな恩恵を享受しながら自然崇拝の信仰が生まれ、すべてが神であるアニミズム（万物崇拝主義）として芽生え、神威岳（神の山）、雄鉾岳（古くはカムイエロシキと呼ばれ、神がそこに立っている）など、この種の山は16座もある。すべての山が生活に潤いを与えてくれるとは限らない。噴火している火山などは恐ろしい山として近づかなかったし、魔物が住む山とか収穫のない山は悪い山とされ、ウエンシリ岳は険悪な山を意味している。

空白だった地名も、開拓が奥地に進むにつれ地名としての山名が必要になり、山麓を流れるアイヌ語の川を日本語の漢字に転化した名称を用いて、その川の上流に聳える山として命名された例が多い。天塩川上流が天塩岳、トムラウシ川上流がトムラウシ山、長万部川上流が長万部岳などがそれである。

道北地区

宗谷岬～知駒岳～ピヤシリ山～天塩岳～北見峠　約360km（内夏道7km）

天塩川、石狩川水系――――猿払川～湧別川～常呂川水系

道北　360km（内夏道 7km）

道北は会員が少ないため、札幌からの応援と名寄山岳会員の協力を得て達成できた。道北ブロックの踏査コースはエスケープルートが少なく、峠から峠迄の 20 ～ 40km のロングコースが多かった。

H001（地点コード）16 年 1 月 2 日、札幌を出発し宗谷岬にウインパーを設営、翌日、最北端の宗谷岬から道北最初の踏査がスタートした。新妻・長谷川・漆崎(隆)の 3 名で、岬から丸山先の P134 までの 6km を踏査。宗谷岬からは 40km 北方のサハリン海岸が望まれた。宗谷丘陵は平坦で多くの沢が複雑に入り込んでいて、沢の源頭は V 谷となっており、ルートを見極めるのが難しい。特に吹雪・濃霧の時は分水嶺が不明となり困難が予想された。

H005　18 年 3 月、小石峠～モイマ山間の未踏査部分 8km のために、中村他 3 名はアプローチの林道など 16km を歩く。標高差の少ない分水嶺はルートが難しい。気温も高く腐れ気味の雪にスキーは重い。下りは 10km にも及ぶ長い林道歩きが待っている。

蛇行する林道をショートカットして沢に下るが、宗谷丘陵独特のいきなり切れ落ちる沢に難儀する。

H016　17 年 5 月、上豊神～イソサンヌプリ山～知駒岳を樋口他 3 名で行くも、上豊神方面は雪が殆ど無かったため計画を変更し、イソサン～知駒岳間の 8km を踏査した。

H011 ～ 017　翌年 3 月、幌尻山～イソサンヌプリ山間の残り 60km を計 11 名が 3 班に分かれ、各班山中 2 泊の予定で同時に踏査を開始し、道北フィナーレを兼ねた。1 班の小石峠～幌尻山～ R84 間は、漆崎(裕)他 3 名、2 班の R84 ～上豊神林道間は、助田(梨)他 2 名、3 班の上豊神林道～イソサン～知駒峠間は鈴木(美)他 3 名で実施。3 日目は吹雪に見舞われたが、全員無事下山し、夕方ロッジでお互いの健闘を称え合い、山中での苦労話を肴に盛大な酒宴が行われた。この踏査では、地元の小栗・掛水の送迎サポートを頂き大変有難かった。

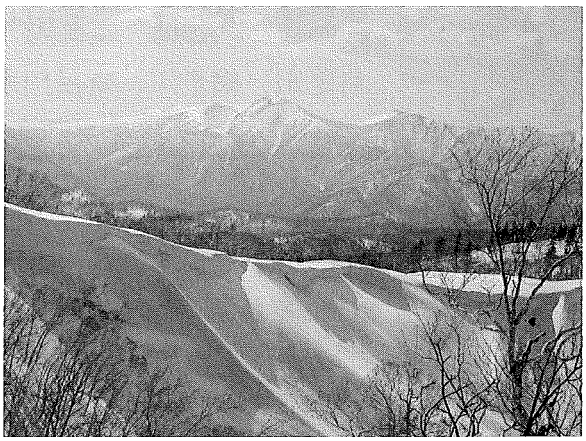
H021　17 年 4 月、パンケ山～ペンケ山～天北峠間の 20km を長谷川他 3 名で実施。ペンケ山東斜面には、雪庇による雪崩が随所に発生しており、乗用車程の大きな雪のブロックが散乱していた。目指す稜線にも大規模な雪庇が張り出しており、ペンケ山の通過を断念し 200m 下方のダケカンバ帯をトラバースした。9 月には残した部分を朝日他 3 名で、ヤブ漕ぎで挑戦するも、1km 進むのに 4 時間も要する厳しい藪のため、分水嶺にも届かず撤退する。翌年 4 月、鶴岡他 6 名が、3 度目の挑戦で残した部分を踏査し完全に繋げた。

H030　16 年 3 月、咲来峠～屋根棟山～函岳の 10km を鈴木(和)他 4 名で踏査。屋根棟山の北西斜面は 45°位の斜度で、雪崩の危険もあるが他に逃げ場が無く、アイゼンを付けスキーを引っ張って慎重に登った。登りきり、遠くの函岳を見て皆なホッとする。函岳小屋の入口は上まで吹溜りで、除雪して入る。翌日、ホワイトアウトの中、広い尾根を地図と GPS を頼りに林道に向けスキーを滑らす。1km 位下ると濃霧も晴れ、快適なスキーを楽しんだ。林道入口では掛水・池・菊地等が待機していて、暖かいコーヒーで我々を迎えてくれた。

H037　16 年 3 月～ 17 年 4 月、シアッシリ山～天北峠の内 66km は池・掛水他名寄山岳会の皆さんの協力で踏査出来た。

H041　16 年 3 月、幌内越峠～ピヤシリ山間の 12km を鈴木(貞)他 2 名で、吹雪と格闘

函岳頂上にて(3月)



チトカニ北 P1193 からの天塩岳(5月)

しながらの踏査となった。ピヤシリ岳頂上近くの小屋は入口上部まで雪に埋もれていた。スコップで掘り出し中に入ると、薪ストーブがあり利用できたのが有難かった。翌日は小屋で出迎え隊と合流し、全員がピヤシリスキー場までの 6km を、深雪スキーを楽しみながらの下山となった。この山はサンピラー(太陽柱) や樹氷のモンスターで有名であるが、何れも時期は過ぎていた。

H045　17 年 4 月、幌内越峠～毛鐘尻山～天北峠の内 28km を富堅・鈴木(邦)・国沢の 3 名で踏査中、毛鐘尻山に進む分水嶺上に前日の熊の足跡がある。熊はナビゲータを持っているかのように、効率の良い斜面を選んで正確に分水嶺を歩いていた。

H052　16 年 5 月、上紋峠～ウエンシリ岳～天北峠間の 38km を中村・漆崎(隆)の 2 名が、4 日間かけて踏査するも、残り 2km で雪が無くなり藪が厳しく、踏査を断念し下山した。残りを翌年積雪期に実施した。

H059　17 年 4 月、上紋峠～天塩岳～浮島峠間の 32km を鈴木(和)他 2 名で、4 日間かけて踏査。初日は台地に出ると猛烈な風で飛ばされ 2 度程転ぶ。夜はしんしんと雪が降る。前天塩岳直下はナイフリッジが見え厳しい様相。3 日目、初めは堅雪にアイゼンが効いていたが、程なく雪が緩んで膝や腿まで踏み抜き難儀する。鋭く尖った岩峰のところはハイマツに逃げ、無事クリアする事が出来た。天塩岳からの下りはのどかなゲレンデ。夜半から強風雨となり、4 日目はスタートを遅らせ、藤内の待つ浮島トンネルへと目指した。

H062　北見峠～チトカニウシ山～浮島峠間の 16km は、16 年 2 月、福田(智)・福田(貴) 他 4 名でチトカニまでは踏査出来た。その先は過去 3 回挑戦するも、猛吹雪やホワイトアウト、天候急変などで断念したが、17 年 5 月、漆崎(裕)他 3 名で 4 度目の正直でついに踏査が出来た。チトカニウシ山頂上から C1357 迄の 1km に亘る分水嶺上を、昨夜か今朝、熊が先に踏査していた。チトカニ頂上からは、有明山、ニセイカウシュッペ山、北鎮岳、旭岳、天塩岳等の眺望が素晴らしかった。

(鈴木　貞信　記)

道東地区

北見峠～武利岳～三国山～十勝岳～狩勝峠　約169km（内夏道66km）

斜里川、網走川、常呂川水系――――釧路川、阿寒川、十勝川水系

道東　169km（内夏道 66km）

H070　17年2月、平山～ニセイチャロマップ岳間の17kmを含む総距離47kmを京極・金沢は4日間かけて踏査を行った。スキーを付けスタートする時点で、既にマイナス17℃と厳しい冷え込みである。分水嶺到達まで8時間、離脱してから7時間と奥深く、踏査中の2日間もホワイトアウトと風雪に見舞われた。ニセイチャロマップ岳への登りは、スノーナイフリッジの刃先をスキーでアクロバテックに進むなど、厳冬期の厳しい踏査となった。

H074　17年4月、石北峠～三国峠間の6kmは、助田(陽)他4名が山中2泊で踏査。密生した樹林帯を通過する際は4月というのにワカンでも膝上まで雪に埋まり、歩行に時間を要した。

H076　16年4月、三国峠～ユニ石狩岳間の7kmを中谷他6名が山中テント泊で踏査。ユニ石東肩の斜面は30°位あり、200～300mの距離でアイスバーン状となっており危険な状況であった。

H078　17年7月、十石峠～石狩岳分岐間の5kmは夏道があり、台風の影響で針葉樹の大木がところどころ倒れて登山道を塞いでいるものの、神埜他10名で高山植物を楽しみながらの踏査となった。

ユニ石狩岳P1676尾根のテント場(4月)

H086　17年7月、三川台～トムラウシ山～沼ノ原間の19kmは夏道があり、大崎他4名で俵真布から入る。今年は例年より融雪が遅く、五色ケ原の花園は見られなかった。

H089　17年8月、三川台～オプタテシケ山～美瑛富士小屋分岐間の14kmは、金曽他10名で3日間とも小雨の中を踏査し、小屋で待っていた出迎え隊、森武昭他26名と合流して、道東フィナーレ登山は終了した。下山口駐車場では畠山(廸)らが全員分のソーメンを用意、皆でご馳走になり大感激した。

H095　16年8月、分水嶺公募登山が十勝岳周辺で快晴の中開催され、首都圏からの4人を含む18名が参加した。美瑛岳～十勝岳～上ホロカメットク山間の7kmを3班に分け、美瑛岳からは石岡・宮津・神原他7名が、上ホロからは東山・西田他4名が、望岳台からの直登は新妻・八木橋が、それぞれ十勝岳頂上で合流し、全員で望岳台へ下山した。

H098　16年5月、上ホロカメットク山～下ホロカメットク山間7kmを、大崎他7名はP1827まで行き、更に助田(梨)他3名は、下ホロまでの往復を目指し、つぼ足で一部はズボズボ沈むところもあり、ペースが上がらず13時間かけて小屋に辿り着いた。下ホロ頂上からの十勝連峰、大雪山、夕張山地、北日高連峰の眺望は素晴らしかった。

H098　17年4月、下ホロカメットク山から東4kmを踏査、田島他4名で長いシートカチ支線林道を含む27kmをスキーでラッセルし、最長のアプローチであった。P1254～下ホロ山頂迄はアイゼンを装着した。

H100　17年4月、下ホロ東4km～稚空知山～佐幌岳間の25kmを含む37kmを北守他

1827直下からの下ホロカメットク山への分水嶺(5月)

3名で、スキーシールに新雪が団子状になるのを落としながら、山中2泊で踏査した。

H101　16年1月2日、北海道支部最初の踏査が田島他7名で、佐幌岳北2kmで開始。北に十勝連峰への分水嶺を望み、南にオダッシュ山・狩振岳・トマム山への分水嶺を望みこれからの各ルートを確認した。

H102　16年7月、道東地区最南端の佐幌岳～狩勝峠間5kmを、首都圏から森、古市の参加を得て、6名で狩勝峠から往復踏査した。　　(鈴木　貞信　記)

余話

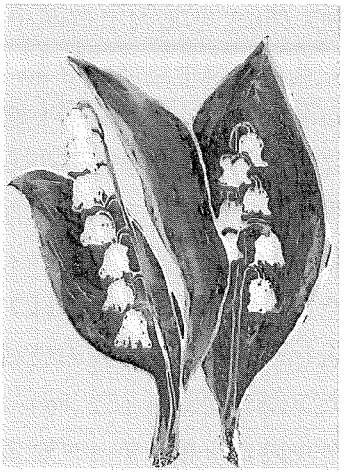
公募踏査・十勝岳と美瑛岳に参加して

分水嶺踏査委員会　宮津公一

2004年8月28～29日、若い時から大好きな大雪山系、その一部の踏査であるが、北海道支部の公募情報を得て、分水嶺踏査委員会でいち早く手を揚げた。

晩夏の佇まいの白金温泉、白樺荘に入る。ここで支部の方々、首都圏から参加の3名と合流。支部の皆様お心尽くしの手作り料理で宴会となる。Tシャツ、手提げ袋などお土産まで頂き、心ゆくまで酌交す。

翌朝は快晴、望岳台より朝日に輝く十勝岳を見上げながら、3班に分かれて出発。私は少しでも歩きでの多い美瑛岳経由に入れていただく。植生を気にしながら美瑛岳コルから



山頂へ分水界をたどる。眺望素晴らしく、トムラウシ、ニペソツなど、そのまま行ってしまいたい程、登攀意欲をかき立てる。

すでに新妻支部長は十勝岳頂上に陣取り、2コースからの集結を待っておられる様子、十勝岳山頂で、上富良野岳、上ホロカメック経由のC班とも合流、出発点望岳台に下山した。

無雪期の登山道、植生無しの火山岩礫帯は、どうという難しさは無く、山行報告はこの程度とする。報告したい事、それは北海道支部が新妻支部長、長谷川事務局長以下、会員、会友、一般参加まで動員してこの事業に取り組む姿勢と意欲には心を打たれた。それでこそ、総延長1100km余は成し遂げることができたものと。先日私にまで贈呈下さった、「北海道中央分水嶺踏査記録」を拝見し、また自分達の担当区（奥会津）・短い距離ではあったが、足かけ2年、5回も挑戦、苦労したことを反芻し、改めて感激した次第である。最後に首都圏より参加の石岡、東山、西田、宮津4名は、これをご縁に道外会友となったことを附記いたします。

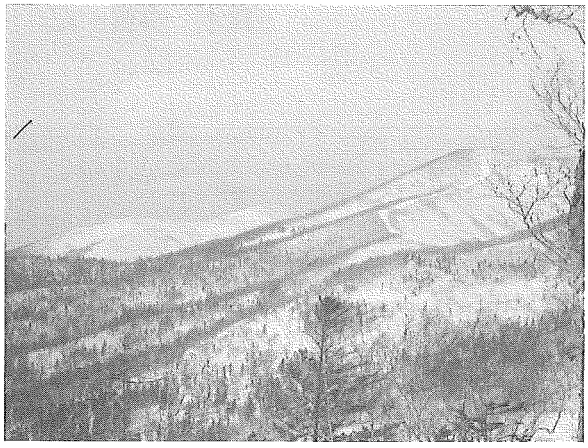
道央地区

狩勝峠～トマム山～樽前山～昆布岳～静狩峠　約327km（内夏道38km）

石狩川、尻別川、朱太川水系――――十勝川、鵡川～苫小牧川水系

道央　327km（内夏道 38km）

H104　17年3月、狩勝峠～オダッシュ山～三支庁境間の19kmを、三戸部他3名で踏査。2日目は午後から天候が悪化し、雪混じりの強風の中での歩行となった。



臥牛山からのオダッシュ山

H109　17年1月、幾寅峠～トマム山間の4kmは、鈴木(貞)他3名で、厳冬期の山中泊。2日目、稜線上に出てから猛烈な風雪(風速20m位)に晒され、体感温度はマイナス30℃を体験。鈴木は手の指3本（凍傷Ⅲ度）と風上側の右頬を、他の1名も右頬が軽い凍傷にかかった。

H112　17年3月、社満射岳～金山峠間の15kmを、鈴木(和)他2名が南富良野スキー場のリフト終点からスタート。最中状の雪の上に30cmの新雪が積もり、スキーでのラッセルが始まった。社満射岳では北側に大きな雪庇が発達しており、樹林帯側に逃げると重い吹溜りが待っていた。下りでは吹溜りに突っ込み顔面制動の洗礼を受ける。テント予定地では雪を踏み固め、風除けのブロックを積み上げて整地し快適なテント場を作った。翌日P903へは、尾根幅が1mと細く、しかも両雪庇、左雪庇、右雪庇と状態が変化しており階段登行、階段下降を余儀なくされ難儀した。3日目朝は、半分雪に埋もれたテントの除雪から始まった。今日は快晴で綺麗な樹氷の中をスタート。P719で石田(栄)は出迎え隊の石田兄妹と感激の親子対面をした。

H115　16年4月、金山峠～老根別山間は鈴木(美)他4名で、スキーでの踏査。頂上直下の東斜面分水嶺上には幅30m、長さ100mの雪崩の跡がありアイゼンに履き替える。大きな雪の固まりがゴロゴロ散乱し、上を見ながら慎重にルートを選んだ。頂上から北に延びる尾根の東側には、500mに亘って大きな雪庇が張り出して今にも落ちそうに見えた。

老根別山への雪崩斜面の分水嶺と雪庇

H116　17年4月、老根別山～三角山～R136峠間の16kmを北大山岳部中島の参加を得て他2名が、山中2泊で踏査。今回の老根別山への取り付きは雪崩斜面を避けて、三点の沢林道から入り頂上稜線に出るルートとした。稜線下まで安田・大畑の同行を頂く。頂上から北へ延びる長大な尾根の末端から西に下り、そこから南への分水嶺はアップダウンの繰り返しが多く、三角錐の急斜面ではスキーアイゼンが有効であった。時には、スキーを持ちバケツのようなステップを雪壁に付け

て、強引に直登するなどしながら分水嶺を辿った。3日目の朝、三角山の頂上に立つ。R136峠に出て分水嶺は終わった。ここから9km先で待っている藤内・大畑の出迎え隊までスキーを滑らせ、感激の対面をし、用意してくれた冷えたビールが特別美味しかった。

H117　17年3月、清風山～東長和間の13kmを植田他3名が、山中2泊で踏査。駐車場から分水嶺までの9kmの林道を4時間かけてスノーシューで進む。清風山から先は支尾根が幾つも派生していて、樹木が多く見通しが悪い。どこが分水嶺なのか、地図とGPSで確認するのに苦労した。小さな分水嶺を発見。こちらの斜面と向かいの斜面の間にコルらしきところがあり、ここが幅2m×長さ5mの小さな分水嶺となっていた。老根別山、三角山、清風山等は殆んど人が入らない山で、分水嶺踏査のお陰で登る事ができ感謝している。

H120　17年1月、横須賀・三野他2名で長和を踏査。標高が400m程度と低いため、樹木が密生して分水嶺のルートを見極めるのに苦労した。

H125　17年8月、クオベツ山無名峠で百周年記念山行兼道央フィナーレ登山を実施した。平山会長・田邊副会長他本州9名を含む40名が参加。2m位のクマイザサが密生した藪漕ぎに終始したが、踏査は完了し道央の分水嶺は完全に繋がった。無名峠から西は前年5月に、若林、高木らが踏査済みである。

H134　16年6月、当会の踏査活動を新聞記事で知った千歳市民から、参加申し出があり、21名の参加を得て、新妻の引率で千歳空港から支笏湖畔迄の約20kmの踏査を実施した。新千歳空港近くの分水嶺は標高僅か20mと日本一低い分水嶺と思われる。しかも滑走路を横断しているという珍しい所である。滑走路は立ち入り禁止であり、空港を取り巻くフェンスに沿って外側を廻り踏査とした。

H138　16年2月、キムンモラップ山～モラップ山間を宮崎・杉山他2名で踏査。快晴の中、鹿の安住の場所を通らせて貰った。「モラップ」とはアイヌ語で「鳥の羽が多く落ちているところ」の意味。

H161　16年4月、留寿都～神里間の12kmを山本(治)他3名で踏査。ここは、国道230と道道230が分水嶺を形成する地形上貴重な区域である。

H168　17年3月、礼文華峠～金山～新富間は、前年9月に八木橋・海老名・斉藤(勝)らで踏査した残り、13kmを横川・小森他3名で実施。雪も多く雪庇を避けながらの踏査で、下山予定時刻が大幅に遅れたものの完了した。

H171　16年3月、赤石他2名は、極端に片側に寄った、珍しい地形の分水嶺を踏査した。長万部町礼文華峠近くの、新辺加牛トンネル上の分水嶺標高点255地点は、南の太平洋まで僅か240mしかなく、北の日本海側へは直線で30kmもあり、ここを源頭とする来馬川は、渡島半島の付け根を北に流れ、日本海の寿都湾に出る。　　(鈴木　貞信　記)

道南地区

静狩峠～ルコツ岳～大千軒岳～白神岳～白神岬　約276km（内夏道7km）

利別川、太櫓川～石崎川――――長万部川、ルコツ川～木古内川水系

道南　276km（内夏道 7km）

地元メンバーが少ないため、札幌からの応援と「青い山脈」などの山グループの協力を得た。

標高の高い山は無いが、奥深く見通しが悪いため、ルート選定に苦労し、又小さなアップダウンが多く踏査に時間を要した。

道南は北海道の中でも特に熊の生息密度が高く、踏査中は足跡や糞を見るのは頻繁で、熊の恐怖との闘いでもあった。

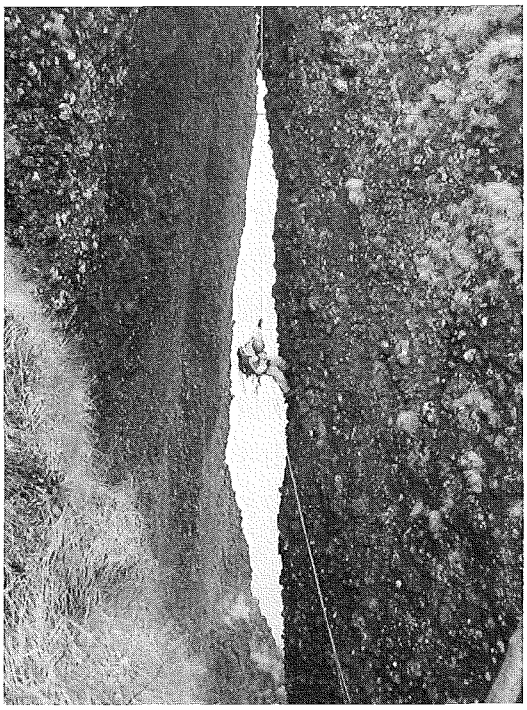
H181　16年10月、お月見山行と分水嶺踏査を兼ねてピリカ丸山の3kmを踏査。河村、高橋(桓)、畠山(勝)、古城他17名が奥ピリカ温泉～ピリカ丸山～二股温泉を、紅葉とブナの原生林の中、天気にも恵まれ頂上からの展望も良く楽しい踏査ができた。

H184～H195　美利河峠～ルコツ岳～トワルタップコップ岳～キムンタップコップ岳～日進峠間は総距離44kmで、井後(幸)をリーダーとし、高澤・安田・米村・西野・上島・佐藤(英)らが8回に分けて踏査した。標高が400～500mの山では、樹木も多く分水嶺を見極めるのに苦労した。

H199　17年4月、新妻・侍園で岩子岳を踏査。岩子岳南斜面は鋭く切れ落ち、雪が付いていない為、危険を避け沢に下りトラバースし0.7kmを残した。翌年3月、佐藤(守)他3名で再度挑戦し、デルタ状雪田から灌木帯をアイゼン装着で目的を達成した。

H202　雄鉾岳割岩とピナクルは道内の分水嶺でも一番の難所で、中村がリーダーとなり漆崎(隆)・漆崎(裕)・大畑等で完全トレースした。

雄鉾岳北にあるP790は割岩と呼ばれている。巨大な岩が二つに割れたように、2m程の間隔で垂直に立っている。その両方に分水嶺が通っている。17年10月、中村はその間隙の中を50m懸垂下降して分水嶺を繋いだ。



雄鉾割岩での中村の懸垂下降

雄鉾岳北峰からは40mの懸垂下降。その先に5～6人が立てる程度のピナクルがある。北側は一部オーバーハングしており、30mの懸垂下降。ピナクルから続く尾根は幅30cmしかなく、両側は鋭く切れ落ちている。

H205　17年3月、漆崎(隆)は単独で沖沢山～突符山～姫待峠間の約19kmを踏査した。沖沢山から南に延びる尾根は岩稜地帯で、地形図には現れない10m前後の壁の連続となっている。踏査方法は、まず空身でザイルをフィックスしに行き、戻ってザックとスキーを上げる。次にその先の下降に入る。強風の中その繰り返しで、途中ピナクルもある厳しいルートのため、1日に1kmしか進めず粘り強く頑張った。

雄鉾北峰ピナクルでの漆崎(裕)の懸垂下降

H222　18年3月、梯子岳を海川・片岡は日帰りで14時間かけて踏査。分水嶺上は激しいアップダウンや痩せ尾根が続き、肉体的にも精神的にもタフネスを要求されるコースだった。

H225　18年3月、焼山～瓜谷山間などの5kmを踏査するため、海川・片岡らは林道他16kmを歩く。分水嶺上はブナの大木が林立する広々とした、ピーク不明の台地状の低山が続き、GPS測定地点を定めるのに苦労した。

H231　17年5月、七ツ岳～C819間の9kmを海川・片岡で計画し、焼山から白神岬迄完了予定であったが、途中から積雪が無くなって厳しい藪漕ぎとなり、2kmを残し引き返した。翌週、沢からのルートに変更し、厳しい藪漕ぎながらも繋ぐ事が出来た。

H233　17年5月、清水他2名が燈明岳3kmの分水嶺の為に、大量の熊の足跡を見ながら、前後林道を含め17kmを歩く。

H235　16年4月、単独行の海川が前千軒岳奥二股沢左岸尾根で親子熊と遭遇。熊は尾根上部から下へ、海川が下から上へ登るとバッタリ鉢合わせ。両者の距離20m。40～50秒睨めっこ。熊は照れくさそうに振り返りながら藪の中に消えてくれて無事生還。子連れの熊は特に危険なため、その日の踏査は中断し引き返した。熊の臭いは物凄く臭く、生きた心地がしなかった。

H237　17年4月、百軒岳の3kmでは、清水他2名が、分水嶺まで沢ルートのため、特長靴を履き股下迄の渡渉を12回も繰り返した。最大の問題箇所と考えていた領域を突破出来た意義は大きい。

H245　18年4月、最南端の白神岬で、道南フイナーレ踏査登山を、横内Lのもと平山会長他23名の参加を得て、2班に分かれて実施した。茫洋と霞む津軽海峡を足下に眺めながら、海岸段丘をなす岬先端部100mは懸垂下降をしながらの踏査であった。

おわりに

今後の展望として、三国山からの知床岬、日高三支庁界から日高山脈を南下し襟裳岬迄の踏査も視野に入れた支部活動の可能性が現実味をただよわせている。

（本文については、敬称略とし、各踏査班の氏名はL・SLとは限らないのでご了承願いたい。地区別の記述は北から順に並べた。又、積雪期はスキー、スノーシュー、ワカンでの踏査が多い）　　（鈴木　貞信　記）

余話

中央分水嶺送迎運転手として

北海道支部　藤内英夫

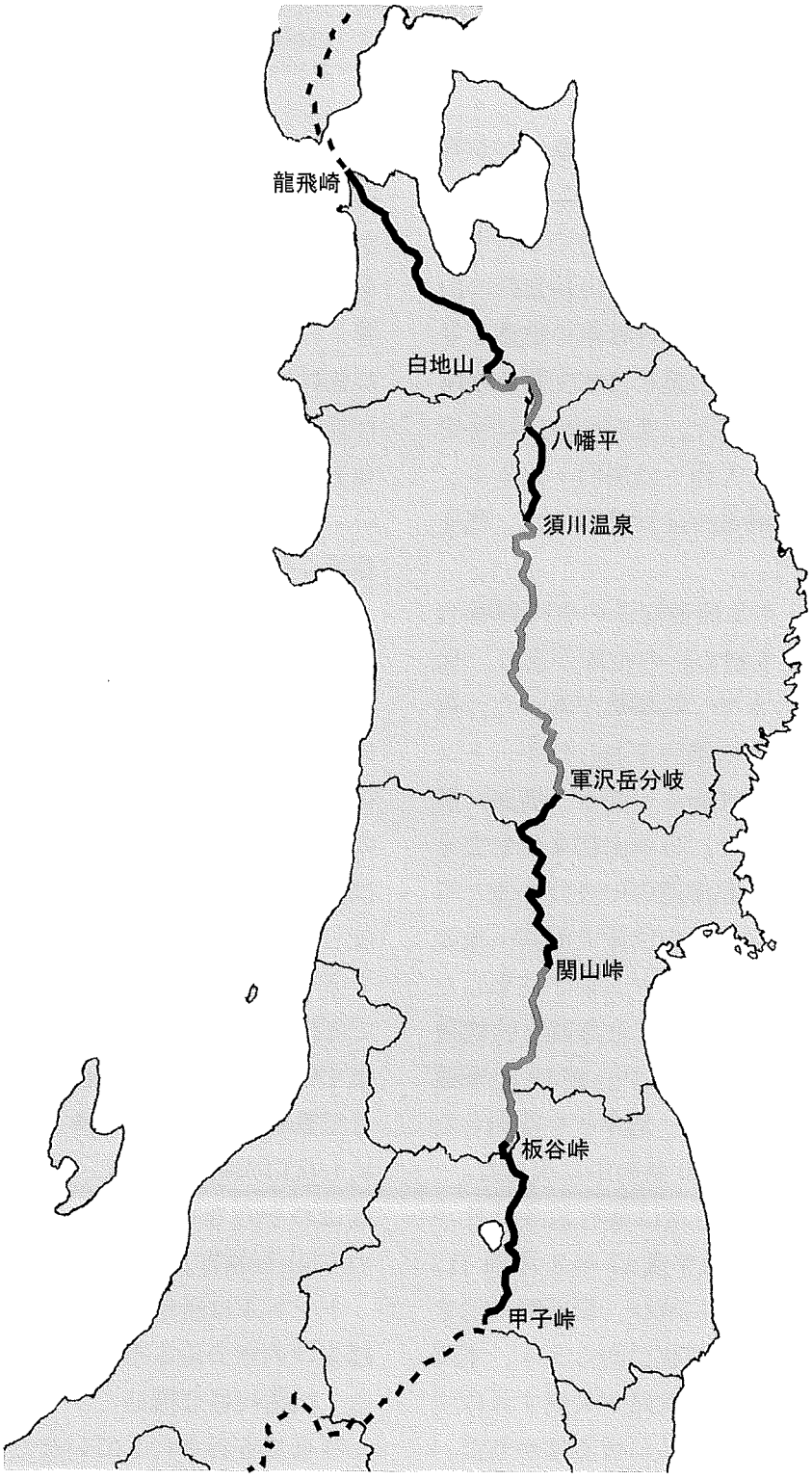
今回のプロジェクトには踏査班の送迎係として参加し、11回の山行に18日間出勤した。登山口まで送ったあと迂回待機して下山口で迎えることの繰り返しだったが、車の走行距離は4581kmに及んだ。高速道路会社に聞いたところ、札幌を出発して青森から本州を通り抜け、鹿児島県に入ったあたりでUターンした計算になるとのこと。いささか驚いたが、中央分水嶺を眺めながら北から南まで踏査班に伴走したものと思い直して、ひそかに満足している。

スノータイヤに着け替えたまま車庫に眠っていた車はよく走ってくれたが、シルバーマークを貼って慣れない雪道をのろのろと行く運転手では、出発する皆さんの意欲を削ぐことになったかも知れず、我慢して乗って下さった皆さんには少々申し訳なかった。

自分にとって、圧雪の道、雪降りの日、朝霧の中、雪の夜などのハンドルは何年か振りのことであった。夜の峠道では、すれ違ったトラックにシャーベット状の雪を撥ねかけられて、目の前が何も見えなくなる一瞬も経験した。初体験になった雪解け時の林道には、崩落、ぬかるみ、軟弱な路肩などが次々とあって緊張の連続であった。ひとりポッチで迎えに入った山奥の藪道で一番気がかりだったのは、ヒグマとばったり遭遇しやしないかということ。道がカーブするごとに首を伸ばして先を覗き込み、ゆっくりとアクセルを踏み直したことなどは、臆病癖全開のほろ苦い思い出になっている。

大きな仕事を成し遂げた踏査班の皆さんとは違った場面であるが、緊張感を共有できたことに満足し、お粗末なサポートにもかかわらず事故もなく終了した幸運を慶んでいる次第だ。一日の行程では550km、運転時間10時間が最高記録としてあり、支部のフィナーレ踏査にご参加くださった平山会長にご一緒させていただき、良い思い出を残せたのも嬉しい。

東北ブロック



青函トンネルを歩き抜ける

首都圏　柳下棟生

北海道最北端の宗谷岬から南下してきた中央分水界は、南端の白神岬から本州津軽半島北端の龍飛岬へどのように引き継がれるのであろうか。実際に歩いた会員の記録である。

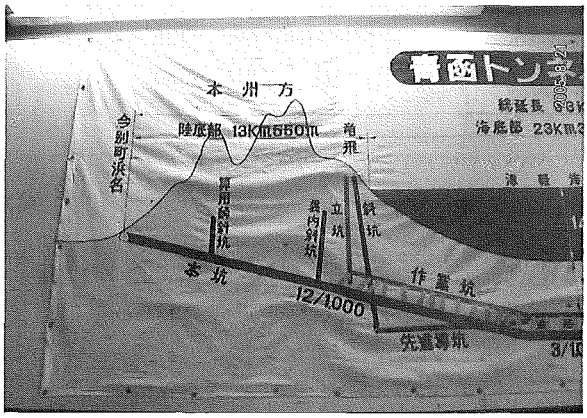
五十年このかた、山歩きと自転車旅行が好きで、平地と山麓は自転車で周遊している。その結果、自転車走行軌跡が国内で5万キロを越し、東京の自宅から大概の山岳地帯の山麓に軌跡が通じた。近年は自転車の軌跡を登山の基点にしている。山頂と自宅玄関を軌跡で結ぶことが生き甲斐だ。そのためには海を渡らねばならない。九州へは関門トンネル、四国にはしまなみ海道を徒歩で渡った。残るは青函トンネルだ。

昭和63年トンネル開通記念の青函博覧会で、『トンネル歩き初め』の企画があり、保安上厳しい条件つきで一般募集があった。選に漏れて、一生一度の機会を逸したが、トンネル歩きの催しが稀にあると聞き、周囲に触手を張り巡らしていた。日本山岳会の中央分水嶺踏査も始まり、北海道の中央分水嶺と本州のそれが青函トンネルの位置で海底山脈として連結し、氷河期にナウマン象が往来したことを知った。この矢先、『北海道新幹線着工記念青函トンネルウォーク』がJR北海道主催で行われると知った。是非とも参加したい。幸い催行募集人員20名の中に入った。

主催はJRだが催行管理は某有名旅行社が委託されていた。日時は平成17年8月21日。前日までに団体で函館に飛び、松前町に泊まる。行程は北海道吉岡斜坑口から入り、本州龍飛斜坑口に出る。函館航路が欠航すればすべてが無になる。ただ神仏に祈るばかりだ。幸い前夜旅館でJRの担当者からトンネルの説明を受けるところまできた。翌朝は斜坑口までバスに乗るが、斜坑口の位置は教えて貰えなかった。保安上明らかにできる場所ではないのだろう。一つ心配が生じた。歩行行程が地表間設定か？坑内にはケーブルカーもあるそうだし、運搬車両に特定区間乗ることも考えられる。山と違って自分勝手な目的行動は絶対にとり得ない。歩き抜くという自分の行動には自信があったが、他者の企画で特別地を歩かせて頂く以上、風まかせで心もとない。同行の参加者に当たると私のような目的意識は持っていないようだった。

当日は朝から雨。旅館をでてからのバスの経路を地図と車窓から観察してメモしておく。バスは吉岡で国道からそれて坑口の建屋に入って停車した。雨のせいもあるが、私には隠密裏の行動のように思える。ここは日本の安全保障上も重要な場所であり、昔でいえば機密要塞地帯である。下車してそのまま入坑してしまうと、地表との軌跡を結ぶことができない。私は建屋の外に走り出て、GPSで測位して、周囲状況を把握した。後日ここまで中央分水嶺地点の白神岬から徒歩で再来して軌跡を結ぶためである。1/25,000地形図にも坑口の明記はなく、案内がないとこの位置はわからない。別途GPS測位の数値も丸めて「山行報告」を分水嶺委員会に出してある。

トンネルは用途ごとに複数本あり、今回の踏査は列車の走る本坑ではなく、作業坑である。結構複雑な構造だから、坑口で急ぎ撮った写真でも参考にしていただこう。各自タイムカードをもらって、入坑時刻を印字する。ここから斜坑を下る。ケーブルカーはあったが、幸いに乗らずに徒歩で下って、海底250



メートル近くの作業坑に達した。作業坑は見た目にほぼ水平で、本州の龍飛側まで約23キロあり、地表への斜坑の下りと上りを合わせると合計約25キロとなる。作業坑の海底部は海水部140メートル、土質の部分は約100メートルの下ということだ。公海部の海底にもし爆発物を仕掛けられたら、と心配ひとしきり。隊列を組むのではなく各人自由に歩く。規定時間内にゴールできないと救護車に拾われてしまい、更に龍飛側ではケーブルカーに乗せられるので完全踏査にはならない。

坑内には10メートル間隔位で蛍光灯が点いており、足元は安心できた。蛍光灯の交換だけでも大変なことだ。懐中電灯で照らしながら歩くのと違って恐ろしくはない。山中の無灯火のトンネルでのように、重い荷物が急に一層重くなって、振り向いたら殉職者が載っていた！というようなことはない。

トンネルは多少の屈曲部はあるが、直線部では前後に人影が見えない時もあった。道幅は二車線で、側溝があって漏水が流れている。流れる方向を観察すると、一番低いトンネル中央部に向かって流れている。正確に記すと中間点と印された地点から、私の徒歩で約30分手前に、最低水準点標と印された標識があった。したがって漏水をこの辺で掬い上げて地表に排水しないと、トンネルは水没してしまうだろう。排水は先進導坑を通って地表にでる。これだけをみても日常の維持に莫大な費用が必要なことがわかる。排水しないと3日で水没するとのことである。天井は高く4メートル程。中間点には電気施設があった。ここが排水の中枢なのだ。施設といえば、全行程を通し仮設トイレが2箇所あった。入坑後まもない地点の側溝の流水をなめてみたが、塩辛くなかった。まだ陸地に近いからであろう。中央部に行くほど塩辛くなるはずであるが、側溝が深くなり危険に思えたので一寸なめてみるのは止めておいた。北海道側に比べて本州側では天井のツララが目立ってきた。地質と漏水量との関係であろう。温度は20℃位、湿度も大儀に感じなかった。トイレ以外に休憩場所はないが、荷物も軽くリズミカルに歩けた。この催しの安全を保証している関連機関があるので閉所恐怖にも襲われることなく私は25キロを約5時間で歩き抜けた。

坑内では目より耳の方が敏感になる。時折隣の本坑内を走る列車の通過音が聞こえるが、姿形はまったく見えない。人の足音と微かな風の気配と側溝の水音だけ。不思議なことに不快な反響音はしない。平成17年10月からは新幹線敷設のための工事に入るとのことで作業坑は本来の工事専用となり、この酔狂な試みは不可能となるのだ。さて龍飛側の斜坑を上り、タイムカードへ出坑の時刻を印字してJR北海道から『青函トンネル完歩証明書』をもらう。開けてくれた建屋の扉から待望の本州側の地表にでた。建屋の隣に青函トンネル記念館があった。雨はあがっていた。

これで青函トンネルを地表間踏査ができ、所期の目的を果たしたのであるが、まだ中央分水嶺が線で結ばれたことにはなっていない。やり残した陸地部の踏査軌跡を作るために、1ヶ月後の9月20日、21日に再度龍飛崎、白神岬を訪れた。今度は心の余裕をもって周辺も含めた探索踏査もできたのであった。

なお付け加えると、平成17年に幻冬舎から安東能明著、「ポセイドンの涙」と題し、青函トンネルを舞台にした推理小説が出版されている。或る程度このトンネルの雰囲気を伝えているものと思っている。

津軽地区

龍飛崎～大倉岳～発荷峠、迷ヶ平～与須毛堂森　約135km

岩木川、米代川水系――――新城川～馬渕川、奥入瀬川水系

青森支部は担当区間全体を3分割し、各班が責任をもって計画実施することにした。北の竜飛崎から県道屏風山内真部線までの54kmを津軽班に、続いて国道394号線大川原までの42kmを青森班に、八戸班には南八甲田を越え十和田湖の西側国道103号線発荷峠までの39kmを振り分けた。

各班の頑張りで巧くいけば、分水嶺踏査責任者の筆者は楽が出来るはずであった。しかし、天は見逃がしては呉れなかった。ある日秋田の佐々木支部長から「支部の区域内に、青森との県界が川で、分水嶺は完全に青森県内にある区間がある。秋田としては他県を侵すつもりはない」との電話。更に本部の石田委員長から青森でたのむと駄目を押された。

迷ヶ平から与須毛堂森まで

これは、先に分担を決めた南端の発荷峠から少し飛んだところの区間である。登山道はないが標高は低く春の雪の締まった時期なら難所もないので一人でもやれると腹を括る。が、サポートがないと縦走方式はとれず、車を置いた所へ戻るピストン方式で往復44kmを一人で歩く事になるのだ。強風や吹雪で戻った3日間をいれて8日間かかったが、分水嶺を歩いて驚いたのは、十和利山から十和田湖へのルートだった。分水嶺の南、秋田側に植林された径15～20cmの杉林が去年の大雪のためか軒並み、幹から折れて凄まじい有様。それに比べ北側のブナ林はそのかけらも見えない。手を加えた秋田側の植林と原生林のままの青森側のあまりにも大きな違いに、自然のしっぺ返しを見た思いであった。

又途中で、日本大背脈縦走島田と書かれたテープを発見したりした。その後、山行に忙しく報告書をまとめないで居たら、記録した手帖を紛失し、翌春又も一人で踏査する事になった。踏査も二度目となればルートも解り気楽なものの強風や吹雪のため実効は5日間、カラ戻り2日の7日間もかかってしまった。歩いた距離は合計88km。分水嶺をこれだけ一人で歩いた者もおるまいと自分で自分を褒めたのであった。　（高橋　毅　記）

津軽半島を行く

2005年2月26日午前8時、会員3名が1週間の予定で竜飛崎をスタート、階段国道を経て国道339号と併走する分水嶺をスキーで南下した。シールの不具合と灌木の密生で距離がのびず、ピーク488m付近でビバーク。翌27日は風雪が激しく、シールがこのままでは無理と判断し、矢形石山を越えてから陸奥湾側に下山を決定。山中に一泊し28日12時30分海辺の算用師部落に到着した。

第2回目は3月21日会員2名で踏査開始。雪面が固くなったのでスキーがよく滑り、前回の終了点には10時30分到着。半島第二の高さの増川岳を左に見ながら、アップダウンを繰り返し四ッ滝山に15時着。30分ほど進んでブナ林の中をビバーク地とした。

翌22日、品岳分岐付近から、ブナ林が杉・ヒバを加えた林へと変わり、標高も低くなったため、針葉樹の若木が密生していた。距離が延びず7km程進んだだけ。途中随所に津

本州最北端の竜飛崎で

軽半島縦貫道建設の測量標識がブナの立木に打ち付けてあった。翌日玉清水山までの予定は里に不幸があり、今回も中途下山となった。

第3回目、前回の終了点の県道12号には、4月2日7時着。袴腰岳には14時着。日本海からの強風のため山頂には雪が無く、今回の踏査で三角点が確認できたのはここだけである。この日は赤倉岳分岐付近でのビバーク。

翌4月3日夜半からミゾレとガスの為11時出発。急登に手こずったが、大倉岳12時着。十二岳を経て16時にはビバーク。

4月4日は朝から晴天、7時40分発。最終地点の県道と分水嶺が交差している所までは人工林地帯で半日の行程である。最終地点には13時着。苦労はあったが、クマタカの飛翔、クマゲラのドラミング、採餌木の確認など山行を楽しむこともできた。今回本州北端からの中央分水嶺踏査の一区間をトレース出来たことを嬉しく思った。(清野　宏　記)

八甲田には何が似合う？

櫛ケ峰から御鼻部山迄はアプローチが長い。猿倉温泉から御鼻部山に抜けてもサポート隊がいなければ帰って来られない。テントを担いで、御鼻部山から櫛ケ峰を往復する事とし、共に忙しい中村氏と日程を調整、2004年8月21・22日と山に入った。

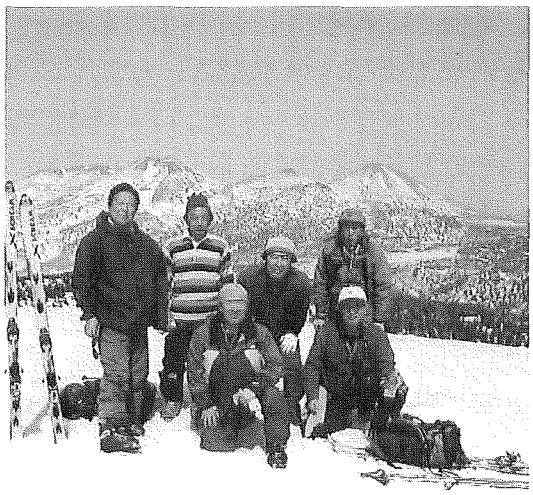
「富士には月見草が良く似合う」とは郷土の作家太宰治の言葉である。「八甲田には長靴が良く似合う」というのが、我々凡人の言葉である。猿倉温泉から御鼻部山までは、戦前に軍用道路が作られ、完成を見ずに廃道になっている。道路の名残はありながら、手が全くつけられておらず、湿地をジャブジャブ漕いだり…シャツを雑木に引っ掛けて破ったり…崇り目である。

滝ノ沢～白地山まではHAT-Jの力を仰いだ。中央分水嶺踏査登山の主旨に従えば日本山岳会の活動を一般に広げた表彰ものとは言え、内実は人員不足の結果である。2004年9月5日、HAT-Jから21名の参加を得、分水嶺、十和田火山の成り立ちなどを学習しながらであったため、非常に有意義であった。

あとの区間は、2005年7月2・8日、日帰りでバタバタとつぶしたという印象しかない。　(大久保　勉　記)

人生の無常を

2004年4月18日。水蓮沼バス停より3m弱の雪の壁を越え、各自シールを着け快晴の中、雪面の反射を受けながら、北八甲田山を背に駒ヶ峰を目指し順調に高度を稼ぎ始めた頃、先行していた加藤と合流。(この時点で10日後の28日が加藤の通夜になるとは誰一人考えもしなかった) ニセ駒をすぎ、尾根伝いに進み駒ヶ峰着。櫛ヶ峰を目指してシールをはずし、指導員の資格者2名を含むメンバーは軽快？にすべる (もちろん加藤も)。櫛ヶ峰山頂の三角点を確認し、全員で北八甲田山をバックにして撮った記念の一枚。
(これが加藤最後の山行写真となる)



櫛ヶ峰の山頂にて

途中、ガチャポッチの前で昼食を取った後、シールをつけ見通しの良い尾根を快調に進み、横岳の山頂も無事通過、シールを外し沖揚平を目指し下降開始、快晴のなか15時25分全員無事今日の予定を完了。今回参加した加藤氏が1週間後に急逝し、生前最後の山行となりました。岳友一同、心からご冥福をお祈りいたします。　(中村　光明　記)

奥羽北地区

白地山～発荷峠～迷ヶ平、白萩平～四角岳（青森支部と重複区間）
八幡平～秋田駒～和賀岳～三界山～栗駒山（岩手支部と重複区間）
栗駒山～花山峠～須金岳～軍沢岳（宮城支部と重複区間）
約 260 km

米代川、雄物川水系――――相坂川、馬淵川、北上川水系

はじめに―始動まで

日本山岳会創立百周年記念事業の一つとして中央分水嶺踏査登山の計画案が初めて支部長会議に提案された当時（平成15年）、会員の高齢化のため実施は難しいのではないか等の意見が出され、私も中谷前岩手支部長と共に反対した一人でもあった。

秋田支部としては、既に全国の各支部に先駆けて、「曲甲山から女神山」までの踏査をGPS測定にて実施しており、また、かつて情熱を燃やし県境縦走に没頭していた一時期もあって、全地域をほぼ熟知していたことと、一人でも多くの支部会員に奥羽の山々の魅力を再確認して頂きたい思い等から、後に出た修正案も考慮し、反対から賛成へと切り替えて、本格的に準備に入った次第である。

秋田支部担当の分水嶺は、およそ320kmあり、そのうち3分の2ほどには踏跡すらない。その大方は隣接する岩手県との県境にある。隣県と重複する分水嶺については、支部間で担当区間を分けることはせずに、それぞれが好きな時期に好きな区間を実施していくことに決めた。従って、踏査済区間をお互い報告はしたが、重複区間の生じたことはやむをえない。

分水嶺を横切る鉄道

また、当支部では公募形式はとらず、支部会員と一部有志で実施し、登山路のある区域外は、藪こぎはなるべく避け、残雪期に主力をおくこと。主力メンバーもほとんどが50代半ばから60代後半となり、かつてのようにテント泊での縦走は無理であることから、朝早くから夜遅くまでの行動にすること。さらに安全第一をモットーに好天候を最優先にして実施することとして始動した。

方針に従って

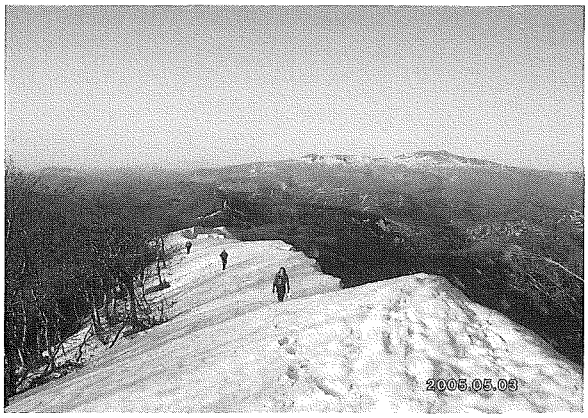
平成16年春期は北栗駒山周辺（大森トンネル～東山～上鉢山、須川温泉～秣岳）と十和田湖方面、その他を踏査したが、交通規則と雪不足が問題であった。特に、国道の冬期閉鎖と林道の除雪が行われていなかったことには困惑した。なお6月29日の秋田魁新報に、「東北の背骨を踏査」と題し、当支部の分水嶺踏査が報道された。

この年の残雪期以降の分水嶺踏査は、好天候と人材に恵まれ順調に推移し、残雪期をも含め約150km、全体の約60％を達成した。

当支部担当の踏査区域は、県北部の迷ヶ平から八幡平までは、四角岳以北の一部を除いて青森県（14km）と岩手県（48km）内の領域であり、これを前述の320kmから引くと約260km（水平距離）程である。

春期から夏期にかけては、登山路のある区域を選び、白地山から発荷峠、更に赤岩山を経て国道までと、八幡平から大深岳を経て孫六分岐までとを各々1泊2日の山中泊にて親睦を兼ねて実施。県中央部においては、一般コースのある曲甲山から和賀岳、秋田駒ヶ岳から孫六分岐までを有志により実施した。

秋期は、落ち葉で見通しの良い11月以降とし、県南部の割倉山から笹峠以北のP741mまでを3区間に分けて実施、晴天下



竹ノ子森山頂から北側の分水嶺を望む　後方は栗駒山

のヤブ山を大いに堪能した。

天候に恵まれず

平成17年は予想外の大雪となり、残雪期の豊富な雪量に期待を込め、総力で取り組む予定であったが、前半期は例年になく好天に恵まれず、また後半期は主力メンバーの体調不調等で大幅に実施計画が狂ってしまった。

結果として当初予定していた計画の60%程度しか実施出来なかった。予定区域は藪山が主体であり、高齢化した支部会員としては残雪期のみという踏査方針に従い、残った区域は来春に持ち越すことになった。今残雪期に踏査した山域は、比較的標高の低い地帯を含んでいる上に、融雪期に予想以上の高気温が続き雪は早々と消え去り、多くの藪こぎが強要された。

とりわけ、県北の与須毛堂森以南から不老倉峠まで、県央の下地森から五番森の北峰まで、県南では花山峠以西から山猫森までの各山域は特に残雪が少なく苦慮したものである。

3年目を迎えて

前年の踏査達成率は、計画目標の60%強と大幅に狂ってしまったが、本年はかつてない程の大雪と好天候に恵まれ、昨年取り残した区域を含め、予想以上に成果を上げることが出来た。

ただ、残念であったのは、春の大型連休以外の休祭日が、全て悪天候に見舞われ、力量ある若手現職組の参加が得られなかったことである。従って、リタイア組の高年者が主力となり、休祭日にこだわることなく、すべて天候に照準を合わせての実施となった。

踏査日の選定にあたっては、インターネットとテレビの天気予報を常に把握し、自主的に即実行できるように日頃から体制を整えておき、併せてアプローチとなる車道の雪量、除雪等、現地状況の予備調査をしておいた。

結果は、大型連休以前に踏査した「仙岩峠～横長根」の区域を始め、大型連休後には「須川温泉～上鉢山」など五区域。大型連休中は、現職組を交え、「須金岳～鬼首峠」等の三区間を踏査し、全行程を快晴・晴天の下に実施できたのであった。

残すは、笹峠以北の「P741～秋田女神以南の県境峠」までの一区間、わずか2.6kmのみとなった。しかし、この区間は、分水嶺上の残雪期に踏査するタイミングを逃してしまった。当期間中最も苦慮した事は、今冬の大雪が里雪であったために、アプローチとなる車道の除雪が進まず、車の乗り入れ可能な時期が大幅にずれ込んでしまったことに起因する。特に栗駒山系へは、須川温泉方面への開通が大幅に遅れた上、開通後も安全上時間規制があり、方針通りの早朝入山と遅い下山が出来なくなってしまった事である。

ダケカンバの巨木地帯　甲岳台先

今期のかつてないほどの降雪は、分水嶺上よりも麓に大雪をもたらした。各林道入り口の雪解けを待って入山してみたが、既に分水嶺上は藪化が進み、特に栗駒北方の大薊岳から上鉢山の区間は、70％近くは強烈な藪漕ぎ、従って大幅な時間オーバーとなり、下山地点を目前にしてビバークを余儀なくされた。

反面、「薬師岳・和賀岳から沢尻岳」の区域は、真木渓谷の雪解けが早く、大倉岩まで除雪されていた事、また、昨年は除雪されていなかった東成瀬の蟻巣山への合居林道と、岩手の五番森への林道が早々と除雪されていた事などのお陰で、分水嶺上の豊富な雪量を利用出来て、本当にラッキーであった。

前述の残した全藪区間2.6kmは6月18日（本会設定のフィナーレ踏査日の翌日）に実施し、これをもって秋田支部担当の全区間を、参加会員の協力のもとに、事故もなく無事終了することが出来た。

終りに―徹底した戦略と対策

積雪・残雪期にこれまで踏査した区域は、従来の登山の方法では、1泊2日を要する長いコースであった。しかし、これを日帰りとするために、荷物の軽量化を図り、超早朝に（午前2時～4時）出発し、夕方遅くまでのゆっくり行動（長休みはしない）を心がけた。それと高速道路の利用、天気予報と林道等の状況を把握する等、更には、万一に備えての携帯電話や無線機、ビバーク用具等の対策も考慮した結果、予想以上に成果をあげることが出来たと思っている。

秋田支部で実施した分水嶺水平総距離は256km（北海道支部、広島支部に次ぐ長さ）、入下山に要するアプローチの距離を併せると、実に476km（ほぼ秋田～東京間の距離）、

踏査完了記念　女神山登山口にて

参加延べ人員は256名に達している。

参加した会員の内、夫々古希と還暦を超した伊藤秀雄会員と鈴木裕子会員、それに県岳連や高体連の要職にあって、忙しい中を参加した今野昌雄会員の努力と熱意が踏査達成に繋がっている事を特記しておきたい。

なお、当支部は、踏査のスタートは他支部よりも飛び抜けて早かったが、終盤になって大幅に遅れてしまい、そのため本部から若手会員の派遣について再三打診を受けたがお断りした経緯がある。その理由は、天気情報を参考にした好天日のみの実施（殆どが前日に決定）、超早朝出発、そして遅い下山では、宿泊の斡旋や宿舎への送迎、連絡等を考えてみると、たとえ戦力が増しても、その対応に負担が予想されたからである。

最後に、国道への早朝乗り入れや、送迎を快く引き受けて下さった長岩嘉悦顧問、山奥の林道まで再三出迎えをして下さった寺田新一会員、フィナーレ踏査に出迎えて頂いた菊地岩手支部長、その他サポートして頂いた会員等も含め、踏査に参加して下さった会員諸氏に心から厚く感謝の意を表します。

なお、平成18年6月29日の秋田魁新報に、「開始から三年踏査を終える」と題し、当支部の分水嶺踏査完遂の報が掲載された。

（佐々木民秀　記）

余話

中央分水嶺と街道が織りなす峠の歴史模様

岩手支部　松田和弘

分水嶺は水系を分ける一方で、それによって区切られた山麓の人々や文物をしばしば繋ぎ合わせる。岩手を南北に縦断する分水嶺を経糸に例えれば、東西に走る街道が緯糸として交わる峠には、様々な歴史模様が織り込まれてきたのだろう。

岩手県を代表する民謡、南部牛追い歌には、「田舎なれども南部の国は、西も東も金の山」とある。我々は、金の山ならぬ見渡す限りの藪山を踏査することに精一杯であったが、その折々に貝梨峠や、梨の木峠、国見峠、仙岩峠、白木峠、柏峠など多くの峠を横切ることになった。

古くから盛岡と秋田を結んだ旧秋田街道の国見峠も印象深いものの一つであった。秋田駒ヶ岳の外輪山から登山路を外れて分水嶺を南下すると、稜線に「従是北東盛岡領」と刻まれた高さ1メートル余の花崗岩の石柱が東方を望んでいる。かつて秋田側から急坂を登り詰めてこの国見峠に立った旅人は、突然開けた視界に息を飲んだに違いない。駒ケ岳の裾野が延々と続いて地平線と見まがうばかりだから、平福百穂が詠んだごとく、その裾野越しにのぞく岩手側の地平線が心なしか傾いて見える。

国見峠から南に、古道特有のU字溝状にえぐられた旧街道を下るとヒヤ潟に達する。ここは、国見峠の険しさを避けるため秋田側に下る新道が明治9年に整備された折に、仙北郡と岩手郡の頭文字をとって仙岩峠と命名されたものだ。昭和32年からさらに大改修され、高さ5、6メートルもある「国道仙岩峠貫通記念碑」（昭和39年　建設大臣河野一郎）があたりを見下ろしている。石碑の並外れた大きさは、足掛け8年におよぶ大工事を要した国道によせる期待の証しであろうか。しかし、やっと完成したものの、冬期間は豪雪と凍結によって閉鎖を余儀なくされ、車社会の要請に応えられなかった。新たなルートに仙岩トンネルが開削され、昭和51年に国道46号線が開通し、先の国道は廃道になった。わずか13年の短い使命だった。

分水嶺をさらに南進して貝吹岳の手前から岩手側に下る地点には、西方に向けて「従是西南秋田領」と刻まれた石柱が建ち、国見峠のそれに呼応している。地形図に「仙岩峠」と記されているが、この場所は元来「的方」（まとがた）と呼ばれ、固有の峠名はなかったようだ。短命に終わった仙岩峠の名称を惜しんで、この地に移したものと推測される。

岩手と秋田両県を結ぶ主要国道には、その他に秋田県鹿角市に通じる282号線がある。中央分水嶺を越える貝梨峠には分水嶺公園が設けられている。貝梨峠道は明治の後年に新たに切り替えられたもので、その南側を並走する梨の木峠越えが藩政時代の旧鹿角街道である。もはや往時の面影は少ないが、アスファルト舗装された峠付近から林間の細道に入ると、大木の根元に数個の石祠が祀られており、「越戸塞ノ神」という案内板も見られる。盛岡藩の領地である鹿角市周辺からは、多量の金や銅が採掘された。旧鹿角街道は、これらを盛岡に輸送する重要な産業道路として重用された。藩内は北上山地の金山も合わせ、まさに「西も東も金の山」であった。

この街道は山中をたどることが幸いして開発から取り残され、遠く七時雨山の山麓に至るまで多くの一里塚が残っている。梨の木峠の前後にも、東には曲田の、また西には苗代沢の一里塚が大切に保存されている。

奥羽北地区

四角岳～梨の木峠～安比岳～八幡平（見返峠）
八幡平～秋田駒～貝吹岳～三界山～栗駒山（秋田支部と重複区間）

約 240 km

米代川、雄物川水系――――馬渕川、北上川水系

多難の門出

岩手県が関わる中央分水嶺の多くは秋田県との県境脊梁山脈からなるが、八幡平以北のそれは、県境から東に回り込んで二戸郡安代町（現、八幡平市）を南北に縦断している。安代という町名は、昭和の大合併の折りに、この地が太平洋に至る安比川と日本海に注ぐ米代川を分けることから、それぞれの一字をとって命名されたもので、まさに分水嶺の町にふさわしい。

2004 年 4 月、残雪期をねらって支部の踏査山行が始まった。初戦は県南、焼石岳連峰の栃ヶ森山に照準を合わせたが、参加者は支部山行始まって以来のわずか 2 名。結果は、前日からの大雪と藪に遮られて、やむなく撤退となった。つづく 5 月の大薊山も、林道の通行止めに出鼻をくじかれたうえ、斜度 40 度もあろう雪渓を攀じたり、笹藪と潅木に苦戦したあげく分水嶺到達さえかなわなかった。これらの苦闘は、岩手支部通信 23 号で「中央の誰か知らないが分水嶺を歩くと言い出した人の顔を見てやりたい」とか「連れてきて歩かせようか」とぼやかせ、前途の多難を予感させるものとなった。またこうした藪山歩きは体力を要するうえ、1 日の歩行時間が長いので早朝未明に集合することになり、広い県内から駆けつけるのは大変なことだった。それが原因してか、参加者が従来の支部山行に比べて急減し、分水嶺踏査が支部活動にとって重荷となる懸念さえあった。

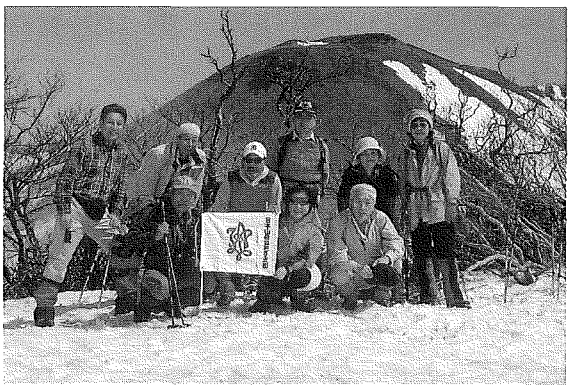
踏査距離を伸ばす

一方、6 月と 8 月には縦走路が整備されている八幡平から裏岩手縦走路を経て県境を南下し、踏査距離を大幅に伸ばすことができた。とくに 8 月は、十数年来続けている日本アルプス山行を分水嶺踏査に振替えて、3 泊 4 日

笹森山（国見峠）から貝吹岳方面を望む

という県内では異例の日数を費やした。遠く岩手山や早池峰山を道連れに心地よく縦走しながら、時には湿原に飛び出したり、池塘のほとりに憩ったりした。通常の山行ではもっぱら中高年登山スタイルだから、食料や寝袋を背負って山小屋を渡り歩くのは、会員にとって久しぶりのことだったろう。長い行程でくたびれ果て、小屋に着く頃には隊列も乱れ気味だったが、10 名を越す参加者があって賑やかさを取り戻した。この山域は、さらに翌 2005 年の 5 月と 6 月の 2 度にわたって踏査を加え、貝吹岳を経て地森の手前ピークまでを線として繋いだ。

9 月には、手付かずだった分水嶺北端の四角岳と大倉森周辺を攻めることになった。全く情報のないまま、1 日目は地形図を頼りに大倉森を目指した。沢を遡上して見当をつけた尾根に取りつき、笹と潅木の急登にてこずりながらやっとの思いで分水嶺のブナ林にたどり着いたが、相変わらずの藪である。せめて大倉森の三角点標石を確認しようと、立ち木に登って地形を確かめたりしたが、30 分ほどの労も報われずに断念。復路は同じコースをとったが、歩くと言うよりもしばしば滑り落ちる具合であった。翌日は登路のある四



横長根(E118)秋田駒ヶ岳女岳を背に

角岳に立って分水嶺の状況を偵察する予定だったが、朝からの雨にたたられ、前日に引き続いて達成感のないまま宿を後にした。この山行によって、安代町内の分水嶺の多くは北上するも南下するも、いずれにしろ積雪期以外は困難であろうことを確認した。

踏査形態の変更

踏査が2年目に入った2005年には、厳冬期が過ぎ去るのを待って3月に八幡平から安比岳へのスキー山行、4月に積雪を利用して蟻巣山、5月には前月に残した蟻巣山から大森山まで立て続けに雪上山行を実施していた。

そのような折り、本部の踏査実行委員会から踏査形態を点から線に変更し、さらに支部単独で踏査することの可否について回答を求められた。岩手支部としては、この踏査計画が立案された時点から、従来の支部山行の内容や会員の年齢条件では、本県内の分水嶺を線で結ぶことは難しいという認識が一般的だった。また、踏査実行委員会の説明でも、当初はそれが容認されていた。このような条件に基づいて、支部として分水嶺踏査に取り組むにあたっては、全域踏査にこだわらず、支部活動の活性化に役立つものとすることを重視した。すなわち、少数精鋭や個人山行に依存するのではなく、多くの支部会員が参加して踏査することを前提として進めてきた。したがって、先の踏査委員会からの連絡には当惑させられた。

それまでに八幡平以北や焼石岳連峰を踏査した経緯から、大勢の会員が道なき道を縦走することは不可能であった。踏査成果は遅々としており、このままでは全域踏査は全くおぼつかなかった。ついに、2005年4月の支部総会において、残された区間の踏査に向けて個人ないし有志山行を取り入れることになった。支部山行と並行して個人や有志による山行が精力的に展開され、八幡平以北の踏査が19回を費やして達成された。そのうち12回はスキーや雪上歩行によるもので、山麓の長いアプローチに難儀した。また、焼石岳連峰にも2005～6年の2年がかりで取り組み、ことに踏査期限が迫った6年の4月には、雪中露営による強行軍を行って、緒戦に撤退した栃ヶ森山や大薊山も遂に線で結んだのであった。

峠で完遂を祝う

このようにして、秋田支部の成果と合わせて踏査達成のめどがたち、2006年5月28日に貝梨峠と梨の木峠の間を最後の踏査区間として打上げ山行を行なった。出発点の貝梨峠から林間をゆっくり南下し、終点に近づいて「賽の神入り口」案内標から細道に入ると、大木の根元に数個の石祠が祀られてあった。梨の木峠に故人の往来をしのびながらお茶で乾杯し、互いに笑顔を交わして支部の踏査完了を祝った。

踏査を終えて振り返ってみると、半ば義務的に努力した面もあったが、参加しなければ味わえなかった思いがけない経験にも恵まれた。また、全国の大人達が分水嶺に群がる様に、ある種の狂気さえ覚えたが、同時に、歴史に残るような大事業は、日頃の常識を越えた次元でこそ実現するものとも思った。いずれにしろ、それを成し遂げた(社)日本山岳会の底力は万人の認めるところであろう。岩手支部のわれわれとしても、この踏査を今後の支部活動に生かし、次の百年への一里塚としたいものだ。　　(松田　和弘　記)

奥羽南地区

栗駒山～花山峠～大鏑山～船形山～関山峠　約 148 km

雄物川、最上川水系――――北上川、鳴瀬川、名取川水系

担当区間について

2003 年、中央分水嶺の縦走計画が本部から提案された時、それまで宮城支部では分水界を連続して踏査する経験を、支部の組織活動でも個人としても持ち合わせていなかった。それにもかかわらず、役員会でそう紛糾することなく受入れられたのは、県境縦走について何人かの人が関心を持っていたことと、今までの年次計画が特に基本的な方針の無い単発の企画で、その時点での関心と思いつきの山行が繰返されてきていたことによるのかもしれない。また役員会の出席メンバーが相当程度の活動実績を持つ人達であったことが、本部提案を受け入れるのに、多少の心配はあったとしても反対が無かった大きな要因と感じた。

当初、当支部には隣接する山形支部と同じ区間（花山峠から板谷峠まで）が割当てられていた。さて、山形支部と合同で実際の行動を進めるには過去における連携不足が指摘され、この割当て区間を両支部でさらに二つに分けて進める方が効率的であろうということになった。最初は 2003 年 9 月 13 日、全国集会の開かれた青森で、続いて 10 月 18 日、仙台に於いて山形支部と話合いを持った。その際、双方共に北側半分の担当を希望している事がわかった。しかし、宮城が既に栗駒山からの行動計画を立てている事、板谷峠は山形支部の方が消化区間として適している事などに理解をいただき、北側の区域を宮城支部が、南側を山形支部が担当し、その境界は結局ほぼ中間の旧関山峠にするという線でまとまった。両支部長が同席し相互に話合ったのは初めてのことであり、これも記念事業のもたらした好い結果の一つであると思われる。

白髪山を望む

地形や雪の量を考えて

計画の具体化について検討を重ね、2 ヵ年で完遂する事、登山道の無いところは積雪期または残雪期に行動する事、出来るだけ宿泊日数を少なくする事、多くの会員が何らかの形で参加出来るように工夫すること、などの方針を決めた。例えば登山道のある部分は、積雪期の行動で重なってしまう事を承知しながらも、多くの支部会員が参加出来るように日帰りの計画を立て、実際に多くの会員に歩いていただいた。

支部内で分けた各区間の実施順は、分水嶺までのアプローチと、標高だけでなく地形と残雪量の関連などもよく検討して決めた。たとえ標高が高くとも痩せている尾根は雪庇の崩壊が早く風による影響で風上側は積雪が少ないので早い時期に藪漕ぎとなってしまう事、これに反して標高は低くともある程度の尾根巾がある区間では残雪の活用期間が長い事を考慮したのである。また、宿泊日数を削減するのにアプローチの長短では苦労した.分水嶺到達に要する時間が登山道の無い部分では相当に掛ってしまう。登山道が無いので残雪期に企画すると、除雪されてないため分水嶺に到達するのに時間を要する。この例は栗駒山と船形山である。その点、堺田から鍋

越峠間は標高が低く残雪を心配したが迎え側の鍋越峠側が除雪済であったので送り迎えとも極めてスムースにサポートが行なわれた。

計画と多少ずれたが

計画通りに運ばなかった二区間がある。いずれも歩きが遅い筆者が足を引っ張ったのである。一つ、栗駒山から鬼首峠までを予定していた初日、栗駒山頂到着に1時間以上の差がついてしまい、予定の所には泊ったものの結果として二日目に響き、須金岳まで行って泊る予定が、かなり手前の山猫森で宿泊する破目になった。三日目も遅々とした進み具合。鬼首峠まで歩く予定がかなり手前の間の岳から下ることとなった。ラッセルにも悩まされ、サポートの待つ下山地に23時55分の到着となり、多くの会員に心配をかけてしまった。

一方の船形山から鍋越峠の行動では、初日のJ・Jスキー場から船形山山頂小屋までが一日掛りになってしまい、二日目でもクラビ沢出会いから荒神山まで約1.5時間の遅れを出し、北日長山を越せないで泊まる事になったために三日目の行動距離を長くしてしまい、まだ除雪していない鍋越峠までの行動を途中で断念、半森山南から銀山温泉に下る破目になってしまった。計画を担当していながら情けない結果で皆に迷惑をかけてしまったが、支部会員の暖かい心に支えられ行動を重ねた。

特に苦労したのは｛花立峠～堺田｝と｛鬼首峠～間の岳｝間であったろうと思われる。この前者は二日に分けて行動、2日目は全体が藪こぎで、分水界の尾根自体が明確でない上、大部分が二次林であり藪密度が高かった。当初から藪を予想しており、参加者が少ないのではないかと考えて山菜の季節に企画したのであったが、予想以上に多くの会員が参加、しかもそれぞれ何がしかの山菜を手にして踏査できたのは思惑があたり嬉しく感じた。

しかし｛鬼首峠～間の岳｝間は前記のように初期踏査で残した部分であったため焦りを感じた。二度目は鬼首峠から入った。途中で荒天となり三人の元気者（佐藤昭次郎・中條俊一・宇都宮昭義）も、先に筆者が下山遅れで心配をかけていたため、無理をしないで引き返す事になってしまった。これは時間的に勿体ない事ではあったが、安全を第一に考えた正しい決断であったと認識している。なぜなら引き返し個所から先は標高が高くなり、虎毛山への分岐付近までは痩せ尾根で雪庇の崩壊部分もあり、さらにその分岐を過ぎると尾根巾が広くなりかつ平坦になってガスに巻かれると苦労するところで、間の岳からの下山路を見つけるのに難渋する個所でもあるからなのである。三回目は、曇り時々晴れで無風に恵まれ、ついに何とか宮城支部担当区間の踏査完結を迎えることが出来た。

2005年6月11、12日で支部内の報告会が開かれた。一方、山形支部でも完結をみて、宮城・山形両支部合同の踏査完結打ち上げパーテイが月山麓の志津で山形支部の肝いりで開かれ、両支部からの参加者は時間を忘れて盛り上がった。本部企画やブロック集会以外で他の支部とこうして懇親を深める事が出来たのも記念事業の波及効果である。また宮城支部内でもこの記念事業への参加により初めて山行が共に出来、同じテントで酒を酌み交わし、山談義を交わすなどの交流が出来た。まさに組織内の相互理解が大いに深められたという副産物も得られて、今後の活動に生かされることと期待を大きくしている。個々の詳しい山行報告は宮城支部会報第16号（2006年6月発行）に、また宮城支部のホームページにも掲載してある。参考にしていただければ幸甚であります。

（高橋　二義　記）

奥羽南地区

関山峠～蔵王～二井宿峠、栗子山～板谷峠　約74km

最上川水系――――名取川、阿武隈川水系

山形支部が踏査した区間は、概ね山形・宮城県境、山形・福島県境に沿っており、奥羽山脈の背骨に位置している。

分水嶺上に登山道があるのは「面白山から蔵王エコーライン」、「鳩峰峠から龍ヶ岳」と豪士山の「中ノ沢峠から駒ヶ岳分岐」の区間で、全行程の40％程度。残り60％には登山道は無く、僅かに林業関係者や山菜取りの人が入るのみである。特に県南部の分水嶺は550m～1200m前後の山並みで、厳しい藪漕ぎを強いられ無雪期の踏査は無理と言われている。分水嶺踏査・調査が目的であるため、敢えて無雪期に挑戦したが「ニツ森山」「番城山～金山峠」「駒ヶ岳分岐～鉢森山」の各区間は残雪期に踏査せざるを得なかった。

踏査は04年3月から05年4月までで、踏査日数は27日間、延べ161名の会員が参加した。ここには、登山道の無い主な二区間の踏査について記すことにする。

大深沢峠～番城山

アプローチは上山市萱平の大深沢林道から。この林道は宮城県七ヶ宿町の滑塚に通じる林道であるが、既に廃道になって久しいため、随所に崩壊が見られ、更に道脇から雑木の枝が張り出して非常に歩き難く、大深沢峠1012mまで3時間弱を要した。5月中旬の空は今にも雨が降りそうな空模様であったため、1120mピークの途中からダイレクトに番城山北尾根を目指した。北尾根の手前に至ると熊の糞が所々にある。この山は、地元では「熊の棲」と言っており、呼子を吹きながらの登りとなる。北尾根はほぼ平らな上りで2mを超える密生したチシマザサに山頂の方向が見えず、コンパスだけでは頼りにならず、灌木などに攀登り方向を確認し藪漕ぎを繰り返した。この辺から小雨が降りだした。チシマザサの藪漕ぎは200m進むのに2時間もかかる始末。GPSは、ほぼ山頂近くにいることを示したため、ザックをデポし、藪漕ぎを開始すると急に笹藪の背丈が低くなる。そこが番城山の山頂である。山頂には二等三角点、石の祠と4m²弱の避難小屋があった。歩き始めてから山頂まで6時間40分。この山は積雪期、残雪期に山スキーで登られるとはあるが、十分過ぎる疲労困憊の山行だった。

二井宿峠～鳩峰峠

4月上旬、試踏のため二井宿峠の駐車場に車を置き、分水嶺尾根に取付き912.4mの仙王岳を目指して残雪を踏み締める。峠付近の積雪は30cm程度であったが、高度が上がるにつれ積雪も多くなる。歩行開始から1時間40分で仙王岳の山頂に着いた。積雪は120cm程度で、ピラミダルな蓬沢山と、銀雪に輝く蔵王連峰の雄大な山並みが眺望できた。

山頂から南西に200m進むと幅1m程の痩せ尾根になり、両側に崩れた厚さ1mほどの雪庇が残っている。雪庇の上を慎重に500mほど進んだが、気温が上昇し崩壊する危険が生じてきたため、撤退せざるをえなかった。

9月中旬、前回踏査の逆コース、鳩峰峠から入山した。峠から龍ヶ岳へはなだらかな登山道がある。山形・宮城・福島の三県境を過ぎ300m程進むと994.2mの龍ヶ岳である。山頂には二等三角点（点名：金原峠）がある。

龍ヶ岳より先には登山道はなく、微かな踏み跡があり500mほど進むと982m峰に着く。杉木立に囲まれて石の祠が三つ並んでおり、湧水している水溜りがある。ほぼ山頂でありながら湧水している不思議な場所であるため、龍ヶ岳に詳しい地元の古老に尋ねてみた。

982m 峰の石の祠。近くに湧き水の溜りがある

話によると、高畠一帯は昔から水不足に悩まされ水争いが絶えなかった。幕末の頃、高畠町の満福寺境内に、鶴岡市大山の善宝寺から竜神様を分神し御堂を建立した。日照りになると毎日太鼓を敲いてお祈りしたとのこと。地元では昔から山頂付近での湧水が知られており、明治2～3年頃に石の祠を安置して「奥の院」として崇め、日照りが続くと集落総出で雨乞いをした。最近では水窪ダムが出来て農業用水の確保が可能になり、10年ほど前の雨乞いが最後だという。龍ヶ岳は以前には、岩滝（岩岳）と言われていたとのことである。

祠の横から薮の中を微かな踏み跡を辿り100mほど下がると、20mの垂直の岸壁の縁にでて進路を阻まれてしまった。7～8mのブナやミズナラの樹木で視界がきかない。ルートを確認し東に200mほどトラバースすると、高さ10mの岸壁が南北に100mほど続いている。岸壁に沿って北に下ると837mの峠にでるのだが、14人の大パーテイであり疲労の色が見られたため踏査を中止した。

9月下旬、鳩峰峠を7時20分に出て前回のコースを辿り、途中から東寄りにコースをとり、南北に走る10mの岸壁に沿って一気に837mの峠に下る。峠には微かな踏み跡が東西に見られたが、東側は4～5m密生した雑木に覆われ、西側一帯は背丈を超える笹薮が続く。この峠は田堀越えと言われ、昭和30年頃まで高畠町金原から宮城県七ヶ宿町の稲子や湯原に行くのに使われた。龍ヶ岳に登る道路でもあったようだ。龍ヶ岳山頂の三角点の点名が金原峠であることからも頷ける。

峠から803m峰へは5～6mの雑木に蔓植物が賂んだ藪漕ぎが続く。更に891m峰への尾根上は背丈を超えるチシマザサ、東西の斜面はブナに覆われている。891m峰から仙王岳の手前200mまでの約1km弱は、密生した雑木に蔓植物が巻き付いた痩せ尾根で悪戦苦闘、午後4時50分に仙王岳に着いた。

山頂には三等三角点（点名：仙翁岳）がある。仙王岳からは4月の残雪期に通った北北西尾根を一気に下り二井宿峠には午後6時20分に着いた。総歩行時間11時間の踏査である。藪漕ぎで手足は傷だらけになったが、安堵感と満足感が交錯する踏査であった。

分水嶺の踏査で感じたこと。元来、山には登山道は無かったと思う。趣味としての登山の歴史は浅く、以前は信仰による登山、測量や鉱物の探索等のためであったろう。今では登山道ができ誰でも山登りを楽しめるようになったが、一方では昔の山道が使われなくなり、以前の藪山に戻ってしまった山も多く、往時の峠の名称さえも忘れ去られている。そうした山は極めて情報が乏しく、地形図のみが唯一の情報であるが、注意したいのは数年前に現地調査済と記載された地形図であり、登山道が記載されていても実際は登山道が無くなっている区間が多々あり鵜呑みにできない点である。未知の山行きでは、事前調査の実施と情報収集の必要性を痛感した。

GPSの使用は吹雪や視界不良の際は極めて正確な進路を示してくれるが、登山の醍醐味に欠ける。地形図とコンパスによる踏査は判断が正しければ成功し、間違えば相応の結果となるが、それなりの満足感が得られる。

戦後60年、これまで無計画な森林伐採が行われてきたが、稜線沿いのブナの二次林は野生味あふれた自然に戻りつつある。山形支部は、地元の山に腰を据え自然環境の現状を直視していきたい。　（渡邊　誠　記）

余話

幻の小山田道路（猪野沢新道）

山形支部　渡辺　誠

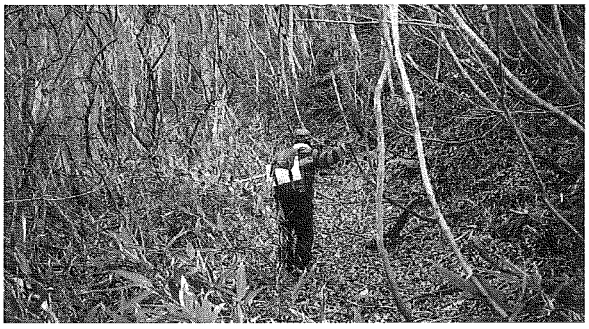
関山峠～面白山間の中央分水嶺は山形・宮城県境尾根に位置しており登山道はない。

10月上旬、国道48号から旧国道の関山街道（廃道）に入るが土砂が道路を塞いでおり関山隧道まで歩きとなる。この道路は山形県令三島通庸が明治15年に完成し、昭和43年に現在の国道48号が開通するまで使用された。往時、山形県から宮城県への道は、笹谷峠、ニロ峠、小山田道路（猪野沢新道）などで、これらの道はいずれも峻険な奥羽山脈を越えるもので、物資の輸送は辛うじて牛馬や人の背にあやかる程度であった。

中央分水嶺関山峠720mは関山隧道の真上に位置し、隧道の横から直登したが、傾斜角40°のガレ場、傾斜は上に行くほど急になる。分水嶺は幅35cm弱の痩せ尾根、崩壊は山形県側の西斜面がひどく、一部は完全なナイフリッジ。関山峠から南南西に位置する807m峰はブナの大木のなかにあった。

10月下旬、国道48号から柳沢コースを辿り分水嶺尾根に進む予定であったが、柳沢には堰堤が随所にあり、高巻きする際に登山ルートを見失い、柳沢源頭付近の傾斜角30°の尾根を登る。地形図上の標高760m付近の山道を探索するが確認できず、休憩後、分水嶺である969m峰に登ったが、雨が降りだし視界不良に。危険なため踏査を中止した。

11月上旬、6時30分に前回と同じ柳沢コースから入山した。柳沢コースは潜橋を過ぎ右岸の二つ目の沢から入渓したが登山道は無い。潮行を続けると標高600m付近からスラブ状になり、左側の小尾根に取り付き100m程登ると、柳沢分岐（分水嶺尾根）に着いた。稜線の5m下に幅2～4m往時の道跡を見ることができたため、10月初旬に踏査した807m峰まで歩いたが道跡には直径10～15cmのブナが繁茂している。帰路は分水嶺の県境尾根を踏査し柳沢分岐に戻った。更に分水嶺を南下し前回登頂した969m峰を踏査し、15時に猪野沢分岐に着く。分岐の20m下に道路を見つけたので200m程北に歩いてみたが、その先は崩壊し道路は無かった。



往時の面影を残している小山田道路（猪野沢新道）

この道路は、野川村（現東根市）の名主・小山田理兵衛が明治5年、山形県令関口隆吉の命により猪野沢（現東根市）から宮城県名取郡新川村に至る新道（幅3.6m、距離27km）を莫大な私財をつぎこんで明治10年に完成させたもので、山形県と宮城県を結ぶ三等国道であったが、明治15年の関山斯道（旧国道48号）の開通により利用されなくなり、随所に往時の面影を残すのみである。これが私財をつぎこんだ僅か5年間の幻の道路、無念であったろうと感慨に胸が熱くなる。

猪野沢分岐からみる面白山は逆光の中に雄大な山塊で座している。面白山まで平面距離で約1km、高度差440m、面白山北斜面はブナ林であるが背丈程の雑木があって思うように高度を稼げない。途中からヘッドライトを照らし、17時25分に漸く面白山山頂に着いた。暫時休息後、天童高原には18時55分に着く。総歩行時間12時間25分であった。

余話

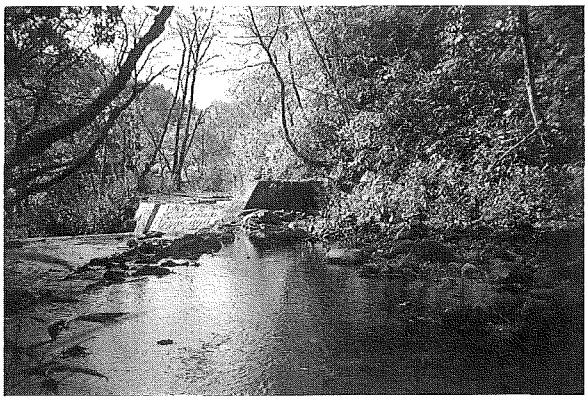
水中分水点の横川堰（旧名：助左衛門堰）

山形支部　渡辺　誠

7月下旬、今日の踏査は蔵王エコーライン（刈田駐車場）～冷水山分岐～水中分水点～舟引山～舟引峠までである。

中央分水嶺は、ほぼ山形・宮城県場上にあり刈田駐車場を5時50分に出発する。亜高山帯を代表する矮性したオオシラビソの粗林の軽い藪漕ぎ、緩かな下り、標高1510m付近から地形図には県境尾根沿いに山道があるが、通る人も無いためか獣道でブナの樹林に覆われている。冷水山分岐からブナ林の中を微かな踏み跡を辿り更に南下する。1320m付近から背丈ほどのチシマザザに覆われたササ藪地帯となり何処が山道なのか全くわからない状態が程続くが、天候は晴、視界良好、メンバーの中に現地の地形に詳しい会員がいたため無事に突破し、9時20分に水中分水点に達することができた。これが横川堰（助左衛門堰）である。堰は背丈程の雑木にヤマブドウ等の蔓植物が絡み合い僅かに堰の形跡を残すのみである。

この水中分水点の横川堰は宮城県の横川支流の一枚石岩沢の奥の鴨戸沢湧水から給水し、更に一枚石岩沢の水を加え水路により山形県上山市の寒沢（萱平川）に流し農業用水として利用されている。農業用水として他県から水を引いているのは全国で横川堰ただ1ケ所である。横川堰は、文政4年、中生居村（現上山市）の庄屋、奈良崎助左衛門が水不足を解消するため横川からの分水を考え、宮城県角田藩に分水の許可を嘆願したが認められなかった。助左衛門は上山藩にも交渉を依頼したが、他藩に水を引かせることは許可ならず、それどころか私財の大半を使った工事が先走った工事であったため工事差止めを命ぜられる。この工事は標高1100m以上の場所であり距離が1000m弱、落差10mを均等に傾斜をつける難工事であり、夜間に提灯をつけて高低差を測ったと言われており先人の苦労が偲ばれる。明治12年に山形県令三島通庸が宮城県令松平正直に交渉し、許可をとり、明治14年遂に横川堰が完成する。実に60年という執念の工事である。



横川上流二ツ石沢の給水取入口

その後、昭和にはいり横川堰は改修を重ね現在は横川上流の二ツ石沢（ナンバ沢）より給水し鴨戸沢の水を加え、更に一枚石岩沢の水を加え、距離は約1500m、水路とトンネルで寒沢に流されている。往時の横川堰は現在の堰よりも15m程高いところに掘割や切通しで作られている。水中分水点の横川堰が流れる真上の分水嶺尾根を南下すると舟引山1173mである。分水嶺尾根を更に南下し12時20分に舟引峠に到着した。

なお、水中分水点の横川堰には市道南蔵王舟引線を通り横川堰の分水嶺直下まで車で入ることができ、横川堰管理道路を通り二ツ石沢の給水口まで30分で行くことができる。

会津地区

板谷峠～安達太良山～中山峠～鎌房山～甲子峠　約125km

阿賀野川水系――――阿武隈川水系

特異な分水界

日本の中央分水嶺は、県境となっているところが多いが、福島県では県土のほぼ中央を貫いている。また、県内には日本海と太平洋の両方に水が流れる大きな水源が2つある。

尾瀬沼と猪苗代湖である。尾瀬沼は標高1660mにあり、その西北端から流れ出た水は沼尻川を流れ、標高1400mの尾瀬ヶ原に達する。尾瀬ヶ原の水は北に向かう只見川に集まり、平滑ノ滝、三条ノ滝を流れ落ち、奥只見ダムを経て阿賀川と合流し日本海へ注ぐ。もう一方の水系は人工的なものであるが、尾瀬沼の南縁から三平峠の下を通る水力発電用のトンネルに端を発し、ナメ沢を経て片品川となり、利根川と合流し、太平洋へと注ぐ。

もうひとつの水源、猪苗代湖からの自然の流れは湖の西北から出でて、日橋川から阿賀川、阿賀野川となって日本海に注ぐ。東に流れるもう一方の水系は、これも人口の水路である安積疎水から始まっている。猪苗代湖の北東側の取水口から中山峠の直下を通過し、郡山市とその周辺を潤し阿武隈川に注ぎ、太平洋へ流れ出る。1879年に完成したこの安積疎水は、那須疎水、琵琶湖疏水とともに日本三大疎水の一つに数えられている。

この二つの水系が、自然の流れは共に阿賀野川に合流し日本海に注ぐ一方、太平洋に注ぐ流れは共に人口の水路であるところが興味深い。このように、こと分水嶺に関しては、福島県は特異な状況にあると言える。

踏査の総括

我が福島支部も他支部同様、会員の高齢化が進んでいる。分水嶺踏査についての最初の支部幹事会の場でも、完遂できるかどうか悲観的な意見も出たが、ともかく「やってみっぺ(やってみよう)！」ということになった。当初は、会員の負担を軽減するために、登山道が整備されていて、日帰り可能なところから踏査を行うことにした。

最初の踏査は、2004年7月25日、安達太良山から土湯峠までのルートで、御年82歳の会員を含む6名が参加した。終日雷鳴が轟くなか、ハラハラしながらの踏査であったが、何とか目的地の新野地温泉までたどり着くことができた。途中、土湯峠付近では、東北地方では飯豊連峰等の高山のみに分布するとされるマツムシソウが自生しているのを発見し、また、周辺の植生が何とも美しく、隊員一同しばしたたずみ、見とれていたことであった。新野地温泉では露天風呂とビールで疲れを癒し、正に極楽気分。この温泉旅館のご主人も日本山岳会の会員であり、サポート要員に名を掲げることにした。

同年8月8日に船明神山～母成峠、10月16日に御霊櫃峠～額取山分岐の踏査を行った。このうち10月16日に登った額取山では、その頂上は分水嶺からは、はずれているものの、西に磐梯山と猪苗代湖、東に上記の安積疎水が潤す郡山盆地が一望でき、すばらしい眺望を満喫した。

865mピーク付近の藪尾根と岩峰

11月21日には諏訪峠～鶏峠、12月12日に萱峠～865.5ピークと踏査を行ったが、ここまではいずれも日帰りであり、参加者の足取りもゆったりとしたものであったので、思うように踏査距離を伸ばすことが出来なかった。また、この時期はGPSの使い方、報告書の記入の仕方等に不備、不慣れな点もあったが、踏査を進めるにつれて、次第に慣れていった。ただ、GPSを使いこなせる人員が限られており、その者が踏査に参加しないと報告書を作成できないという事態も生じた。

藪から棒ならぬ、藪から笑い

さらに、他のいずれの踏査隊も同様と思われるが、大きな障害となったのが、藪こぎである。まったくコースタイムの予想がたたず、方向も見失いがちで、体力を消耗すること、甚だしい。

また、物理的な困難さとは別に、踏査コースが国立公園内を通っているところもあり、小潅木の枝をへし折りながら進むことには、若干のうしろめたさ、或いは罪悪感を伴うことがあった。同様の体験をお持ちの他の踏査隊員諸氏はどのように感じられたであろうか、伺いたいところである。

苦しいことばかりの藪こぎではあったが、'04年11月21日、諏訪峠から笠ヶ森山への登りの際、医師である渡辺千代蔵会員(実はこの方が82歳)いわく、「いやぁ、ここは俺よりひどいヤブだぁ！」。藪こぎで笑い声が起こったのは唯一この時のみであろう。

難あり援けあり

'04年の冬を迎え、積雪期でなければ踏査が困難なコースを実施する予定であったが、主たる隊員が体調をくずしたり、また私事で恐縮だが同年暮れに踏査担当者たる筆者に不幸があったりして、翌年にかけての積雪期は一度しか踏査を行うことが出来なかった。

そのたった一度の踏査が、'05年3月21日の東大巓～栂森のコースである。この時は、非会員と他支部の会員(共に女性)も参加し、それまでとは違った雰囲気の踏査となった。GPSのデータや記録をとることは困難であった。

'05年秋からは、広く支部会員に参加を募る一方、その地域を熟知した少数の精鋭会員に踏査を依頼した。高田雅雄、堀江誠克両会員が、それぞれ5度、4度の踏査を単独で実施してくれたことによって、大きく踏査距離を伸ばすことが出来た。

しかしながら'06年5月の時点で、いくつか未踏査の区間を残しており、支部の独力による踏査完遂は見込み薄となっていた。

福島支部独自で全コースを線で結ぶことができなかったことは、誠に不甲斐なく遺憾に思う次第である。踏査担当者として、至らなかったことを反省している。ただ、敢えて「言い訳」させていただくなら、踏査に参加する活動的な会員は、その多くが地元や職域、学校単位等の山岳会に所属しており、そこでも中心的な役割を担っている。各々の山岳会の年間行事や山開き、地域自治体主催の登山大会に、また遭難救助訓練や実際の捜索、さらに県山岳連盟の行事などに参加・出動することが多く、どうしてもそちらの方を優先させざるを得ない状況にあった。そしてこれらのことが影響してか、会員の間に、是が非でも踏査を成し遂げようという堅固な意志が不足していたことも否めないところである。

その後、未踏査の区間は、分水嶺実行委員会及び山岳地理クラブの方々が自主的に引き継いで下さり、踏査を実施していただいた。ここに、格別の敬意をもって感謝申し上げたい。

最後に、今般の分水嶺踏査に参加・協力して下さったすべての皆様に、あらためて感謝申し上げ、擱筆する。

(武藤　伸彦　記)

福島支部の未踏査区間を歩く

福島支部の担当区30数kmが未踏査であるとの連絡を受けたのは2006年6月末、全国各支部の踏査完了を見込み、企画していたフィナーレ山行も終わっていた。すぐに分水嶺委員会の森事務局長から、猪苗代の江花委員と筆者に其の補充踏査に当たるよう指示があった。これ程の距離を短期間でどう実行するか、身の引締まる思いであったが、まず手始めに、吾妻の姥ガ原から景場平の区間を北野、江花、平野の3名で踏査した。この後は、「山岳地理クラブ」や他の会員にも協力を呼びかけた。その結果7月中には、一切経山から東大巓、磐梯吾妻スカイライン、土湯峠、御霊櫃峠～三森峠と踏査は順調に進行した。その後、福島支部で一部区間の踏査完了の報告があり、難コースの一つが解決した。

8月地理クラブ会員を主力に鎌房山の東側を踏査。9月には大白森山～鎌房山に挑んだ。事前に調べたが登頂の記録や経験者は見つからず、山の様子は不明であった。稜線のすぐ南側には林道（車は進入禁止）もあり、危険性は少ないと判断して、9月2日近藤、板坂のパーティが甲子峠より入山、大白森山から鎌房の南西最低鞍部に達した。今井、寺田、平野の隊と合流、翌早朝、東側の林道から踏査を開始した。林道を離れた鎌房の登りは潅木に頼り身体を引き上げながらの急登である。

2時間程で尾根に辿り着いた。福島支部が以前到達した地点である。ここから三角点までは、笹に覆われてはいたが、しっかりした踏み後があった。頂上には藪の中に三角点がかすかに頭をみせていた。さて下りになると、北側の藪の薄い方へと迷いがちになり、林道で待機してくれていた遠山の無線のサポートとGPSによって、軌道修正をしながらの難行であった。

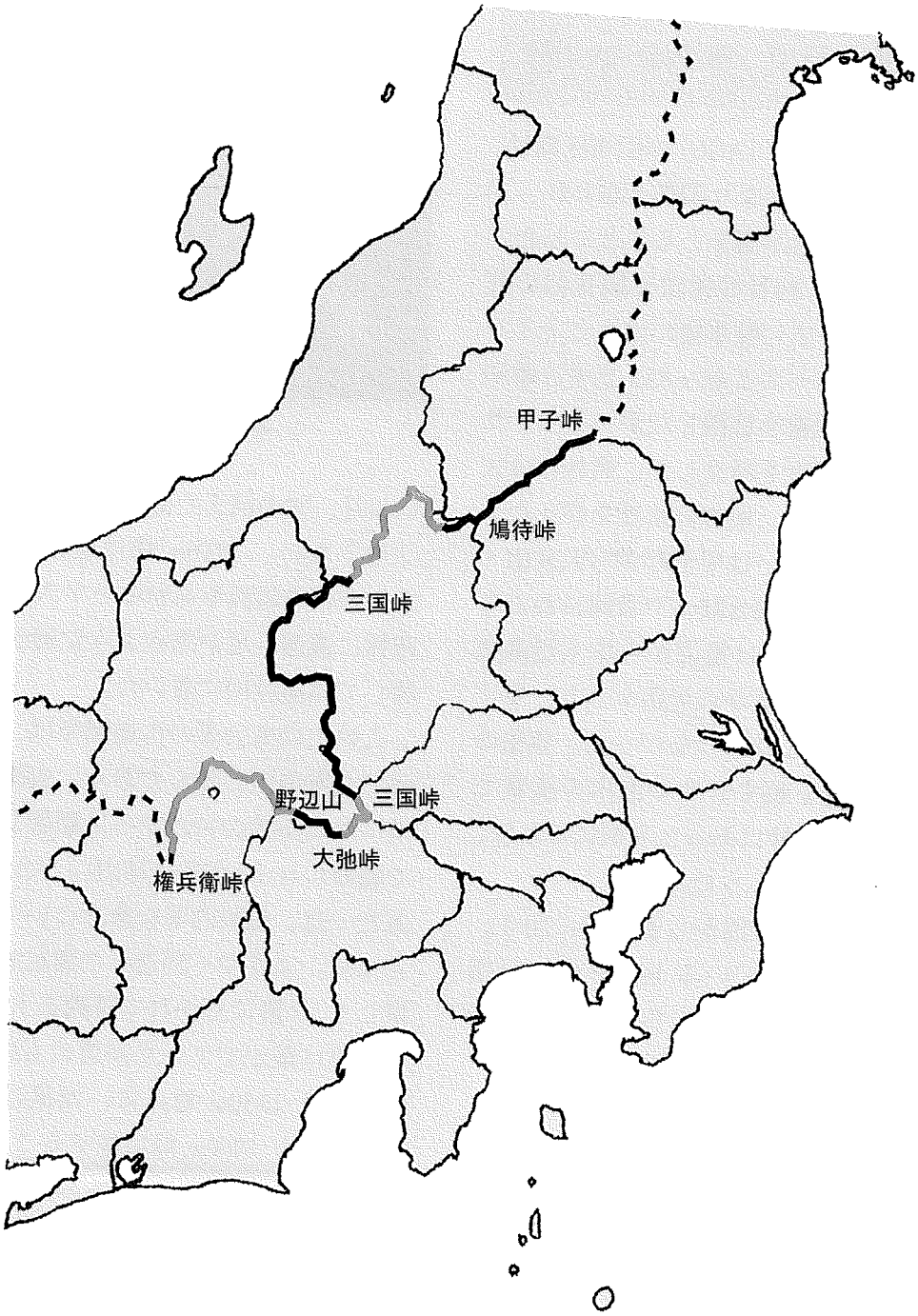
9月26日江花と2名で、景場平から南の未踏コースを完了した。残すは、栂森～萱峠と板谷峠の区間となる。広く参加者を募るも集まらず、やむなく江花との2名で決行することとした。下山地点の足の確保は、藤本委員の要請で福島の大谷氏が快諾して下さった。10月26日笠松温泉に泊る。夜半からの雨で一日延期し、早朝猪苗代を出発。大沢の集落に入ると［熊出没注意］の立て看板がやけに目についた。牧場を過ぎ、荒れ放題の砂盛林道約5km地点の砂盛に車を置く。沢から歩行開始。栂森南西の分水嶺に到達し、ガレ場を経て栂森の頂上到着までは2時間50分の行程であった。

三等三角点は笹に覆われていた。人跡未踏のようなこんな場所にどこからこの石を運んだのか、先人の努力に敬意を表したのであった。快晴の中360度展望は良好、去り難いものの長居は無用、再び猛烈な藪に突入する。大谷からの無線、受信の感度は良好であったが、こちらの声は不明瞭のようだ。P1133手前辺りから古い踏み跡があった。既に15時半を過ぎており、このまま峠まで続くことを祈る。崩壊部には熊の足跡が見つかり要注意なるも、どうやら熊の方で遠慮してくれたようだ。GPSで位置を確認したところルートからはずれている。修正のためのトラバースはシノダケの密生地。しかし先行する江花は身軽に抜けていく。月明りの分水尾根には木材搬出用であったのか、ロープウェイの支柱が2基、その残骸をさらしていた。18時26分、ようやく大谷の待つ萱峠に到着。途中ビバークもあり得る中、長時間も待機してもらい、特製の飲物、暖かい食事の差し入れは、何よりの心遣いであった。

その後、板谷峠の踏査は福島支部が実施、有終の美を飾ったという知らせが入った。

（踏査委員会　平野　彰　記）

関東甲信越ブロック



帝釈、尾瀬地区

甲子峠～三本槍岳～男鹿峠～山王峠～荒海山～安ヶ森峠～帝釈山～馬坂峠～袴腰山～三平峠～鳩待峠　約113km

阿賀野川水系――――阿武隈川水系

山岳地理クラブ　甲子峠～大川峠

わが山岳地理クラブ（AGC）の担当区間は、栃木側からの入山はかなり困難と思われ、アプローチは主に南会津側をとることにした。

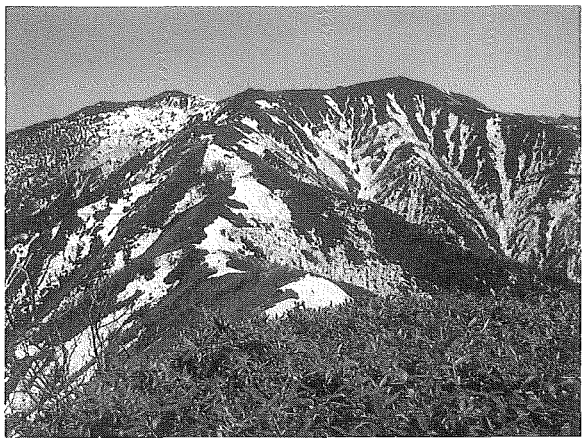
2004年5月第1回目の探索で観音沼の駐車場に仮泊する。広い駐車場には水とトイレがあり、貴重なベースとなった。まず、番屋のコルと呼んだ稜線を目指したがチシマザサの激しい藪で、遡行を断念した。翌日には大峠から流石山を往復、最初の踏査を終えた。その後は、大峠あるいは甲子峠から大倉山・三倉山、甲子山・旭岳分岐まで数回にわたり探索、2005年9月には鏡沼から坊主沼避難小屋に入り、旭岳分岐から旭岳を上り、甲子峠から番屋のコルまでがつながった。旭岳の下り後半は背丈を超すササや灌木の猛藪であった。なお、甲子峠にあった看板によれば、堺峠が本来の名称のようであった。

2004年11月、観音沼から番屋川に向う。反射板ピークと呼んでいる1624m峰を目指したが、分水嶺から20mぐらいのところでササとシャクナゲの猛藪と雪に阻まれた。

2005年11月3度目の番屋川アタック。チシマザサを分けてコルに達し、さらにササを分けて1624mの反射板ピークまで達した。

2005年7月、観音沼から大峠経由で番屋のコルに向う。三倉山からの下りは道が全くなく、灌木がぎっしり詰まった藪で、方角を誤り、GPSで位置を確認後藪を登り返す。さらにその先の背丈の倍をはるかに超えるチシマザサの密集地帯を突破しコルに到着した。

大分水嶺西側の踏査は、先ず小出原から黒滝股山に突き上げる尾根の偵察に続き、2005年5月、雪の消えた急斜面をあがる。踏み跡は全くない。1216m峰付近に残雪があり幕営。翌日急斜面をあがるとアスナロの若木の密林に遭遇、足が思うように動かない中を奮闘して黒滝股山に着いた。


赤柴山付近から東を望む

この山は南会津の古地図では、アノ山、地元でもあの山と呼んでおり、会津田島の水無川にかかる橋の付近からは顕著なピークとして眺められる（点名は姉山）。大分水嶺まではあと一息、比較的楽な藪をこいで大分水嶺に立った。ようやく到達した満足感に浸る暇も惜しく、2班に分かれて稜線をトレースした。

東班は藪がでていたが雪にも恵まれ1339m峰を越え1330m地点に、西班は雪の消えた稜線を下り1360m峰に達することができた。

西端からの探索は2005年7月の栗生沢経由大川峠から始まった。大川峠の名は那賀川の源流の一つ、大川に由来したと思われる。峠から1501m峰（カミウミ・上海岳）に向う。大川の枝沢、上ウミ沢の源頭にあることに由来する（点名上海岳）。藪をこぎ1438m峰の先に達した。

1週後、再度上海岳に向かう。1週間の間に藪がひどくなっているが上海岳に到達でき

た。新しい上海岳の標識が目についた。その後も上海岳から先を目指したが、100m を進むのに2時間もかかる程の灌木の猛藪で、途中で撤退した。

8月に入り、栗生沢からオオクト沢を遡行し、1181m 峰に向かう。藪をこいで分水嶺1360m 峰に上がり、1445m 峰との鞍部、大萱峠手前で幕営後、上海岳北の1480m 地点まで足を伸ばし大萱峠から下った。厳しい、ロープがほしいコースだった。

あとは反射板ピークから赤柴山を越え、1339m 峰手前までを残すのみとなった。

我々の踏査も今回で打ち上げにしたいと、2006年5月、通い慣れた番屋川を上がる。取り付きからかなり雪が出ている。斜度が急になった1000m をこえた辺りから雪の大斜面になり、さすがのチシマザサも雪の下に埋まっている。雪に埋もれたコルから快適に上り、昼過ぎには1635m の赤柴山に着いた。三角点は確認できなかった。

翌日、最後のコースに向かう。栃木側に雪庇が張りでた稜線を辿る。急な1504m 峰の先は雪が切れて小藪となり歩きにくい。ここで先行隊が先を急ぎ、最後の1339m 峰の手前まで約700m の距離を踏破してきた。まだ時間が早いので赤柴山のデポを撤収して反射板ピークの下を幕営地とし、3年越しのAGC の大分水嶺踏査最後の一夜を過ごした。

AGC 分水嶺踏査は偵察も含めて24回、参加者は実働25名、延べ113名で、10回以上の参加者は4名あった。

（北野　忠彦　記）

余話　御用邸まで巻き込んだ山名問題

首都圏　遠山　元信

我々が担当した分水嶺区域内に、古くから行政とマスコミ、そして昭和天皇まで巻き込んだ山名問題がある。

場所は栃木県と福島県境の那須岳西方にある大倉山と三倉山。発端は昭和33年に発行された五万分の一地形図『那須岳』図幅内で、それ以前に発行されていた旧版図の大倉山と三倉山の位置が逆になったことからであった。この違いについて那須の御用邸で植生調査をされていた昭和天皇も気が付かれ、国土地理院が調査した結果、新版図が正解であると。その経緯は『山と渓谷』に「陛下がご指摘になった“地図のミス”」(小俣幸太郎執筆・328号・昭和41年4月1日発行)として紹介された。福島県側の下郷町は旧版図の誤りについて昔から気が付いてはいたが、戦前は陸軍参謀本部が作成した権威ある地形図に対し誤りがあるとは指摘できなかったとのこと。

ところが、平成4年になり当時の栃木県黒磯市(現・那須塩原市)が、山名が混乱して困るから何とかして欲しいと国土地理院に要望。それが地元紙の『下野新聞』に「大倉山・三倉山・”那須岳”図から削除」(平成5年6月25日)として紹介された。国土地理院は栃木県側と福島県側で呼称が逆であることから公平を期するため地形図から削除すると言う。これがパソコン通信で全国に広まり、昭和天皇まで巻き込んだ山名問題の再燃か、と話題にもなった。その後も国土地理院に対して山名が違うと申告があるようだが、削除されずに新版図のままで現在に至っている。

前述の『山と渓谷』で紹介されている内容は、昭和天皇が指摘された問題だけでなく、地名山名等の採用方法等についても詳しいから、地元はもちろんのこと興味ある方には参考資料としてご一読をお勧めしたい。

山遊会　大川峠～男鹿岳～山王峠

「私の経験した山行の中で最も難しい山を5つ挙げるとすれば、北海道札内川上流のカムイエクウチカウシ山、黒部の毛勝山、中央アルプスの安平路山越え、加越の笈ヶ岳、および猿ヶ馬場山である。今回の中央分水嶺としてトライした男鹿岳はこれらに決して勝るとも劣らない一級の手強い山であった」。私たちの担当区間で最も多くリーダーを務めた植木信久は最終報告をこう書き始めている。それほど中央分水嶺の踏査は、当初の安直な予想に反して、並大抵のものではなかった。

私たちは当初、藪のない残雪期に麓で一泊程度の山行を3～4回すれば完了すると考え、計画を立てていた。そしてその通りに実行し始めた。最初のうちは問題なくこなすことができた。大川峠から男鹿岳への登頂。山王峠から大倉山あたりへの踏査。しかしそれからが続かなかった。大倉山から男鹿岳へのルートを踏査することができなかった。結局、完踏までは丸2年、9回のアプローチが必要だった。

第1回目は、2004年5月8日～9日（土～日）に状態偵察として、12名が参加して行い、大倉山を少し越したところまでいく。帰りに2度道を間違え、ルートの難しさをかいま見ることになった。

第2回目、3回目は、反対の大川峠側からのアプローチ。車が入れる晩秋を選んだ（いまは落石の影響で、車は途中までしか入れない）。10月23日～24日に藪の世界を下見し、男鹿岳山頂まで到達する。第3回目には位置や標高、コースを確認しながら男鹿岳に。つけてきた赤布を辿るだけでコースとしては楽だったが、藪はどうにもなっておらず、苦戦を強いられた。

4回目以降は山王峠を起点とする踏査になる。山王峠は、国道121号線にあり、冬でも除雪されているためだ。近くの横川パーキングにテントを張り、ベースキャンプとした。

第4回目は翌年の4月2日～3日（土～日）、積雪期に行い、6人が参加。1回目よりさらに延長したが、男鹿岳が遠いことが確認できただけで終わった。

5回目は、1日で山王峠～男鹿岳往復は不可能だということから、山中泊をし、山王峠から大川峠に一気に踏破する予定だった。大川峠には無雪期しか近づけないことに加えて、それほど藪はひどくないという情報があり、夏に行った。しかし、結果は惨敗。9月23日～24日に、3人で挑戦したが、2度道に迷い、藪に行く手を阻まれて、大倉山にしか行くことができなかった。山王峠から男鹿岳へ連なる山々は、標高がほとんど同じで、枝尾根が多く、2万5千分の地図には掲載されていないピークが多い。高度計と磁石のルートファインディングでは難しかった。

翌2006年、第6回、7回目は大倉山の先までの下見が行われた。

4月7日～9日（金～日）に行った第8回目は、山王峠から山中1泊で、男鹿岳をめざした。結果的には男鹿岳直下までしか到達できなかったが、主要な部分を踏査し大きく前進した。また、横川牧場のルートを使うことができた。その勝因の一つはGPSを使ったことである。先回の反省から積極的に利用したもので、短時間で、迷うことなく分水嶺を辿ることができた。そして8日後の4月17日（月）～18日（火）、最終の踏査が行われた。横川牧場のオガクラ林道を利用。男鹿岳直下まで行き、そこから分水嶺を辿って男鹿岳登頂を果たした。

ちなみに男鹿岳は「角川日本地名大辞典」の栃木県版では「おじかだけ」、福島県版では「おがだけ」と読み方が違う。日本三百名山だが、登山道がなく、当時、2人の方が遭難して亡くなられている。

（永田弘太郎　記）

00会　山王峠～安ヶ森峠

2004年春、分水嶺踏査委員会より00会大川会員が持ち帰った栃木、福島県境の山王峠～安ヶ森峠間について踏査可能かどうか資料を集めて検討した。この区間は藪と潅木で9割は山道がなく水もなし。残雪期以外の縦走記録もない。私は以前この山塊の中で日留賀岳から男鹿岳、大佐飛山の藪山を歩いた実績があり、踏査に手をあげた。難度は高いが三渡会長の判断でこの区間を担当することを決定した。支援隊は車の移動、荒海山へ通常ルートからの水の補給などの調査山行を事前に行った。

実踏査は当初10月に予定したが台風で流れた。11月21～23日、晴れることが見込めたため決行する。踏査隊は佐藤允信会員と友人の田村利弘氏、支援隊は大川昭、石井孝行、佐野正之、副島一義の各会員。20日夜山王峠駐車場で幕営、21日6：30出発。峠でGPS無線機を調整する。

佐野会員に見送られて山道に入る。車馬楽は尾根歩きで問題なかったが、雨量計測小屋の手前で尾根をまちがえた。小屋着8：00。ここからすぐ急登になり、藪が深くなった。1062m地点の手前で尾根を大きくまちがえて40分のロス。その後はGPSを十分にチェックして迷わないようになった。藪の中1131mピークを通過し野岩鉄道トンネル上の藪はいくぶん低くなるが1173.9mピーク前後は深い藪になった。鉄塔近くになり監視道があらわれ、つかのまホッとする。鉄塔下15：20着。幕営に適した場所があり、テントを張った。夜中に一時雨が降ったが翌朝は晴れた。

11月22日（月）6：30発。監視道はすぐになくなり、灌木帯の登りとなる。1273mピーク7：45着。超のつく灌木帯で距離がはかどらない。檜科の幼木が多かった。1270mピーク12：10着。この辺から荒海山にむけて高度を上げていくが、荒海山への急登にかかると深い藪と灌木が行く手を阻み、灌木をまたいだり、くぐったりで体力を消耗する。急勾配をよじ登って三角点山頂に16：20ようやく着いた。1276mピークから4時間かかってしまった。頂上直下南稜小屋16：30着。支援隊からの水が4L届いており有難く思った。夕食を十分とり10時間以上眠ってしまった。

11月23日（火）6：30発。快晴。霜があったが昼は暑くなりそうだ。荒海山山頂からは高原山、日光連山、燧ヶ岳も見えた。次郎岳は指呼の間だが、道は全くない上に南面は切れ落ちており、狭い稜線の灌木や北側の灌木をくぐりぬけ次郎岳山頂に9：20着。3時間近くかかってしまった。山頂の藪の中で休憩。その後1475mピーク11：34着。1363mピーク14：15着、背より高い藪が続き慎重に歩いていく。安が森山近くなると藪が背丈くらいとなり楽になってきた。無線が通じ支援隊が安ヶ森に向かったことが分かる。水を依頼した。暑さとアルバイトで水が少なくなっていたのである。

15：18安ヶ森山頂着。皆が待っていた。踏査達成を皆で確認、喜びを分かち合った。私のウールのシャツはボロボロになり、いわれて分かったが、眼球が枝のはねかえりで出血していた（全治二週間）。帰りは湯西川温泉の共同風呂で汗を流して帰路に着いた。

00会員全員の支援と友人の田村氏に感謝すると共に中央分水嶺踏査の一区間の責任を果たせたことを日本山岳会会員の一員として嬉しく思っている。

（佐藤　允信　記）

科学委員会
安ヶ森峠～帝釈山～馬坂峠

科学委員会の踏査区間は馬坂峠から帝釈山、田代山を経て、田代林道峠より安ヶ森峠までである。当委員会は2004年10月16日～17日、「公募分水嶺山行」として、馬坂峠～帝釈山～田代山登山口迄、一般参加9名を含め総勢19名で踏査を行った。一部の区間は科学委員だけで登山道ではなく忠実に分水嶺を辿った。同じく17日、近藤委員は単独で田代林道峠から田代山まで踏査完了。

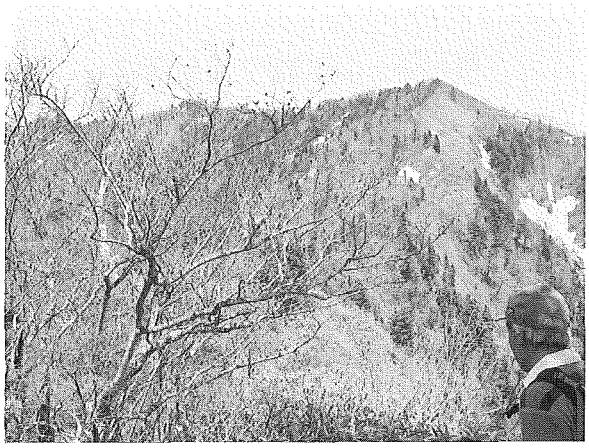
残る区間は困難が予想される安ヶ森峠までの15km余となった。この区間は箕岡委員と平野委員が担当者となって踏査を進めた。

安ヶ森峠～田代山峠

時系列に記すと、2004年11月5日～7日、舘岩村湯の花温泉をベースとし（以後恒例となる）まず安ヶ森峠側から、ついで田代林道側から偵察を進めた。この結果に基づき7月8日～10日まで、縦走隊4名は軽量快速を旨として一気に歩ききる予定で田代林道側から、サポート隊4名は安ヶ森峠側から入山、途中でドッキングする計画で実施した。しかし悪天候に阻まれ、両隊ともほぼ偵察時最終到達点近くにて退却した。

続いて同様の考え方で、10月13日～15日、田代林道側から3名の隊員で2回目を実施した。この時は枯木山分岐付近まで到達するも、ガスにまかれて方向を失い一夜ビバークの後、水不足のため敗退した。

二度の体験から残る未踏査部分7kmは入山、下山ルートを沢筋に求めることにし、黒沢、赤岩沢を主目標に2005年11月から2006年4月にかけ、都合3回にわたり沢筋の偵察山行を行った。



赤岩沢のコルから枯木山分岐を望む

これにより、今度こその意気込みで科学委員会の総力を挙げて挑戦することになった。編成は本隊（A・3名）は赤岩沢を遡行し枯木山分岐近くの主稜線に至り（前回退却地点）、未踏査稜線を辿り黒沢のコル（仮称）へ。本隊（B・3名）は安ヶ森峠より入山、未踏査部を歩き黒沢のコルに至る。A、B両隊とも黒沢のコルより黒沢橋付近に設営されたベースに下山。サポート隊（C・8名）は、ベースキャンプの設営、黒沢のコルへのルート開拓、縦走隊への水と食料の支援、車で送迎、荷物運搬など。

総勢14名にて2006年5月11日～13日に決行。幸い12日は天候に恵まれ、眺望も良く迷うことなくA隊は12日のうちに黒沢橋ベースへ到着、B隊も黒沢のコル寸前でビバークするも13日にはベースに下山。今回はすべての隊が計画通りにその役割を分かち合い、予定通り担当区間すべての踏査を完了することが出来た。B隊が最後に黒沢ベースに到着、全員が揃ったときの感激はひとしおであった。

（箕岡　三穂　記）

科学委員会の公募による踏査登山
田代山峠～馬坂峠

科学委員会の担当区間：群馬県檜枝岐村と栃木県栗山村をつなぐ林道の県境にある馬坂峠から、やはり県境の安ケ森峠までの区間内で、登山道も整備され山としての人気もある帝釈山と田代山(～田代山峠)の区間を対象として、2004年10月16～17日、公募のメンバーにより踏査を行なうこととした。

一般参加の9名を含めた総勢19名は16日池袋を出発し、午後檜枝岐村に到着。昼食後「武田久吉メモリアルホール」を見学した。武田久吉は日本山岳会創始者の一人で6代目の会長を務めた人であるが、幕末から明治初期に活躍した英国の外交官アーネストサトーの子息でもある。理学博士として植物学の教育啓蒙に尽力され、日本山岳会の会誌創刊号(明治39年)に尾瀬の模様を紀行文として掲載された。これを機縁に尾瀬が一躍山岳界に知られることになり、その後の活動が今日の尾瀬の自然を残すことになった。

翌17日朝、当委員会の出発点である馬坂峠に到着。ここまでの林道は10年ほど前に整備されたもので、現在は帝釈山への最短コースとして人気がある。分水嶺踏査のためにもこの林道が非常に重要であることを認識する。幸い天気は快晴。登山道を歩く登山路班と分　水嶺を忠実に辿る藪漕班とに別れ、8時20分それぞれ踏査を開始する。藪漕班は取り付きから笹藪に突入、急坂を暫く登ると藪が途切れたが、そこはオサバグサの群生地である。

一面に咲く可憐な白い花を避けて歩くのに気を使うが心和むところでもある。

9時35分帝釈山頂上に到着。付近は土がむき出し、三角点の標石も裸に近い。しかし360度の展望はまことに見事で間近に会津駒ヶ岳、燧ヶ岳さらに日光の山々まで見渡せた。全員で記念写真撮影後、田代山へ向けて出発。

帝釈山頂上で

登山路は分水界の痩せ尾根を下ってから、大きくは離れないが分水界をはずれる。ここで藪漕班は分水界を忠実に踏査するために、道なき分水嶺を登りにかかる。軟らかな足場、立ち枯れの木、縦横に枝を広げるシャクナゲなどで予想以上に時間を要し、弘法大師堂には11時30分に到着。一方の登山路班は昼食を済ませ、すでに大師堂を後にしていた。田代湿原は北側に緩く傾斜しており、分水嶺は南縁を通りコメツガ、オオシラビソなどの樹林帯となっている。湿地帯への踏み込みは不可能であったので望見に止めた。舘岩村(現在は南会津町)は、湿原の南側にも木道を設け、周回コースにする構想で、現在工事中である。

田代山を写真で見ると山頂の一部を大きなナイフで切り取ったような形をしており、その成因にも興味をもった。かつて火砕流堆積物からなる台地であったのが、周辺の下部が気泡状となり陥没して出来たと聞いた。

藪漕班は湿原から田代山峠まで下る予定であったが、予定時間が大幅に過ぎていたため全員猿倉登山口へ。木道工事資材の荷揚げ用ヘリの轟音が響く中、登山口には14時に到着。

同日、近藤善則委員が単独で田代山峠から田代湿原まで踏査した。途中で我が班との出会いを期待したが果たせず、密藪の急登を約8時間かけて踏査を完了し、真っ暗な山道を車のデポ地まで戻った。

(向野暢彦、平野彰　記)

アルパインスキークラブ
馬坂峠～三平峠

1. 計画について

当クラブは、本企画に賛同し取組むこととした。最初の年の2004年、積雪期に三平峠より桧高山、無積雪期に小淵沢田代より黒岩山、および馬坂峠より台倉高山を、そして2005年の積雪期に台倉高山より黒岩山と、2年間で合計4回の踏査計画であった。踏査方法として、基本的には藪コースは積雪期にスキーを、登山道のあるコースは無積雪期に道を利用することとした。山行形態は、なるべく多くの人が参加しやすいように、回数を増やし、アプローチも麓の宿・キャンプをベースに山稜を往復することとした。

全ての踏査にGPSが使いこなせるメンバーを配置して、安全性および会の趣旨に合致するようにした。

2. 山行報告

第1回踏査は2004年4月、7回目となる2006年5月の黒岩山到達により完遂した。

振り返ってみよう。2004年の3回の山行は、構想通り成果を収めた。残すは、台倉高山より黒岩山までの稜線となった。2005年の積雪期に桧枝岐より舟岐川沿いに入り、雪上にキャンプを作り、日帰り予定で、引馬峠に突き上げ、二手に分かれ、台倉高山および黒岩山を往復する計画であった。しかし、時間切れで、目標には遠く及ばなかった。12時間におよぶ行動の割には、分水嶺の歩行距離はきわめて少なかった。孫兵衛山より黒岩山、また台倉高山より引馬峠に至る稜線踏査は大部分が残った。一番厄介なところだ。

年内の目標達成を目途に、6月に台倉高山より引馬峠、10月には黒岩山より孫兵衛山の藪山歩きを実施した。6月は狙い通りであったが、10月は雨で、そっくり残ってしまった。7回目の山行計画は、とうとう3年越しで、2006年5月初旬となった。アプローチを七入より実(み)川沿いにとり、孫兵衛山より北にのびる尾根にキャンプをあげ、そこをベースに黒岩山を往復することとした。5月3日は天候に恵まれ、快適な分水嶺稜線歩きを楽しみ、午前11時、黒岩山に到達し、2004年9月12日到達地点とジョイントし、我々の分水嶺踏査は完了した。

今回、我々の分担する分水嶺を踏査することからいえば、何と非効率的な動きをしたことかと思う。目的とする距離の7～8倍を歩いたのではないだろうか。特に、2005年10月山行は、小松湿原までテントを上げながら、一歩たりと分水嶺踏査には貢献しなかった。しかし、山行自体は楽しく満足できるものであった。

3. ふりかえって

当クラブの中央分水嶺踏査登山は、回数で7、登山日数18日、延べ参加人数は62名であった。担当した稜線は半分以上が道のない藪漕ぎルートであったため、3回は積雪期に我々の得意とするスキーを使い、あとの4回は藪漕ぎ、ならびに登山道を歩いた。人里離れた、利便性の悪いこのコースは、人と出会うことも殆どなく静かな山行を可能とした。原生林に覆われた峰々は、自然のもつ奥深い楽しみを存分に堪能させてくれた。回を重ねるごとに山域の持つ魅力のとりこになっていったことは確かだ。山に対する感性が戻ってきたような気さえする。多勢の仲間とこの楽しみを共有できたことに感謝したい。

(高原　三平　記)

山の自然学研究会
三平峠～鳩待峠

夏が来れば思い出す…

山の自然学研究会の担当区は首都圏１の中の、西に至仏山（2228.1m）、北に燧ケ岳（2356m）が望める「三平峠～富士見峠～鳩待峠」、標高 1400 ～ 1700m 前後で、冬季は雪に閉ざされているルートである。また、この間は国立公園の第一種特別保護区域にあたり、草木のみならず木石に到るまで、現状変更はしてはならないという制限が付く。積雪期以外に現場に立ち入ることなど、もってのほかである。この保護区間は分水嶺から北側の地域となり、登山道から見るとかなりの部分（特に、鳩待ち峠～富士見小屋間で）あやめ平のあたり南側が高くなっていて、登山道からの立ち入りはできないので、特に始末に悪い。

2004 年４月末、早速冬眠中の尾瀬に向かって予備調査（２名）に出かけたが、ルートはすべて白銀の世界。夏道と分水嶺の位置関係が充分解明できなかった。この間、例えば大清水平の分水線がどの辺りなのかという確認は、冬季では不可能（雪原では単に、平に見えてしまって、分水嶺がわからない）で、分水嶺の踏査が、このようなハイキングコースの方が、思いのほか判り難いという現実に直面している．そこで、夏道が出ているときに、夏道に赤布を付けて、積雪期に現地を踏査するという戦略を取ることにした。

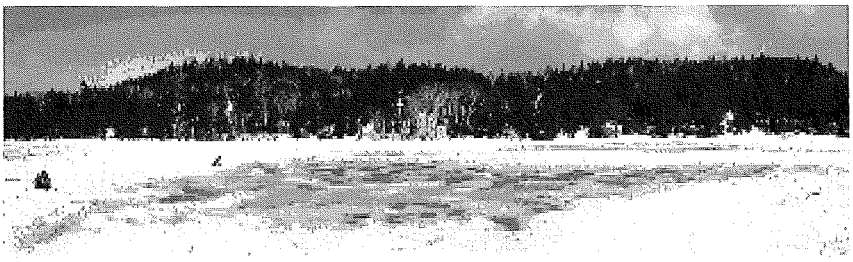
ところが、実際に歩いてみる段には、夏に付けた赤布を頼りに、そこから分水嶺（と思われるところ）を探るのだが、積雪によってそれがふたたび判らなくなってしまう。そのため、ここで踏査したと報告する部分は、実際に歩いた部分ではあるが、厳密に分水嶺であるかどうかということになると、雪ノ下を掘り返して、再度見聞するしかないというのが現実ではある。つまるところ、数度となく現地に立ち入って試行錯誤してみたが、登山道を歩いて見た数値が、もっとも現実的な数値になるのではないか、という結論に到った。

雪が消えて６月、再度調査（５名）に入り、三平峠から大清水平、皿伏山までの登山道樹木に赤テープのマーキングをしてきた。９月はさらに全ルートの登山道の必要箇所に樹木マーキングと、中原山（1968.8m）及び皿伏山（1916.8m）の三角点を確認して、積雪期踏査の準備を行なった（４名）。

年を越して 2005 年５月 23 日、三平峠から大清水平、皿伏山まで積雪平均 1m の分水嶺を踏査（３名）した。大清水平から尾瀬沼畔に出て見ると、沼は流氷が押し寄せたように凍っており、その向うに雪に覆われた見事な燧ケ岳を望むことができた。

驚いたことに、翌朝は沼の氷が解け去って静かな水面となっており、沼畔には長さ 5cm ばかりの可愛い水芭蕉の花があちこちに現れていた。この時期は一日の違いで如何に環境が激変するものかを実感した。美しい尾瀬と尾瀬沼の景観を楽しみながら、価値ある行事に参加して、存分に山を満喫することができた。また、稀に見る好天と絶好の残雪状態に恵まれたことに感謝し、山の自然学研究会が、このたびの全国的な壮挙の一翼を担うことができたことを、皆さんとともに慶びたい。

（関　　清、ほか　記）



ゆきわり会　三平峠～鳩待峠

当会は、2003年日本山岳会の方針に沿って、入会同期の会員で構成していた「97年同期会」を発展的に解散して、2004年2月に結成した安全登山を目指すグループである。

この分水嶺踏査は、日本山岳会の100周年記念行事の一翼を担うという意義は当然であるが、当会の発足の時期に合わせたかのように、ちょうど良いタイミングであったこともあり、会として参加することになった。

このような経緯で64名の会員に参加を呼びかけたところ、8名（男性6、女性2）からエントリーがあり、顔ぶれに相応しいコースを希望したところ、これが認められ、数回の準備会を経て、梅雨期のさ中、7月上旬に鳩待峠から三平峠に向けて踏査することになった。

どこのグループにも晴雨男女（はれあめおとこおんな）がいますが、今回自称晴男が参加したお陰で、梅雨期には信じられない晴天に恵まれ、踏査担当区域外の至仏山に登って足慣らしをし、いよいよ鳩待峠から初夏の日を浴びながら踏査を開始した。

GPSを使用して正確な地点測定をしての踏査。登山道は真正な分水嶺を微妙に外してつけられている。これも先人の知恵だろうと感心したものであるが、今回の目的の「忠実に分水嶺を辿る」ためには藪漕ぎが必要な区間も意外に多くあった。

しかし、この山域は法律で定められた名だたる特別保護区域。一木一草、石一個たりとも移動することができず、ましてや登山道を外れて藪漕ぎなどとても許されないとあっては、真正な分水稜線を見据えながら、その実態を明らかにするのも調査の一つだと考え、野帳に記録していった。

水芭蕉の季節が終わり喧騒を極める尾瀬ヶ原や尾瀬沼から外れ、尾瀬の脇道あるいは裏街道に当たるこのコースは人影も疎らな静かな散策が楽しめる。案の定行き交うパーティーは数えるほどであった。梅雨時であるにもかかわらず、横田代や、あやめ平一帯の池溏群が干上がっているのが印象的であった。

横田代付近を踏査中　バックは至仏山

第1日は、宿泊者の少ない富士見小屋に一泊する贅沢ハイキング。小屋前に東電の建設になるソーラーハウスがあり、その公衆水洗トイレは清潔で見事なもので、さすが東電と感心。

晴天続きの第2日は、白尾山、皿伏山を経て尾瀬沼へ。この間はさらに旅人に会わなくなり完全にわが一団のみ。藪を払い、風倒木をくぐり、ひっそりとただずむ三角点などを撫でながら、大清水平～尾瀬沼～三平峠と辿り、無事に担当区域の踏査を終えることができた。

今回の踏査を終えての感想であるが、一山岳会で全国の分水嶺を踏査するという壮大な企画を実行できたのは、全国組織の日本山岳会だからこそと考えられ、非力ながらその一翼を担えたことは貴重な経験であり、光栄なことと思った。

最後に、この事業を推進、まとめに当たられた関係者のご尽力に心から敬意を表します。

（皆川　惠男　記）

上越地区

鳩待峠～至仏山～大水上山～谷川岳～三国峠　約 87 km

阿賀野川、信濃川水系――――利根川水系

分担区間は、尾瀬への入り口になる群馬県の鳩待峠（1591m）から至仏山（2228m）を経て、群馬、新潟の県境に入り、清水峠（1440m）から谷川連峰を経て三国峠に至る約 87km の山稜である。

群馬・新潟県境部分の約 74km は 1966 年に越後支部で踏査しているが（越後の国境踏査報告書、越後山岳 6 号 1968 年刊）、それから 40 年が経過し、当時の踏査者も高齢化し、今回の「中央分水嶺踏査」への参加はほとんどが無理であった。

越後支部では 2003 年 12 月 13 日、「中央分水嶺踏査実行委員会」を組織して、この計画に取り組むこととし、2004 年 4 月から開始、2005 年 6 月に全ての行程を踏査し終えた。

踏査区間の概要

北の新潟県側は片品川、只見川に流れて阿賀野川となって日本海へ、同じく魚野川、清津川を経て信濃川となって日本海に入る。南の群馬県側は利根川となって太平洋に注いでいる。地理的に表現すれば、利根川の源流群を環状に取り囲んでいる山稜が中央分水嶺をなしているといえる。標高はいずれも 2000m 前後であるが、谷川連峰の主稜線を除けば、一般登山の対象から外れており、登山道は整備されていない。かつては道路上の刈り払いを実施していた所でも、今は背丈を越すチシマ笹に覆われていて進路の標定に苦労する状況であった。

至仏山から清水峠までの約 55km はエスケープルートのない藪の稜線で、全体の 64％を占め、稜線上は積雪、残雪期でないと順調に通過できない。一方、この時期はアプローチに使う林道などが閉鎖されている。それら林道が開通し、稜線上に雪がある“瞬間”を狙って行動しなければならない。

清水峠から三国峠までの約 27km は登山道として整備されている。

踏査報告

踏査区域を三つの区間に分け、必要に応じてさらに細分化した。

1.　鳩待峠―至仏山―平ヶ岳―大水上山―丹後山　28km

この区間は登山対象から外れており道も整備されておらず、もっとも困難な区間であった。残雪期の 2004 年 4 月末日、エベレスト登頂経験のある小林重一会員（13506）が単独で挑み、途中 2 日間の停滞を余儀なくされたが、分水嶺上を 6 日間で踏査した。強風の中を尾瀬、戸倉を経て鳩待峠に至り、そこから平ヶ岳に行くまでに停滞二日を含めて四日間を要した。平ヶ岳は積雪 2m、新雪が 30 ～ 40cm 降りラッセルに苦しんだ。吹きだまりでは胸ぐらいまでのラッセルだった。新潟を出発して 8 日目にしてやっと利根川水源標に到達した。巻機山までの縦走は天候の悪化が予想されたので中止して丹後山から十字峡、三国川ダムに出て下山した。藪は残雪で押さえられていたがこの稜線上では雪庇に注意する必要がある。GPS の測定では数値が安定するまでやや時間を要した。

2.　大水上山―丹後山―下津川山―巻機山　18km

阿部信一会員（13668）他 4 名が 6 名のサポートを得て 2004 年 4 月末から 5 月にかけて巻機山から大水上山に縦走した。尾根道の石楠花が見事で標高 800m くらいまでブナが芽吹き始めていた。

3-1.　巻機山―清水峠　14km

この区間の踏査は計五回行なった。

1)　井出秀雄会員(7159)他4名が2004年8月1日に檜倉山に至り、清水峠までを踏査した。この地域に精通した小野塚高一氏の同行を得て実行できた。檜倉沢の上から大烏帽子山の間は全く人の歩いた形跡がなく、2mを越す根曲がり竹と藪に苦しみ、ガスが出ると方向を見失いがちであった。

2)　加藤明文会員(8058)他3名が2004年9月に巻機山に登り、米子頭山から朝日岳縦走路に出た。朝日岳への縦走路はチシマ笹の藪で道は不明の状況、残雪期を除いて一般者の入山は無理と思われる。

3)　成海修他2名が2005年3月にニセ巻機山に登り、巻機山から柄沢山に縦走した。全コースがクラストしていてアイゼンの爪も半分ほどしか刺さらなかった。

4)　前掲1.のコースを前年単独で踏査した小林重一が2005年4月末、再び単独で計5日間をかけてこのコースも踏査した。残雪期には稜線の雪庇を利用して歩けるが切れているとかなりの藪こぎとなる。藪は笹と石楠花で手強い。

5)　2005年5月始めに加藤明文他2名が4名のサポートを受けて巻機山―柄沢山間を縦走した。この時期の縦走路は東面の利根川側に雪庇が発達し雪稜として残っている。柄沢山の山名については、各種の地図などには「柄沢山」と表記してあるが、過去出版の書籍にはいずれも涸沢の源流にあたるので「涸沢山」が正しいとされている。

3-2.　清水峠―谷川岳　10km

山崎幸和会員(5403)他3名が2名のサポートを得て2004年8月に踏査した。マチガ沢出会いから厳剛新道を経て谷川岳に登り蓬峠に泊まってマチガ沢出会いに戻った。

芝倉岳から蓬峠への稜線上は笹の繁茂が著しく笹をかきわけて歩くところがあり、蓬峠から清水峠への稜線も登山道が笹藪に覆われつつある。一の倉岳と芝倉岳間の草原に散在する小さな池は崩壊寸前である。

大水上山から平ヶ岳方面の展望

3-3.　谷川岳―平標山　11km

南雲克良会員(5601)他2名が2004年8月7～8日に踏査した。天神平のロープウエイを使って谷川岳に登りオジカ沢の頭を経て大障子避難小屋に泊り、万太郎山、仙ノ倉山を経て平標山まで縦走した。

一週間後、同ルートを小野健会員(5704)が単独で縦走した。

3-4.　平標山―三国峠　6km

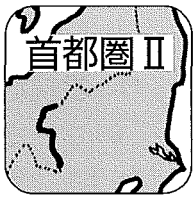
2005年6月11日、湯沢町浅貝の民宿キクヤ山荘において支部主催の分水嶺踏査終了打ち上げ式を行い、翌12日2班に分かれて，平標山の家に向かった。

本間宏之会員(5557)他5名は元橋登山口から平標山を経て山の家に向かった。

桜井昭吉会員(5021)他14名は国道17号の三国トンネルの方から三国峠に登り、山の家に向かい、本間隊と合流して踏査の達成を祝った。このルート上で目に入った植物を木と花に分けて詳細に記録した。

かくして足掛け2年を要した約87kmに及ぶ中央分水嶺の越後支部担当区間の踏査を終了した。

（横山　征平、ほか　記）



上信地区

三国峠～野反峠～山田峠～四阿山～鳥居峠～地蔵峠～浅間山～鼻曲山～碓氷峠～内山峠～十石峠～三国峠　約 208 km

信濃川水系――――利根川水系

つくも会　三国峠～白砂山～野反峠

「つくも会」に割り当てられたコースは、上越国境の三国峠から稲包山、白砂山を越えて野反峠までである。途中、稲包山から白砂山までは登山道が無く、登山地図にも「稲包山～白砂山国境稜線は猛烈なヤブ：大学ワンゲル部のヤブこぎ合宿の世界」と記載されており、水場も無く、さらには熊が出るような噂もあり、相当困難な縦走が予想された。そこで、会員の技量を考慮し、何回かに分けて実施することとした。

最初は、偵察山行として、2004 年 3 月上旬に会代表の徳永ほか 3 名で実施したが、雪庇や強風による吹雪に拒まれ、三国峠からキワノ平ノ頭手前までで撤退を余儀なくされた。

第 2 回目は、残雪期である 5 月の連休に、野反湖から三坂峠までを、単独踏査したが、これは、他の会員の日程調整がつかず、試踏も兼ねやむを得ず、単独となったものである。

当日は、困難なコースの単独行のため、無線機、GPS、発炎筒、熊よけスプレー等の安全グッズを携行し、万全を期した。

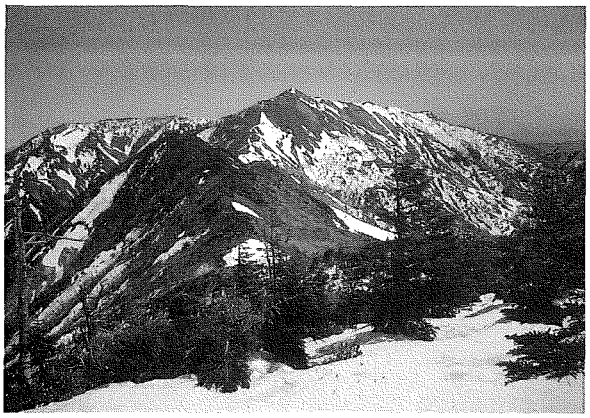
途中白砂山までは、登山道が明瞭であり、快晴に恵まれて、順調に進んだ。白砂山から先は、ヤブの世界となっているが、残雪のお陰で、意外と順調に稜線を外さずに歩くことが出来た。上ノ間山山頂にてテント泊。

翌日も脆くなった雪庇と時々現れる藪を越えて、快調に歩みを進める。上ノ倉山山頂を過ぎ、大黒ノ頭にて、コースは 90 度右折し、下ることになっているが、霧により下の尾根が見えない。目標の尾根にたどり着くまで、左右の尾根に翻弄されたこと 7 回。複雑に支尾根があり、背丈を越える藪と霧に視界が閉ざされたコースを、道迷いせずに下山するためには、GPS が命綱であり大変有効である。

激しい熊ザサのヤブを掻き分け、ムジナ平を過ぎ、セバトの頭を越え、1820m 地点でタイムアウト。藪の中、テント泊。

翌日も、また藪の世界に突入し、GPS、地図、コンパスを駆使して、どうにか登山道のある三坂峠までたどり着いた。

第 3 回目は同年 9 月、比較的登山道が明瞭な三国峠から稲包山を越えて、三坂峠まで。



堂岩山から白砂山

三国峠にて

つくも会の定例山行として一般公募の仲間と共に、16名の参加を得て実施した。コースは、三国トンネルの新潟側坑口脇の登山口から取り付き、一路三坂峠を目指した。長倉山から先、見通しの良い国境の稜線上を歩くこと約5時間、三坂峠に到着。下山後は、猿ケ京温泉にて踏査完結（？）祝いを行った。

だが、その後分水嶺事務局からのご指摘があり、一部ルートを外れていたとのことでビックリ。ルート確認後、誤りに気づき、急遽第4回として2005年7月、野反峠～八間山～堂岩山間の補足踏査を行い完了した。

（芹沢　敏夫　記）

01会　野尻峠～赤石山～山田峠

01会は、踏査計画立案に当り、（1）行程が長いこと、（2）宿泊予定の五三郎小屋が荒廃し収容人数が極めて少ない、（3）山田峠―渋峠間の分水嶺は高山植物保護対策で無雪期の立入り禁止の為積雪期に行うこととし、A、B 2班編成とする。A班は4～5名の少人数で、一方B班は可能な限り多くの会員の参加を促し、日帰り山行とした。踏査は2方向から集中形式、赤石山を合流点とする計画である。04年8月27日、メンバーは01会員、越後支部佐藤レイ子氏を含み4名、長野原草津口からタクシーで富士見峠へ。

峠の北に位置する野反湖は日本最初の発電用ロックフィルダムで、それ以前は堰塞湖と呼ばれる湿地帯で、流水は秋山郷を経て信濃川となり、日本海に注いでいる。

高曇りの中を出発、野反湖を右下に分水嶺を行く、弁天山を経て縦走路を外れ小潅木を分け、ガレた山頂の三角点を確認する。ここからは笹原、草原、針葉樹林と変化に富んだ尾根を行き、高原山、大高山を通り夕刻五三郎小屋に到着。スキーヤーの避難小屋で、外側は堅牢なブロック造りであるが内部は荒廃し、屋根も一部分を残し壊れている。水は小屋下に流れている。夜来の雨を避けて片隅で一夜を過ごす。翌朝降雨の中を出発、オッタテ峰、ダン沢の頭と上信国境の尾根を行き、湯の沢の頭より、踏み跡をたどり、深い笹薮をこいで、巨岩峰の赤石山に到達、中右衛門新道分岐から分水嶺を離れ大沼池へ下山した。

翌28日、B班11名は雨天の中、前泊地鹿沢より車にて渋峠へ入り、立入禁止区を避け上州側の林道を歩き横手山、そして鉢山、赤石山と分水嶺沿いに大沼池へ下山、A班と集結。翌年3月12日、無雪期立入禁止区の横手から山田峠まで踏査を実施した。01会員信濃支部小山内庸人氏、越後支部佐藤レイ子氏を含め8名、横手山頂をスキーで出発するも悪天候、視界不良で途中で断念する。雪解けの進む4月17日、快晴の下、2名にて再度横手山頂よりスキーで滑降、渋峠、山田峠を順調に下り、雪が切れた大きな段差を慎重に車道に降り立ち、2度にわたる積雪期の挑戦で、01会担当分水嶺区の踏査を完了。多くの01会員協力の成果であったことを報告する。

（上野　美裕　記）

丹水会
山田峠～御飯岳～四阿山～鳥居峠

印象的な分水嶺両側の地形の相違

丹水会の踏査担当区域は、亜高山帯で針葉樹下は笹が密生、総じて太平洋側のなだらかな地形に対し、日本海側は荒々しい急斜面、登山道はほとんど無く、無積雪期の歩行は困難、などの特徴があげられる。

初回踏査は2004年4月、北東端山田峠から万座山周辺を歩く計画で、当会の中では若手の4名が入山した。早朝に出発、正午に分水嶺上到達の予定が、事故渋滞に遭い現地到着が大幅に遅れた。実際に踏査に入ると、チシマザサの藪の手強さはいうまでもなく、現地との往復に要する時間、高速道路料金等を障害として実感する。神奈川県を拠点とする当会が、群馬、長野県境にあたる担当区域に到着するには、東京、埼玉あるいは山梨、長野など複数の他県を通過することになる。そこで金曜日の終業時に出発、途中で仮眠をとり、時間を節約することとし、例会でのカンパ、有志の寄付金によって、踏査実行者の費用軽減が出来た。

同年11月には道路凍結のため入山予定地まで車が入れず、また積雪も無く、下山予定側から藪漕ぎで登ることも出来ずに退却したが、遠隔地ゆえの情報入手の困難さを痛感した。2005年3月、万座山周辺のチシマザサ密生地帯を歩き通す予定で、当会の実力者、渡邉玉枝さんの参加を得て実施した。幕営で大変寒かったこと、凍った岩かど、斜面のトラバースで渡邉さんの先導が非常に心強く思えたことが印象に残る。

残雪の4月、分水嶺より群馬県側の斜面に登山道がある土鍋山から浦倉山、そこから分水嶺をややはずれているが、四阿山迄登山道を歩いた。年度始めのため日程調整が難しく2名での踏査であった。

同年9月、毛無峠を中心にして、土鍋山と御飯岳を往復する。毛無峠一帯は、かつての鉱山の影響か草木が育たず、風も強く冬期でも山肌が露出している。峠から山頂への斜面は、ガンコウランなど貴重な高山植物保護の為、立入り禁止域になっている。百周年記念事業ではあるが、ここは環境省自然公園指導員、日本高山植物保護協会員である筆者の独断で踏査空白域とした。

翌日は、例会行事として予定の四阿山から担当区域南西端の鳥居峠までの下見を行った。的岩から鳥居峠までは、分水嶺に沿い道がある筈、しかし多くの箇所でほとんど踏み跡すら分らない程笹や夏草が繁茂、例会として踏査するのはあきらめ、この下見を以って踏査報告とした。

2005年10月、丹水会49回例会として四阿山の踏査を行う。サポートを続けて下さった古谷聖司氏、分水嶺踏査提案者の近藤善則氏、実行委員会の森事務局長の参加も得て23名により、全踏査は無事完了した。地理的、経済的困難を抱えながら、この一年半、無事踏査を終了出来たのは、信頼できるチームでの行動、加えて会員各位の支援の賜物と深く感謝している。

（國見ゆみ子　記）

2005年10月30日四阿山山頂にて
左端は丹水会再高齢者、乾能尚氏

山げらの会
鳥居峠～湯の丸山～地蔵峠

日程　2004年10月23日(土)～24日(日)(晴れ)

『山げらの会』の担当踏査区は、鳥居峠から角間峠までである。2004年10月23日・24日この踏査を実施したので報告する。当初登山道があると思って選んだ区間だった。しかし藪漕ぎの道と情報が入り、5月29日下見を行った。1時間余熊笹の藪と格闘したものの、天気予報が雨だった為、鳥居峠に引返した。10月23日、マイクロバスで鳥居峠に9時過ぎに到着、9時25分より歩きはじめる。途中三角点の位置を確認し、写真を撮り先に進む。藪に入ってすぐに盛り土が続く。ここが長野県と群馬県の県境で、浅間山あたり迄続くらしい。12時20分大塚山着、この調子で頑張れば16時には角間峠まで着けるぞと前進した。四阿山が見え、浅間山の噴煙も見えた。大ヤリには16時20分着、意外に時間がかかる。このままでは陽のあるうちに角間峠に行き着けないことが確実となり、角間山の肩からと登山道を下る。24日快晴のなか、北アルプスの眺望を楽しみつつ、角間峠の藪と地蔵峠―湯ノ丸山―角間峠間を無事踏査完了出来た。今回は強力な助っ人が応援に来て下さり、携帯電話で常に無事であることを鹿沢温泉のメンバーに連絡出来たこと、貸切バスの送迎が滞らなかったことが幸いした。

(山げらの会　記)

余話
分水嶺踏査　発祥の地？

分水嶺踏査委員会　近藤善則

信州側の新張から峠を越えて、鹿沢温泉に至る道には一番から百番までの石仏が、1町ごとに祀られている。これを「百体観音石造町石」と言う。その80番観音の地が地蔵峠でここには地蔵菩薩と観音菩薩が仲良く同居している。分水嶺の峠としても名高いこの地は、湯の丸高原のベースとして広い駐車場とロッジが立ち並び、一年中観光客が絶えない。

分水嶺上に建つロッジ花紋の先代は、この湯の丸の自然を大手資本の開発の手から身を呈して守ってきた人として知られている。そのロッジの屋根に降った雨水は棟から北と南に別れ、北は湯尻川から吾妻川へ、そして利根川を経て太平洋に流れる。南は所沢川から千曲川に注ぐ。北と南が逆転している特異な地域なのだ。

峠から北側、百番目の観音像が建つ山間に鹿沢温泉がある。昔は信州側からの道しかなく、百体観音も湯治の為の道しるべであった。

鹿が傷を癒したと伝えられる鹿沢の一軒宿・紅葉館は古くから日本山岳会とも縁が深く、特に西堀栄三郎を中心とした雪山讃歌発祥の話は有名で改めて記すまでもないだろう。紅葉館の女将からは次々に日本山岳会の先輩達の逸話が出てきて話題が尽きない。昔のままの有様を頑固なまでに守っている姿勢に往年のファンも多く、最近は豊富な水源を利用してミニ水力発電にも取組み、新しいものと古いものを程よく取り混ぜながら、なお環境への配慮も忘れない貴重な温泉宿だ。

地蔵峠から湯の丸山を経て角間峠に至り鹿沢温泉へのルートは科学委員会主催で分水嶺をテーマに探索山行が催された場所でもあり、このことがきっかけで中央分水嶺踏査が始まった。まさに分水嶺踏査発祥の地である。

山想倶楽部
地蔵峠～車坂峠～火山ルート峠

熊に出会い、雷に打たれて

山想クラブ踏査担当区域は地蔵峠、車坂峠、火山ルート峠迄である。2003年同好会連絡会議に出席した西田、松村は『楽しく歩けて、楽なコース』を選ぶこと、まずこれを至上目標とした。困難なコースに当ると、当クラブの連中から非難され、踏査参加者が誰も居ないと云う事態になりかねない。そこで先にいい区域を取るべく、積極的に手を挙げて、逆指名結果が冒頭の担当区である。このルートは展望良く、お花畑、いい温泉、その上登山道は整備されている、楽しいハイキングコースだ。参加募集には案の定14名が申し出てくれた。

踏査実行に当っては、我が会には2つの強力な武器？があった。それが今度の踏査登山を成功に導いた最大要因かもしれない。先ず一つ、山行リーダー松村氏は某ツアー会社に勤務する現役登山ガイドである。ルートについては勿論のこと、地形、植生にいたるまでまるで生き字引である。もう一つは中川氏である。かつて土建業を営む土地測量の専門家であった。ここで掲載写真を見て頂きたい。測量用ポールまで持込んだ本格的な測量となった。

7月24日、ガイド付き、測量士付きの我々14名は3台の車に分乗して地蔵峠に向った。到着後早速GPSによる観測を始める。専門家が2人も居るので心強い上に、更に妥協を許さぬ真面目人間、荒井氏が測定結果を記録するという完璧な布陣であった。残りのメンバーはと云えば、分水嶺踏査などどこ吹く風、眺望がどうの、花がどうのとのん気なもので、何しろ、『このきれいな花は？』と尋ねれば、ガイド松村氏が、『花の名は何々、特徴は云々』と即座の解説、『今、立っているのは何処？』と尋ねれば、打てば響くように『ここは何県側で、下に見える川は蛇堀川、ここから南に流れて千曲川に合流する』と立て板に水。早い話が、無料でガイドを付けてハイキングをしているようなものである。

黒斑山頂にて参加者一同

しかし2日目、黒班山から浅間山へのルートでは一波乱あった。車坂峠から黒斑山への途中、針葉樹林帯で隊員がツキノワグマに出合ったのだ。幸いにもこの熊と体面したのが、我等が山想クラブ随一の豪傑で、熊に引けを取らない体形風貌の持ち主、井上氏であった。出合った熊もさぞ驚いたことであろう。

その後、小浅間への途中で激しい雷に見舞われたが、本来の目的は充分果たすことが出来た。花いっぱいの高原を行き、おいしい空気を吸い、いい温泉にも入った。そのなかでメンバー相互の懇親も大いに深められた。参加の皆さんへの感謝と共に、報告を終える。

（西田　和夫　記）

解説

浅間山について

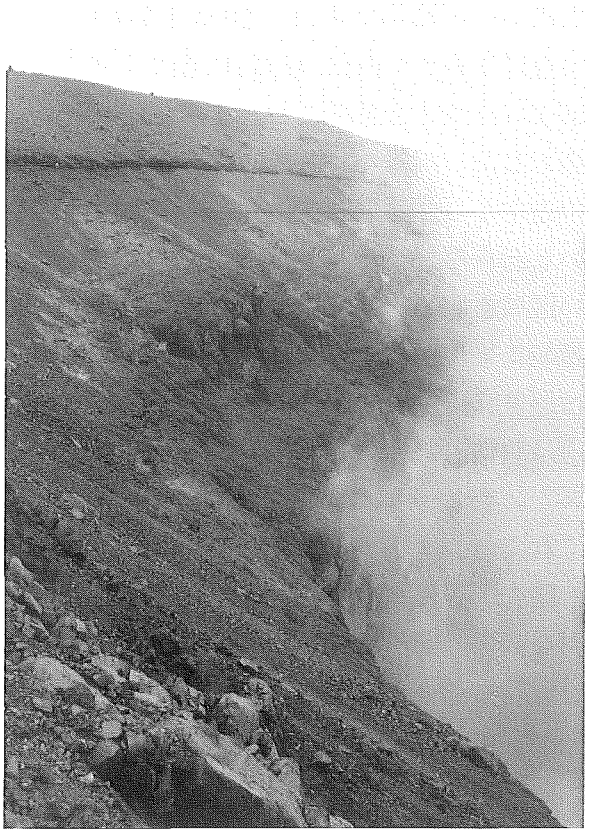
分水嶺踏査委員会　近藤善則

火山国日本は中央分水嶺上にも多くの火山が存在する。そのなかでも現在活発に活動している火山の代表は浅間山であろう。
浅間山については今更述べるもなく、多数の解説や記録があるので詳細は省くが、「あさま」は火山を示す古語で富士山の神を祀る浅間神社や阿蘇山の「あそ」も関連のある言葉であると言われ、多くの浅間山が日本全国に点在している。群馬県・利根川水系と長野県・信濃川水系の境にあるこの浅間山は古くから信仰の対象となっており、南麓の追分には浅間神社が鎮座している。

火山活動でいえば、7世紀頃の噴火の記録(日本書記)以来たびたび噴火が繰り返され、詳細な被害が記録されており、研究資料も多く残されている。特に天明3年(1783年)の大噴火は大飢饉を招いたとされ、北麓の集落を全滅させ、鎌原あたりは日本のポンペイと称され、いまだにその痕跡が残っている。観光地となっている鬼押出しもこのときの溶岩が固まって出来たものだ。

そのような活火山であるから、登山での入山には規制があり、1972年 より立ち入りが禁止されてきた。その後沈静期には規制が解除されたこともあるが、その火山活動に応じて地元自治体が火口からの一定の直線距離以内を立入禁止区域としている。

今回の分水嶺踏査実行時点では、爆発的噴火活動の真っ最中であり、2004年9月よりレベル3の段階となっており、分水嶺上では、トーミの頭―黒斑山―蛇骨岳―Jバンドー賽の川原―山頂―小浅間―峰の茶屋　間が規制の対象となっており、入山できないので踏査では分水嶺を迂回したが、2005年6月にレベル2に引き下げられた。



浅間山山頂火口（1990年5月撮影）

現在、軽井沢口(国道146号線「峰の茶屋」コース)では、火口4km以内立ち入り禁止である(軽井沢町浅間山の火山に関する情報2006年8月現在)。

小諸口は黒斑コース(高峰高原―車坂峠―槍ヶ鞘―トーミの頭―黒斑山―蛇骨岳―Jバンドー賽の河原)と、火山館コース(浅間山荘登山口から一の鳥居―火山館―湯の平口―賽の河原)ともに、賽の河原分岐点(火口から概ね2km)まで、登山者の自己責任で登山可能(小諸市　浅間山登山情報 2006年8月現在)となっている。

さらに2006年9月にはレベル1に引き下げられ、前掛山まで登山可能となった。

登山口のある軽井沢町、小諸市にとっては観光面で規制による影響が大きいので、この引き下げは登山者ともども朗報ではあるが、あくまでも目安であり、100%の安全を保証するものではなく、登山の安全に関しては自己責任が求められるのは当然のことである。

火山活動度レベルの区分けについて

気象庁は火山噴火予知連絡会の提言に基づいて、火山活動度を0～5にレベル化しており、情報を提供している12の火山は下記の通りであって、太字は中央分水嶺を、( )内の数字が、2006年10月現在のレベルを表す。

浅間山(1)　伊豆大島(1)　阿蘇山(1)
雲仙岳(1)　桜島(2)　吾妻山(1)
草津白根山(1)　**九重山**(1)　**霧島山**
{新燃岳(1)、御鉢(1)}　薩摩硫黄島(2)
口永良部島(2)　諏訪之瀬島(3))

火山活動度レベルの基準はつぎの通り

レベル5　極めて大規模な噴火活動等
噴火活動等広域で警戒が必要。
レベル4　中～大規模噴火活動等
火口から離れた地域にも影響の可能性があり、警戒が必要。
レベル3　小～中規模噴火活動等
火山活動に十分注意する必要あり。
レベル2　やや活発な火山活動
火山活動の状態を見守っていく必要がある。(浅間山の場合は4km規制となる)
レベル1　静穏な火山活動
噴火の兆候はない。
レベル0　長期間火山の活動の兆候がない。

各自治体では、気象庁の火山情報でのレベル発表に基づいて、規制範囲や距離を定めているが、必ずしもレベルと連動しているものではなく、各自治体の判断で規制距離を定めているようだ。

小諸市の場合レベル2では本来4km規制となるがこれを2kmとしている。さらにレベル1となると500mとなり、ほとんど山頂近くまで行けることになる。

さて、噴火口のある場合、分水嶺の線引きはどうなるのであろうか？　浅間山の場合、Jバンドから賽の河原方面へ一端下がり、前掛山の北側から火口を目指して瓦礫を歩き火口の西端に至る。地図上の県境は火口のまん中を通っているが、分水嶺は北ルートをとるか？南ルートをとるか？

2568mの標高点は東端にあり、お鉢は一周できる。筆者がかつて火口を一周した記憶では(もちろん規制前のことであるが)南側の方が標高が高かったように思うのだが…。噴火の際に溶岩が流れ出る確率はやはり北側(群馬県側・利根川水系)の方が高いのかもしれない。

アルパインスケッチクラブ
火山ルート上～碓氷峠

2004年6月19日～20日に、分担の火山ルート上から碓氷峠までの踏査を実施した。

19日にメンバーは軽井沢駅に集合し、徒歩で旧軽井沢市街・旧軽井沢峠経由で霧積温泉の金湯館に泊まる。翌日霧積温泉を出発し、十六曲がりの登りは途中でスケッチをし、緑の木々の中での楽しいひと時であった。霧積のぞきを通り最後の急坂を越えると鼻曲峠である。ここが中央分水嶺上である。早速GPSを取り出し、緯度・経度と高度を記録する。三角点のある鼻曲山頂上は見晴らしが悪い。そのため5分ほど離れた小天狗岳に移動する。360度の展望の中で思い思いスケッチを開始する。残念だが一部に青空が見られるものの浅間山は台風と梅雨前線の影響で頂上部に雲が懸かっている。

昼食後、留夫山経由で碓氷峠に向かう組と国境経由の火山ルート上へ向かう組とに別れる。4人が碓氷峠組で12時15分に出発する。落葉の積もった小道を快適に降りるが、疲れた体には留夫山の登りはつらい。地図上の三角点を見つけその都度GPSで緯度・経度・高度を記録し、山行を楽しむ。花の少ない季節ではあるが、スズラン・カザグルマ・ツマトリソウ・ユキザサ等清楚な花が見られた。峠の茶屋で茶を飲み、見晴台でスケッチブックを開き、見え始めた妙義山のスケッチを楽しむ。見晴台からの道は普段ほとんど利用されることが無く踏み跡がかすかで、最後は無くなってしまったが、分水嶺沿いに下って国道18号の碓氷峠に16：40に降り立つ。国道を約1km歩き軽井沢駅に到着する。

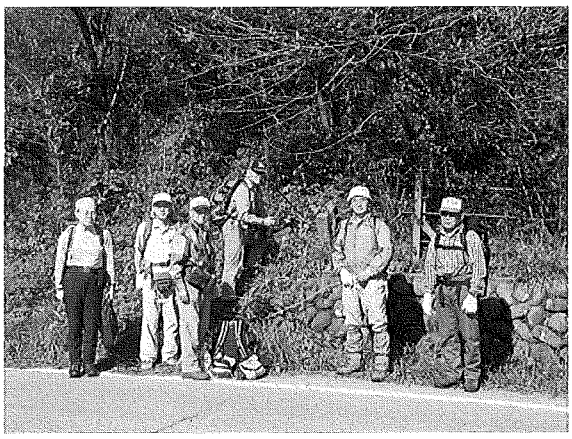
もう一方の火山ルート上までを踏破した4人は昼食後、鼻曲山を後に火山ルート上へ下る。下り始めはかなり急坂で、張られたロープを使って黙々と下る。30分くらいで鼻曲山の西登山口の国境平に到着。その後は平坦なゴルフコース沿いの舗装された道を行く。国道146号線の県境バス停から林に入るが、林の中はシダ類の生い茂った道無き道で、藪こぎをしながら進み、目的の火山ルート上のつつじが原バス停に突然でることができた。途中浅間山の頂上は終日雲の中であった。バスで軽井沢駅に行き碓氷峠ルート隊と合流した。

（冨樫・沼田　記）

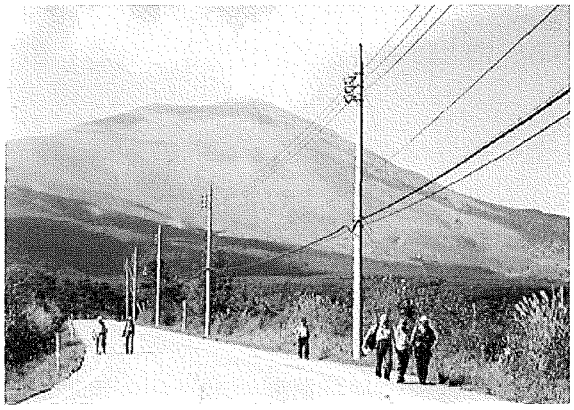
九五会　浅間山麓～鼻曲山～碓氷峠

このコースは一部藪におおわれているものの、登山道は明瞭な踏跡があり、比較的易しい18kmである。また自然林が豊かで、噴煙を上げる浅間山や妙義山の眺めが良く、中仙道の要所だった旧碓氷峠、熊野神社、茶屋名物の力餅などと歴史を感じる。また、途中に秘湯といった感じの恵まれた霧積温泉があり、一日で全行程の踏査は困難であると考え、浅間山麓出発組のA班と碓氷峠出発組のB班とに分け、鼻曲峠で落ち合い、霧積温泉で一泊する事にした。しかし、歩行水平距離では両班ほぼ同じであったが、登高距離A班は435mに対し、B班は1022mと倍以上もある、上り下りの激しい行程であった。しかも、B班は見つけ難い観測点があり、長時間捜索したこともあって、鼻曲峠到着時間に大差が出てしまい、峠でA班に逢うことは出来なかった。霧積温泉で参加者全員は体を楽しく癒すことが出来た。

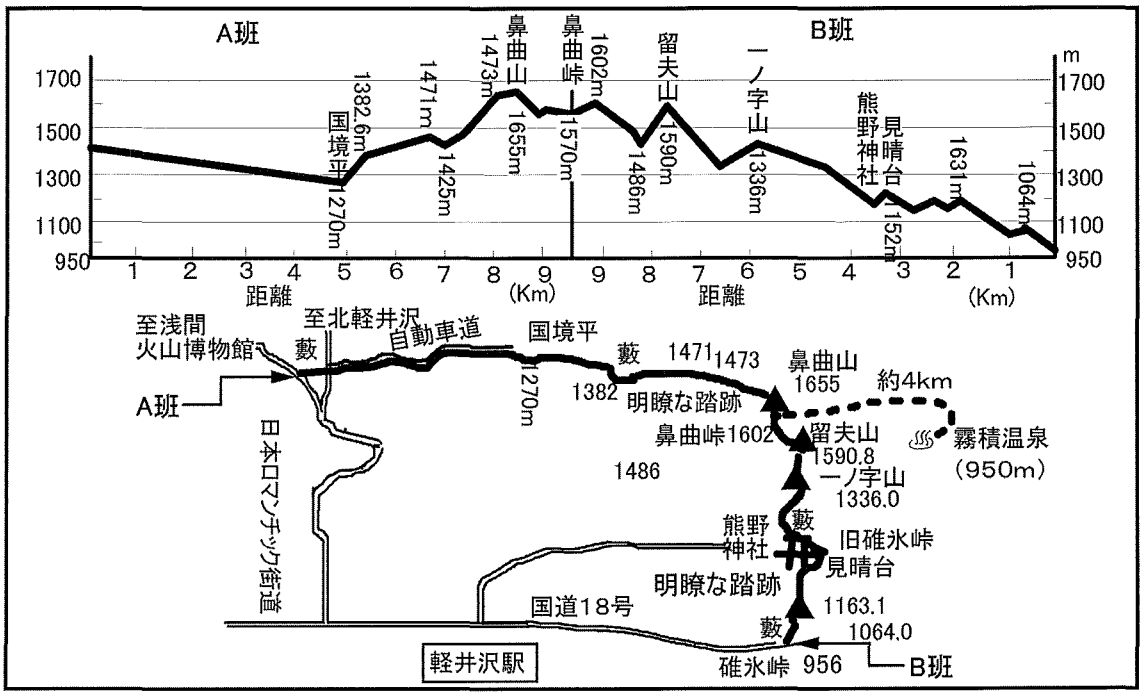
（江口　欣也　記）



碓氷峠踏査入口



浅間山を背にして



行程図

緑爽会　碓氷峠～八風山～内山峠

1995年5月、自然保護委員会OBと現役委員会有志の親睦を目的として結成された緑爽会も、現在は高齢化が進み、厳しい藪漕ぎコースの踏査は困難と判断し、比較的安全に歩ける碓氷峠から内山峠間の分水界を担当することとなった。区間は碓氷峠―矢ケ崎山―入山峠―和美峠―日暮山―八風山―矢川峠―物見山―熊倉峰―内山峠までの約18kmで、殆どが長野、群馬の県境尾根である。昭文社『山と高原地図』を見ると、登山道があるのは全体の3分の1に当る八風山から内山峠間のみ、あとはある程度の藪漕ぎを覚悟する。

第1回目は4月25日、快晴のもと、碓氷峠から矢ケ崎山に登り、入山峠・桜堂山・新軽井沢峠を経て和美峠まで約5時間かけて歩く。碓氷峠からの尾根の取付きは歩き易く、道も矢ケ崎山の山頂直下まである。それはたぶんこの尾根の長野県側がプリンスホテルのスキー場になっているためと思われる。矢ケ崎山山頂は狭いが展望は素晴らしく、北に伸びる分水嶺の山並みと、その線上の残雪に白く彩られた浅間山の眺めが印象的であった。山頂からの下りは直下から崖状の急斜面になっているため、なだらかな西に伸びる尾根を少し下ってから斜面を巻いて県境尾根に入る。

後はなだらかな尾根歩きが続く。境界杭と赤いビニールテープの目印が所々につけられていた。それにしても群馬県側がすっぽりと落込んだ落差のある地形には驚かされる。

入山峠を過ぎ、コースを少し西に外れた桜堂山の4等三角点（正式点名『二ツ岩』）は、岩の中に埋込まれた金属の標識で、山の三角点としては珍しかった。

第2回目は5月16日、終日小雨降るなか、美和峠から八風山分岐まで歩く。なだらかで広い尾根が続いているため、常に地図と磁石で方向を確かめながら歩くことが続いた。途中には山椒の木の群生地もあり、ちょうど芽吹きの季節であり、少量頂いたのだった。日暮山分岐の手前から別荘地の際を歩く、雨で滑り易い斜面と、細かいアップダウンが続き、予想以上に疲労感が積もる。八風山分岐への最後の登りは、小沢状のなかを登るザラザラ道であった。八風山山頂に寄り、天気が悪かったので約5時間歩いて終わりとする。

第3回は6月5日、快晴、緑爽会メンバー（横山隆、大島洋子、鈴木快信）と一般の会員三井由江の4名で八風山分岐から矢川峠・物見山・熊倉峰・内山峠を歩く。先ず八風山へ北側から登り、分水界の尾根の分岐に到達する。下りは岩状急勾配を避け、尾根中腹につけてある登山道を、少しの区間利用した。

矢川峠から香坂峠の間は春にはツツジの花が多く咲いて、のんびり歩くには最適のコースである。矢川峠の4等三角点は登山道から少し東に外れた複雑な地形の中にあり、探し出すのに手間取った。物見山を経て、長野県側の内山牧場に立寄り飲んだ冷たいミルクの味は忘れられない。約6時間歩いて内山峠に着き、これをもって、我々は無事に担当区間全部を歩き終えた。特に八風山から内山峠間は道も良く、展望の好い地点が随所にあり、中でも荒船山の岩稜が種々形を変えながら大きく迫ってくる様は実に印象的であった。

（横山　隆　記）

三水会　内山峠～荒船山～十石峠

熊と遭遇、雷と雹に追われて

三水会の担当ルートは全体が長野と群馬の県境になっている。東側の内山峠は長野県南佐久と群馬県西上州とが接し、今は内山トンネルを通ってルート254が結んでいる。西側の十石峠までの間は水平距離にして約27kmであるが、内山峠から荒船山を挟んだ田口峠までの9.5kmを除いて登山道は無く、藪漕ぎが予想された。この区間を歩いた記録としては、1983年12月の法政大学探検部・執行一利氏らによる、ぶどう峠～内山峠、1987年5月と10月の上野信也氏による、星尾峠～十石峠、1989年4月の福田忠氏による、余地峠～矢沢峠がある。いずれもかなりの藪漕ぎを強いられている。これらの記録と田口、余地、大上、十石の各峠付近の偵察行から、2004年の秋と2005年の春に分けて踏査を行なうことにした。3回の踏査行で登山道の無い約18kmの区間を終了し、最終第4回は登山道のある内山峠から田口峠まで歩き全区間を完了した。以下にその概略を記す。

第1回は2004年11月21～22日。21日は田口峠と余地峠間を3名ずつの2班で両峠から入山した。田口峠班（池田、塩澤、豊田）は霊仙峰、小唐沢山と順調に進んだものの、その先から猛烈な丈余の熊笹漕ぎとなった。余地峠班との交信の結果、13時を過ぎた地点から引返すことに決定した。とその時である、前方60m程の場所に3頭の熊を目撃。うち2頭は小熊のようであったが我々の気配を察してか、急いで藪のなかに消えたのでホッとした。余地峠班（石原、平澤、古市）は1337.4m峰からの下りで尾根取りを誤った為、時間をロスし、時間切れとなって余地峠に戻った。

翌22日、4名(塩澤、豊田、平澤)は大上峠から1308m峰、広小屋山の肩を経て3時間程で矢沢峠に着いた後、分水嶺を離れ、峠より急な涸れ沢から大上林道に出て終る。

第2回は2005年5月14日と15日に実施した。7名（池田、川俣、塩澤、砂田、豊田、平澤、古市）で、先ず14日に、前年やり残した区間を踏査し、翌15日は池田氏を除く6名で十石峠から北上して猛烈な笹藪のなかをGPSを頼りに雷と雹に遭遇しながら、7km余を11時間という苦闘の末に、大上峠に抜けることが出来た。

第3回は同月29日である。4名（塩澤、柴田、成瀬夫妻）で短い余地峠、矢沢峠間を日帰りで踏査、これを以って道が無く懸念されていた区間は完結された。以上これらの区間では、古い苔むした石柱の県境標識と、その存在を示す樹木のペンキ跡を探し確認しながら、所によって2m以上も伸びた熊笹の藪を掻き分け進んだのであった。

最終の第4回は10月1日、分水嶺実行委員会事務局長、森武昭氏を含む10名（池田、石原、川俣、塩澤、田中、成瀬夫妻、平澤、古市、森）で内山峠から殆ど分水嶺上を通っている登山道をたどって荒船山、星尾峠、御岳を経て田口峠に抜け、これをもって三水会分担の全行程を完了した。

（塩澤　厚　記）

休山会　十石峠～三国山～三国峠

普段とは極めて趣の異なる山行

休山会の担当区域は、長野県と群馬県の県境・十石峠から県境上を南に向い、長野県と埼玉県境に入った三国峠まで、地図上の平面距離で凡そ21kmの分水界である。我国を代表する二大河川、信濃川、利根川と埼玉県側は荒川の分水嶺に当る。西は小海線を挟んで八ツ岳、東は日航機墜落で名前の知れた御巣鷹山と隣接している。群馬県側は秩父山群の最奥部に当り、取り付きが急峻であり、いきおい小海線側からのアクセスに拠ることとなった。

踏査時期は（1）出来るだけ多くの会員が参加（2）積雪期及び藪の繁茂する夏期を避けるよう考慮し、04年5月、11月、05年5月と都合3回の踏査で完了した。初回は車道が通る十石峠よりぶどう峠まで幕営で、第2、3回目は旅館前泊とした。全体で5泊8日間（山中5日間）の踏査となった。

最大の痛恨事は第2回踏査中の2004年11月、急性心不全のためH氏が急逝されたことである。遺体収容に当り長野県警レスキュー隊に特段のお世話になり感謝している。

踏査の5日間は登山道の状況、分水嶺へのアプローチ、日毎の天候など極めて趣の異なる山行で、参加者は皆普段の山行では味わえない登山体験であったと語っている。ここである一日を少し振返ってみる。

05年5月6日前泊地北相木村の宿で、地元の婦人が言うには『八ケ岳が見えるときは天気が良くなる』と。雲行きは怪しいが、八ツが見えていた。不用の荷物は次泊地への別送を依頼し、車で赤火岳山麓の林道終点まで約20分送ってもらい入山。6時8分歩行開始。ツツジ、赤松、栂の林の中、シャクナゲを掻き分けて進む。立派な鹿の角を発見。途中H氏終焉の地に向かい黙祷を捧げた。8時40分、木次原の3等三角点の赤火岳山頂に着き記念撮影、曇天で遠望は効かず、すぐに南峰に向う。笹藪密生、先導者がすぐ見えなくなる。高額な眼鏡を笹に跳ね飛ばされ紛失した者、腕まくりのまま行動し切り傷だらけになる者などがいて、1.7km程度を結局2時間費やした苦労な道程であった。なだらかな平地の弥次平山頂に着き、早めの昼食をとる。明大ワンゲル隊がかつて設置した弥次平のプレートがあった。曇りで見通しの効かない中、GPSを頼りに石仏の三角点を目指し上り下りを繰り返した。生々しい熊の爪跡が橅の大木に刻まれている。バイケイソウが緑鮮やか。岩場を登り、14時22分石仏山頂に到着。眼下に雲海が広がり、折角の遠望は効かず。さらに分水嶺を南に進むが、地図にある登山道は発見出来ず、林間を谷間に向って枯れ沢に沿って下り、16時30分車と待ち合わせの林道に到着した。付近は東電が緑化復元を図っている所。鹿の家族が尻を高く上げ疾走する様も目にした。近くの温泉で疲れを癒し、夕食にありついた時は既に8時を回っていた。

（鈴木　秀郎　記）

赤火岳山頂、木次原三角点

甲信地区

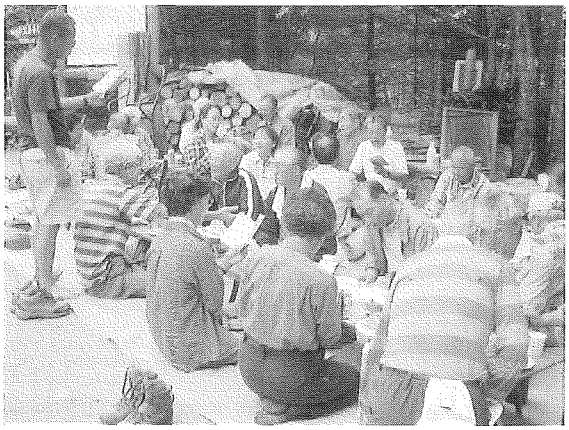
三国峠～甲武信ヶ岳～国師ヶ岳～大弛峠　約30km

信濃川水系――――荒川、富士川水系

静岡支部は、本県上に中央分水嶺がないため、山梨県三国峠から甲武信ヶ岳、国師ヶ岳、大弛峠の稜線を歩くことになった。

第一回目の参加者は、大石惇支部長、照内豊、八木功、室伏偉男、山内眞行、長谷川廣司、大村武敬、小川正育の8名である。6月1～2日にかけて、霧雨の中、三国峠に集まり十文字峠に一泊し、甲武信ヶ岳に登り毛木平へ下った。十文字小屋周辺のアズマシャクナゲの群生は、今を盛りと咲いていた。甲武信ヶ岳山頂には、環境省、山梨百名山等の標柱や巨大なケルンが積まれ、昨今の百名山ブームを象徴している感がある。信濃川（千曲川）、荒川、笛吹川（富士川）の分水嶺を歩き、山頂から250m程下った所に、信濃川源流の大きな標識。マイヅルソウ、ゴゼンタチバナを林縁にながめ、源流から遊歩道のような路を毛木平へ下った。道中は源流への散策者が多いためか、木陰や石の間に菓子のパッケージやペットボトル等のゴミが見受けられた。我々は早い者勝ちでこれらを拾って下山した。

第二回目の参加者は、照内、山内、赤石秀之、葉華子、水野恵子、山本久子の6名に加えて、本部から分水嶺踏査委員会の宮崎紘一、森武昭、両氏の参加を得て、計8名で、7月



山梨支部の皆さん

奥秩父の原生林を行く

24日大弛峠小屋前に参集した。16時半頃より古屋学而支部長をはじめとする17名の山梨支部会員と情報交換をかねた懇親会を催した。甲州ワイン、旬の葡萄と桃で飲み歌う。静岡を出発した時は気温が30度を超していたが、ここでは真夏でも20度程度だということだ。平均年齢は60代半ばを越えていたと思うが、合唱の山の歌は雷雲を蹴散らすばかりであった。

25日6時に8名は国師ヶ岳から甲武信ヶ岳へと出発。山梨支部員は金峰山へと向かった。登山路は整備されており、木道や木段が前国師ヶ岳の近くまで設置されていた。標高2271.6m（東梓）の三角点は盤石のみが地表に露出しており標石は皆無であった。照内と女性3名は甲武信小屋泊まり。他の4名は頂より往路を帰る。逆コースの国師への登りには苦労した。

三国峠～甲武信ヶ岳～大弛峠の踏査は、約30km、一般ルートであり問題なく終了。GPSによる高度測定を行ったが地形図に表記されている高度との差異は小さかった。山梨支部の人達とも親睦を深めることができて、有意義な山行であった。

（山内　真行　記）

余話

衛星移動通信サービスを活用した情報伝達の試み

分水嶺踏査委員会　藤本慶光

中央分水嶺踏査計画の立案当初には、踏査と併行して色々調査する計画を立てていた。その一つに踏査実行中のチーム間で、または行動している現地と日本山岳会の本部間で、音声と映像によるコミュニケーションがとれないかというアイデアがあった。すでにNTTドコモが衛星移動通信サービスを開始し、一部の山小屋に衛星電話を設置していた。

そこで、大学山岳部OB仲間の中村維夫常務の紹介を得て、2002年5月11日に分水嶺踏査委員3名がNTTドコモを訪問し、MM事業本部衛星ビジネス部の方々に説明を伺った。分水嶺踏査計画は、当時はまだ正式には未承認の時期であり、中村常務に「色々なセットの入った25kgのトランクを担いで皆さん山に登られますかねえ」と冷やかされた。

この企画が100周年記念事業として承認され、実際の活動を始めた頃の2003年10月16日、科学委員会主催の科学講演会でNTTドコモの松木部長からこの衛星移動通信サービスについての詳しい説明を受けた。二つの異なった地点の間で映像と音声で状況を伝え合うというのはかなり実行が困難なので、実際の山歩きをしている現場から東京の日本山岳会の本部に伝えるという形をとることにした。

実地テストを東京近郊の陣馬山と山岳会のルームとの間で、2004年4月23日に行なった。NTTドコモの社員2名、山岳会会員3名が陣馬山山頂に機械を運びあげ、山岳会のルームに受信装置を据え付けて、NTTドコモの社員2名、山岳会会員3名が待機した。

山頂に装置を設置し、電波を発信したが、音声は伝わったものの期待していた映像の方は、遥か宇宙の彼方に浮かぶ2個の衛星を経由することからも、テレビ中継のようにスムーズには行かず、断続的な静止画像がかなり時間的にずれて伝わることがわかった。

実際の状況伝達は、ちょうど熊本市で開催される全国支部連絡会の会場を受信場所、奥秩父山系の国師岳山頂を発信場所として実施した。国師岳は近くの大弛峠まで車が入り、機材の搬入が容易だという利点があった。

2004年10月2日、すでに分水嶺踏査を終了していた静岡支部の大石支部長、照内事務局長に山頂に来ていただき報告をすることにした。分水嶺踏査委員3名に山梨支部からの応援も得て、発信準備にあたった。

熊本では熊本支部の加藤功一氏らの応援を得て、東京から運びこんだ機械を会場の九州産交ホテル6階のロビーに設置した。ホテルの建っている向きが電波をキャッチする方向とずれているのでうまくいくかと心配したが、アンテナの入っているパソコンを窓の外に突き出して方向を探り、やっとキャッチすることが出来た。平山会長をはじめ大勢の方々にロビーのテレビセットの前に集まっていただき、国師岳山頂からの照内さんの踏査実施状況の報告を聞いた。音声はやや低いながらもなんとか聞き取れたが、肝心の映像の方は同じものが静止して長く写っており、かなりもどかしい思いがした。まだリアルタイムに周囲の状況を伝えることは困難だった。

携帯電話などでは到底届かない遠距離間で何とか状況を伝えるという試みは出来たが、分水嶺上を踏査するという困難な状況のもとでのこうした試みはいささか実施に無理があることがよく分かった。

このたびの試みの実施にあたっては、NTTドコモの皆さんが終始熱心にサポートしてくださり大変感謝している。

甲信地区

大弛峠～金峰山～信州峠～飯盛山～野辺山　約33km

信濃川水系――――富士川水系

歴史と地理的特徴のある山域

山梨支部の担当は奥秩父主脈の西部に当り、大弛峠からJR小海線最高点までの区間。北側には高原野菜で有名な長野県の川上村や南牧村があり、金峰山川、小川などが千曲川（信濃川）に注ぐ。南側には深い山間に温泉が点在し、谷を刻んだ荒川、本谷川、釜瀬川などが富士川につながっていく。

この区間の最高峰・金峰山（2,599m）は古来、分水嶺を挟んだ甲州と佐久里人の信仰の山であり、江戸時代後期の地誌「甲斐国志」によると、甲州側に9口、信州側1口の信仰の道が開かれていた。また何本かの峠道があり、山を越えての交流があった。時代をさかのぼれば、長野側に大深山遺跡、山梨側に御所前遺跡など数々の縄文時代の遺跡が分布し、古代から山と人の営みが行われてきた。

近代になっては、木暮理太郎と田部重治によって「森林と渓谷」の素晴らしさが紹介された。この山域に足を踏み入れること一千余日、原全教は奥秩父学ともいえる自然、民俗、歴史、山名、登山コースなどを正続編の「奥秩父」で集大成した。

山梨支部は、こうした歴史と地理的特徴を持つ山域を4つに分けて踏査した。順序として大弛峠から西へ進む行程で報告する。

静岡支部と交歓して

大弛峠―金峰山―大日岩―八丁平は2004年7月25日に行った。参加はサポートも含めて17人。この前日、大弛峠―甲武信ケ岳を踏査する静岡支部と懇親会・情報交換会を大弛小屋で開いた。両支部合わせ30人近くが参加し、山の歌を大合唱して気勢をあげた。25日は静岡支部が東へ、山梨支部は西に向かった。

大弛峠を25日早朝、9人で出発。金峰山では三角点東隣りの大岩（GPS観測値2,602m）と、金峰山信仰の蔵王権現に見立てた五丈岩（GPS値2,601m）に登った。岩上は平らで2畳ほどの広さがあり4、5カ所、自然にできた窪みがあり水がたまっていた。

西方に下って大日岩。ここも分水嶺上にあり岩上で測定（2,224m）した。雲行きが怪しかったが、基部に戻った瞬間、バリッ、バリッ、ドドーンと大音響。落雷した。最も怖いとされるカラ雷だった。思わず地面に伏せたものの、1分遅れていたら大変なことになっていた。間もなく土砂降りになった中を北に下り、目的地・八丁平に13時20分到着した。ここから豪雨の中を瑞牆山荘に下った。

難関を往く

担当区間の中で難関と見られたのが、登山道のない小川山から信州峠間だった。このため、この間を八丁平～小川山～萱ダワ（分水嶺上の鞍部）と萱ダワ～信州峠の2区に分け、2005年4月から6回にわたりアプローチ調査、シャクナゲ密生地のルート工作、テープ付けを行った。小川山へは西の萱ダワから、葉が落ちた10月実施が有利と判断した。

10月16日早朝、萱ダワから小川山へ向けてスタート（本隊6人、サポート2人）。長野県川上村の協力で高登谷湖先の林道ゲートを開けてもらい萱ダワまで車で入った。北東へ稜線（分水嶺）を忠実に登る。広葉樹や針葉樹に付けられたテープに助けられ1,915mピーク着。この間でマツタケをゲット！進むとシャクナゲの密生地、狭まった岩稜、2重山稜を越え、進路が真東になり、針葉樹の原生林を登って「松ネッコ」（2,110m）着。好天に恵まれ小川山方面を見通すことができた。

ここから南西に向きを変える。営林署の標識、踏み跡もある。長野側は伐採されて林道

もあるが、山梨側は針葉樹の海が広がっていて対照的だ。シャクナゲの藪を何回も突破して進む。稜線が東に向きを変えるあたりから傾斜は緩やかになり、前方の稜線上に高さ5m、幅5m、長さ30mほどの巨岩が見える。2万5千図に記載はない。ここを過ぎると急登となり、シャクナゲの藪を漕いで小川山山頂に出た。萱ダワから5時間半かかったが、ルート工作がなければ、こうはいかなかっただろう。山頂からは南へ、まるで舗装道路のように感じる登山道を下り、樹林の底の八丁平着。金峰山からのトレースとつながった。

萱ダワー信州峠間は6月13日に踏査した(本隊2人、サポート1人)。支部踏査の皮切りだが、距離は短く標高差も少ない、事前調査でテープも付けてある、付けた本人が歩くとあって、緊張感はなく楽勝気分で信州峠から入山した。ところが迷うはずのない場所で迷ったり、来た方向に戻ってしまって登り返したりして、普通なら3時間ほどの行程を2倍もかかって萱ダワに着いたのであった。

初冬の踏査はゴルフ場？

信州峠―横尾山―小海線最高点間は、中央部分がカヤトの密生地であるため、実施時期を初冬とした。事前調査で横尾山西方の北面(長野側)が筑波大の演習林で、区間ほぼ中央の鞍部(三沢のタル)直下まで管理道路のあることが分かり、筑波大現地事務所の許可を取り、そこまで車で入ることにした。また小海線最高点の南側はゴルフ場を歩くこと、ホテルが分水嶺上に建っていることも分かり、通過のお願いをした。こうした状況から、三沢のタルから入り東の信州峠、西に小海線最高点までの2パーティーに分れて実施した。

12月18日朝、演習林内の道路終点まで車で入った。東進が6人、西進が6人、サポート3人。5分ほどで三沢のタル。快晴で積雪もなし。ここから東進組は、膝までのカヤトと薄い踏み跡をたどって「槍」、4つほどのコブを越えて木賊のタルへと進む。40分で、

ゴルフ場のグリーンが分水嶺
(清里アーリーバードGC)

北へ派生した尾根の頭に当たる鞍骨(くらほね)と、分水嶺上の豆腐岩の分岐に出る。鞍骨をピストン。分岐を北東に折れ豆腐岩。ここから東南東に一旦下り、登り切って横尾山に着いた。ここからは立派な登山道となり、信州峠に下った。行程5時間半。

一方、西進組は三沢のタルから雑木の中、踏み跡を探しながら急登20分で最初のピーク・丸山に着いた。山梨側はカヤトと牧場の枯れた草原、長野側は雑木の林に変わり、この風景は飯盛山までずっと続いた。また山梨側は分水嶺に沿って有刺鉄線が延々と獅子岩付近まで続いていた。小さな登り下りを繰り返して正午に飯盛山の北にあるピークに着いた。足を延ばして飯盛山をピストン。ピークに戻って北西に向きを変え三角点のある八岳屋(平沢山)へ。北東面(長野側)にスキー場。北に突き出した尾根を下って獅子岩。西から北にかけてゴルフ場が広がっている。

分水嶺を忠実にたどって1番ホールを横切り、ロングホールを下った。ゴルフ場外の雑木の藪を下り切るとホテルの裏口。玄関に回ってロビーを往復した。すぐ目の前が小海線最高点。ついでに国道140号最高点を往復した。分担区間達成の記念写真は、笑顔があふれていた。行程5時間。

この夜は会員経営のロッジ山旅で踏査達成の宴を張り、支部の踏査を締めくくった。

(深沢　健三　記)

信濃支部

信濃地区

野辺山～赤岳～蓼科山～鉢伏山～霧訪山～権兵衛峠　約 128 km

信濃川水系――――富士川水系、天竜川水系

無事の完登を目指して

指定されたルート、細分化されたコースへの希望アンケート、日帰りは別として全てテントかビバークを基本とし、100 周年イベントや支部行事との折り合いを考慮して立案する。そして何より参加者の年齢を考えると、とにかく無事に完登のみである。

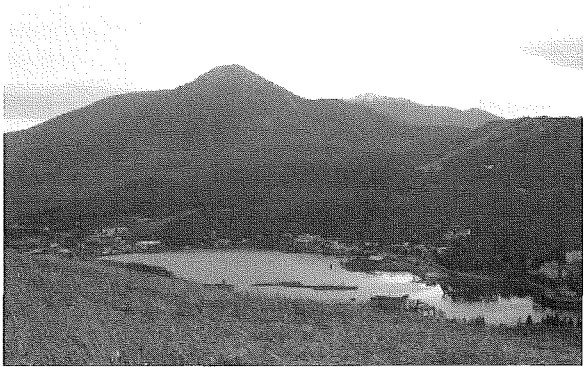
自分ではかなり呑気で楽天家だと思っているが、分水嶺の計画を練り上げる頃から、ちょっと真剣にならざるを得なくなった。初期の段階とはちがい、厳しい条件が増えてくる。「分水嶺を忠実に」というのはどこまでか、許容範囲は？トラバースの縦走路はそのルートを外して道の無い尾根を歩くのか、およそとか、大体とか、適当とかは通用しない状況である。

担当区域は最高のコースかも

八ケ岳連峰はオーソドックスな登山ルート、蓼科から霧が峰、塩尻峠までは距離は長いがハイキングコース、塩尻峠から善知鳥峠、牛首峠までは藪の中、道はあったり無かったり。牛首から経が岳を経て権兵衛峠間は、積雪期以外は歩けない一級コースと、実にバラエティーに富んでいる。もしかすると日本列島中央分水嶺の全長およそ 5000 キロの中で最高のコースかもしれない。

県境踏破の頃から 40 年

今回の企画が提案された折、40 年前に信濃支部 20 周年事業として「県境一周 1000 キロ」を思い起こし、心の中で唸ってしまった。長野県の分水嶺はかなり長い。北は志賀高原の岩菅山あたりから、菅平、浅間山、八ヶ岳全山と霧が峰から鉢伏山、塩尻峠、日本列島のへそといわれている善知鳥峠から権兵衛峠、さらに木曽川をまたいで野麦峠、乗鞍岳、全長 300 から 400 キロになるかも。



蓼科山と白樺峠
大門峠から車山山頂への途中から

県境踏破の折に血潮を湧かしたつわもの共は 40 歳を加えて今は老人。果たして戦力が整うのか。あの時の大変さを思い出し、それらの人たちは首を横に振るかも知れない。そして金。心配は尽きることなく多い。マイナス面ばかりが頭をよぎり、えらい事になったというのが当初の実感である。

行き交う思い

分水嶺を持たない支部、同好会や委員会の参加を得て、我が支部の受け持ち区間は、八ヶ岳から塩尻峠経由で権兵衛峠までと判決が下ったのであったが、いうなれば無罪に近い。「この企画ご勘弁を」と狼煙を上げたので、それへの温情であったか。与えられた区域に刻苦勉励努力し、迷惑をかけてはならないと思ったものだった。

2004 年 7 月 6 日初日、歩き始めだというのにガンガンスピードをあげてスタスタ行くトップ、これでは後の者はたまらない。体の馴れを待って調子を上げるのが山登りの鉄則であり、常識の筈だが・・負け惜しみの愚痴。

「味噌汁と天気予報は当たったためしなし」の言い伝え通り、信用していなかった長期予報が今度はともに気になりだした。“今年は暖冬のはずだったのに”と愚痴を言ったところで大雪を止められる訳でもなく、又消えも

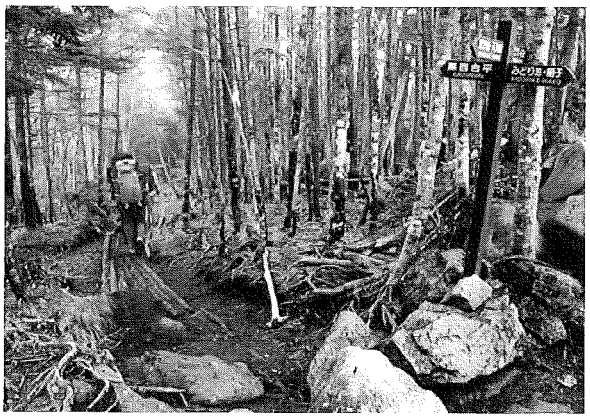
しない。今更のように豪雪地帯の人々の大変さが実感としてわかる様な気がする。北海道や東北の支部の進み具合は・・・。しんしんと凍みる冬の夜更けは頭が冴えると思い込んでいるくらいだから、暑いよりは好きである。「雪が降れば犬と子供が喜ぶ」通り、子供の頃から雪を活かした遊びを創り出して環境に適応する能力が自然に身についているので、雪山は好きだった。

しかし今度の踏査は通常の冬山登山とはちがう。道がなくて藪だらけ、夏では歩けない部分がかなりある。残雪期に決行した経ヶ岳～牛首峠の難所は、地元民も営林署も未知の区間。やせた岩稜と藪漕ぎ、雪ぴに注意しながらアップダウンの激しい雪稜を進んだ。覚悟してはいたものの大物コース、久しぶりに味わう充実（？）した苦行であった。

「まだ終わりませんか、大変ですね」100周年中央分水嶺踏査がスタートしてから折にふれて話題になる。遅れ気味の我々にとっては置いて行かれてしまいそうな不安と、あせりを感ぜずにはいられなかった。

目的を持って歩く

二つ山の頂上で長野県の全ての川の源流を突き止めているという二人に出会った。分水嶺を歩いている我々のことを感心していたが、この二人も大変な業である。年間150日と聞いて又感心。江戸時代、街道と呼ばれていた昔の道を歩き続けているという東京の若者に和田峠で話す機会があった。源流を突き止める人、百名山を登る人、旧街道を足で確かめる人、そして分水嶺を辿る者、各々その目的を持って突き進んでいる人は目の色が輝いて見える。



中山峠

皐月や松の盆栽は出来上がった美術品、芸術品である。年月を経て幹の太さ，根張りの見事さ、百年以上も歳月を愛培されてきた樹の品格は、どんなに栽培技術の優れた人が手掛けたとしても、五年や十年で創り出せるものではない。分水嶺が完成された時、踏査に汗した人は勿論、これに参画した全ての人の力の結晶として見事な芸術品となって欲しいと願っている。

登山の原点に

日本山岳会は「より高く難しく，未知の山を目指して」この登山の基本理念に忠実に、いち早く多くの会員が海外に足を運び、世界の高峰に足跡を残し、その輝かしい歴史と共に日本の山岳界のリーダー的存在として現在に至っている。エベレスト、マナスルなどの初登頂に刺激されるように、登山ブームに沸いたヒマラヤ初登攀争いの時代から、より巾広いフィールドでの登山活動が世界の登山界の風潮になり、その技術、方法も多様化し、自然に親しむ調和のとれたスタイルが台頭してきている。社会が近代化し、生活が安定すれば人間本来の姿に立ち戻りたいと願う。自然への回帰、憧憬として基本に帰りつく時代が来つつある。登山の原点に。この中央分水嶺5000キロがその原点に立ち帰った足跡であり、これに目覚めた価値ある1ページであったと確信している。

踏査距離(平面)　130km

担当区間の中、三峰山～和田峠～鷲ヶ峰は、フィナーレ山行として実施、別に記載がある。

フィナーレ踏査を除いて

踏査回数	17回	踏査日数	25日
参加者	46名	延べ参加者	116名

（中野　和郎　記）

フィナーレ踏査

三峰山～和田峠～鷲ヶ峰～八島湿原

分水嶺踏査委員会　北野、福山

JR 中央線の上諏訪駅に、上り下りの列車から、或いは乗用車から降り立った登山姿の面々、JAC 会員達の表情には、完遂近い歓びと安堵感が滲み出ていた。時は 2006 年 6 月 17 日、約 5000km に及ぶ日本列島中央分水嶺を線でつなぐ仕上げの日であった。

信濃支部メンバーをリーダーに

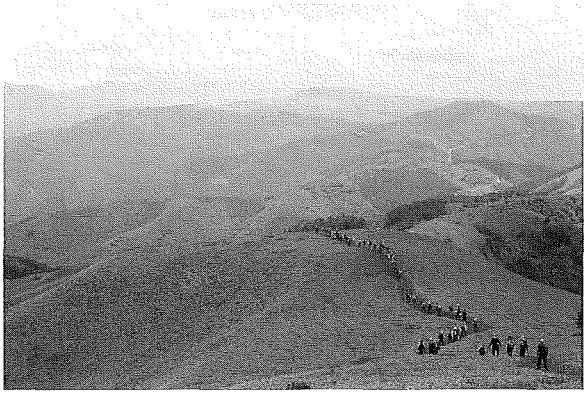
北海道、山梨、東海の各支部、首都圏の会員達は、信濃支部会員による万般の準備と案内のもとに、総勢 80 人、バスや車に分乗し、三峰山駐車場に到着。10 時 40 分から A ～ F 班に分かれて踏査を開始した。

梅雨の最中であったが、幸い薄日も射す日和に恵まれて、東に八ヶ岳連峰を望み、近くの蓼科山：諏訪富士をめでながら草原状の緩い尾根道を登り、三峰山 1887m に着いた。渡る風は心地よく、見おろす谷の新緑は美しく、山々は我々のフィナーレ山行を優しく迎えてくれた。

和田峠に向かう。草原は次第に笹に変わり、潅木もでてくる。コナシの白い可憐な花が目立ち、朱色の美しいレンゲツツジに気をとられながら、やや藪気味のピークを越えて下る。まもなく中山道旧和田峠に出た。

中山道の難所として名の通った旧峠の歴史を案内する立派な碑は、五街道の中で最も高く 1531m の、この大変な峠を越えて、黒耀石の運び出し、江戸時代の参勤交代など、繁く往来のあった跡を語っている。

旧峠から一度登り返し、踏み跡が少しある程度の歩き難い急坂を下って、ビーナスラインを横断、カラマツ林の中を急登、巨大な電波塔のある 1621m 峰に着く。前方に鷲ヶ峰 1798m が高く聳えている。樹林帯を登って着いた鷲ヶ峰山頂は曇、しかし四方見渡しのよいところ。方位盤の北側の茂みの陰に真新しい三角点をようやく見つけてから、ガレ状の岩の多い下りにかかった。最終班も八島湿原駐車場に揃い、15 時 45 分から、踏査完了の打上げ式が行なわれた。(踏査完了を見込んでの企画のため、この時点での踏査率は 99％強であった)



三峰山より和田峠へ　右前方が鷲ヶ峰

打上げの祝杯

爽やかな高原の気に包まれる中、信濃支部前支部長、中野和郎氏が分水嶺踏査の完了を宣言。続いて平林副会長から、「日本山岳会として非常に意義あること」との祝辞を受けた。そして田邊副会長の発声で缶ビールをもって高らかに乾杯！ 2004 年初から着手、会員千余名がつないだ 5000km。皆、達成感を深く深く味わったのであった。

フィナーレ踏査を終えて

東海・中部ブロック

木曽地区

権兵衛峠～茶臼山～鉢盛山～野麦峠　約 83 km

木曽川水系（一部天竜川）――信濃川水系

はじめは威勢良く

踏査を始めるに当たり目標を高く掲げた。ポイント登頂や過去の記録でお茶を濁さず、新たにトレースして全ルートを切れ目なく完全踏破すること。定められた期限より前に、先行き不透明な時点で踏査完了記念式典の日取りまで設定していたこと。結果的にはこのプレッシャーが功を奏したのかもしれない。

どんな場所か

本州の最も幅広いところのド真ん中を分水嶺は曲がりくねりながら過疎の村々を隔てている。ほんの一部の登山道以外、踏査中に出会う人は皆無、そこは野生の世界である。

森林限界を抜くのは茶臼山と行者岩の頂上だけ、他は深い樹林に覆われ、殆どが国有林であるために一般人には用のない場所だ。

だから地名、山名が極端に少ない。記録をとるにしても、×××m ピークと味気ないことになり当事者以外には分かりにくい。

人工林も混じってはいるが、この森林に埋めつくされた姿が日本の原風景だろう。そこへ分け入る気分はガキの頃の探検ごっこに似たスリルを味わい、獲物を求めて徘徊した古代人の DNA がまだ生きていることを実感した体験だった。

戦略はコツコツ方式

「取り付くしまもない」とは地図を広げて調べ始めた頃の印象にうってつけの言葉だ。稜線上のヤブは覚悟するが、そこへ辿り着く手掛りがみつからない、強行突破するにしても長時間かかりそうな人里離れた遠隔の地だ。ヘリコプターを飛ばして偵察してみたいとさえ思った。

どこから分水嶺に取り付くか、地形図を広げたり畳んだりの繰り返しで、偵察を始める前に紙は擦り切れてきた。

長距離を一気に縦走するより短区間を繋いで行く方が、要員確保や天候への対処からもよかろうと小刻み戦法をとった。しかし1区間を一日で済ませることができないケースが多く、小刻みを更に刻むことになった。効率は低下するが止むを得ない。

踏査の一こま

夏　手始めに唯一登山道のある木曽駒北方稜線をトレースした。当支部担当区間の最高標高点である行者岩から俯瞰すると、分水嶺の山並みは果てしなく霞の彼方まで続き、何処も深い森林に覆われて前途多難が予想される一方、やらねばならぬと決意を新たにさせられた。

秋　踏査の態勢が整い、出陣式ともいえる山行には取り付きやすそうな鳥居峠の北側を選んだ。途切れがちの踏跡はあるも、10 数年前のガイドブックにハイキングコースとして紹介されていた高遠山付近は完全な藪と化していた。木枯らしが吹いてハラハラと降りかかるは初雪か、とよく見ればカラマツの落葉だった。あたりは圧倒的にこの樹が多く山は黄一色である。

残雪期だけでは消化し切れないからヤブと分かっていても暑い時期が過ぎれば入山を繰り返し、一日に 2km、3km と距離を延ばしていった。思いがけずも刈払いされた稜線が少

背丈を越すヤブを漕ぐ（鉢盛山）

しでもあると宝くじに当たった気分になる。

冬　アプローチが難しくなる。稜線までの唯一の手段はスキー場リフトだ。鉢盛山の中腹まで運び上げられた一行はスキー、スノーシュー、ワカンと様々ないでたちで小鉢盛山を越え、鉢盛山を往復した。

春　藪山の稼ぎ時、残雪期には何度も入山した。梢越しに純白の御岳、乗鞍、木曽駒の展望を楽しみながらの登行はヤブ漕ぎや暑さのさなかに比べたら天国である。

楽なことばかりではない。'05年の3月は天候不順で遅くまで雪が降り続いた。締った固雪を期待して入った最後の数区間では、腰まで潜るラッセルに難渋し、稜線に到達するだけで持ち時間を殆ど消費してしまい、分水嶺部分を僅かしか進めないことも何度かあった。設定された期限が迫るなか、ここの担当者は粘り強く毎週入山してやり遂げた。

自然環境は豊か

地形は概ね穏やかで通過困難な岩場もなければ、崩壊地や大規模伐採の跡も見当たらない。分水嶺の両側の地形や植生に際立った相違はみられない。要するに山容は平凡で眺望は利かず、登山の対象としては魅力のない稜線が大部分である。一部分は、大棚入山付近のようにヤセ尾根に樹木が密生し巻くに巻けず、潜りぬけるのに難儀した箇所はあったがこれは例外的である。

チシマザサは到るところに猛威をふるっていて踏査の最大の障害であった。当地では概ね標高1300m以上がひどい。最低標高1200mだから、ヤブから逃れられる区間は僅かで、身体に触るものが何もない空間に行き逢えば、"この世の楽園"と言ってもオーバーではない程、ササにはうんざりさせられた。

人工物は少ない

目障りとなるほどの物はない。峠付近を除いて最も多いのは送電鉄塔の9基、これも高々275kVだから巨大な代物ではない。峠山山頂は電波銀座の観があり、無線中継局舎がひしめいている。

一箇所のスキー場が分水嶺稜線まで這い上がっているが大きな地形改変はなく、これ以外に開発の手は伸びていない

終わりは賑々しく

踏査完了を祝う記念式典には趣向を凝らした。掘割状になった鳥居峠の両側から支部の女性クライマー2名が、ザイルを伝って同時に峠へ降り立つ。全経路が繋がった記念の握手を交わすと、居並ぶ来賓、報道陣始め支部員など60名余から盛大な拍手が沸き起った。すかさずファンファーレに代るアルプホルンが重々しく鳴り響いて旧中山道を行き交うハイカーを驚かせ、式典は大いに盛り上がって終わった。

踏査完了記念式典（鳥居峠、'05.4.23）

すべてが終わって

海外の未踏峰を目指すのであれば華々しいが参加できる人は限られる。分水嶺踏査は誰でも何らかの貢献ができる大衆的企画であることがユニークであった。

普段、誰も省みない山稜に力を合せて取組んだことは、その成果よりも過程そのものが大きな収穫であった。

無事故で完結できたが反省点はある。自然環境などの観察が充分できなかったことである。藪漕ぎに、ラッセルに喘いでいるとき写真を撮ろうなどとは思いもよらず、メモを取るのさえ疎ましい。予め綿密に計画を練り、調査項目や報告書のシナリオを作っておかないと正確な記録はとれず、記憶を頼りの報告書となったことは否めない。

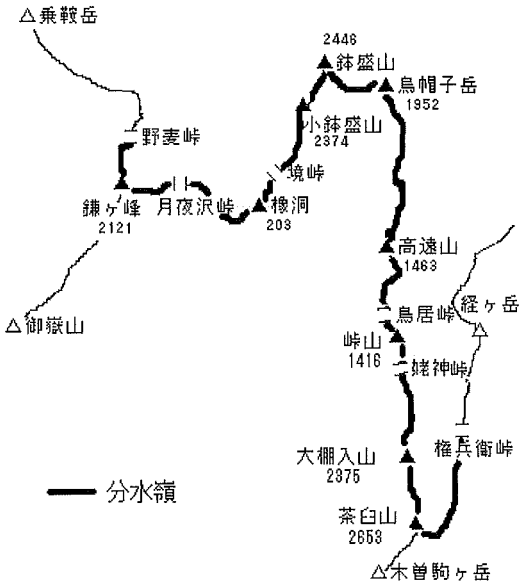
（堀　文昭　記）

余話

峠の今昔

東海支部　西山秀夫、堀　文昭

当支部内の中央分水界は、右図のように列島の中で最も込み入った稜線上にあって、峠にも様々な歴史が刻まれている。

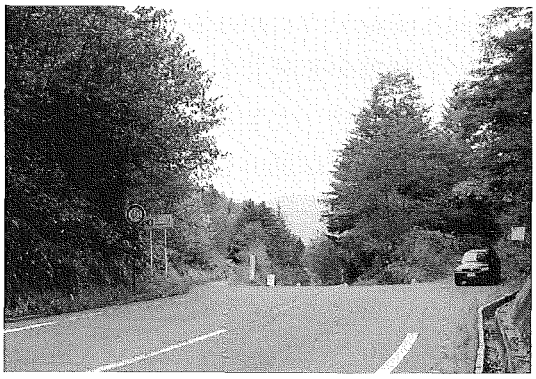


野麦峠：乗鞍岳と御岳山を結ぶ稜線上にある。乗鞍岳から下ってきた尾根の最初の最低鞍部ですぐ鎌ヶ峰につながる。飛騨から信州諏訪へ出稼ぎの女性たちが歩いて越えた。峠に石碑が建つ。山本茂実著『ああ野麦峠』は映画にもなり有名である。

いま、有名になったお陰で観光地化し、売店、宿泊施設、峠博物館、各種の記念碑が立ち並ぶ。県道 39 号線の他、旧街道が遊歩道として整備されている。

月夜沢峠：その昔、関所を通り抜けることが出来なかった人たちが、月明かりを頼りに越えたことが月夜沢峠の由来。今、悪路の村道が奈川村と開田村を結ぶ。相変わらず間道であり、通過車両は殆どない。

境峠：木祖村と奈川村の村境となっている境峠は、昔「板敷峠」「板橋峠」とも呼ばれていた。この辺一帯は湿地帯であったため、歩きにくい峠として有名で、そこで当時の人々はサワラの大木をきり、板にして道に敷きつめ、少しでも歩きやすいように工夫していた。そこから板を敷いた峠、板の橋の峠という意味で、この名がついたという。



秋の境峠

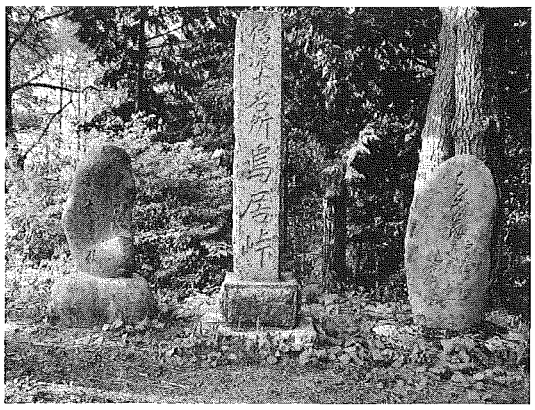
いま、峠の両側にはスキー場や別荘地が開発され、県道 26 号線は通年通行可能である。

鉢盛峠：水源導水の歴史

江戸時代の天保 10 年、味噌川の水を朝日村側の野俣沢に引くよう水路が完成した。明治 26 年に旧今井村と和解ができて廃止された。今は崩壊して一部に名残をとどめる。これは木曽川から信濃川への流域変更であった。（詳細は山行報告書参照）

今、この峠を越える長い林道は両端の朝日村と木祖村で遮断され、通り抜けることはできない。

鳥居峠：中央分水嶺を越える中山道の難所である。かつては奈良井峠又は薮原峠とも呼ばれた。明応年間（1492 ～ 1500 年）松本の小笠原氏との戦いで木曽義元はこの頂上に鳥居

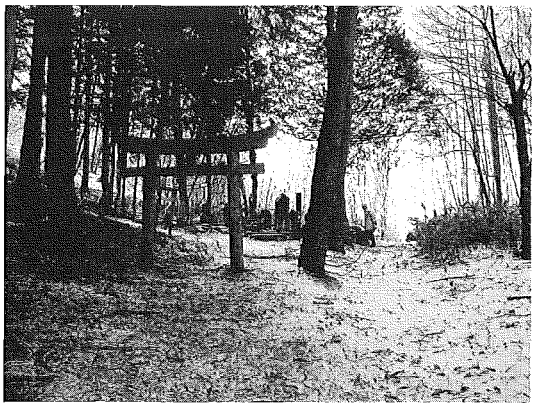


鳥居峠の句碑

を建て、御岳権現に戦勝を祈願したと言われ、以来、峠の名前の由来とされる。御岳の遥拝所。御岳の遥拝所は梓川村の天狗岩、朝日村、塩尻市、楢川村の界のからたきの峰など各地にある。菊池寛『恩讐の彼方』の舞台。

いま、国道19号線とJR中央線はトンネルで峠の下を通過する。明治期の国道は林道として機能しており、旧中山道も整備されハイカーに人気がある。薮原側の丸山公園には芭蕉始め多くの句碑を集めた一画がある。

姥神峠：権兵衛街道の峠。羽淵と神谷を結ぶ。御岳の遥拝所がある。峠の東、羽淵の里は全戸御岳教を信仰しているといわれる。権兵衛峠を開削した古畑権兵衛の末裔は峠の西、神谷に住む。最近、国道361号線のトンネルが峠の下を抜けた。細々とした峠越えの山道に人影はない。



姥神峠

権兵衛峠：かつては鍋掛峠といわれた難所であったが日義村神谷に住む古畑権兵衛が馬も通過できる道に切り開いたといわれる。その名前をとって権兵衛峠といわれるようになったのは元禄9年（1696年）であった。

水源導水の歴史：江戸時代、奈良井川源流の白川の水を、峠を越えて伊那へ引く歴史があった。今ではトンネルを穿って通水している。今も生きている導水路である。峠には説明板がある。（山行報告書参照）

木曽は米の生育に適した土地が少なく産米が少なかったため、古くから伊那谷の上伊那地方から米を木曽地方に運んでいた。特に元禄9年(1696)伊那谷と木曽谷に横たわる中央アルプスの権兵衛峠を越える道が開削されてからは一段と人馬の往来が盛んになった。幕末皇女和宮の降臨の際、中山道の道普請が行われたが、これらの使役に伊那谷からこの道を使って多数の人足がかり出された歴史もある。

いま、車道の峠と、300m隔てて旧街道の峠がある。踏査はこの間が空白にならないよう配慮した。車道の峠には駐車場、トイレが設備されている。旧峠には古畑権兵衛の碑やら記念碑などが立ち並び、公園的に整備されている。

現在、国道361号線のトンネル工事が進行中であり、うねうねと長い峠越え道路は使命を終えようとしている。

権兵衛峠の分水嶺碑

余話

分水嶺の自然環境、植生について

東海支部　堀江召浩

はじめに

長野県は南北 212km、東西 120km にもわたり、本州でも最も幅広い中央部を占めている。なかでも当支部の分担地域は、木曽川水系（一部は天竜川）と信濃川水系の接するところ、地形はそばたつ山岳とそれらの大山脈に隔てられて、狭く深く入り込む河川渓谷や、盆地などを形成する複雑多岐な稜線である。暖温帯から冷温帯にかけては、古くから人為生活圏と重なって来たために、自然植生の大半は消滅して代償植生と化し、自然植生は限られたところに僅かに残存している。現地を見た目で自然環境の推移をまとめてみる。

気　候

自然環境、植生に大きな影響を与えるのは気候である。当地域は日本海側気候と太平洋側気候両方の影響を受けている。ほとんど同一の気候条件であるが、あえて分類すると権兵衛峠から鳥居峠までの一部地域は太平洋側気候の影響を受ける。従って冬季の積雪量は鳥居峠から野麦峠までに比べて少ない。標高が高まるにつれて気温が低下し、複雑な地形によって局地差のある山岳地特有の気候となるが（山岳気候）、分水嶺は森林限界以下であるから、高山気候までには至っていない。

年平均気温（標高 1500m 地点）　8℃～10℃
月平均（同上）　1月：－6℃，8月：18℃
年間降水量　2000mm
降雪の深さ（年平均，同上）100cm～150cm
（これらの数値はエリア内分水嶺地点の平均推定、厳密には 77km 地点全て差異あり）

生物季節

豊かな自然に囲まれた地域では、周囲の山や木々の色変わりによって農作業を進め、生活の目安にして暮らしてきた。虫や鳥の動きの違いで季節の移りを察知した。四季により鮮やかに変身する夏緑（落葉）樹林帯に住み、高い山岳を間近に見上げて過ごす信州の人びとこそ、自然の変化を敏感に感じ取り、自然と一体となって生活している。愛知県の都市生活ではもはや感じることのできない、生物季節が活きているうらやましい地域である。

植　生

地史的、地形的あるいは人為的な影響下によって拡がる植生区分は、微妙な気候の差異もあり複雑である。大部分が冷温帯であり、夏緑（落葉）広葉樹林からなるブナクラス域の植生が広く占めている。標高が増すにつれ、亜寒帯林である亜高山帯樹林のコケモモートウヒクラス域となり木曽山脈の標高 2500m 以上では各種の高山植生域となっている。

【夏緑広葉樹林帯（ブナクラス域）】

標高 200m から 1600m ～ 1800m までの広い範囲が低山帯（山地帯）で、下部低山帯では冷温帯の夏緑広葉樹を主とするブナクラス域に含まれるが、人為文化圏と完全に重複し、それらの大半は代償植生域と化し、めぼしい自然林は見当らない。カラマツやスギの人工林、クヌギ、カシワ等を混生したアカマツ林などが優占する二次林が多い。

標高 600m ～ 800m を超すと上部低山帯のササーブナオーダー域のブナ、ミズナラ、シナノキ、ウリハダカエデ、ハウチハカエデ、ヨグソミネバリ、コシアブラ、オオカメノキとなる。飛騨山脈や戸隠山周辺、上信越県境付近の多雪地帯では、よく発達して残っているが、当地域の分水嶺では断片的にしか見ら

れない。標高2000mに達するカラマツの人工林があり、さらに植林されようとしている。ところどころ伐採後放置された地には、代表的な先駆種、ダケカンバが群落をつくる。

【亜高山針葉樹林帯(コケモモ－トウヒ綱域)】

ブナクラス域の上限から標高2500mにかけて針葉樹林が広く存在するが、これも伐採されてカラマツ、ヒノキ等の人工林になっているところがある。本来はオオシラビソ、シラビソ、トウヒ、コメツガ、ヒメマツハダ、ヒメバラモミなどの針葉樹を多数含み、本州の代表的な亜高山帯針葉樹林を形成していたに違いない。味噌川（木曽川上流）流域は水源涵養林（国有林）となっていて沢筋では、ミヤマハンノキなどの低木群落、ハルニレ、ハンノキ、ドロノキ等ヤナギ類が河辺湿生林として見受けられた。

すばらしい鉢盛山の自然

自然植生の乏しいなか、当地域内の高峰鉢盛山（2446m）には自然植生が残されていた。岳沢登山口から続く樹齢200～300年の昼なお暗い原生林はモミ、ツガ、シラビソの針葉樹にダケカンバ、ナナカマド、ベニサラサドウダンなど混生し、春の芽吹き、秋の紅葉はすばらしい。展望台付近は原生林の伐り境を中心にゴゼンタチバナ、ツルリンドウを足元に見、村界尾根（2160m）に出るとオサバグサ、ミツバオーレン、小一葉オーレンなど可憐な草花がシラビソ、トウヒ、ダケカンバの樹下をにぎわせる。「権現の庭」（2400m）の高層湿原にはワタスゲ、エゾリンドウ、シラタマノキ、アオノツガザクラなど貴重な植物も数多い。山頂にはコケモモ、コイワカガミ、テガタチドリ、ミヤマリンドウ、ウルップ草など高・亜高山の花も咲き乱れている。

この山は以前、鎖川流域に生活する44ヶ村の入会山であった。薪炭、刈敷、屋根板材など山の恩恵を受けたのみならず、古くから信仰の山として崇められた。特に雨乞いの祈願の名残りとして木曽村、朝日村、波田町の古い祠が3体今も安置されている。

チシマザサ（ネマガリダケ）の猛烈な繁殖

これが分水嶺踏査の最大の難敵であった。キタゴヨウ、シラビソ、コメツガ、ヒノキの古木をとりまくように密生し、それらの稚樹は林床には見られない。このまま放置すれば一帯がササ山になってしまう危機感を覚える。文献によれば分布はサハリンから北海道、東北裏日本各県で標高700m以上の多雪地方に多く、積雪50cm以上で優占する。（地下茎の深さが浅いので無雪地では低温害を受けやすいが、平均最深積雪50cm線で積雪の保温効果を受け生育可能）地下茎の芽子数に比してササとなる割合は数％に過ぎないが、二年目から桿の上部で枝を分岐するので株立ち状になる。（このため密生地では胸高位置でより立て込み歩行に抵抗が強い）

いずれにしてもササは我が国林業の大きな障害物になっている。ササの生える場所と生えない場所にどのような立地的、土壌的な違いがあるか、植物学の世界でもほとんど判っていないらしい。ササの生地は火山灰土におおわれた個所で、火山灰が洗い流された地域にはササの群生はないともいわれているが。

ササは数十年から百年に一度くらい、大面積で開花、結実し、その後一斉に枯死するという、特殊な生活史を持つものと言われている。ササが繁茂するブナ林は、ササの枯れたところでは、ブナの種子は生き残ることが出来るし、ササの回復する間にブナの実生が育っていく…。このようにしてブナの世代交代がなされてきた学説が一般的のようだが、地球温暖化が進む今、永い時間軸で同じ現象が続いていくのだろうか。6月に柔らかい美味なタケノコが採れるとか、それが熊の冬眠明けの主食になるなどと云っておれない。森林破壊の元凶になるのではと心配せざるを得ない状態である。

飛騨地区

野麦峠～乗鞍岳～牛首山～美女峠～宮峠　約 50 km

信濃川、神通川水系――――木曽川水系

2003 年 11 月 16 日調査を始め、12 月に 1 度調査。2004 年に入り、2 月 28 日美女峠～宮峠間の試踏、見座部落から美女峠は工事のため除雪されていたので峠近くまで車を入れた。しかし予定地点（1050m）に達するのにコースを間違えたり、GPS に見離されたりで時間切れとなり次回の完踏を期した。

美女峠～宮峠（3 月 8 日～ 9 日）
前回時間切れを考え近くに宿を取り早朝に出発する。カンジキを付け GPS を頼りにポイントごとにサポートと連絡を取りながら宮峠に着く。なんとかなって安心した。

美女峠～日影平山（3 月 26 日～ 28 日）
26 日は中間エスケープルートの調査をする。27 日は宮峠近くに宿を取り翌朝 5 時 30 分出発、晴天で－4°C、前回 1m もあった雪が峠にはない。クラフト状の雪面はゴム長が快適だ。杉林の中は GPS が思うように作動せず時間をロス。下と連絡を取りながら道路出会いに着いてサポートと会い朝食。この後一部道路を通ったりし、1118m の三角点を確認、1134m 点では地図にない四等三角点があった。小さな尾根を間違え除雪された林道に出て再度登り直す。下降口を探しながら慎重に急な下りをおりる。岩井谷道路に出るまでの 1 時間余りは藪との戦いで大変だった。

日影平山～飛騨高山スキー場最上部　稜線～美女峠中間点（4 月 5 日～ 6 日）
岩井村にて宿を取り早朝スキー場へ。カンジキを付けて登る。稜線に出ると朝日の差し込むクラストした松林から、西に穂高、笠、目の前に乗鞍、御嶽、はるか南に白山が白く輝き素晴らしい。快適なカラ松林。積雪 1m の尾根は牛首山（1408m）に続く。雪の中、三角点を確認。牛首山を下ると林道に出た。この道は稜線上に付けられ、尾根横断点までこれを利用する。1200m からはカラ松林に変わり、雪も少なく、藪の中、顔をたたきつけられる。1110m の下りは岩場となり、カンジキをはずす。命からがら林道コルに着く。ここで昼食。これまでの調査で 1315m のアップダウンは最高に強く、前回に付けておいたペナントを見つけた。

乗鞍岳剣ヶ峰～千町ヶ原～丸黒山～枯松平山～日影平山（9 月 18 日～ 19 日）
前回より 5ヶ月振りの調査。今日は天候が悪い。平湯で車を置き、バスで畳平 2701m に着くが、外は相変わらずの悪天候。案内所で情報収集。ガスの中 14 時に肩の小屋に着く。朝 6 時、風強く視界も悪い中、雨具を付けて出発。雪がまじりはじめた稜線は更に風が強い。飛ばされそうになる視界は 10m ぐらい。これでは踏査は無理。剣ヶ峰で三角点を確認し、肩の小屋に引き返して朝食。バスが運休したと言う。とにかく畳平で待つことにした。1 時間ぐらいでバスが運行を始めた。平湯に戻り日影峠へ行く。先程までの天候が嘘のように晴れてきた。日影平山まで行き、三角点確認。次週に再踏査を決める。今回の参加者が 10 名と多かったのに残念であった。

前回悪天候で中止した剣ヶ峰～日影峠の再踏査（9 月 25 日～ 26 日）
肩の小屋には宿泊客が少なくとても静かだ。朝 5 時 30 分小屋を出発。稜線上はやはり風が強い。前回三角点を確認した剣ヶ峰をパスし、登山道を外れ、大日岳奥ノ院を通り、南側尾根を下り夏道に出る。登山道の脇には可愛い石地蔵が千町ヶ原まで数多く見られた。シャクナゲ平の阿多野平郷への分岐点で 1 人の男性に会った。ガスが晴れ、避難小屋が見えてきた。まだ新しく立派なログハウスである。あるはずの三角点の発見に手間取り、笹

藪の中でようやく見つけ、やれやれ。千町ヶ原はまるで箱庭を思わせる様な美しい湿原帯、夏には多くの花々が見られるのではないか。樹林帯に入ると大木が根っこごと倒れている。急斜面を登り切ると丸黒山の頂であった。ここにサポート隊の一人が差し入れを持って2時間も待っていてくれた。三角点を確認し、日影峠で待つサポート隊の所へ下った。ここでも冷たいビールとつまみで迎えてくれ、感謝。今年の最後の踏査を無事終えて一安心した。

乗鞍岳～野麦峠の下調べと情報収集（2005年4月8日～9日）

最終下山予定地の温泉スキー場の休暇村にて情報収集後、奈川村役場経由で野麦峠の下見をする。奈川村役場でのアドバイスは、

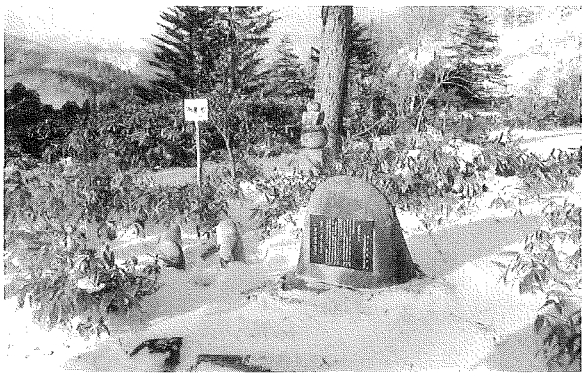
1. この間の分水嶺は、野麦峠から剣ヶ峰を登るとよい。
2. 今年は雪が少ないから出来るだけ早く実行した方がよい。
3. 野麦峠までのアプローチは4月15日に除雪を開始し、20日頃には特別に入れるように協力したい。

対応していただいた課長さんも県境踏査経験があり、こちらのことを理解してもらえた。

野麦峠～戸蔵～高天原～剣ヶ峰

（4月22日～24日）

昼過ぎ出発。奈川村役場の観光課長さんと連絡を取り、除雪してあることを確認し、渋沢温泉で宿を取り、明日に備える。翌朝5時30分宿出発。風が強く、路面は薄氷がはっている。坂道で止まれば前進不可能になると思い、そろそろと野麦峠まで登る。6時10分、体感温度は－10°Cほどではないか。登山準備の後、一等水準点を確認。サポート隊と別れ、峰の茶屋の前を通り分水嶺入り口の笹藪に入る。30分ほどで、ツガの林になった。積雪1.5m位、GPSでNEを確認するが三角点は発見出来ない。戸蔵を過ぎ、剣ヶ峰を左に見ながら進む。樹林帯の中は不安に思う。ここ



野麦峠の一等水準点

はGPSに頼るより仕方がない。やがて尾根は左に大きく曲がり2066mの三角点に着くが、ここでも発見できない。（12：00～12：45）このころより曇り空から小雪になり視界が悪くなる。風当たりの少ない樹林帯でテントを張ることにする。2163m地点だ。

朝起きると快晴。外はバリバリ。6時45分出発。樹林帯も抜け、2500m地点。高天原への急登が続く。左手に美しい御嶽山が見えてきた。2550m。トップを交代しながら2700m。ここで10時30分になる。高天原2829mに11時30分着。ここに三角点があると思い1時間かけ探すが見当たらない。ここには三角点がないことが分かった。高天原のコルから剣ヶ峰へ。2850mからの急登は雪も多く、新雪が50cmもある。雪崩を気にしながら登る。大日岳の沢で2人のスキーヤーが登ってくる。峰本宮は氷につつまれ、鳥居が半分雪の中にある。一等三角点で無事に踏査出来たことを互いに喜び握手を交わした。サポート隊の3人と連絡を取りながらアイゼンを付けて下る。途中でサポート隊の迎えの一人に会い、三本滝ヒュッテ前でサポート隊がビールとつまみをもって迎えてくれた。これで踏査が全て終わった。17時00分であった。全踏査を終えて今思う。やっと終わって一安心とさみしさが感じられるのは、無事完踏出来たからなのか。サポート隊として動いてもらった会員、踏査に参加された会員に感謝、心よりご苦労様でしたと言いたい。

（木戸　繁良　記）

飛騨地区

宮峠～位山～川上岳～大日岳～檜峠　約79km

神通川、庄川、九頭竜川水系――――木曾川、長良川水系

上々の滑り出し

当初我々の担当となっていた野麦峠～乗鞍岳～宮峠までの区間は、富山支部にお願いすることになり、負担が減ってホッとしたというのが正直な気持ちであった。

早速に委員会を立ち上げ、具体的な区間割りや実施時期の検討に入った。全延長の内、登山道のあるのは約3分の1にあたる26km程度。残りは登山対象とはなっておらず、登山道の情報はない。それらの区間は主として残雪期に入るように計画したが、それだけでは無理で藪の薄い季節にも入る必要があるのではないか、という意見が出てきた。

その意見を取り入れ、早速にその年の11月、第1回の踏査をあまり登山道の情報のない見当山付近の区間で実施した。ところが、分水嶺は村境でありかつ旧牧場境なので、鉄条網の跡と踏み分け道が続いていた。当初予定の区間は午前中に終わり、その先を行く。後半は別荘地の判りにくいところや笹藪もあったが、きちんと分水嶺をたどり、予定の倍近い距離を稼ぐことが出来た。この第1回目の踏査の成功は大きな自信となった。

担当区間の核心部は烏帽子岳と鷲ヶ岳を含み、日本海側の庄川源流が太平洋側に大きく入り込んでいる。標高は1600mを超し登山道は皆無。この核心部を2004年3月の残雪期に2回に分け踏査した。2回とも快晴に恵まれ、すばらしい稜線漫歩であった。3回の踏査で、全区間踏査の完遂を確信出来た。

春うららの懇親山行

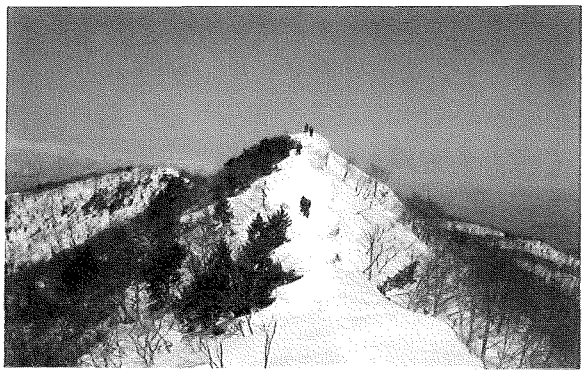
2004年の定時総会の翌日の春期懇親山行には分水嶺踏査を組み入れた。区間は位山から苅安峠で、一般登山道のある一番平易なルートである。総会に出席いただいた平林副会長も参加され、会友や一般参加も含め40数名で賑やかに分水嶺を歩いた。この日も快晴で白山や北アルプスは白銀に輝いていた。

夏の藪こぎとGPS

例年、夏期山行として北アルプス等を縦走していたが、この年は山中1泊での分水嶺踏査に当てた。区間は位山からパラソル峠まで。位山から川上岳を越えて1227m峠までは、距離は長いがいい登山道。それを1日かけて歩き、1227m峠付近でテント泊。支部の行事でのテント泊は初めてで、夜は非常に楽しい酒盛りとなった。ところが翌日はものすごい藪の中での悪戦苦闘。パラソル峠までの2.5kmになんと5時間。途中に沼田洞という三角点があるが、付近は何の目標もない平坦地で、密生する灌木帯の中を右往左往。GPSのおかげでようやく三角点を探り当て、現在地の確認をするという状況だった。この先西ウレ峠の方へ延す計画だったが、パラソル峠で全員が精根尽き果ててしまっていた。

秋の交差縦走

毎年秋に実施している1泊での秋期懇親山行にも分水嶺踏査を組み込んだ。区間は蛭ヶ野高原から大日岳を越えて桧峠まで。これも距離は長いが登山道のある区間である。実は前日、台風が岐阜県付近を通過しており、その余波の風雨の中を石徹白の宿に集合する。



白尾分岐点から鷲ヶ岳への稜線

この程度の藪なら特に気にしない

翌日の台風一過の晴天を祈願して前夜祭。ところが、当日は朝から深い霧で、1日中その状態が続いていた。分水嶺踏査は常に片道切符なので、必ずサポート隊が必要になるが、この時は2隊に分けて交差縦走とした。この初めての試みは非常にうまくいき、山頂到着はほぼ同時、1隊が車を回送して他隊の到着点に着いたのもほぼ同時、という状況だった。

落葉敷く11月の収穫

夏の藪こぎで残したパラソル峠から西の区間を、いつ歩くかが問題。あの藪を考えると残雪期となるが、残雪期だと峠に到達しても、又同じコースを延々と戻らなければならない。そこで葉の落ちた11月にチャレンジしようということになった。パラソル峠から、前回苦労した沼田洞の方向とは逆の藪へ取り付く。しばらくは同様な藪だったが、村境を離れるピークからは切り開きがあった。これには一同大喜び、大変嬉しかった。竜ヶ峰牧場へ降りる分岐点の1223mピークにアレアレという間に到着。県道側へ下り途中の車止めまで歩く。この踏査は思わぬ収穫であった。

明くる残雪期

2005年の残雪期、これまた全く未知の区間である西ウレ峠から山中峠までを2回に分けて実施した。前年同様、めいほうスキー場のリフトを使って1500m地点まで行き、前年の逆方向の北へ向かう。30cmほどの新雪のためワッパが沈み苦労しながらピークを越えて進む。スノーモービルが縦横に走り回っている大雪原の横を行く。西ヶ洞のピークで三角点を探すが1mを超す雪のためあきらめて、サポート隊の待つ部落まで下った。次回は逆に西ウレ峠から西ヶ洞に向かう。雪の状態が良く、ほとんどツボ足で歩く。西ヶ洞の頂上では残雪も50cm程度、無事三角点を探し出すことが出来た。

打上げ山行

2005年度に入り、残す区間は竜ヶ峰の牧場付近と、宮峠から苅安峠の間だけとなった。宮、苅安間は最後の打ち上げに取っておき、竜ヶ峰牧場付近をまず終えるように計画する。予定した日はあいにくの天気。雨具をつけて強行したが、昼に牧場の小屋で食事中に本降りとなり、その先わずか2kmを残して中止。その2kmを実施する日程の調整が難しく、やはり天気の芳しくない日に決行し、雨の中最後の藪こぎをする。結局、1227m峠から西ウレ峠の間は、当初2回と見ていたのが4回かかってしまい、この区間だけが計画の倍の日数を要した。こういうところが、未知の分水嶺を行く魅力なのだろう。

そして最後の宮峠、苅安峠の間。出発前の苅安峠で、分水嶺踏査踏破記念の横断幕を掲げ記念写真を撮る。少々ルール違反だが宮峠には適当な場所がないし踏査の成功を確信しての事であった。そして20数名でわいわいと縦走。予想通り切り開きも少しあり順調に進行出来た。その夜、下呂温泉での打ち上げ会が大いに盛り上がったのはいうまでもない。

振り返って

計13回の踏査の参加者は58名、延べ207名。全部参加した3名を始め10回以上参加の会員が8名。この人達を中心に皆さんよく頑張ったと思う。おかげで会員の絆が一段と深くなったと思われ、この企画をされた日本山岳会に感謝したい。次なる目標を何にするか、会員の絆を如何につなぎ止めていくかを今後考えていきたい。　（堀　義博　記）

余話

お役人気質、今昔

岐阜支部　堀　義博

岐阜支部の担当区間の中にパラソル峠という場所がある。この名前の由来も興味のあるところだが、それは別の機会に譲るとして、この峠を県道が横切っている。数年前までは自由に通行出来たが、いつの間にか峠の前後14kmの間が通行止めとなってしまった。その県道から分岐している林道も以前から通行止めである。

分水嶺踏査に当たり、どうしてもその県道及び林道をアプローチとして利用しなければならない。それで、県道を管理している岐阜県高山建設事務所、及び林道を管理している飛騨森林管理署に、それぞれ道路使用許可を申請した。理由として分水嶺踏査をあげ、その意義を述べ、全国一斉に展開しているのだから是非協力してほしいとお願いした。我々としては、まことに壮大な事業であり必ず理解してくれるはずだと確信していたが、返事はどちらも「ノー」。分水嶺踏査と道路管理と何の関係があるの？という次第である。お役人にとって、分水嶺踏査も単なる遊びであって、迷惑この上もないということであろうか。これにはまいりました。

その時に、あることを思い出した。当支部の創始者は高名な今西錦司博士で、博士が岐阜大の学長として岐阜におられた30年以上昔、支部の人達をつれて盛んに全国各地の山に登られた。乗り入れ規制のある所もかなりあったが、どんなに制限が厳しくても、博士の名前を出すと正に「黄門様の印籠」で、「どうぞどうぞ」となったということである。

幸い、当支部には岐阜大学助教授で、植生調査が専門の西條先生が会員として在籍している。それで、西條先生の植生調査に同行するということでお願いをしたら、すんなりと許可が下りた。正に、民には強く学には弱いお役人気質。昔も今も変わらないものだと、つくづく感心したり呆れたりした次第である。

このようにして許可を取り決行したが、ひどい藪のために予定の区間を踏査することが出来なかった。そのため、再度パラソル峠に乗り入れることが必要になり、今度は県道だけが対象だったが、又々岐阜県に申請を出した。前回の続きということなので、全然心配していなかったが、またまた「ノー」の返事が返ってきた。どうして？と聞けば、担当者が変わったということである。又一から説明して許可を取ったが、許可証は踏査が終わった後に郵送されてくるという始末であった。

ゲートはダイヤル鍵で、前回の通行で番号は知っている。地元の人たちも番号を知って自由に行き来しているようなので、強いて許可を取る必要もないのは事実である。けれど、それが我々の姿勢であるということで、手続きを踏んで乗り入れた。おかげで、爽やかな気持ちで分水嶺を歩き、山を後にすることが出来た。

濃密な笹藪の中から、見事にパラソル峠に到着

余話

町村合併と分水嶺

分水嶺踏査委員会　近藤善則

平成の大合併が始まる以前には、分水嶺を通過する市町村は全国で56箇所あった。合併につれて、当然この数にはかなりの増減があるものと思っていたが、意外にもあまり変わっていない。考えられる理由は、

① 分水嶺が接している同士の合併ならば、変わらないか一つ増える。

② 分水嶺が通過する同士ならば、1つ減る。

つまり合併によって増えた箇所と減った箇所が同じだったということなのか。こんな疑問をもって地図を眺めていた折、ある市の関係者から（自分達の市は合併により全国一長い分水嶺を持つ市になったと思われるが）という照会がきっかけで、調べてみると全国で分水嶺の一番長いところは約120kmある高山市という事が判った。照会のあった市ではなかったのである。高山市は今までの市部に9村を加えて総面積2180km^2、ほぼ東京都と同じ面積の巨大な市となった。人口十万人足らず。一人あたりの面積比では東京と1,000倍以上の差がある。分水嶺が通過しているのが、旧宮村、清見村で、計73km。これももちろん日本一。だからどうなんだ？と言われると返事に窮するのだが、とにかく分水嶺が通過している地域には興味深い話題が多いものである。

石徹白

岐阜支部と次の福井支部の担当区間の接続点は檜峠。ここに「石徹白」という所がある。「いとしろ」と読む。およそ地元に馴染んだ者にしか読めない地名。以前、大日岳とひるがの高原の分水嶺公園にある水中分水点を訪ねた時に立寄ったが、興味を引かれたのは、音の響きとこの地の歴史であった。

かつては白山への玄関口であった。現在「石徹白」は岐阜県郡上市、平成の合併前は岐阜県白鳥町。そして昭和33年までは福井県石徹白村で、昭和の合併での珍しい越県合併であった。さらに昔を辿ると縄文時代から暮らしの跡があり、特に平安時代、白山信仰の盛んな頃は、「上り千人、下り千人」といわれるほどのにぎわいであったという。唯一、檜峠越えが石徹白への道だった。

この地を流れる石徹白川は九頭竜川の支流なので日本海側である。分水嶺を越えなければ入れない地であった。険しい峠道を辿って、ようやく辿りつけばその先、眼下に穏やかに佇む集落。なにやら映画の一シーンのような光景だが、その時は単に名前に惹かれ、その感傷的なシーンには気も留まらず、峠から見た大日岳や毘沙門岳が殊の外まぶしく感じられたのを記憶している。

石徹白は柳田国男いわく、中世の社会組織が明治初期まで残っていた貴重な場所であると。イトシロとはアイヌ語で「大きな墓場」という意味だときき、悲しい歴史を秘めた地だったのだろうと思った。今でこそ峠は車で難なく越えられるが、村時代の生活は想像を絶するものであったろう。まさに秘境という言葉通りの地。市町村合併には様々なドラマが隠されている事が多いが、この石徹白もそんな分水嶺が通過する地域の一つである。郡上市は分水嶺の通過する高鷲村と白鳥町そして2町、3村が合併して高山市に次ぐ広さの市となった。分水嶺を越えてでも岐阜県側になったことは当然だったのかもしれない。

今、檜峠越えの旧道は地元の生徒らによって再整備が進められているとの知らせに、決してここは墓場などではないと確信した。

越前地区

檜峠～平家岳、温見峠～栃の木峠～大御影山　約196 km

九頭竜川、黒河川、北川、南川水系――――長良川、揖斐川、淀川水系

福井は越前と若狭の国とからなっている。私が住む越前は美濃との国境に山々が聳え立ち、畳々の重なりを見せて、はるか彼方に続いていく。それらの峰々から流れ出る水は、美濃側は長良川となって太平洋に、越前側は九頭龍川となり日本海に注がれていく。まさに国境の山々は中央分水嶺なのである。

また若狭は近江との国境に接し、栃の木峠から大御影山までが中央分水嶺であり、水は日本海と片や琵琶湖に流れて太平洋に入る。日本海まで15kmという近さのところもある。標高も最高峰でも950mしかない。

福井支部は4区域に分け、岐阜県桧峠から平家岳を井上彪会員、平家岳から温見峠までを分水嶺のない石川支部にお願いし、続いて温見峠から栃の木峠までを宮前庄三会員、栃の木峠から大御影山までを井上泰利会員の3名が企画担当し、それに全支部会員が参加、ほかに登山愛好者が協力して下さった。そして遂に2006年6月17～18日、12名の支部会員の参加を得て美濃平家岳に登り、巡視小屋で分水嶺踏破打ち上げを盛大に開催できた。

日本の分水嶺踏査について討議されていた支部長会議で、私が会長をしている福井山岳会の40周年記念事業として福井県の県境の完全踏破を取り上げ、1978年1月から1980年4月にかけて実施した事、それには古参会員から新入会員まで多くの会員が参加し、真の心の交流が得られて、「福井の県境を行く」という1冊の本を上梓できたことを紹介した。併せて現在の支部は私を含めて高齢者の集まりで、到底達成することは困難という思いから当企画に反対した覚えがある。しかし登山の魅力の一つである未知に挑む冒険を味わうことが、分水嶺踏査の意義と考えて支部会員の参加をお願いした。

いよいよ始動

2003年11月1～2日福井支部の芋煮会の山行として、今庄の高倉峠から権現山に登り分水嶺の踏査をした。

2004年3月29日と4月11,15,18日に井上彪会員が踏査を行なった。雪がない時は藪で大変ということだった。前途が思いやられた。そしてこの区間、美濃平家岳までは2006年4月1～3日にかけてテント泊で実施、前々日が雨で新雪が深さ30～50cmもあり、全員ワカンジキを履いて5人交互のラッセルとなり、老体は疲れる。徳平山分岐手前の稜線上にテントを張る。夜中雨がテントをたたき、眠れない。翌日は雨の中でテントを撤収。雨の中での出発。途中で分水嶺から外れGPSで修正しながら歩く。15時、白木峠の手前約500 mのピーク稜線に生えているヒノキの大木の下で、行動打ちきり、テントを張る。今回は荷物を軽くするため、アルファ米、副食なしの食事で味気ない。また雷雨と強い風がテントをたたく。3日目は気温は氷点下、強風と雨の中での出発となる。白木峠まで下り、滝波山へ登り返した。この山は岐阜県内にあり、その頂に立ったが、雪庇が張り出していた。分岐に戻り、高度を下げ荷暮川と野々小屋谷川との合流点の尾根から20分位のところ、あと美濃平家岳まで1.7kmの所で行動を打ち切る。18時、車の所に無事帰り着いた。大野市朝日（旧和泉村）のレストランで、三日ぶりにおいしい料理、ビールにありつき、そして温泉に入って極楽気分に浸った。

深い藪山は積雪期に歩くことが原則

2005年3月19日天気予報は晴れ、栃の木峠から上谷山までの計画をした。支部会員牧田氏らと福井を午前4時に出発。国道365号線は雪のため峠まで通行止めとのことで、木

の芽トンネルから敦賀に出て北陸道に乗り、木の本インターで降りて国道365号線で栃の木峠に向かう、敦賀の大和氏と峠で出会う。ここは滋賀県のスキー場になっていて、今年は雪が多くまだ営業をしていた。車は有料駐車場に。峠の「栃の木」は深い雪の中、大きな冬枯れの木が雄々しく空高く立っていた。

夜来の気温の低下で氷雪となり、靴をけり込んで急斜面を登る。尾根に出ると登りやすくなる。天気さえよければ踏破も夢ではない。太陽の日差しをうけたブナの木々が白い雪にその影を落として我々に癒しを与えてくれ、また岳友達は軽い足取りで、私を元気づけてくれた。上谷山から振り返ると栃の木峠がはるか彼方に望見出来た。加越の山々の上に白く輝く白山。分水嶺を離れ手倉尾根から広野の集落に無事下山。10時間を要したが今後の踏査に希望が持てた。事務局長の船田氏に迎えられ、栃の木峠まで送ってもらった。

柳ヶ瀬山での記念撮影

運命の無常

嶺南地区を担当いただいた井上泰利氏は、敦賀山の会会員も参加の踏破に2004年4月25日、京都支部との引継ぎ点、大御影山から取り掛かり、2005年2月22日、三方ヶ岳・行市山まで13回で踏破された。2005年6月11～12日の日本山岳会百周年の京岐北陸ブロック記念式典と越知山の記念山行に参加された。しかし何ということか、7月5日井上さん突然の死去の知らせを受ける、絶句！彼とは50年以上の山友達で、日本300名山の踏破やチベットの未踏峰に共に登った無二の親友であった。残念、悲痛の極みである。

2005年4月29日～5月1日、温見峠から能郷白山・杉ヶ谷山。昨年の福井豪雨で温見峠までは車で行けないと思っていたが、工事関係者と話をして通らせていただいた。温見峠に車を置き登山道沿いに能郷白山に向かう。白山神社奥の院を風除けにして幕営。風がうなり声をあげて吹いていた。翌朝見れば祠の扉の片方が壊れていた。30日はイソクラに向かうとき笹薮に入り大変な思いをした。杉ヶ谷山を経て尾根沿いの平地にテントを張る。能郷白山は大きく見えた。

打上げ山行

2006年5月1日～2日いよいよ分水嶺踏査山行も打ち上げの日となった。国道157号線の熊河峠に車を置き、飯盛山への尾根に取り付く。昨年来の大雪で、ワカンジキをはき、急斜面をよじ登る。標高1000mを超すとブナの原生林となる。この辺りから傾斜もゆるくなり、白い雪原にブナの実が散りばめられていて、豊作で熊もさぞかし気持ちよく冬眠しているのではないかと思われた。森本次男著「樹林の山旅」に書かれている、若丸山が青空に姿美しく見えてきた。分水嶺のピークに着き、前回の杉谷山まで、空身で往復する。若丸山の稜線は予想通りのやせ尾根で、笹やシャクナゲ、つる草の藪であったために難儀した。14時40分、雪のない頂上に着く。二等三角点があった。テント泊の装備で、77歳の老人である私が、この頂に立てたことには感慨無量、感謝の気持を深くした。

この頂きからは、冠越えと、兜のような冠山が見えた。冠峠から見るのとは違う山の容姿を眺め、見る場所による確認を改めて感じた。16時20分、平らな雪原で行動を打ち切りテントを張る。5人で、豪勢なすき焼きとビールで乾杯した。この日は、偶然ながら、私の77歳の誕生日の前夜祭ともなった。

（宮本　数男　記）

余話

福井の山々と水

福井支部　宮本数男

有難きかな、山からの流れ

日本山岳会の会報「山」に載せられていた中央分水嶺の踏査軌跡をみる時、福井県西部では日本海にかなり近い所を分水嶺が通っている事に気付かれるだろう。そこは若狭の国である。滋賀、京都の県境から流れ出る黒河川、耳川、北川、南川の流域であるが、近いところでは分水嶺から海まで 15km しかない。

東側の越前は、二の峰を頂点とする越美山地から湧く一滴一滴の水が九頭竜川に集約されて日本海に流入する嶺北地域である。

この福井の山々は落葉樹と針葉樹が育つ自然豊かな地域で、日本列島の大分水嶺。踏査では、藪に苦しめられもしたが、5 月には、福井県側斜面の素晴らしいブナ林の新緑に浸りながら歩きもした。ここから流れこむ美しい水が、日本海の魚を育ててくれている。

話が飛んで恐縮ながら、太平洋側、相模湾に縁どる小さい真鶴岬の沖の魚が美味しいのは、この岬のある真鶴半島に豊かな森があるからという。地球上のあらゆる生物は水によって生かされ、その養分をたっぷり含んだ美味しい水が森林によって提供されていることは言うまでもない。

冠山に登る

冠山は嶺北の中心の山であり、九頭竜川に合流する足羽川の源流域の山でもある。

「21 世紀へ残したい日本の自然百選」に選定され、「越山若水」と称される福井の地。心のよりどころである福井の山々と自然を満喫できる山岳会の分水嶺踏査には、支部会員一同“未踏の地を行く冒険気分”で参加したものであった。

冠山峠の記念碑

福井は 2004 年 7 月 18 日、この足羽川流域で 338mm の福井豪雨と呼ばれる雨が降り、福井市の中心部を流れる足羽川の堤防が壊れ大被害を蒙った。冠山にはその翌年 4 月 26 日に登った。国道 417 号線を冠峠に向かって車を走らせたが、田代を過ぎた所で通行止めのゲートがあり歩くことになる。福井県側の国道は足羽川の源流沿いに造成されているので、福井豪雨により路側が各所で崩落し危険だ。また山側からの雪崩により、崩落している箇所も多く見受けられた。更に、除雪されていないので、雪崩あとの氷雪は急斜面で、滑落したならば谷底まで落ちる危険、死亡事故につながってしまう。慎重に歩き、3 時間 20 分を要して冠山峠に、ようやく分水嶺線上にたどり着いた。峠には林道開通記念碑あり。右に「越前国池田町」、左に「美濃国徳山村」、「美濃国藤橋村」の石碑が並んでおり、関係者の喜びの表情が目に浮かぶようである。遭難慰霊碑の石碑も一基建っており、今回新しく一基建立されていた。タイトルには「揖斐川源流」とある。ここに太平洋に流れ行く源流の標識で分水界は示されている。

冠山への夏道は福井県池田町で整備したの

揖斐川源流の記念碑

で、分水嶺稜線をはずれ福井県側の冠平に回りこむように付けられている。部分的に積雪があり、忠実に分水嶺の尾根沿いで、藪漕ぎをしながら頂に立った。山頂の三等三角点は狭い頂であるから土台の周囲の土が流失し、石が露失し傾いていた。ここから冠越え(1262m)まで行き、帰りは急な氷雪の斜面を再び慎重に歩いて、11時間の山旅を終了した。

九頭竜川の源流を訪ねる

分水嶺踏査で福井支部の担当区間の東端に近く、福井と岐阜の県境に油坂峠(717m)がある。この峠付近が嶺北地方を流れる一級河川、九頭竜川の水源と言われている。そこを訪ねようと梅雨の晴れ間に車で福井市を出て、九頭竜川沿いに走った。大野市から美濃

九頭竜川の源流

街道に入ると、満々と水を湛える仏原ダム、鷲ダム、九頭竜ダムと続く。九頭竜湖は人造湖であるが、面積では青森の十和田湖にほぼ匹敵するもの。湖面には森の緑や山々が映えて美しく、自然の湖のようであった。この川は有史以来氾濫を繰り返したが、一方では治水・利水事業が8世紀頃から始められた記録があり、相次ぐ自然災害と人間との葛藤は記憶に新しい。

さて旧油坂トンネルの福井県側の林道に入り、下ると橋がある。左手の林道沿いの谷川が源流と思われた。しかし、ここで倒木に阻まれて通行不能、車を降りて沢登りに移る。落ちる滝はなく、滑滝であるから安心して進み、3時間で源流の水源に到達した。そのごく細い流れが、やがて広大な坂井市の河口に到る長い旅を思いやった。

文化の色濃い嶺南の山々

奈良・京の都にまつわる歴史が多い地域。乗鞍岳は文化の日に登った。ここでいうのは、日本列島中央分水嶺の中で最も高い飛騨の乗鞍岳(3026)ではない。標高は866mである。敦賀から国道161号線に入り国境の山中峠が分水嶺になる。山中峠には奈良時代、愛発の関が置かれ、越の国へ下る際、幾多の人が西近江を通った。西行は次の歌を残している。「あらちやま　さかしく下る谷もなく　かしきのみちをつくるしら雪」なお、この「あらちやま」とはこの乗鞍岳をさしている。

筆者は福井市の歴史まちづくりの事業で、柴田公園の整備に景観設計家としてかかわってから、柴田勝家に関心を持ち、滋賀県の小谷山や山本山に登る。分水嶺の行市山も戦国時代に柴田勝家の砦となった。玄蕃尾城(柳ヶ瀬山)は本陣でここから行市山山頂を経て、別所山、中谷山、大池山、林谷山と、これら各陣地は、尾根を人馬によって結んだ強力な陣地として構築された分水嶺の山々なのだ。

越前地区

平家岳肩(井岸山)～温見峠

約 26.6 km

九頭竜川水系――――長良川、揖斐川水系

ヤブに覆われた越美国境

当支部の近隣に中央分水嶺はない。担当区間は、福井支部から割譲された福井・岐阜県境（越美国境）、海抜 1000m から 1200m 前後の人里遠い山稜だった。そこは多種の潅木が混じるヤブに覆われ、日本海から吹付ける風雪が深い谷を刻み、山間の集落は、過疎と水害、ダム建設によって殆ど消滅していた。

分水嶺へは温見峠、平家岳登山道、屏風山登山道、蠅帽子峠道を辿る外、適当に林道から沢を遡行し、或いは尾根筋のヤブを掻き分ける。しかし、アクセス道路は冬期の途絶は勿論、常に崩落の危険に晒され、雨や落石などで頻繁に通行止めになる。岐阜に回るか、福井から入山するかの選択も悩ましい。現地へ行ってみるまで様子が分からないほど、世間から疎遠なところだった。

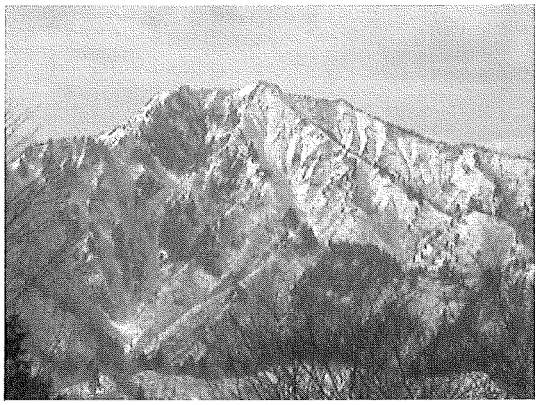
2004 年 4 月、支部総会において「10 の主要地点を踏査して全体の概況を把握し、残雪期に集中して全区間を走破する方針」を決定。早速 8 人が偵察に入る。ちょうど温見峠直下まで除雪が終ったところで幸運である。少しヤブではあったが、豊富な残雪の刈安山を越えて踏査できた。

5 月、蠅帽子嶺、左門岳肩（北峰）、五現川山、中高山肩（南峰）、越山（おやま）を、6 月、分岐（1106m 峰）、平家岳肩（井岸山）などの要衝を陥れた。急流の渡渉で流され、ウルシに被れ、ヤブに傷つき、山中に迷ったが、殆ど狙い通りのルートをトレースし、完全踏査に自信を得た。その間、「分水嶺踏査」の文字をシャツに刺繍して寄付する有志も現れ、支部内のムードは盛り上がっていた。

11 月、11 人が岐阜回りで屏風山へ入山。予備調査のとおり屏風谷を遡行し、急な尾根を喘ぎながら頂上へ。槍や穂高、御岳、白山などが眺望できた。河内谷に夕闇が迫る頃全員が下山を終え、熊出没の注意書を恐れず林道の傍らに幕営、祝宴で一年を締めた。

2005 年 3 月、5 人が車 2 台に分乗、凍結、新雪の国道を走る。油坂峠を越え、入山口の大須ダムまで約 5 時間、長い道のりであった。

残雪が覆う林道を遡り、沢の渡渉を繰り返し、急斜面に取付いた。西尾根から左門岳を経て同山肩（北峰）に到達。そこは積雪十分、木立の間合いも良く上々の幕営地。屏風山が眼前に峻立し、平家岳は遠い。雪のテーブルに持寄りの酒肴を並べ、山談議に興じた。



左門岳肩から望む屏風山

翌早朝、2 人は西の平家岳肩へ、3 人は東の屏風山へと出発した。2 人は、複雑に曲折する雪稜を地図で確認、要所に赤布を付け、大小いくつものコブを上下し、ブナ林を抜け、急登して目標の平家岳肩に到達。目前の平家岳は、全面に白銀を纏うピラミッドだった。

小雪が舞い出す。面倒なカンジキを脱ぎ、ツボ足で急ぎ往路を引返す。幕営地に着く頃から徐々に風雪が強まり、やがて夕闇が迫る。灯を掲げて叫んだが 3 人の気配はなかった。

その 3 人は出足から快調、いくつものピークを越え分岐を過ぎる。屏風山への急勾配の細尾根は雪塊が片寄っている。慎重に歩を進め山頂へ出て小休止。更に先へ進んで雪壁を

アップザイレン、2ピッチ下った。コルまではなお深く、時間も相当経過した。止む無く山頂へ戻り、帰路の途に着いた。

屏風山の危うい雪稜を下り一安心。分岐を過ぎ、谷から吹上げる風雪が強まる。湿雪がカンジキに重い。アップダウンの連続や細尾根に苦戦を強いられ、とうとう夜間の雪中行。横殴りの吹雪がヘッドランプの明かり、励まし合う声を掻き消した。

雪にまみれて幕営地へ到着。嵐がゆするテントに明りが入り、歓談が深夜に及んだ。

3日目、快晴で新雪が煌く朝。屏風山は墨絵のような山容を見せ、純白の白山は際立って神々しい。食後の珈琲は美味かった。

新雪を踏んで快適に東尾根をスイスイ。しかし、下るほど雪は軟弱、深みに足を落した。

4月、アプローチの残雪状況を事前調査した上、蠅帽子川中高谷出合から10人が入山。ヤブを分け中高山まで進み、尾根に道筋をつけ同山肩へ到達。小雪がちらほら風に舞う。サポート隊の4人は、踏査隊を見送り下山。

健脚・快速の2人は、刈安山を目指し西へ。標高1000m前後の稜線は、シャクナゲなどのヤブが覆う。枝尾根に惑わされ、アップダウンを繰返して蠅帽子嶺に到着。少し下って蠅帽子峠、赤い前掛けのお地蔵さんが鎮座している。アラレ降る夕暮れの峠道にツエルトを張る。幕末の旧暦12月この峠を越えた水戸天狗党。その苦難と憂国の情に思いを馳せ、寒い一夜を明かした。

天候が回復し、気持ち良い朝の出立。依然としてヤブは続く。標高1100m位から残雪があり、ピッチを上げ越山に到着。一旦コルに下り、上り返して順調に雪の稜線を刈安山まで進み、能郷白山、荒島岳、白山を眺望。

蠅帽子峠まで往路を戻り、ヤブ尾根から蠅帽子川へ降り、長い川筋を下った。

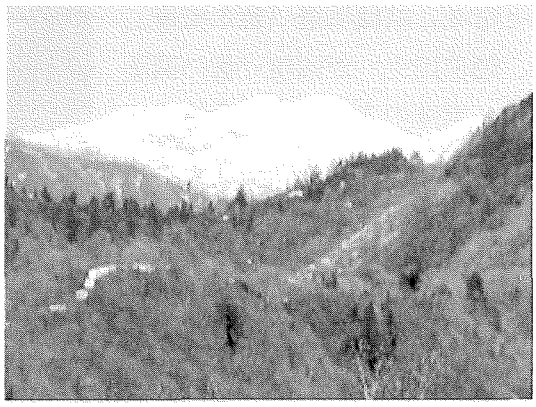
一方、4人は東へ向い、威勢良くヤブを分け2つ目のピーク「藤倉谷の頭」へ到着、幕営。

翌早暁、屏風山を目指し長いヤブの難コースに挑む。主稜線を外さないよう曲折を繰り返し、いくつものピーク、残雪のコル、笹ヤブの広い斜面などを越えて行く。シャクナゲの混じるヤブは密度を増し、ヤセ尾根上は老木のヒノキ群が往く手を阻んでいた。

苦闘7時間、屏風山直下、西の水谷東コルに辿り着く。日没前に幕営地に戻るため2人が引返し、残りの2人は急崖の木の根元、岩角などをホールドにして登攀、屏風山頂の南の台地に躍り出て前回の踏査線に繋いだ。

往路を慎重に戻り、残雪のコルで日没が迫る。危険なヤブの暗夜行を避けて早めのビバーク。食糧、ガスなどは乏しいが満たされた気分。落ち葉の臥所にツエルトを被った。

3日目、寒さに目覚め早々に撤収。激ヤブが続き空腹を我慢して耐える。幕営地では朝餉を用意し、気を揉んで待つ。やがて4人が揃い、周りに活気が満ちた。



中高山肩から見た白山

日が高くなっての出発は、初夏のように暑い。ザックが肩に食い込みどこまでもヤブが絡む。ようやく中高山肩へ到着して大休止。北の谷合いの彼方、白山の優美な姿は、4人を労うかのように微笑んで見えた。

分水嶺に別れを惜しみ中高山へ急登、最後のヤブ尾根を足取り重く下った。

当支部の分水嶺踏査は、19回実施（うち予備踏査16回）、参加者延べ81人、所要日数25日、歩行延べ155時間。距離に比べ費やした労力は多かっただろうか。

（大庭　保夫　記）

余話

天狗党が越えた蠅帽子峠（はえぼうしとうげ）

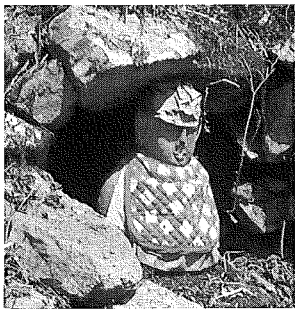
石川支部　大庭保夫

能郷白山（1617.3m）を最高峰とする越美山地は、多量の雨や雪が深い谷を刻み、人の往来を妨げている。中央分水嶺は、その山中を東西に延び、古来より越前と美濃に分ける国境（現福井・岐阜県境）だった。

国境を越え両国を結ぶ峠道の一本は、蠅帽子峠を通り下秋生（越前）と大河原（美濃）を繋ぎ、鎌倉期には重要な路線となっていた。

江戸期に整備が進み、北陸道と中山道を直近で結ぶ役割が増大し、長く本道的な位置を占めていたが、戦後、温見峠道（現国道157号）に主道の座を譲り衰退した。

織田信長軍の越前進攻や浄土真宗布教の経路となり、結城秀康（徳川家康二男、越前国主）が国境守備の関を設け、東海の人が白山を登拝するため、能郷白山に詣でた後、蠅帽子峠を越えて平泉寺（現福井県勝山市、白山三馬場の一つ、越前禅定道の起点）を目指したなどの歴史がある。



峠名は、夏蠅が多いので、帽子を被って通ったことに由来するという。

この峠の蠅は、人畜の生血を吸う「オロ」、「オロロ」ともいう「虻」のことである。今日なお山間に生息し、夏の盛りに群れとなり襲来する。帽子は、古くから広く成人男子が常用した「烏帽子」のことか。「ハエ」が「エボシ」に群がる峠の光景が目に浮かぶ。

一説は、越前鯖江、誠照寺の僧（法師）が峠の急坂を這い登ったので「這法師（はいぼうし）峠」という。お盆の頃、僧が巡回する道筋は、峻険な峠がいくつもあったので、地を這うような者にはその勤めが果せないが、例えそうだとしても、信仰心の厚い土地柄に相応しい峠名とは思えない。

平成16年5月、国道157号の冬期閉鎖の解除に合わせ、4人が温見峠を越え大河原に到着。直ちに蠅帽子峠へ向かった。

先ずは根尾西谷川左岸への渡渉。膝上の流れは意外に早く1人が流され、昔日の旅の苦難を偲ぶ。河原の奥に赤い模様の前掛けをしたお地蔵が佇み、ここが登り口。山道は、よく踏み込まれて往時の雰囲気が漂い、新緑のブナやミズナラの林が美しい。草木を払い崩壊箇所を補修すれば、昔が蘇りそうだった。

約2時間半で峠（967m）に到着。ここにもお地蔵が安置されていた。今は殆ど訪れる人もいないが、幾千の人が手を合わせたことか。

「峠」とは、道祖神（道路の悪霊を防いで行人を守護する神）に「手向け」をしたことが転じたというから、この辺りにその御座があったとしても不思議ではない。野の花を摘んで手向けると、お地蔵は伏せ目に応え、微笑むようだった。

やや古びた標識板に「這法師峠　水戸浪士の道　右下越前」と書かれ、失われる峠の歴史をとどめようとする美濃の人たちの思いが滲む。しかし、越前への下り道はヤブの中へ消え細っていた。

目標の蠅帽子嶺（1037.3m）の踏査を終えて峠に戻り、傍らの木陰に身を横たえ、往時に想いを馳せる。木々を揺らす風の音は、旅人の急ぎ足、牛馬の息遣い、そして浪士たちの呻き声のようにも聞こえた。

時代は幕末。安政の大獄や桜田門外の変、新撰組の寺田屋襲撃、等々の事件が天下を揺るがす。水戸藩の内乱に端を発した天狗党の

乱もその一つ、維新の「夜明け前」（島崎藤村の歴史小説）を象徴する事件だった。

天狗党は、武田耕雲斎以下水戸浪士たちが尊王攘夷の旗印を掲げる千人余の大軍団。常陸国、大子（現茨城県大子町）から京都を目指し、日光例幣使道［にっこうれいへいしどう：徳川家康の命日、東照宮に幣帛（へいはく）を奉納する朝廷の使者が毎年通った街道。221回続いた］、信濃路、中山道を西上。途中、下仁田峠（群馬県富岡市）で高崎藩、和田峠（長野県下諏訪町）で松本、高島両藩を破り、無敵の進軍だった。鵜沼宿（現岐阜県各務原市）まで進んで幕府方の大垣、彦根、桑名三藩に往く手を阻まれる。軍議の末、戦を避けて根尾谷へ針路を変える。越美国境を越え、北陸道から京都へ入るという困難な作戦だった。

断崖の中腹を細々と縫うクラミ渓谷の難所を過ぎ、大河原集落に入る。冬の蠅帽子峠道は途絶し、誰一人通う者はない。しかし、彼らには、朝廷に尊王攘夷の志を訴え、大義を果たす唯一の道だった。元治元年（1864年）旧暦12月4日夜、大砲、武器、弾薬とともにかすかな雪明りの中、長い隊列が峠を越えた。

越えて越前奥地の豪雪地帯の真只中（中島、木の本、池田、今庄など）、深く重い湿雪を分け進む。止めどなく降る雪に戦いようもなく、志士たちの心身は徐々に疲弊していった。

およそ850km、40日余の行軍の果て、ついに新保（現福井県敦賀市）において戦わずに幕府方の加賀藩に投降。同藩の対応は温情的だった。その恩義が今もなお金沢と水戸との人心を繋ぐ（「水府義勇塚」が志士を慰霊、金沢市にあり）。

幕府の過酷な処分は前代未聞、352名の斬首だった。後の明治7年、411人の志士を祀る松原神社（敦賀市）が建立され、同22年靖国神社に363柱が合祀されたという。

蠅帽子峠の北は越前大野藩、土井家4万石（現福井県大野市、土井家は常陸国下妻から入封）の領地だった。遡れば、信長軍の部将、金森長近が一向一揆を平定し大野盆地に築城、小京都といわれる碁盤の目の城下町を建設したのが始まり（後、長近は移封された飛騨高山で同様の街を整備）。城下南西の荒島岳（1523.5m）は、豊かなブナ林の裾野を広げていた。

当時の藩は、直営店（大野屋）を大坂など各地に開設・領内産品の販路を拡大、北前船（洋式帆船大野丸）を所有し蝦夷地往来、藩校明倫館の創立、伊藤慎蔵（緒方洪庵門下、適塾の塾頭）の招聘と蘭学の振興などでその名は高かった。

天狗党の峠越えは、藩を震撼させた。戦って勝てる相手ではないが、譜代としての立場もある。幕命に従って進路を妨害するため、峠下の道筋にある五つの集落を焼き払った。

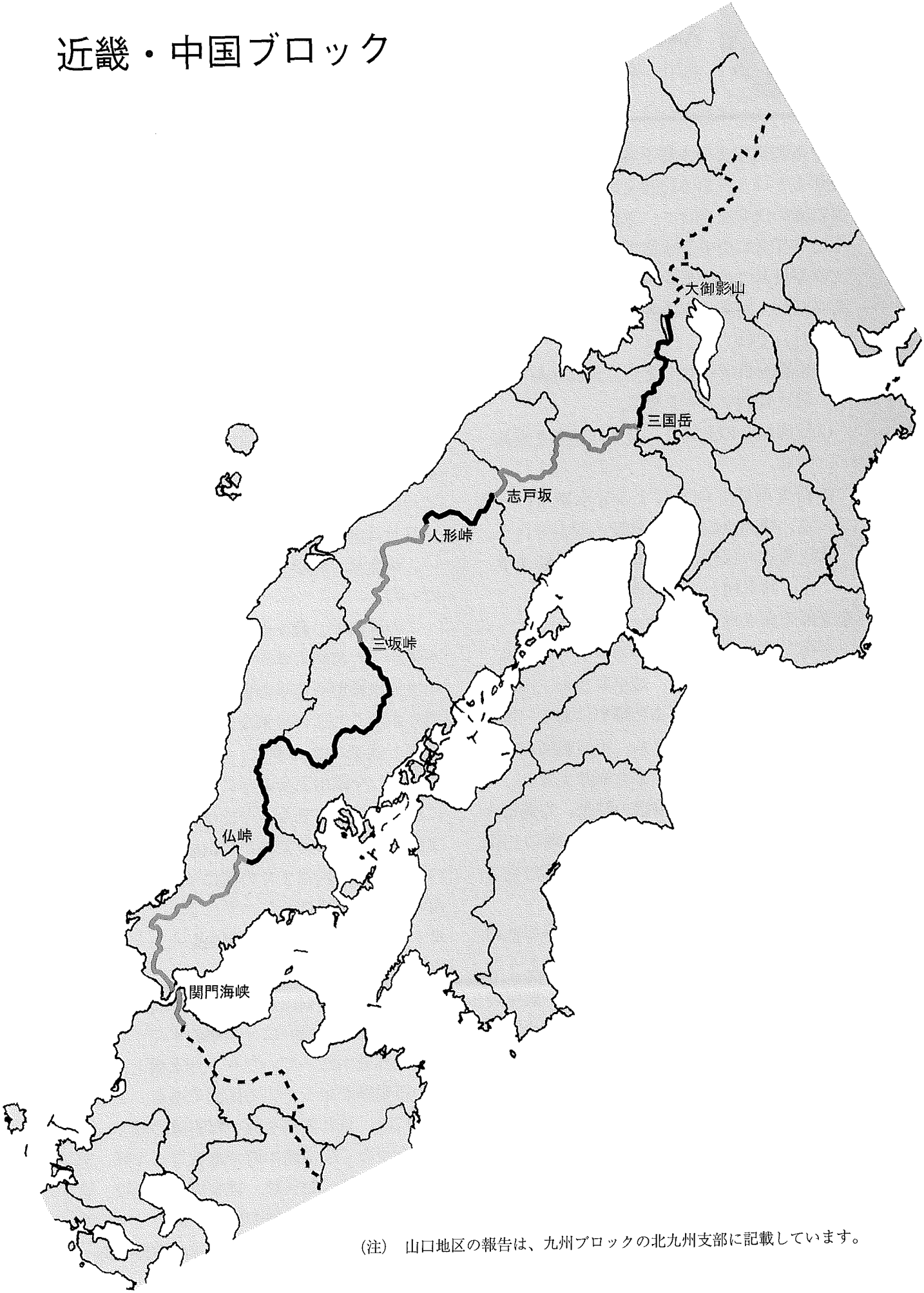
天狗党の進軍は止まらず、城下まで6kmに迫る。藩は町方と計ってようやく城下町通過の大難を逃れ、騒動は治まった。寒空の下に家を失った事件は、「浪士焼け」といわれ、恨みを今日に伝える。柳廼社（やなぎのしゃ：当時の藩主を祀る）には絶対参ってはならないと。

峠の下に美濃の商人が祭祀した十一面観世音菩薩（通称蠅帽子観音）は、大野市内に遷座され、旅人が安堵を得た下秋生の集落は、昭和32年にダム湖に沈む。今は峠道の面影もなく蠅帽子川が静かに流れ、川辺に峠への起点を示す新しい小さな標石が置かれている。

根尾谷は、「薄墨桜」（樹齢1500年余）、「根尾断層」（濃尾大地震。明治24年10月、内陸直下型世界最大級の震源地）で知られ、多くの人が訪れる。その最上流、かつて越前との交易で賑わった大河原集落は、もはやない。

穏やかな昼のひと時の夢想から覚め、峠に名残を惜しみ、もと来た道を下った。

近畿・中国ブロック



（注）　山口地区の報告は、九州ブロックの北九州支部に記載しています。

丹波地区

大御影山～三国岳～佐々里峠～鴨瀬芦谷山～中山峠～三国岳　約 140km

北川、南川、由良川水系――――淀川水系

日本列島中央分水嶺を各支部が分担して踏査するという、日本山岳会の100周年記念事業計画の決定を受けて、京都支部でも支部長を総責任者に中央分水嶺委員会を設置して、支部委員および会員から委員10名を選任し、踏査区分、踏査日程を計画、立案した。踏査に当たっては、

「①山岳会員ばかりでなく、会員外からも主旨に賛同する人を募る.

②支部例会の形式で、月1回踏査を実施する.

③踏査項目：GPSによる分水嶺上の三角点、標高点の緯度、経度の測定を行う。

④三角点の保存状況、自然環境の特筆事項、地形図との相違点を見る。」

を支部の重点方針とした。

京都支部の守備範囲である中央分水嶺は、滋賀北部の滋賀、福井、岐阜県境の三国岳から、西の園部町と篠山市の境界にある三国岳へと通っている．このうち、担当範囲が重複する福井、滋賀の県境部分を福井支部と、一方の境界は関西支部と協議の結果、高島市今津北の大御影山（950.1m）から、西の三国岳（508.0m）までの踏査を京都支部が受け持つことになった.

この区間の中央分水嶺は、北海道や中部の山岳地帯と違って、1000mを越えるような高い山も無ければ、峻険な山も無く、展望の無い里山のような山が連なっている。それだけに地図読みによる正確な位置確認が求められたと言えよう。また、その小さなアップダウンの連続は、日ごろの鍛え方が不足している者にとってダメージが大きかったのか、何人かの人がバテたり、痙攣を起こしたが、大事に至らず路査を継続することが出来た.

区域の特徴

支部担当の踏査区間の分水嶺を地形おび自然環境から見ると、大きく三つの区域に分けられる．一番北の大御影山から福井県との県境を辿り西進し、三国峠から山城、丹波の境界沿いに南下して、山城、丹波、近江の境の三国岳、佐々里峠を経て卒塔婆山までの稜線には、手つかずの自然が残されていた。ブナ林、オブジェさながらのブナの木や、太い台杉の古木に感嘆の声を上げながら歩いたが、熊に出会ったり、間近に鹿を見て驚いたのもこの区間だった。ただ、昔歩いた時の背丈程の笹竹は消えて、深山の趣はなくなってしまい、歩き易い尾根へと変貌していたのは残念だった。

この区間で、我々が踏査した時には踏み跡が無かった稜線も多かったが、日本山岳会の中央分水嶺踏査発表の影響であろうか、積雪期しか歩くことの出来なかった福井県境の近江坂と武奈ケ嶽の間に、我々が踏査する10日前に、今津山上会の手により道が開かれ楽に歩くことが出来た。今ではこの区間の福井支部担当区間の愛発越から山城、丹波、近江の境である三国岳までの間には、高島市の「湖西の山ネット協議会」の手により、分水嶺を歩く「湖西トレール」が誕生したことは、注目に値する出来事である。

二つ目の卒塔婆山から西、畑ケ岳までは、中央分水嶺上に或いは分水嶺のすぐ下を、丹波広域林道が走っていたり、分水嶺上に送電線の巡視路が走っている区間である。この連なりには、京と若狭を繋いだ古道の峠や、村と村をつなぐ生活路の峠であるコシキ峠、男鹿峠、深見峠、知谷峠、神楽坂、海老坂、肱谷坂などの峠が分水嶺の稜線を横切っているが、林道が出来て山は削られ、昔の情緒のあっ

た峠の面影は全く残っていなかった。踏査に飼い犬を連れて参加し、本人は踏査を止めてサポートに回ったのに、犬だけが帰らずについてきて、二人の会員がブツブツ言いながらも食べ物や水の世話につき切りになって、下山口まで犬を連れ帰った思い出があるのもこの区間だった。

最後の区間は畑ケ岳から西の三国岳まで。この区間の分水嶺は、何処が分水嶺か分からないような平坦な畑地や500mにも満たない薮の里山が何十も続き、最も地形図読みの要求される地域であった。尾根を聞違えウロウロしたり、バテた人が出たために、下山口に置き車を回そうと先行した3人が尾根を読み違え、本隊よりかなり遅れて山を下ってきたのもこの区間の思い出であり、読図力の不足を反省させられた。

長距離踏査もフィナーレへ

こんな京都支部担当の中央分水嶺の踏査範囲の距離は約140kmもあり、一区間7km～10kmを目安に15区間に区切り、アプローチを含めると約190kmの距離になる。第一回踏査山行を平成16年4月に西の三国岳からスタートしたが、5月計画時は朝から雨のため中止。6月からは積雪時の踏査を考慮し、北の大御影山から南下して、12月には芦生の森南の小野村割岳で終わった。翌年は再び西の観音峠から東進し、最終、平成17年7月に小野村割岳へ到達。この最終の山行には斉藤惇生元会長も参加され、横田支部長の提唱による今西式万歳三唱で、京都支部担当の中央分水嶺踏査を完結した。

この15回の踏査山行で私が13回のリーダーを努めさせて頂いたが、踏査山行に参加した人は、山岳会会員33名、非会員11名の計44名で、延べ参加人員は231名にも及び、各参加者の協力により完遂出来たものである．また、この踏査山行15回全部に参加したのは、池田祥祐、磯部純、横田和雄、小松志信（非会員）の4名であったが、この中で

新町にある「水分の路」案内板

北の大御影山から西の三国岳までの中央分水嶺を一本の線に繋ぎ、林道歩きに逃げないで、最後まで分水嶺歩きに拘ったのは、横田和雄一人だけであった。

この踏査山行でGPSを用いて緯度、経度を計測した数は、分水嶺上や近くにあった一等三角点～三等三角点の21柱、四等三角点の6柱と、分水嶺上の標高点や主要な峠、分岐点などの計139ケ所であった。標高については、最初は測定したが、あまりに地形図の標高と、また、持っていった3個のGPSの差が大きく、数値の信用が危ぶまれたので、途中から測定を中止してしまった。歩く途中では、地形図に載っていない新しい林道が出来ていたり、古い峠の位置が地形図と違っていて、戸惑うことも多かった。

サポート隊に感謝

今回の中央分水嶺踏査では、取付き口、下山口までの公共交通機関の便が悪いため、どうしても車山行にならざるを得なかった上、線上の歩きとなるので、取付き口と下山口が異なり、置き車や車の転送が必要になった。この転送がなければ時間が浪費され、順調には行かなかったのは確実だったろう。全部の山行ではなかったが、サポート隊として踏査に参加することなく、ただ車を転送するためだけに参加して、皆が帰るまで待っていてくれた横田支部長を始めとする山村孝夫、池田祥柘、枯木俊二、山田和夫や住吉朋和（非会員）の各氏に対し、ここに御礼申し上げる次第である。

（磯部　純　記）

関西支部

丹後地区

三国岳～栗鹿山～戸倉峠～志戸坂　約 198 km

東中国地区

志戸坂～辰巳峠～三国山～人形峠　約 76 km

由良川、円山川、千代川水系――加古川、市川、揖保川、千種川、吉井川水系

多数の会員の参加を目指し

関西支部では分水嶺踏査にあたり、多くの会員の参加を促すため、1）踏査区間を登録制にして希望者を募る、2）多数の参加が期待できる区間は積極的に支部山行に取り入れることとした。

先ず、久保三朗会員が地図とにらめっこで綿密に検討して、峠から峠、あるいは登山道のある峰から隣のピークまでなど、日帰りかあるいは前夜泊程度で踏査可能と考えられる50の区間を設定した。これを直ちに支部報に掲載し、踏査の応募者を募るとともに、逐一エントリー状況を支部報に載せて空白区間の踏査希望者を探していった。どうしても埋まらない区間は支部役員が受持つ事とした。

この50区間は、1日で踏査しきれないところは2回に分けて実施したり、逆に、行程が捗ったところでは2区間を一気に踏査したり、また、テント持参で2、3日かけて一定区間をまとめて踏査する個所も出てきた。結果的には、56区間に分けて実施し、2003年10月12日に京都、大阪、兵庫の3県境に近い櫃ヶ岳を皮切りに、2006年4月15日の人形峠に近い鳥取、岡山県境上の伯州山まで、足掛け3ヶ年がかりの踏査となった。

分水嶺担当として久保三朗、中島隆両会員は全般的な進行状況を把握することと、支部例会としての実施に力を尽くした。兵庫県内は地元の阪下幸一会員とこの周辺の著書も多い須磨岡輯会員が、鳥取、岡山県境は、誰も行かないなら私が、と心強い宣言をしていた城隆嗣会員と重廣恒夫支部長が、それぞれに多くの区間を受け持った。また、人形峠に近い最西の区域は鳥取の清瀬祐司会員と広島の上中俊治会員からの情報を頼りにしていた。しかしこの間に、上中さんがチベットで急逝されるという思いもかけない事態に直面した。無常を感じ身の引き締まる思いであった。

参加者の報告

参加回数でみると、1位の山内幸子会員は56区間中、6割近い32区間の踏査に参加。2位の久保和恵会員も26区間を踏査した。最大多数の参加者を集めたのは、京都、福井両支部との3支部合同スキー山行として実施した岡山県の恩原尾根から三国ヶ山（みくにがせん）の区間で、実に29名がスキーでの踏査に参加。ほかにも、支部山行として実施した区間について15名を超える参加者を数えたことも多々あった。一方、単独行での踏査区間も4区間におよんだ。合計では、関西支部踏査区間の参加人数は延べ400人を超えるほどの盛況を見た。

法道山～サデの谷を下る

伯州山より東、三国ヶ山方面を望む

支部報には多数の会員から興味深い報告が数多く寄せられた。曰く、「最初は辛うじて踏み跡があるのだが、少しずつ倒木や潅木・笹などが行く手を塞ぐようになり、顔には蜘蛛の巣がへばり付くようになる。」(松波幹夫)。「伯州山山頂から人形峠方向へは踏み跡はあるが、ブッシュで隠れがちで歩きにくい。やがて背の高い根曲がり竹に変わり、掻き分けかきわけ歩くが先が見えない。5メートルも前の人と間が空くと人影が見えないほどの密林だ。」(阿部和行)、「初めての分水嶺踏査山行でしたが、難しさと同時にその魅力を味わいました。」(岩崎しのぶ)、等々、薮漕ぎの苦労とともにこんな機会でしか味わうことがなかったであろう貴重な経験として尊重する感想が多く寄せられているのである。

大きな収穫

踏査終了の日を迎えて、久保三朗会員は、最後に次のような感慨を述べている。

「当初はそれまでの支部山行を基準に考えていたから、果たして行けるものかという不安は大きかった。だが呼びかけに応えて、今まで支部山行にはご参加のなかった方々の数グループが、つながる縁の会員以外の方々まで誘いあわせて参加活躍、有形無形の協力をして下さったので、当初の懸念は消え失せて、比較的早い時期に完了を見ることが出来た。これだけの山域での、これだけ多数の山行を持てたことは一大収穫である。会員の減少が云々される今、私はやはり会員に身近なよい山行を持つことが山岳会として大切だと思う。そうした意味でこの分水嶺山行の意義は大きいものがあったろう。」と。

確かに、分水嶺踏査山行を機会に、新しい仲間と出会え、色々な刺激を互いに与え合ったように感じている。　(金井良碩　記)

余話

分水嶺の最低点

関西支部　久保三朗

日本海ー太平洋の分水嶺の最も低い所は兵庫県氷上町の石生(いそう)の95mである。他支部の方でも御承知だろうと思う地名で言うならば篠山と福知山の間ということになる。

瀬戸内海側が加古川の、日本海側が由良川の水域上源が接する地であって、殆ど平地に近い大きな鞍部である。その鞍部に出来た町すなわち峠の集落が石生で、町の中はどこが分水嶺か辿るのも難しいくらいの平地だが、町の東すぐには多紀の連山が立上って分水嶺

を形作る.

地元ではその山裾に水分れ（みわかれ）公園なるものを作り、併せて背後の分水嶺約600mへ登ってしばらくの稜上歩きの後、側稜を降りて公園に帰って来る一巡コース（分水界展望ルート向山連山登山道）を整備して、分水嶺の顕彰に努めて居る。

本部から、分水嶺歩きがほぼ終了する頃に全国を募集対象にした踏査記念山行をどうかと打診が有った時、関西としてはやはり域内に有る特異点であるここを推奨したが、蓋を開けてみると他からの反応はゼロ．これは本部式典をはじめ各地で100周年記念行事が連続する只中の上、「最低」というのはやはり魅力に乏しかったからだろうと思われる。

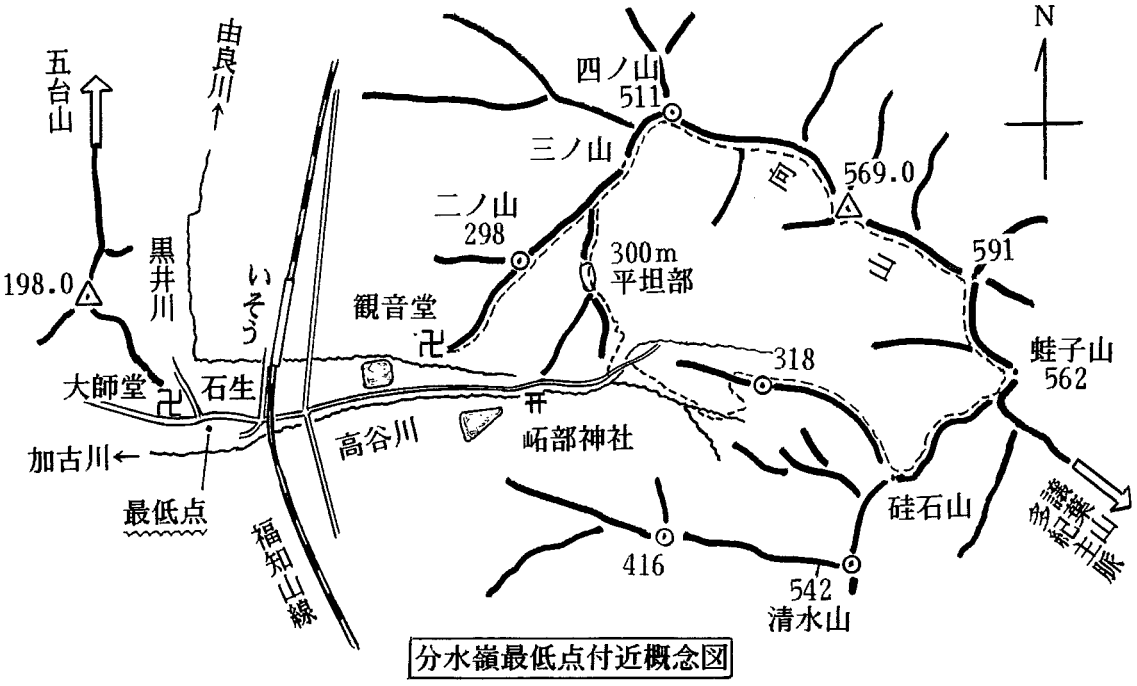
だが支部としては25名もの参加を得たので、趣旨の通り踏査記念行事として催行した（2005年10月9日）。幸い秋晴れに恵まれ周辺の丹波の山々の晴れやかな展望を得て、「打ち上げ」よろしく賑やかに楽しい一日を持った。

ここは西南から北東へ、柏原から石生へ春日へと細長い地峡ながら取り巻く平野へ、突出した形の尾根なので展望は良い。ちょっとした露岩の突角や尾根の張出しなど展望の良い所の案内も丁寧に出してくれて居るので、道から外れた所でも行ってみることが出来る。

ここは西南から北東へ、柏原から石生へ春日へと細長い地峡ながら取り巻く平野へ、突出した形の尾根なので展望は良い。ちょっとした露岩の突角や尾根の張出しなど展望の良い所の案内も丁寧に出してくれて居るので、道から外れた所でも行ってみることが出来る。

分水嶺の始めの頃（2003年4月19日）にも来て居るのだが、その時は雨もよいながら、低い所はコバノミツバツツジ、稜線ではヒカゲノツツジが、多紀アルプスの呼称も有る硅石の岩場を飾るように満開で美しかった。

コース通り一巡し山を降りてから、更に反対側（町の西端）の、分水嶺の続きの五台山への尾根が立上る付近まで町を横断して行く。傾斜がわからないとは先に書いたが、一軒一軒で水がどっちへ流れるかの調査がされて居て、その結果の地図によって、最低の中の更に最低点まで行って、以て記念山行のピリオドとした。



分水嶺最低点付近概念図

水分れ公園を外苑に見る位置に、古いお社礒部（いそべ）神社があり、当日は秋の御祭礼であった。神社の詳しい縁起は知らないが昔の人が水分れの地を依代（よりしろ）に水神様を祀ったのが始まりであろうから、その御祭礼と我々の分水嶺記念が同日になったのはこれ佳日瑞縁というべきであった。

余話

支部の活動は四国の分水嶺踏査へ

関西支部　金井良碩

関西支部では中央分水嶺踏査を進めながら、同時に、支部行事として、枝線の紀伊半島の分水嶺に当たる大峯奥駈道や紀伊山地の参詣道の踏査も実施した。今年からは、さらに延長線上の四国山地、瀬戸内海と太平洋との分水嶺踏査を実施することになった。

記念講演会

2006年5月26日、徳島市で「四国分水嶺踏査」記念講演会を開催、尾野益大会員が、四国分水嶺に関わる、源流、ブナ林、高山植物、地質などの説明を含め、山々の個性まで紹介し、続いて重廣支部長からは、分水嶺の定義、これからの登山のあり方、独自のテーマをもてる分水嶺踏査の魅力などを伺った。そしてキックオフミーティングを持ち、四国の山仲間と共に踏査を開始した。

踏査開始

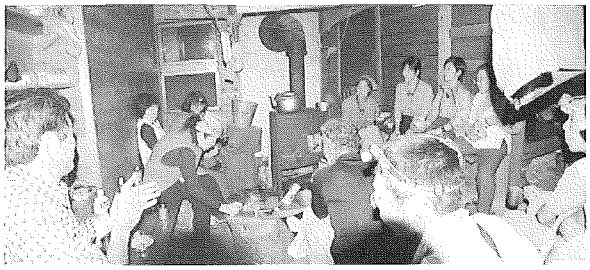
起点は徳島県の平石山、終点は愛媛県の黒森山で、行程の総延長は約150kmになる。13区間にわけ、月に1回のペースで行っている。

白髪分岐

四国は複数の山脈が縦断しており、讃岐山脈、法皇山脈には、瀬戸内海へ注ぐ河川の源流、南側に東へ流れる吉野川へ注ぐ源流あり。西日本最高峰の剣山(1955m)を擁する剣山山系あり、石鎚山系ありと、分水嶺を厳密につないでの縦断は無理であるから主要な分水嶺の集まる四国山地の縦走にする考えである。

この分水嶺踏査を機会に、新しく生み出された関西支部のエネルギーを大事にしていきたいと思っている。

三嶺山頂にて



お亀の避難小屋でストーブを囲んで

中国地区

人形峠～韮山～内海峠～道後山～三坂峠　約136 km

天神川、日の川、江の川水系――――吉井川、旭川、高梁川水系

地域の概要

当支部の分担区域は、中国地域の脊梁山脈の一部であるが、中国地域の北側に偏在し、地形は北側の日本海側が急峻で、南の太平洋側は緩やかである。コースに岩場はなくて標高差の少ない比較的平坦な地形で、全体がいわゆる藪山である。また、大部分が鳥取県と岡山県及び広島県との県境となっている。

分布状況をみると、国土地理院の地形図は5万分の1が6枚、2.5万分の1が13枚に及んでいる。行政区画の市町村数は、2004年以前の時点では日本海側と太平洋側のそれぞれが6町と10市町村であり、河川の水系はそれぞれ3本ずつである。標高は、最高地点が1271m、最低地点が511mの比較的低い地帯である。

人々の生活が山と密着し、行政と文化が複雑な地域である。

藪から棒？いや、藪から分水嶺

この辺りの藪とは、高さ2～3m、直径1～2cmの強靭な竹が密生したものである。人体の胴体や頭の部位の高さでは竹がしなやかなので竹と竹の隙間を押し開いて潜り抜けられるが、地面に近いところでは竹が強靭で間隔が狭くて、隙間を押し開くこくとができず靴を前に進めるのに大変な苦労であった。また、頭上が藪で遮蔽されているためにGPSが誤表示して迷うことが再々で、心身ともに疲れた。藪こぎは当初予想した以上に大変苦しく、今回の踏査した分水嶺は藪の中から掘り出した宝物のように思われる。

踏査に参加した延べ人員は、本会の会員119人、非会員40人で合計159人である。歩行時間数は延べ168時間であり、これを道の状況別にみると、道がなくて藪こぎをした部分が120時間で全体の71％を占め、藪こぎのない道が延べ48時間で全体の29％であった。

担当した距離を会員1人当りに換算すると3.09mであり、これを全国平均の0.78mと比べてみると極めて過重である。これは、会員数が44人の弱小支部のために割り高になったものと思われるが、藪こぎと共にとにかく苦しかったという印象が強い。

葛藤の時期

これまでを思い返すと、胸中は重苦しく長い年月に感じられた。やりたいけど今回はやりたくないという胸中の葛藤の年月であったのである。

2003年のいっ頃だったか、支部長から計画の説明があった時は、支部員の皆は「エー…、ウソー…！あんな所の踏査なんて無理だ。本部の現場を知らない連中は気楽によく言うよ…」と、絶句と悲鳴があがった。それと言うのも、当支部では、1989年に「山陰の百山」、1999年に「鳥取県境の山」、2000年に「美しき伯耆の滝たち」という研究誌を発行しており、その都度、今回の分水嶺である県境を踏査したいと思いながら、その困難性から断念してきた経過があったのである。その困難性とは藪が深くて踏査なんて不可能と思えたからである。

また一面では、いわゆる山屋と言うのは、人から言いつけられて登山することを快く思わない習癖があるようである。「自分達がやりたくてもできなかったことを本部の言い付けでやらされる」という忌避反応である。

体制を整え着手

それでも2003年には特別委員会を作って

全体を4区分して担当者を割り付けるなどの体制が整えられた。しかし、動きは鈍く、2004年には全体の1割程度しかできなかった。藪の深い部分は全くの手付かずであり、ここは積雪期に一気にやってしまおうと、とにかく先送りを決めこんだ。しかし、2005年も3月になり雪が消えかかる頃になっても動きは鈍く、支部長の顔色が変わってきた。4月になって雪が消えて、本部からの最後通告を受けると、もう先送りもできず、漸く重い腰があがった。積雪期なら楽にできたものを雪が消えて苦しくなってから取り組むという間の悪さであった。

腰があがってからの動きは速かった。山域が自宅から1時間程度と近いことから能率が上がったのである。日帰りを原則として荷物を少なくし、藪の中を身軽に潜りぬけたのである。本部への報告は39報であり、1報に1～4時間の短時間のものが多かった。しかし、藪が深い上にエスケープ不能の部分が多く、1報の最長歩行時間は11時間に及んだものもあった。70歳以上の老年会員が多い当支部にとってきつい試練であった。

峠道のこと、溝のこと

印象に残ったことを紹介したい。分水嶺上には道のない部分が多かったが、分水嶺を横断する峠道が多かった。舗装道路やトンネルなどの近代的な道とともに古い廃棄された昔の峠道が多かった。廃棄された道に関する地元の人の話では、「今から30年ぐらい前まではよく使っていた。徒歩で30分から1時間程度で、県境を越えて部落間を交流していた。今では、下流方向の道を経由して自動車で交流している。徒歩の時代より時間が多くかかるが楽になった。しかし、交流は以前より少なくなった。きっと、自動車で何処へでも行けるので、峠の向こうの部落とだけ交流しなくても良くなったためでしょう」と言う。人間の歩ける範囲での慎ましく濃密な山村の生活が想像できるような話しであった。

また、県境には不可思議な溝があった。それは、幅2～3m、深さ1～3m程度の大きさで、石垣で補強された所もあった。10mぐらい連続していたり、短く断続している所もあった。人形峠は日本で始めてウラン鉱脈が発見されて、鉱脈探しに山を掘り回したという噂を聞いているので、その一部かと思って、旧日本原子燃料公社（現在は独立行政法人日本原子力研究開発機構）に問い会わせた。「昔のことでよくわからないが、付近の農家が家畜を放牧するための牧柵の代用としたものだと聞いたことがある」と言われた。しかし、大木や深い藪の中で大した道具もない遥かな昔、人力で掘ったその労力は大変なもので、中国の万里の長城が連想されるほどである。もしそれが本当なら、山里の過酷な生活の証しとして貴重なものと思われる。

色々あったが

全てが終わった後の感想は、苦しかったが嬉しいことも多かった、ということである。まず、山屋として登山が沢山できたことはなによりである。筆者自身でも1ケ月に15回入ったこともあった。また、分水嶺上を歩くこと自体が楽しかった。分水嶺を東から西に向かって歩いていると、右手は日本海、左手は太平洋に繋がっているわけで　両方の大海原を我が手で掴んでいるように思えた。その上、日本山岳会会員によって北海道から九州まで繋げられた日本列島の大縦走であり、豪壮な気分であった。また、サポート隊の出迎えは、仲間意識が強まり、組織的登山をしているような高尚感を味わった。さらに、とうてい無理と思っていた分水嶺が完全に踏査できて、以前に行った山陰の百山や県境の山という点が線で繋がれた。このことは、我等の身近な山々が完全に我が物になったようで何よりうれしいかぎりである。

（藤井　信一郎　記）

西中国地区

三坂峠～阿佐山～大佐山～寂地山～平家ヶ岳～仏峠　約362km

江の川、周布川、高津川水系――――高梁川、芦田川、沼田川、錦川水系

中央分水嶺踏査計画により、広島支部は岡山県に近い備北の三坂峠から山口県と島根県の県境の仏峠までが担当区域となり、会員以外の登山愛好家の協力も得て、踏破完全実施を目指した。踏査距離は約362kmである。野間弘を委員長とする踏査実施委員会を組織して着手することとした。

踏査区域の概要

担当する主領域である広島県は東部の「備後の国」と西部の「安芸の国」に二分される。さらに夫々の国の北部を「備北」「芸北」と言い、また、県境をはさんで島根県を「山陰」、広島県を「山陽」と呼ぶ。

中央分水嶺は、備北の三坂峠から山口、島根の県境にある仏峠までサインウエーヴのような形で東西に延びている。江の川、周布川、高津川の水系が日本海にそそぎ、高梁川、芦田川、沼田川、錦川の水系が瀬戸内海に流れ込む。南北に走るJRの路線は芸備線が向原駅付近の「なき別れの標柱」のある所で、福塩線が上下駅で、芸備線では道後山駅の東付近でそれぞれ分水嶺を横断する。国道では、54号線（出雲街道）や184号線（石見銀山街道）など多くの国道が南北に横断している。中国自動車道は、中山峠、明神峠、田野原新田、米山峠などで分水嶺を串刺しにしている。

原生林の広がる西中国山地、分水嶺の通る主稜線には現在も樹齢200年の天然杉や、ブナ、ミズナラ、トチ、ケヤキなどの大木が確かめられ、「水をはぐくむ森」には広葉樹林がうっそうと繁っている。

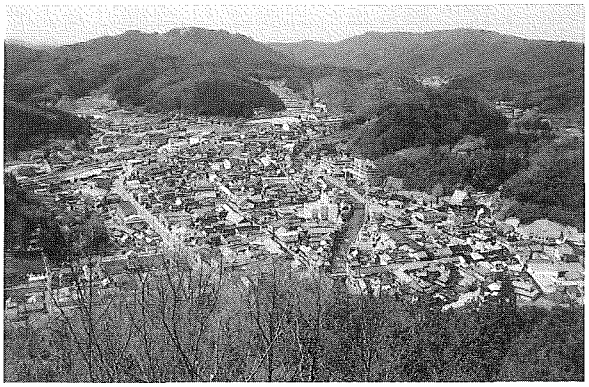
踏査の概要

1）三坂峠～阿佐山　踏査距離 約206km

全担当区域の東部分である当区間は、すでに1988年6月から6年1ヶ月をかけて、線としての完全踏査が広島支部の有力メンバーの在籍する「広島山稜会」によって行なわれた。この完全踏査は広島山稜会の創立35周年記念事業として遂行され、その詳細な山行報告は「峠」創立35周年特別号（広島山稜会編）に掲載されている。

今回、この区間のポイント全てを踏査した際、上記の山行報告は貴重な資料であり大いに活用したものである。山行回数は延べ51回、参加延べ人数は369名で、一回の山行参加者の平均は7名であった。

東からこのルートを概観すると、三坂峠から中国山地の脊梁部をはなれ、瀬戸内海に向けて南下する。神石高原から山陰と山陽を結ぶ天領の町として有名な旧上下町（現在は府中市に属する）に入る。



翁山（538m）から分水嶺の町上下町を展望

この地で1991年に第四回「全国分水嶺サミット」が開催されたので住民の関心も高く、国留めの三叉路には「ここは日本列島の背骨、分水嶺地点です」という看板が立っている。備後略記には上下町について、「東より登り極めて、ここより西に下る所なる故に上下と名に負いたるなり。此処より東南の水は芦田川に落ち、西北の水は三次川（江の川）に落ちあえり」と記されている。古くからここが分水嶺地点であったことに興味を示していた

ことがよくわかる。広島山稜会はこの踏査の時にいろいろな箇所にプレートをかけてきたが、町が作った分水嶺の看板には今もきちんとこのプレートが飾られている。分水嶺はこの後、広島県の中央部の広々とした世羅台地を通るが、近年大規模な農園化事業の施工に伴って境界が分かりにくくなっており、ルートポイントを探すのに苦労した。世羅町内の池で、瀬戸内海へ流れていた水をせき止めて日本海に用水路をひいていた所があった。同じ町内だから問題としないのかもしれない。

中国地方最大の川である「江の川」の流域には陰陽交通で栄えた町が多くあり、中国地方の生活や文化を育てた。分水嶺を境としていろいろな違いを知ることが出来て興味深い地域である。

広島県内をほぼ東西に伸びてきた分水嶺は、中国自動車道をまたぐ明神峠あたりから北に進路をとり、「陰陽分水嶺の碑」のある峠が谷を越えて中国山地の核心部へと進んでいく。

中国山地の低山特有の藪山の厳しさに遭遇することになり、山登りの原点に立ち戻った思いがした。広島山稜会の六年に及ぶ完全踏査においても連日の激しい藪こぎに大汗を流し、自分の居所が分からなくなって戻るのに苦労したり、帰宅後、踏査ルートの誤りを発見して再度挑戦したりした。一方、野営では地元の人々の暖かい人情に接してありがたく思った。さらに北上すると江の川の源流である阿佐山に至り、島根県と広島県の県境になる西中国山地の主稜線と合流する。

2）阿佐山 ～ 仏峠　踏査距離 約156 km

全担当区域の西部分である当区間、今回、完全踏査を実現した。東部分のポイントの踏査を含めて延べ111日を要し、参加人数は延べ601名となった。2004年4月4日に三坂峠で山陰支部と合同でキックオフ大会を開催して以来、2006年3月の終了まで約2年の歳月を要した。一日あたりの平均参加者は5.4人であった。

西中国山地の脊梁部は島根、広島、山口の各県の県境となっており、中央分水嶺の稜線と重なる部分が長い。主稜線には広島県内で最高峰の恐羅漢山(1346m)が聳え、標高1000m～1300m級の山々が30座余り連なる。全体に分水嶺稜線上の山々の頂きは穏やかだが、山腹部は急傾斜でそこには多くの素晴らしい渓谷が見られる。阿佐山から大佐山、恐羅漢山を経て、三県の境になっている後冠山に至る。島根、山口県境はここから深谷川に下降するが、中央分水嶺は島根県に入り、ブナとカタクリで人気の寂地山から藪山の白旗山、大迫山の稜線を経て一気に島根県六日市町の田野原新田に下る。我々は田野原水源公園の大蛇が池の上流の新田地区八幡神社前を分水嶺と判断した。深谷大橋の西部で中国自動車道を横断して県境に戻り、星坂峠などを経由して平家屋敷跡の頂きである平家ヶ岳に至る。平家ヶ岳の東部は急峻な藪尾根で、とりわけ今回の最終踏査地点となった所だけに記憶に新しい。島根、山口県境上を米山峠、さらに西中国山地の西端に位置する莇ヶ岳を経て島根県柿木村の入り口に当たる最終踏査地点の仏峠に至る。ここより以西は北九州支部の担当区域となる。

西中国山地は動植物の宝庫

中央分水嶺の通る西中国山地はブナ、ツキノワクマ、渓流魚のゴギを代表に、天然記念物のヤマネ、モモンガ、周年生息するクマタカ、夏鳥のアカショウビンなど動植物の宝庫である。

主稜線では存分にサルネンエビネや優雅に飛び交うアサギリマダラ、種々の昆虫にも出会うことができた。

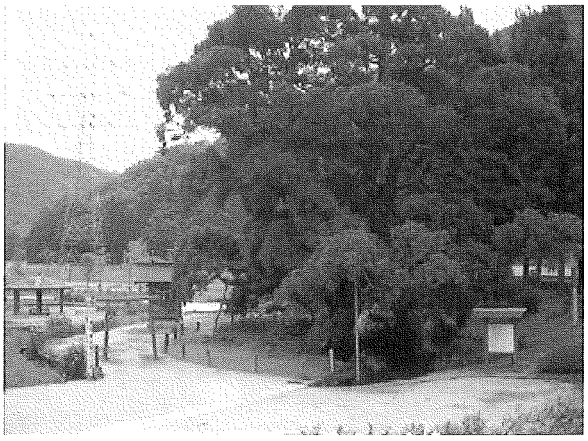
地域の文化遺産

一方、地域の生活文化、伝統行事にも触れる事ができた。島根県柿木村下須の「万歳楽」は山盛りのご飯を食べて空のお椀を取り合う奇祭。大食を試みて来年の豊作を祈願するの

である。また、平家ヶ岳のふもとにある「平家屋敷跡」は標高823mの清流のそばにあるものの、現在はそれらしき跡がなく、山師の飯場小屋があるのみで墓地も見当たらない。「壇ノ浦の合戦に敗れた平家一門の松前隼人守は、源氏の追っ手から逃れるため木谷峡源流に移り住み、農耕や木地師をして暮らした」という説明看板が雨に濡れて寂しく立っていた。

京ツカ山E班メンバー登頂記念

渓流魚ゴギの郷、旧匹見町三葛地区には島根県の無形文化財に指定された伝統芸能で「三葛神楽」がある。廃校となった三葛小学校の校舎で虫干しされていた神楽衣装を見ることができた。さらに「六日市の水源祭り」は田野原水源公園で毎年6月の最終日曜日に雨乞い神事を行う。太古の昔、河川争奪によって生まれた高津川の水源「大蛇ヶ池」で伝説に基づいて雨乞いをする。神主が一週間ほど社に篭り、満願の日に氏子がワラ蛇を持って歩き、大蛇ヶ池に浸けて降雨を祈願する祭りである。池のほとりに「水と竜神」をテーマにした水源会館がある。六日市には「水郷の町」を示す緑の看板が目立つが「分水嶺」の表示がまったく無い不思議な地区でもある。しかし、この町では水の話題が豊富であり、踏査していて大変興味深い町であった。



田野原の千年杉

終わりに

北海道支部に次ぐ長い踏査距離をいかに完全踏査するか。過去の経験から一日の踏査距離を3.6kmとすれば踏査日数は101日となる。しかし結果は予想を越えて111日となった。ルートは神石高原、旧上下町や世羅台地に代表される低い丘陵地帯と、西中国山地の標高1300m級の主稜線、いずれも標高にこそ違いはあるが、「道なき道と藪山」は同じであり、「体力と読図力」を常に必要とした。

ビバークが予想される踏査地域では周辺の事前調査が不可欠であり、踏査ルートの確認においてGPSは強力な武器となった。

支尾根が多いので下降時にはよく迷って、トラブルがしばしば起きた。月明かりに助けられたり、体力が消耗して野営したり、大自然から楽しく学ぶ機会も多かった。多くのドラマも生まれた。

「標高の高くない中国山地が一番の難所である」（堀公俊著　日本の分水嶺）とは聞いていたが幸いにも踏査中にたいした事故も無く、無事に終了することができて安堵した。協力いただいた広島山稜会、白木愛山会、可部山岳会、三原山の会、マツダ山岳部、その他多くの登山愛好者の皆さんに心から感謝し、厚く御礼申し上げたい。

（佐々木弘磨　記）

余話

西中国山地に「分水嶺新道」開通

広島支部　兼森志郎

広島支部担当区間約 360km の踏査は、7区間に分けて 2004 年 4 月一斉に開始された。我々の担当地域は西中国山地ではやや東部に位置し、W524 傍示峠～ W534 高岳の間、島根と広島の県境部である。多くの山仲間の協力を得て、順調に踏査は進み、この年の 10 月には完了した。その余勢を駆って、W537 天杉山までを引き受けることになった。

秘境の踏査へ

その地域は西中国山地の中で秘峡部にあたり、以前から気になっていたところでもあった。中でも W535 聖山分岐～ W536 野田原の頭～野田の 100 本松（奥匹見峡からの分水嶺到達点）間約 3km には、登山道は無く、わずかに残雪期を利用してマニアが歩くのみだった。

友人知人のネットワークを総動員して、この地域に詳しく且つヤブ漕ぎ名人を探したところ、自薦他薦で 29 名の精鋭？が集まった。

雪の来るまでにと考え、2004 年 11 月 14 日秋晴れにも恵まれて、広島側 14 名と島根側 15 名の 2 班に分けて踏査し、合流したところで広島側へ引き返す作戦でスタートする。もちろんビバーク覚悟のいでたちで。元々マニアから、このルートに登山道があったら随分魅力的…もちろん小生もそう思っていた。

後のために要所要所にテーピングをお願いすることとした。広島を代表するヤブ漕ぎ名人を揃えただけに、信じられないような正確さで B2 ～ B3 クラスの大藪の中を踏査は進み、やや広島よりの地点で両隊は合流、意気揚々とテーピングを頼りに下山した。

登山道を作ろう

下山後のことである。期せずして「ここに登山道を作ろうではないか？　我々も手伝うので」参加者の 1 人森林生態学の研究者（会員）も含めて全会一致できまった。来年（2005 年）9 月の中国ブロック・100 周年記念登山をこの地で「分水嶺新道の道開きを兼ねてやろう」と内々決心する。すでに宮島・彌山で開くと決定していたのだが…敢えて。

コンセンサスを得て

2005 年いよいよ 100 周年の年が明けた。過去に登山道整備等では苦い経験もある。というのも 1 度だけで済むのならまだしも、後々までいい状態を保つには、並々ならぬエネルギーが要る。それには「何故ここに登山道が必要か」と言う意味を明確にし、地元行政・地域のコンセンサスを得る必要がある。

根回しが完了し、いよいよ県境をはさんで、両町の担当者、関係者及び支部関係者の合同会議を、匹見町内で開催する運びとなった。すでに 7 月になっていた。

登山者にそんなに喜ばれるのなら全面的に協力しようということになり、先ず当該地の山林所有者を探してもらうことを約束。この段階で、島根側は民有林、広島側は国有林であることが判明。しかも広島側は第 3 種ではあるが国定公園にかかっており、県の担当部署の許可が要るとのこと。幸い、両支所担当者の好意的な対応でとんとん拍子に事は運ぶ。国有林を管理している広島森林管理所の担当官も、たまたま知己の間柄だったせいもあり、書類作成のために数度足を運んだが、めでたく手続きが完了した。

いよいよ作業開始

8月の最後の日曜日、両町の森林組合の刈払いプロ（各5人分の予算を計上してもらう）、行政、地元有志、登山者、もちろん支部会員あわせて52名が両サイドから攻め込

荒刈りをするプロ

むこととなった。ヤブ漕ぎ隊がテーピングテープを頼りにルートを先導し、刈払いの機械化部隊が粗刈り、中刈り、仕上げと進み、我々は必死に後始末、最後が清掃…。

感動しながら進むうちに、かすかに相手方のエンジン音を聞いた時、ついにやった！と皆でにっこり。

会員有志による片付け

午後もかなりたったころ、予定のポイントで両隊合流。固い握手と生ぬるいビール少々で乾杯。念願の、見事な分水嶺新道の開通となる。しかも両支所には今後の登山道の維持管理と案内標識の設置を約束してもらう。

ついに道が開く

2005年9月17日（土）広島市内にて100周年記念フォーラム、記念式典、懇親交流会を山陰支部、本部平山会長他多数の参加者を得て行なった。そして翌18日（日）は“記念登山＆分水嶺新道道開き”の日となる。

地元中国新聞及び朝日新聞が事前に情報を流していただいていたこともあり、当日9時からの開会式には、匹見・渡辺支所長、芸北・岡本支所長、平山会長、高田山陰支部長ほか約150名が駆けつけ、分水嶺新道の道開きを祝った。

案内標識を設置

総勢130名が島根側奥匹見峡Pから広島側北広島町高岳登山口へ向かって大行進。参加者の方々から

「エエ道ができたのう」

「ようやったモンじゃのう」

「大変じゃったろうのう」等々。

広島弁、石見弁、山口弁が聞こえてくる。

分水嶺踏査の副産物である。

その後も2度ほど訪れたが、多くの登山者に愛されている気配が感じられて嬉しい限りである。ゴミが1つも落ちていないのが特に良い。

今は多くの関係協力者に対して感謝の念でいっぱいである。

余話

本州西南端の山々

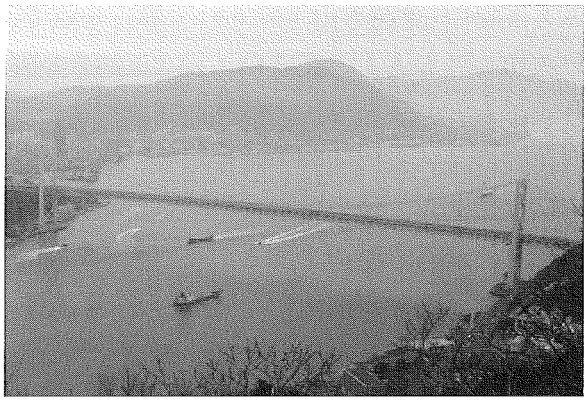
北九州支部　井上　佑

火の山（268·2m）は瀬戸内海国立公園に属し、九州本島に最も近い山で、関門海峡に面する10kmは渡り鳥のコースになる。特に見事なのが、ヒヨドリの渡りで、10月になると、北から全ヒヨドリが集合し、数百から数千の群れをなして海面すれすれに九州を目指すが、ハヤブサの急降下に群れは動き、その様子は龍の渡りと呼ばれる。

古代の烽火（とぶひ）で山名になり、九州は足立山から受け、津布田の火の山に渡し、飛鳥の都まで続く。中世は豊後の大友氏と、大内や毛利の戦いにおける城として機能した。1793年（寛政5）、烽火台（ほうかだい）が築かれ、外国船接近を萩城まで知らせる予定であった。1888年（明治21）頃、要塞工事が始まり砲台が置かれ、一般人は立入禁止になり、「要塞地帯」の石標が打たれた。

ロープウエイ壇ノ浦駅からジグザグに登り山上駅に出る。眼下は源平船合戦の古戦場で、平家滅亡の海になる。関門海峡と響灘の展望を楽しみながら高みを目指し、砲台址に上がる。ここは日露戦争で満州に運ばれ活躍した、28糎榴弾砲台址で、三等三角点は地下34cmの枡に収められている。

地下に収めた三角点



火の山から関門橋を撮影：対岸は九州「門司」

これは分水嶺踏査で判明したもので、私は百回位登っていたが、コンクリートの蓋が被せてあり、落葉に隠れていて判らなかった。三角点は1895年（明治28年11月）の設置であり、要塞の完成後になるので、1944年（昭和19年）高射砲を据付ける際に、周囲を盛り土にしたための結果である。北の無線塔のある藤ヶ谷山（240m）を越え尾根を辿る。

火の山にある三角点のある砲台跡

霊鷲山（りょうじゅせん）（288.5m）も要塞址で掩蔽壕（えんぺいごう）の上が最高所で北を除き絶好の展望台になり、以前は三角点も近くに在ったが、北側200mに四等三角点（278.1m）は移動。三角点周辺には電波塔が多い。また、付近では古代から鎌倉時代の遺物が発掘されている。

尾根の踏跡を辿り、逢坂の市道を渡る。逢坂峠は1863年（文久3）、米、仏の軍艦との戦いで、山陽道の海岸部は通行止めになり、ここを拡げて官道とし、長門一の宮住吉神社経由で赤間関に出た。新山（150m）を越えると准提山（覚苑寺山176.6m）三等三角点で、鋳銭坊の名もある。長府に、三十三観音を巡り、下ると、覚苑寺（かくおんじ）、古代和同開珎（わどうかいちん）を鋳た長門鋳銭所址・長門国分寺址に出る。

尾根を進み、住宅地を抜け、送電塔の小山を越え、滑石で県道を渡る。長府配水場の上にピークがあり平削地になっている、幕末は、ここに大砲を置き、勝山御殿の藩主を護ったものであろう。送電塔のピークに登り、尾根が終わると住宅地で西側を北に進み、山に入る。

猛烈な藪で、東側の谷には滝がある。900mの藪漕ぎを果たすと、勝山御殿からの山道に出て、登ると毘沙門天址で三等三角点は築地の藪の中にかくれている。

ここ**四王司山**（392m）は、古名、宝鏡山であり、867年（貞観9）四天王像を入れ四王院を建立し新羅を調伏させるため、この名に変った。

毘沙門堂は焼け、今は無いが、四王司神社初寅の日は、未明から多くの参拝者が登り、商売繁盛を祈り、賑わう。1336年（延元元年）大内弘直と足利尊氏の軍が戦い、以後、大内氏と厚東氏の戦が幾度もあり、大内氏も毛利元就に攻められ滅亡する。その戦の度ごとに、

四王子山頂にある毘沙門天の祠

毘沙門天像は山下に避難した。山頂近くは武者溜りの平坦地が数多くあり、南東尾根の海抜250m付近には延べ250mにわたる石垣が残り、中世の戦場を偲ばせる。東に張り出した三角錐のピークは権現山（317m）で見晴らしが良い。この山塊には少数だが猿も棲んでいて、親子連れを見かけることもある。

西南麓の勝山御殿付近は、蝶の渡りのコースで、「アサギマダラ」が南西諸島に帰る際、関門海峡を渡る前の秋季に羽を休める。秋の七草の一つである、菊科の多年草「フジバカマ」の花を食し体力を付け南に戻る。春は四国のみかんの花を目指し、当地を通過することはないが、大分県の姫島には6月、海岸植物「スナビキソウ」の花に集まる。アサギマダラは山形県蔵王スキー場から、沖縄県与那国島に渡っていたので、下関経由を考慮すると、2500km以上、飛んだことになる。

勝山御殿は、1863年（文久3）攘夷戦で外国船の砲撃を避けるために、海辺の長府藩主邸を山間に移したもので、8ケ月で完工している。

尾根を北から西へと回り、鞍部から南に砂子多川（すなこたがわ）が流れる。昔は土石流が頻発し、この名になり、人家流失と多数の死者も出たが、砂防堤が多く築かれて治まっている。この周辺は猪の棲息地で、よく見かける。

ここを登ると、勝山（361m）で、ここも城跡であり、南の青山城（288m）との戦いがあり、大内義長が最後に籠城した城で、石垣もある。分水嶺は頂上まで登らず、7合目の郭跡から北尾根をくだり、中国自動車道を跨ぎ、道祖峠にでる。峠を東に下ると毘沙門天があり、戦の前に国王司山から、ここに難を避けていた。

下関中央霊園の東南端から尾根に取付き、小嶽山（227m）を越え、道祖峠の石碑に「奉納大乗妙典天保七年」とあるのを見る、昭和40年頃までは利用された道だった。

三等三角点（岩河内359.7m）と表山（390m）

と二つのピークには石組があり、ここも中世の山城であったのだろう。相の木山（385m）、私は同行しなかったが、踏査隊は相の木山を越えていないだろう、道は東側を捲いている。これらを越えて市道の奥山峠の西には市環境センターが高い煙突で煙を吐いている。北に西へと登り、千把焚（501m）に達す。

樹木で視界はゼロだが、雨乞いで火を焚く平坦地は充分に有り、明治頃に削平したものである。南から西へと下ると亀ヶ原。ここは、分水界であり、北側の水は瀬戸内海に流れ、南の流れは日本海に注ぐ。1710年（宝永7）7月、2年前からの凶作に耐えかねた浮石村の庄屋と畔頭、百姓5名が、ここで休息中の幕府巡検使に強訴をし、長府で死罪になったが、残った村人は年貢が減じられた。茶店跡には「浮石義民直訴之地」の記念碑がある。

ここから南の水は綾羅木川で、砂子多川と合流し、稲作による弥生時代から人の営みを支え、綾羅木郷台地遺跡、伊倉遺跡らがある。

内務省の英人技師W.K.バルトンの選地、指導により、100年前からは、内日貯水池が完成し、日本で9番目の近代水道として使われ、これらの施設は国の登録有形文化財になっている。

西に尾根を詰め、林道を越えて上がると汐見岩（470m）で、南の四等三角点（桜ヶ谷447.3m）は分水嶺から外れる。北隣の広瀬コブ（473m）を越えて、急坂を登ると鬼ヶ城（三等三角点619.6m）になる。鬼ヶ城については『新日本山岳誌』をめくってください。但し、山名が「鬼ケ城山」となっているが「鬼ヶ城」が正しく「山」は除く。

そして関門海峡をわたると

北九州支部　関口興洋

歴史の舞台

壇ノ浦の沖合いはご承知のとおり、1185年の源平合戦の終結地点であり、二位の尼に抱かれた安徳天皇崩御の地である。近くには安徳天皇と平家一門を祭る赤間神宮があり、春には先帝祭で賑わう。

また、少し離れた舟島は宮本武蔵と佐々木小次郎決闘の場所として有名であり、現在は巌流島として観光地となっている。門司と下関からそれぞれ観光渡し舟が出ている。なにやら関門海峡の観光案内めいてきたが、青函トンネルとは違い簡単に歩ける市民の遊歩道となっている。雨天でも濡れないで、ウオーキングやジョッギングができるので、運動のために利用している関門市民も少なくない。

ここで、日本山岳会との接点にも触れておきたい。関門海峡を見下ろす門司の風師山（362m、九州百名山）には、日本山岳会の、槇有恒元会長の歌碑がある。ここに槇さんをご案内したのは、風師早朝登山会を主宰され、永年にわたり地元登山界の発展に尽くされた堤甚五郎先輩（4162）とお聞きしている。

「この頂に立つ幸福の輝きはこれをとらふる街を知りし山人たちの力によるものなり」

堤さんは2003年永年会員の顕彰式直前、残念なことに逝去なされ、式への参列は叶わなかった。とりとめもなく記したが、機会があれば、是非一度歩いて歴史をひもといていただきたいと願っている。（写真は北九州支部＜D＞ブロックの夏に掲載）

余話

関門トンネルを歩く

北九州支部　関口興洋

北は宗谷岬より南は佐多岬まで線で結ぶことが大きなコンセプトになっている、日本列島中央分水嶺の踏査である。本部から、北海道・本州間の青函トンネルを会員が歩いたという情報と共に、「関門トンネルは如何」というテーマをもらった。

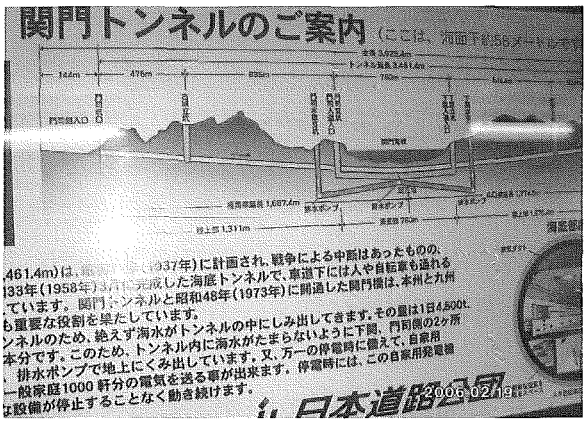
本州・九州間は関門海峡で隔てられているが、現在、交通動脈として4本の大きなルートがある。

1. 昭和17年に開通した関門鉄道トンネル（山陽線の下関～門司間）
2. 昭和33年に開通の関門トンネル（自動車専用の国道2号線と徒歩・自転車専用の人道を併設）
3. 昭和48年に開通した関門橋（中国道と九州道を結ぶ高速道路用吊橋）
4. 昭和49年に開通した山陽新幹線鉄道トンネル（新下関～小倉間）

2006年2月19日（日）、当支部の中央分水嶺踏査委員会の板倉委員長と二人で、門司側の和布刈人道入り口よりエレベーターで関門トンネルの人道に降り立った。現在通行料は無料、自転車は20円である。

〈関門トンネルの概要〉

全長：3925.0m、
　　トンネル延長3461.4m、
　　海底部 780m
構造：車道2車線、幅員7.5m、
　　有効高4.53m、人道幅員3.1m、
　　高さ2.53m　勾配：最急4%、
　　最深部車道面の東京湾中等潮位からの深さ－55.91m
人道用エレベーター：大型の定員40人、小型定員20人、下関、門司立坑に各1台

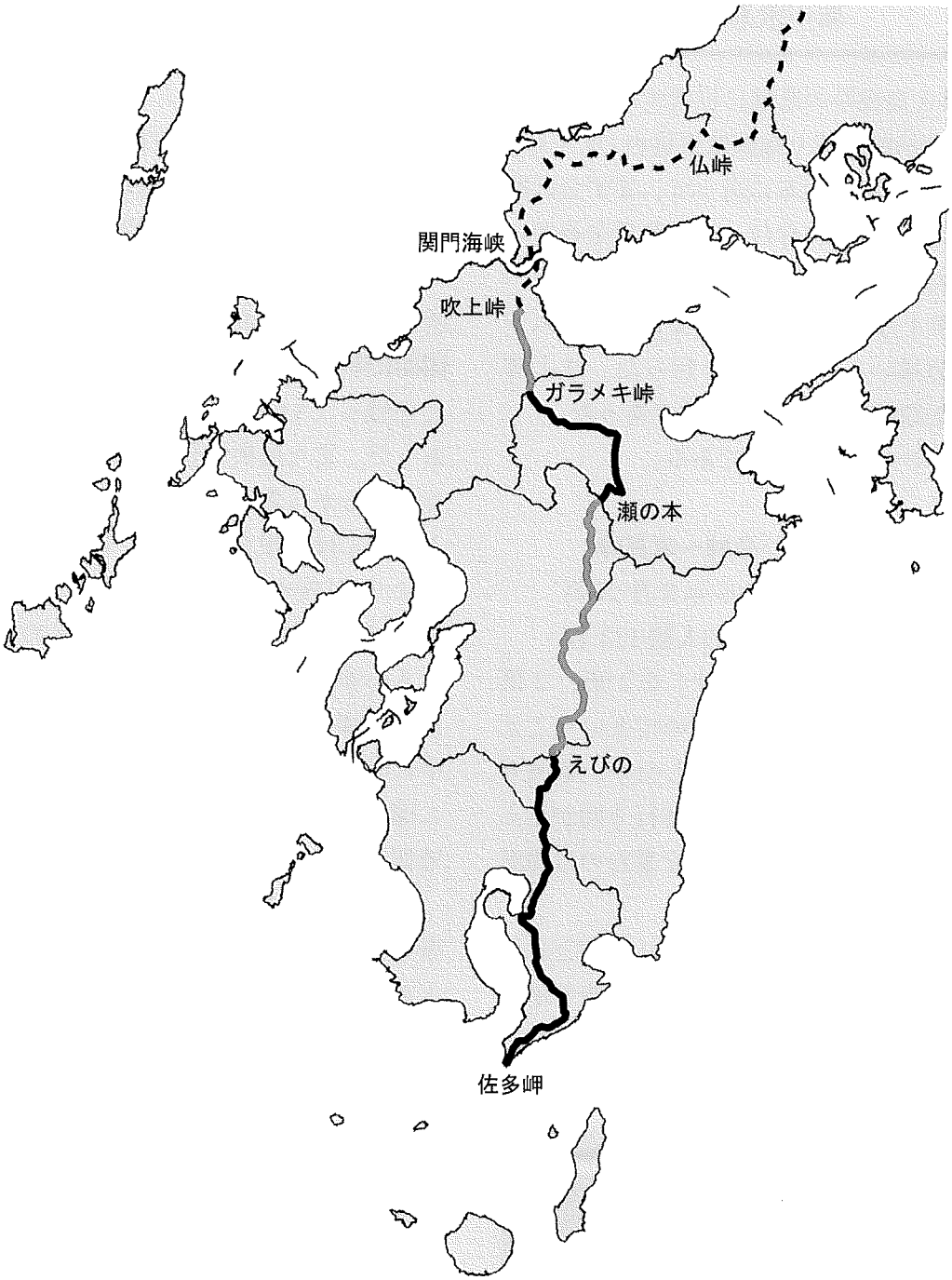


関門人道トンネル内の案内板

利用可能時間帯は6時から22時の間
下関側（壇ノ浦）地下55.4m　12階
　　所要時間片道30秒
門司側（和布刈）地下60.1m　14階
　　所要時間片道40秒
歩行が許されるのは人道部分780mのみ
建設費：57億円
　　（昭和32年度換算約80億円）
工事期間：昭和14年～昭和33年
　　（昭和20～26年は中断）
建設に従事した人員：延べ450万人、
　　殉職者53人
海水のしみだし量：4800t/日
　　（ドラム缶換算24000本）
海水の排出：下関と門司側の2ケ所に
　　水抜き用の立坑を設けて、
　　排水ポンプで地上にくみ出す。
自家用発電設備：一般家庭1000軒分の供給能力を有す

人道部分の780mは車道の下に当たるため、自動車の騒音が結構耳につく。両壁には、魚の絵が描かれ、圧迫感は受けない幼稚園的な雰囲気のある楽しい道である。ほぼ真ん中付近に山口県と福岡県の境界線が表示されている。

九州ブロック



山口地区

仏峠～野道山～竜門岳～花見山～火の山　約 172 km

阿武川水系～友田川水系――――佐渡川水系～木屋川水系

北九州地区

めかり～風師山～貫山～(平尾台)吹上峠　約 49 km

紫川水系――――瀬戸内海

山口県と島根県の県境に位置する「仏峠」から、関門海峡を渡り福岡県平尾台「吹上峠」に至る区間を踏査するに当って、まず全区間を4つの担当区域に分け、支部会員全員がいずれかの班に所属する体制を作り上げた。

2004年4月11日、仏峠に板倉委員長以下18名が勢揃いし、出発式を行った。吹上峠での完結式は2005年5月8日であった。
以下はブロック毎の報告である。

＜A ブロック＞仏峠～木戸峠

2004年4月11日～2005年3月27日
踏査日数20日、延べ参加人数122名

4月11日、「仏峠～野道峠」を1班、2班に分かれてスタートした。初めてということもあって、多くの会員が参加したが、藪漕ぎに慣れず鬱葱とした樹林帯と進行方向が見えない背丈ほどのスズタケの中を進むのは勇気のいることであった。

先輩の方から知恵を借りながら地図とにらめっこし、入山しやすい山域から踏査を始めた。その結果、藪が深く取り付く林道も無い難しいところが残り、終盤が大変であった。

藪こぎ

夏季はスズメバチとマムシを避けるため活動を中止し、晩秋から活動を再開した。

季節の変わりは早く秋から直ぐ積雪期がやってきた。クマササは雪のあるほうが歩きやすいが、反面、三角点が確認できず同じ場所に何回も通ったものである。2005年は全国的に熊が多く出没し、歩きながら熊の爪あとが残っている木を何本か見つけたこともあった。また尾根を登るときは目標の山がよく見えるから迷うことはないが、下りになると、時には尾根を間違え、また見落したりすることが度々あった。がそのような時、GPSは現在地を確認できて、早めに修正できる心強い味方であった。70代の先輩の方々に大活躍していただき、密集したスズタケの中に全身で割り込むように入って行かれる姿に頭の下がる思いがした。100m進むのに1時間かかったこともあった。

分水嶺踏査を機会に新しい会員も増え山口県在住の京都支部会員や広島支部など他支部との交流もできた。今回の踏査は北九州支部にとって大変有意義な事業であったと思う。

（原　広美　記）

＜B ブロック＞木戸峠～大ヶ峠

2004年10月24日～2005年1月30日
踏査日数11日、延べ参加人数82名

分水嶺とはなんぞや？

全員で近くの福智山に登り、まず分水嶺を理解することから始めた。

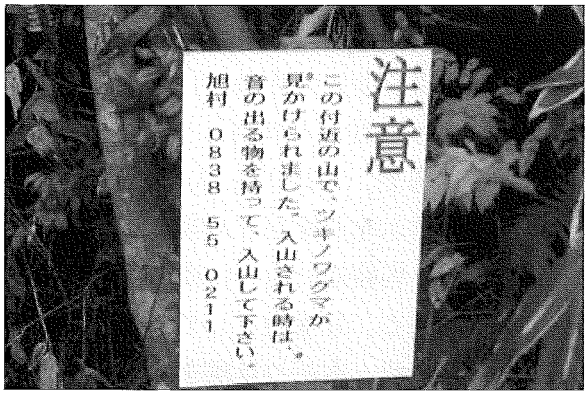
担当区域を地図で確認したが、殆ど未踏の山域である。山口の会員より山や峠に関する資料を入手し、道路地図でアクセスを確認。

山口県内を車で2回走り回り、峠や登山口を確認、下山後の車の回収時間などを算定した。1日の歩行距離をカシミールで計算し、9回で終了の計画を作成した。GPSの操作訓練などの準備段階をへて、いよいよ10月24日から踏査を開始した。その後はほとんど毎週、時には週2回歩き、予定より2回増えたが11回で踏査を完了した。

自宅から登山口までの走行距離は往復で平均270km。全行程約3000km。他ブロックの応援を含めると4000kmに達した。会員の夫も全行程行動を共にし、帰途は睡魔と闘いながら交代で運転したものであった。

普段の山行は藪漕ぎなどのない整備された登山道がほとんどであったが、今回踏査に参加し地図、コンパスを駆使し、鉈、鎌、鋏を持って山に入る貴重な経験をした。また、九州では見られない「熊注意」の看板に出会い、実際に熊が捕獲された話などを耳にした時には身震いしたものである。峠には必ずと言っていいほどお地蔵様が祀られていた。昔の旅人の厚い信仰心を垣間見た思いがする。

台風の影響で林道が崩壊し、風倒木で前途が塞がれ難儀したこともあったが、今となっては良い思い出である。皆さんの協力のお蔭で踏査も無事終了し、創立後まだ日の浅い北九州支部としては、会員同士の結束力が培われたことと思われる。　（西村　信子　記）



熊注意の看板

＜Cブロック＞大ヶ峠～壇ノ浦

2004年5月5日～2005年4月14日

一部について2006年2月19、21日に再踏査。

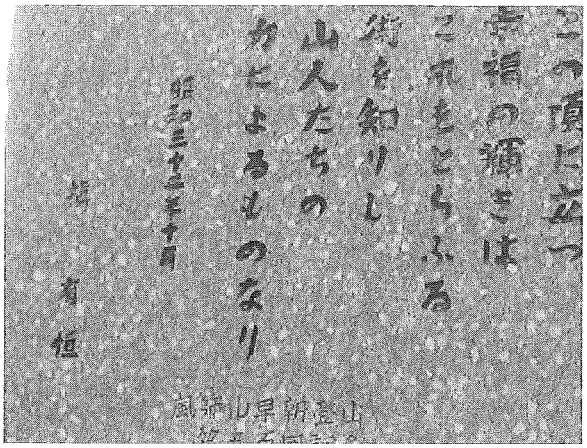
踏査日数22日、延べ参加人数109名

一位ガ岳、鬼が城を経由するこの区間を、地図で確認すると、ほぼ全域が里山で道標も無く困難が予想された。また、北九州支部の会員の大半は九州地区の山域には詳しいが、山口県の里山はほとんどが未知の山域である。このため、各担当者が事前に入山地点と下山地点の確認を行い、かつ町役場や教育委員会に問い合わせて、コースの状態や熊の出没状況を確かめた。

一方、偵察のための山行を重ね、実際に地元の住人にコースの状態を尋ね、入念な計画をたてた。併せて、下関山岳会の会員が全面的に協力して下さり、資料送付の上、本番で道案内をしていただいた。改めて感謝の気持を捧げたい。

さて、実際の踏査は、コンパスと1/25000地形図を駆使しながらの山行となった。鉈や鎌を持っての藪漕ぎで疲れ、コースから逸脱してしまい何度も後戻りした。特に下りでは、地図とコンパスの向きを完全に一致させていても、下る尾根を間違え、辿り着いてみれば「想定外」の集落だった、というケースが度々あった。改めて、読図の大切さを痛感した。

又山口県内では、「大峠」と書いて」「おおたお、おおがたお、おおとう」と呼ぶ場所が70箇所以上もある。峠を「たお」というのは中国地方に広く分布する古い呼び名であり、旅の安全を祈って、手向けているところが峠（たお）である。地図上の峠のふり仮名は、ほとんどが「たお」となっている。地元の人も「たお」、「とう」、「だお」と言っている。　（磯野　文雄　記）



風師山にある槇元会長の歌碑

＜D ブロック＞壇ノ浦～吹上峠

2005 年 3 月 6 日～ 2005 年 5 月 8 日

踏査日数 7 日、延べ参加人数 56 名

担当区域は北九州市の市街地に接しているため A、B、C ブロックに比べアプローチが短く、短期間で効率的な踏査ができた。砂利山周辺には野犬が集団で徘徊する危険な場所もあり、また和布刈～風師山までの標高 100 ～ 300m の里山は藪漕ぎもあり地形が緩やかで分水嶺を探すのに苦労した。竹林も多く、猪が好物のたけのこを掘り返した跡が目立った。都市近郊であるが自然林で覆われているため猪が多いのが特徴である。

2005 年 3 月 20 日、風師山手前の尾根で福岡県西方沖地震に遭遇。風師山には槇有恒元会長の歌碑がある。鹿喰峠付近はかなりの藪であるが、戸の上山の稜線に取り付けば足立山までは企救自然歩道である。

市街地に入り辺湯川から志井までは紫川水系と竹馬川水系が入り組んでおり、水系を横切らないように慎重に歩いた。志井～貫山は尾根が入り組み枝尾根も多く、分水嶺を判断するのに苦労した。

貫山からは本部の分水嶺データによると、広谷～平尾～平尾台～竜ヶ鼻となっている。北九州支部では、貫山～四方台～大平山～吹上峠の尾根の方が分水嶺の地形としてふさわしいと判断し、本部には当支部の見解について諒承して頂き踏査した。この件は、やや詳しく下欄に記した。踏査を担当し、このような問題に遭遇できたことは大変有意義であった。

その後、本部より本州と九州を線で繋ぎたいという要請があり、別に記載があるように、関門国道トンネル(人道)を歩いてきた。

2005 年 5 月 8 日、平尾台のキャンプ場で支部長、副支部長の出席の下、盛大な完結パーティを挙行し、今回の踏査が無事終了したことを祝った。

全参加者のご協力を心より感謝申上げます。　　(板倉　健一　記)

(A、B、C、D ブロック合計)

延べ踏査日数 60 日

延べ参加人数 369 名

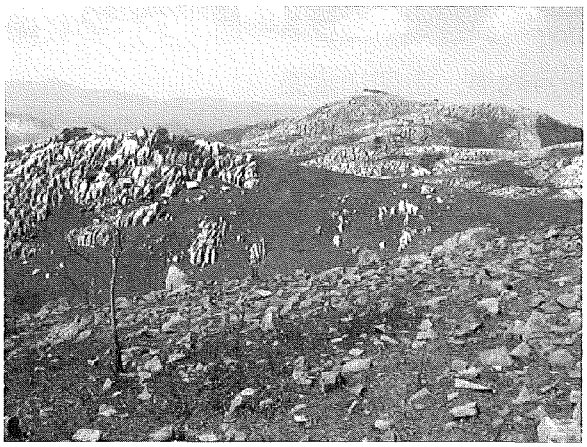
編集文責：事務局　関口　興洋

地下にかくれた分水界――平尾台

2005 年 5 月 8 日、貫山～平尾台(吹上峠)を踏査し、北九州支部の担当である西中国山地の仏峠から平尾台までの踏査を完了した。

この最終区間のルートについて、本部の資料と当支部の見方との間に相違のある事が判った。

本部からの分水嶺データによると、K017 (貫山) から K023 (竜ガ鼻) を結ぶ、主に自治体の境界を辿る南東縁としているが、当支部は地形と高度から判断して、K017 (貫山) から四方台 (610m) ～大平山 (587m) ～吹上峠を結ぶ北西縁が分水嶺にふさわしいと判断した。客観的に南東の稜線より北西の稜線の方が高く、分水嶺として扱うのが妥当と思われるので、本部の見解を伺った。



平尾台南側よりみた太平山とカルスト地形

本部より頂いた専門家（日本洞窟学会評議員の浦田健作氏）の見解では、「平尾台はカルスト台地であるため、地表水系がなく、地下水系を形成している。そのため地表の尾根が分水界になっていない。分水嶺の候補にあがっている二つのルートはともに分水界ではなく、分水界は地表地形とは無関係にほぼ台地中央を通ることがわかっている。つまり平尾台には分水界はあっても分水嶺は存在しない場所である」と。

この見解に従うと、日本の中央分水嶺は平尾台で中断することになる。これでは北の宗谷岬から南の佐多岬までを線で結ぶことができなくなる。本部の中央分水嶺踏査委員会での審議を経て次のような結論を頂いた。

「学問的見解はともかくとして、今回の踏査では分水嶺を線で結ぶことに大きな意義があるので、どちらのルートをとるかは貴支部に一任する」と。

こうした経過で、当支部の見解に基づくルートを中央分水嶺とみなして踏査を実施した。　（板倉　健一　記）

解説

地表の分水界と地下の分水界

小疇　尚

川の水の源になる降雨や融雪水は、裸の岩山でないかぎり直ちに地表を流れるわけではなく、まず土や岩の隙間をつたって地中に浸透していく。滲みこむ速さを上回るような豪雨や急激な融雪がおこると、余った水が地表を流れるが、大部分は地下水になって地下を流れる。それが地下水系で、隣接する水系との境界には地下水分水界が存在する。

地下水は谷頭や谷底で地表に湧出して川の水を涵養しているので、厳密にいえば分水界を決定するには、地表水の分水界のみでなく地下水のそれも考慮する必要がある。地表水の分水界は地形で決まるので、比較的容易にその位置を判断できる。

しかし地下水系は地質構造の影響を受けるので、地表水のそれと一致しないことがある。地下水系は目に見えないので水位、水温、pH、溶存物質の種類と量など地下水の観測や分析のほか、地下水に食塩などの電解質や蛍光染料などの色素、放射性同位体のトリチウムのようなトレーサーを注入して行方を追跡するほかに知る方法がない。そのため地下分水界の正確な位置が判明しているところは少なく、一般的に分水界といえば地表水のそれをさしている。

地下水分水界が地表のそれと一致しないことが多いのは、割れ目が多く二酸化炭素を含む水に溶ける石灰岩地の地下水系で、中国やオーストラリアでは地表の川が、地形的には地表の分水界になる石灰岩の山を天然のトンネルで貫通している例もある。日本でも石灰岩台地の秋吉台や平尾台では、地下水分水界が地表の分水界と一致していないことが明らかにされている。

福岡支部

北九州地区

(平尾台)吹上峠～竜ヶ鼻～戸立峠～英彦山～ガラメキ峠　約 42 km

遠賀川、筑後川水系――――瀬戸内海、山国川水系

秋吉台と共に日本有数のカルスト台地を持つ平尾台は、天然記念物で国定公園にも指定されている。その南西部の吹上峠からが福岡支部の担当となる。小さなピナクルが羊の群れを思わせる羊群原をバックに、最初の三角点を目指す。吹上峠を通る「県道 28 号線」より北東側を自然保護区域、南西側を産業開発地域として現在でも石灰岩を採掘している。ほとんどの採掘場が三菱マテリアルの管轄であるが、最初の三角点地点は削り取られ、眼下に見渡す採掘場は住友セメント所有であった。関係者に三角点を尋ねると、移転し、その場所は不明という。現場は通行できないので、次の採掘場の三菱マテリアルへと向かう。事前にお伺いを立てておいたのでスムーズに対応して戴いた。それにしても日本とは思えないほど広大な露天掘りの現場である。

住友セメント採掘場を望む

次の踏査ルートの竜ヶ鼻へは激しい薮こぎとなり、下りには石灰岩質地域を抜け出し、味見峠に出た。分水嶺はここより標高 4 ～ 500m の小ピークの縦走となるが、その山頂には戦国時代の山城の跡が点々と残っている。特に障子ケ岳（427m）の頂上の砦跡「牙城跡」は、足利一族の山城跡で平坦地からもはっきりと遠望できる。

その間の味見峠、仲哀峠は瀬戸内海から九州内地への品物移動の跡が見て取れる。それにしても、標高も低く、里にも近いため、これらの山々はほとんどが杉、桧の人造林である。また手入れも行き届いていないため、一部の地域を除き九州特有の薮と化している。その杉、桧の樹皮が鹿に食い荒らされる被害が増え始めている。さらに踏査を進めるにつれ、1000m 近くになると英彦山の威容が次第に現れてくる。1 月に岩石山から望むその山容は、雪を着け修験者たちを奮い立たせるように、凜として威厳を放っている。いつの間にか我々が歩いている分水嶺は英彦山への、峰入りのルートであったことに気付いた。

日本を代表する山岳宗教の霊山であった「英彦山」はその勢力は九州全域にまで及んでいた。最盛期には 800 の宿坊と 3000 人の宗徒で栄えたという。この霊山への詣でには、福岡支部の総意で出かけるべきではないか、ふとそう思った。案の定、この懐が深いルートには会員諸氏の意気も高く、1 泊 2 日の山行には 14 名の参加となった。

2005 年 4 月 19 日、北坂本より踏査開始。上部の『県道 500 号線』までは杉林、途中で鹿の抜け落ちた角を拾う。県道よりキャンプ場を通過し、傾斜のきつい自然林を喘ぎながら登って行く。1000m を越えると身の丈以上のスズダケが密集してとても進みづらい。ブナの巨木の倒木に上がりこむと、頭上に英彦山神社の上宮が姿を現した。修験者の苦労を少し垣間見た感じである。

ルートは南岳へと連なるが、ここからがこの踏査一番の難所となる。数年来の花芽をつけた石楠花の枝に苦しみ、足元の下降しやすい場所を探す。20m 懸垂下降し、さらに不安定な稜線を下降していく。夕方近くに、ようやくこの日の終了点の篭り水峠に到着した。

スズダケを分け英彦山神社がある中岳を望む

明くる4月20日、本日で福岡支部担当の「日本分水嶺踏査」は終了となる予定である。英彦山から岳滅鬼山へのルートは修験者の峰入りのコースでもあり、福岡県と大分県の県境でもある。

昨日苦労した篭り水峠より、多少踏み跡が残るスズダケの稜線を辿る。途中、猫の丸尾からは耶馬渓の山々、遠くには九重連山を望むことができる。2時間ほどで大分県の分水嶺に到着した。ここからも踏み麟は確認できるが、照葉樹林帯が続いている。上塚山を過ぎると標高も低くなり、人造林が増えてくる。特に鹿の被害が多いようで鹿避けネットが延々と張り巡らしてある。途中で首がネットに絡まって死んでいる子鹿と、角が絡まって白骨化した頭蓋骨がさらし者のように放置されているのを見かけた。

15時30分、最終踏査地のガラメキ峠に到着した。その場所は地図上では幅1.5m未満の道路（つまり破線）の三叉路になっているのだが、2車線の立派な道路が走っている。三叉路の祖間道を探したが見つからない。地形的にも高度もほぼ間違いない。道路傍に「ガラメキ・・」と読める石碑が建っていた。快い疲れを感じながら藤原の集落へ下山する。途中で前支部長の深田氏と松本氏からの出迎えを受けた。

（浦　一美　記）

東九州地区

ガラメキ峠～大将陣山～大石峠～福万山～九重山～瀬の本　約 221 km

筑後川水系――――山国川、駅館川、大分川、大野川水系

担当区域の概要

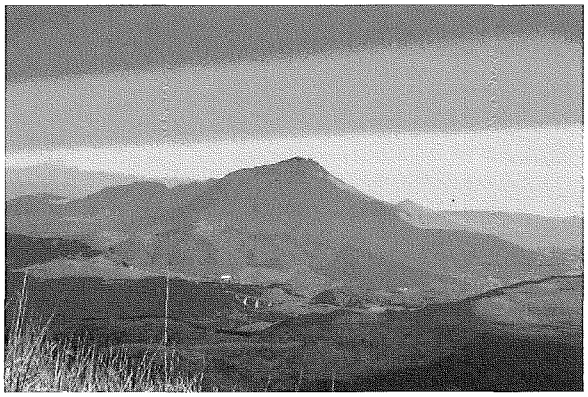
大分県内を通過する中央分水嶺は、太平洋側（瀬戸内海）は山国川、駅館川、大分川、大野川の四河川の源流であるが、東シナ海側（有明海）は全て筑後川の源流となっている。この間には中岳（1791m、九州本土最高峰）など九重連峰の主要峰を縫って通過している部分もあるが、他の稜線の大部分は海抜7～800m 足らずの高さでしかない。しかし、そのほとんどが、九州の低山に特有の濃厚なブッシュで、サルトリイバラ、ノイバラ、あるいはモミジバイチゴなどのキイチゴのたぐい、時にはジャケツイバラのような手強い草木が繁茂するところである。

当支部で毎月行っている月例山行では、ヤブ山歩きは日常的で、また 10 年ほど前には県境を歩くというテーマで長いヤブの稜線歩きを経験し、7 年前には『別府湾リレー登山』と銘うって、別府湾を取り巻く稜線の全区間を完全踏査する取り組みを行った経験がある。これらの体験は、今回のヤブの稜線歩きに大いに役立ったといえる。

踏査の計画と概要

踏査にあたっては全区間を 9 つに分けて、全会員及び会友を 9 班に分け、支部役員 9 名を各班の踏査責任者とした。事前調査を 2004 年 4 月から同年 7 月の期間とし、2004 年 8 月から約 1 年の間を本格踏査期間として、具体的実施は責任者が自班の会員と協議の上で実施することとした。この方式は別府湾リレー登山の際と同じである。

2004 年 7 月 25 日に、支部月例山行で野稲岳稜線の踏査を行ったのが第 1 回で、これが支部におけるスタートのイベントとなった。そして 2005 年 6 月 6 日に最後の内匠の池から弓ノ木の峠の間を終えて全ての踏査を完了



福万山より由布岳

した。それを記念して 7 月 24 日、「日本山岳会百周年記念登山大会」及び「第 4 回青少年体験登山大会」を兼ねて「中央分水嶺踏査完了記念登山大会」を実施し、これをゴールのイベントとした。この大会には一般の応募者も含めて 53 名の参加をみた。本踏査の延べ日数は 34 日、延べ参加人員 169 名となっており、予備調査や最後の記念登山大会を入れれば、延べ日数で約 100 日、延べ参加人員は 500 名を越す数字であった。以下その中のエピソードを報告する。

① 嵐を衝いて

全天候型山行を自認する我が支部員。予定していた分水嶺踏査を行うべく、超大型台風 16 号接近の予報を聞きながら、しのつく雨と風の中を、予定のコースへ向けて 2 台の車を走らせる 4 名がいた。しかし、ワイパーも効かないほど吹き付ける雨風に、さすがの支部員も携帯電話でにわか協議。暴風雨の中のヤブこぎ撤回を決める。さりとてこのまま全面撤退は日本山岳会員のプライドが許さない？そこで急遽行き先変更とし、決めたのが水分峠付近の稜線である。間近に九州横断道路が蛇行しており、いざとなれば何時でもエスケープできると、勇んで稜線に踏み込む。ところがいかに心易い浅い稜線とはいえ、ヤ

ブに踏み込めばなかなか手強い。GPSは悪天候で常に電波ロストだ。好天時なら1時間もあれば通過できる稜線を、彷徨い歩くこと3時間。稜線を選び間違えたり、暴風雨に波打つ萱野と格闘したりしながら目的の水分峠到着。「さすが日本山岳会員」と当人たちだけ大満足。あとで仲間に報告すれば「何もそこまでしなくても…」と笑われても…。

② 倒木を踏み越えたり

耶馬日田英彦山国定公園の「一尺八寸山」や「立羽田」「鶴が原」「内匠」「弓の木台」「黒岳」など名勝耶馬渓の指定景勝地を中央分水嶺が走っている。

耶馬渓の景観は奇岩・奇峰と岩稜に立つ赤松、それに紅葉や若葉の美しい落葉樹の取り合わせが景色の秀麗さを際だたせていた。しかし、2～30年ほど前にこの一帯を襲ったマツクイムシの被害で、多くの赤松を枯死させてしまっている。踏査する上で難渋したのがブッシュと同時にこれらの倒木である。もともと稜線に生育する赤松が枯死して倒木となると、全て稜線を塞ぐ格好となる。右に左に避けたり踏み越えたりくぐったりの悪戦苦闘の連続である。しかし、赤松の倒木よりももっと手を焼いたのがスギ、ヒノキの風倒木である。1991年の台風19号など、近年の台風で植林地は膨大な被害を受け、多くの風倒木が放置されている。至る所でこれに難渋させられたが、中でも内匠の池から鹿倉峠に至るルートでは、それはおびただしい風倒木帯が行く手を塞いでいて、踏査隊を悩ませた。迂回するにしても、何処まで回ればよいのか分からないほどの広い山腹が縦横に倒れたスギで埋められていた。中央突破しかないと踏み込むが、生半可で通過できるようなところではなかった。鉈で切ったり、折ったり、踏み越えたり、潜ったりで、高度差わずか40m足らずの山腹を登るのに1時間以上を要したところもあった。

③岩を攀じ、ラッセルしても

「忠実に分水嶺上を歩くことを基本とする」が互いの申し合わせである。地図と現地の地形とを首っ引きで歩く姿はひたむきである。星生山の東の稜線は大きな岩が突出して連なる岩稜である。その岩の上に上がったり、下ったりしながら三点確保で登稜する集団がある。我が分水嶺踏査隊である。その数メートル横の草の中には楽に歩ける道があるが、あえてそこを通らずに…。

福万山の肩からカルト山に至る間は、稜線付近のみスズカケが密集している。そこに一週間前の積雪が残り、深いところでは30cm近くある。稜線には縫うように林道が走っている。しかし忠実に稜線を歩く踏査隊。スズタケの上に雪が積もった中のラッセルは生半可ではない。雪を叩き落としたり、踏みつけたりしながらスズタケを分けて進む。その稜線の間近には林道が沿って走っており、少し下ればスズタケはない。しかし踏査隊はあえてヤブを分ける。

④ 自然への心遣い

そんな踏査隊も分水嶺から逸れることもある。区間の中には耶馬日田英彦山国定公園区間が43km、阿蘇くじゅう国立公園区間が37kmと、大半が自然公園区域内である。九重連峰の大船山のミヤマキリシマ群落、久住山のコケモモ群落は天然記念物に指定され、同時に国立園法の特別保護区に指定されている。当然、自然に与える影響は最小限度にとどめなければならない。平治岳の北の稜線や大船山の北の稜線は、登山道が分水嶺稜線から数十m、時には100m近く離れているところもある。が、あえて樹林に踏み込まずに道を歩くことにした。自然保護は大切な山屋の心遣いだ。大船山から鉢窪の間は特別保護区であることもさりながら、ミヤマキリシマやウツギの猛烈なブッシュで、特に山頂直下の稜線は獣の通り道すらない。とうてい人の踏み込める所ではないので迂回した。

（飯田　勝之　記）

余話

峠と山と湖

東九州支部　飯田　勝之

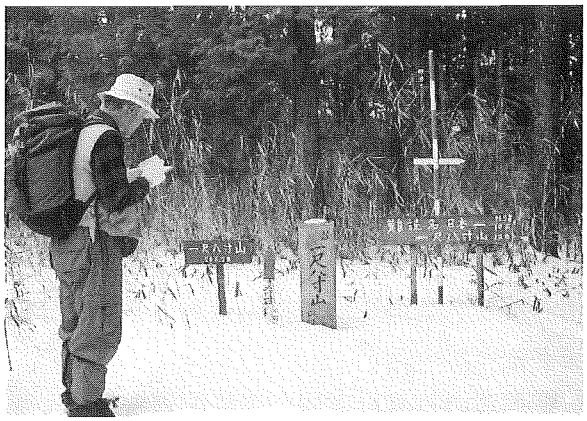
「ガラメキ峠」

当支部担当区間の北の始まりが、福岡県との県境から5キロほど県内に入ったガラメキ峠からである。このかなり変わった峠の名前の由来は、地元の人も知らないらしい。今はアスファルト舗装の林道が峠をオープンカットしているが、数年前に林道が出来るまではここは小さな鞍部で、三方に杣道が分かれており、峠の脇には高さ30cm、幅20cmほどの四角い石の道標があり、頭には矢印と地名が彫り込まれていた。石柱は今、林道の脇に…

「一尺八寸山」

上の峠から15キロほど進んだ中央分水嶺上には一尺八寸山（706.7m）がある。この字を何の予備知識もなしに「みおやま」と読める人は皆無であろう。山頂には、三等三角点の横に「難読地名日本一」と書かれたコンクリートの石碑が建っている。ある同好の会が難しい読みの山を候補に上げ、投票によって日本一を募集したところ、圧倒的多数の票を得てここが日本一に選ばれ、その記念に建てられたものである。

ガラメキ峠の石柱



一尺八寸山の山頂　難読地名日本一の碑

名前の由来について、こんな面白い昔話：

むかし日田盆地をとりまく山の中には、シシや、シカなど、たくさんの獣がすんでいた。特に有田という村には、よその村より沢山の獣がいて、田んぼや畑を荒らしまわるので、村人たちは困ってしまった。困ったのは村人だけでなく、殿様も困ってしまった。

田畑を荒され、村人たちの収穫が減ると年貢が納められなくなるからである。そこで、殿様は家来たちに命じて大がかりな狩りを行った。その時に捕れた獲物の中でひときわ目をひいたのが三頭の大イノシシである。その三頭のイノシシの尾を切ってつなぎ合せて計ってみると、なんと「一尺八寸」もあった。それからというもの、村人たちは、三頭の大イノシシのいた山のことを「一尺八寸」と書いて「三尾山」つまり「みおやま」と、よぶようになったとのこと。

「月出山岳」

この一尺八寸山から南方約五キロのところに、月出山岳（708.7 m）が見える。ここは中央分水嶺からは少し離れているが、さきの難読地名投票で第三位に選ばれた山で、「か

んとうだけ」と読む。一尺八寸山から見ると三つのピークを持つ東西に長い山であるが、日田盆地から見ると実に端正な三角形をしていて、「日田富士」の別名を持つ。この山にもこんな説話がある。

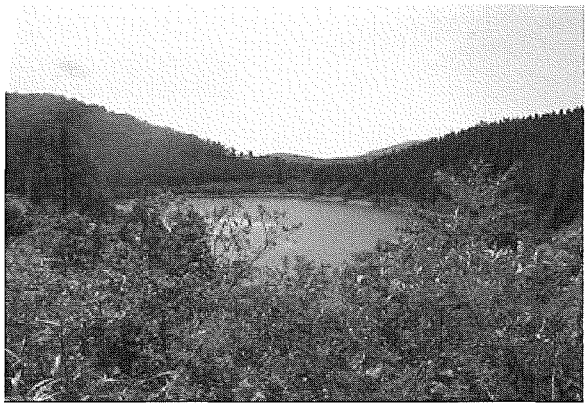
九州各地の天領（幕府直轄領地）を治める日田には江戸から代官が派遣されるが、ある時赴任した代官の姫君がしばらくの間、たいそう江戸を懐かしんで暮らした。侍女たちに「江戸はどちらの方角か？」と聴き、「彼方でございます」と東にある月出山岳を指して教えられると、何時もその山の方を向いては「彼方が関東か。あの向こうに江戸があるのか」と、口癖のように言っていた。そこからこの名前が付けられたとのこと。また、歴代代官が富士に似た秀峰麗美な姿を見ては江戸への郷愁を誘ったといわれ、その名も「かんとう（関東）」に因んだともいわれている。

「立石池」

蛇越岳と立石山の間の稜線には「立石池」という、県内では二番目に大きい湖がある。この湖にはこんな伝説が残る。

むかし、立石池のすぐそばに小さな庵寺があり、そこには立石坊という若い坊さんが独りで住んでいた。立石は仏道の戒めを固く守り、道心堅固、若いながらも有徳の僧として、里人の敬愛をうけていた。立石は夜が明けると由布院の里に托鉢に出て、日暮れに庵に帰って一心に読経するという毎日をくりかえしていた。

ある日の夕方庵に帰ってみると、美しい見知らぬ娘が庵に上がりこんでいて、何と、夕食の用意までしてあった。立石は驚き、ただ茫然と立ちすくすのみ。両手をついて、にっこりと立石を見上げる娘の瞳と立石の眼が合った瞬間、立石の身体は魂の抜けたようになってしまった。魂を奪われた立石はすっかり人が変わって、ただもう娘の命ずるままに



蛇越峠付近より見る立石池

行動するあやつり人形のようになってしまった。

娘は、こうして立石と一緒に庵で生活するようになり、立石はすっかり生臭坊主になってしまい、娘の命ずるままに、里へ降りて托鉢をしては、いくぶんかの生計の糧を得てくる毎日が続いた。

娘は立石に「外から帰ったら必ず戸を叩いてから開けるのですよ」と、口ぐせのように言っていた。ある時、里人から少量の酒の喜捨をうけて帰って来た立石は、日ごろの戒めをすっかり忘れて、声もかけずに娘の部屋の戸を開けてしまった。するとあろうことか、部屋の中には娘の姿はなく、かわりに一匹の大蛇がとぐろを巻いて寝ていたのである。

立石の悲鳴に目を覚ました大蛇は娘の姿に戻り、歯の根も合わずにぶるぶる震えている立石に向かい、「あれほど私がお願いしていたのに、なぜ声をかけてくれなかった。正体を見られては、致し方ない。」と、一陣の風を呼び、恐しい形相で、髪をふり乱して飛び出し、池の中へと消えていった。

見ていた立石は大蛇の毒気にあてられ、驚きの目を見張ったままその場で石に化してしまった。この石が、今も小田ノ池の西方にある立石岩で、大蛇が越えて行った峠が蛇越峠だと言われている。

自衛隊演習場内を踏査！

東九州支部　飯田勝之

「阿蘇くじゅう国立公園」とその周辺には、阿蘇外輪山や久住、飯田高原などのたおやかな草波が広がり、「九州中部大草原地帯」とも呼ばれ、多くの観光客、登山者を魅了している。その中にほとんど人に知られていない広大な草原がある。由布岳の西に広がる日出生台(ひじゅうだい)草原である。湯布院、別府などの近くにありながら、知られていないのは、古くは陸軍、今は陸上自衛隊の演習場であるため隔絶され、最近では沖縄米軍の実弾射撃訓練場にも利用されているからだ。

そのど真ん中を中央分水嶺が通っている。当支部担当の96kmのうち約14kmを占める演習場一帯は鉄の柵に囲まれ、常に歩哨が立つ厳しさ。砲弾が飛び交う時間だけでなく、通常も立入禁止。それでも歩かせてもらいたい。

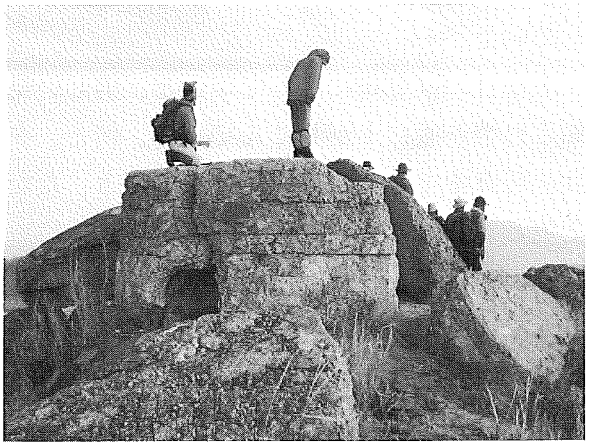
支部はここを管理する湯布院駐屯地と何度か交渉した。窓口は広報室長（二等陸尉）で、意外にも大いに興味と理解を示し、計画書、地形図、参加者名簿を添えて「基地見学申込書」を出せと。問題は踏査時期だった。演習は西日本各地の自衛隊が順番待ちの状態で、支部の希望する土・日連続2日の日程を入れるのはかなり困難という。隊との調整を重ねた結果、許されたのは春秋の一時期に設けられている演習場環境整備期間中の、11月27、28日の2日間だった。更に分水嶺付近の大分県当局と防衛庁との協定により規制されている『高陣ガ尾湿原』と『福万山』の「自然環境保全地域」への立ち入りも許された。

初日は陸尉、2日目には広報隊員が先頭に立って案内してくれた。複雑な地形で波打つ草原の中の分水嶺は、2.5万地形図でも正確には読みとれない。晴天に加え、地形を熟知している隊員のガイドはおおいに助かった。

旧陸軍時代の射撃指示台の跡、弾着を確認する半地下式の壕なども通り、実弾射撃の着弾地では無数の砲弾の破片の間を歩いた。そそり立つ岸壁で屹立する通称「ザクロ山」は、離れたところから見れば、山好きなら誰しも登頂意欲をそそられるが、基地内のため登ることは叶わない。その頂上にも立てた。初日に演習場境界線から草原部分の大半を踏査、2日目は演習場を見下ろす福万山山頂に向けて、森林帯を地図を頼りに登った。冬枯れに入っていたが、二つの「自然環境保全地域」への立ち入り調査も出来た。

湯布院駐屯地は、連絡、調整から案内、支部員の駐車場の確保ほか、2日間の踏査開始地点と終了地点の間に、支部員輸送のジープまで用意下さった。ご協力に深く感謝したい。

日出生台演習場内を歩く
（向こうの高台は旧陸軍射撃指示台跡）



標高点799mの旧陸軍の建造物

内匠の池と大船山の流域変更

東九州支部　飯田勝之

県内を通過する中央分水嶺には、人の手により流域の変っているところが二カ所ある。

1.　内匠（たくみ）の池

かつて「天下無双の絶景」と頼山陽が激賞した耶馬渓は、奇岩、奇峰をはじめ数々の秀景が散らばる広大な景勝地で「名勝耶馬渓」として指定されている。

分水嶺はそんな耶馬渓を縦横にうねりながら走っており、「内匠ノ景」も通過域の一つである。

「内匠ノ景」は上下二つの人工池と周りの景色が優れていることから指定された。分水嶺はこの地を半円形に取り囲みながら通過しているが、珍しいことに、そこには流域変更を伴う工作物が造られているのである。

6月のある日、この地点の前後を踏査した。上の池の堤防を横切って対岸の稜線にとりつき、目標とする到達点に向かい南下を始めた。標高530mほどの稜線から急に高度を下げているところを、低木の藪を分けながらがむしゃらに急斜面を下っていると、突然ヤブが開けた向こうに長さ20mほどのコンクリートの堤防が現れた。よく見るとそれは下の池の越流提（余水吐き）となっているのである。もちろんそこは中央分水嶺の上なのだ。つまり、通常は地形通りの分水嶺だが、雨量が多い時や非灌漑時などで池の水位が上ってこの堤を越すようになると、筑後川に流れて東シナ海に注ぐべき水が、駅館川に流れて瀬戸内海に注ぐのだ。つまり、その時には中央分水嶺は約一キロ南の稜線に移ることになる。

分水嶺上の越流堤、内匠の下池の越流堤

この部分は事前に地図上で分水嶺を判読するのに苦労し、何とか読みとることができたが、人工堤があることまでは読めなかった。

2.　大船山の北の稜線

この稜線は、平治岳の南の斜面と大戸越の峠を挟んで対峙する広い斜面。分水嶺はこの斜面の西の端を下って、下方で東にカーブしながら峠の中程に落ち込んでいる。

この広い斜面のほぼ中央を通る登山道は、下の方では東にカーブする稜線を横切って大戸越の東の端に下っている。近年この道が雨水で削られていき、下方の深いところでは小さな谷のようになってしまっている。雨のたびに道の両側の雨水は一斉に道に流れ込み、道を削り込んでいく。こうした現象は至る所で見受けられることではあるが、ここの道は地形のままだと瀬戸内海に流れ込む水を集めて有明海へと流しているのである。

分水嶺の東側斜面はソババッケに水を集めて大分川へ、西側斜面は坊ガツルに水を落して筑後川に注ぐのである。しかし、東側を通る道が、その斜面の水の一部を集めてどんどん道に流し、そのまま分水嶺稜線を横切って反対側に落としているのである。登山道が分水嶺を変えているのである。

多くの場合、登山道は稜線に沿ってつくられているから、掘れた道が稜線の水の分け方を変えることは少なくなかろうが、これほど大きな規模の流域変更を来している例は、希であると思われる。

中九州地区

瀬の本～箱石峠～根子岳～市房山～白髭岳～八ヶ峰　約144 km

筑後川、白川、緑川、球磨川水系――――大野川、大瀬川、耳川、一ッ瀬川、大淀川水系

2005年11月20日、熊本支部が分担した中央分水嶺の踏査が終わった。前年3月23日、北側の起点：九重山麓の瀬の本高原（1027m）を歩き出してから、南側の終点：白髪岳山系の八ケ峰山麓（663m）まで、踏査に約1年8ヶ月を要した。水平距離144km（実距離180km）、GPS測定点99（追加点13を含む）を28回に分けて述べ人数189人が歩いた。

この区間で分水嶺は40％が県内を通過し約60％が熊本～宮崎県境の九州脊梁山地を通っている。計画段階では、GPS測定の効率化を図るため2班編成で踏査を実施する予定だった。しかし、2004年秋に開催予定の全国支部懇談会（熊本支部主管）を控え、工藤支部長はじめ全会員が準備に追われていた。とりあえず、加藤功一会員をチーフとする1班だけで踏査を始めた。

阿蘇外輪山

「瀬の本高原から阿蘇外輪山（カルデラ）の裾野となる端辺原野、波野ケ原、山東原野へ連なる原野は日本離れのした広漠…」と『日本百名山』の著者、深田久弥を感嘆させた風景である。春4月、野焼きがすんだ原野のあちこちに、キスミレ、ハルリンドウ、フクジュソウの群落が一斉に開花して、踏査班の目を楽しませてくれた。周回128kmもある阿蘇外輪山の内と外を結んで「二十七越四十八峠」と呼ばれるほど多くの峠がある。分水嶺を越す峠も、滝室坂（R-57）箱石峠（R-265）大戸の口（R-265）大村越（牧場道）黒岩峠（町道）高森峠（R-325トンネル）中坂峠（県道）崩土峠（廃道）長谷峠（林道）などの他にも小さな乗越しが多い。

阿蘇外輪山は、西の立野火口瀬で切れて白川を熊本平野に流下させている以外は、ほぼ完全に世界最大のカルデラの縁を形成している。カルデラ内に噴出した中央火口丘は、俗に阿蘇五岳（高岳、中岳、根子岳、烏帽子岳、杵島岳或いは楢尾岳）と呼ばれているが、東端にある根子岳の火砕流堆積物が東外輪山の一部を覆っている。ここで分水嶺は、箱石峠（873m）から根子岳東峰（1408m）へ高度を上げる。比高差500m余の箱石尾根登りはそれまでの高原歩きではなく本格的な登山となる。大戸の口（894m）から、分水嶺は再び外輪山の縁に沿って南下する。

分水嶺はグリーン上！

スギ植林地の境となる土塁に沿って進むと、森の中にはロストボールが沢山転がっている。高森倶楽部ゴルフ場へ近づいたらしい。人影のない閑散としたコースを見下ろしながら進むと、土塁が切れてコース巡回路に出た。その上は何と9番ホールのグリーンではないか！　つぶさに検分したが、此処が分水嶺であることに間違いはない。

ゴルファーの中には、何も知らずに太平洋から有明海側に抜ける中央分水嶺通過パットを決めている人も…読売新聞（2005.12.7）それぞれ途中で拾ってきたロストボールを杖で転がしてはしゃいだ。

ゴルフ場のグリーンにて

ここでは遊び過ぎたか、大村越しを経てラクダ山に着いたのは日没後になっていた。黒岩峠の駐車場まで歩いて大戸の口へ引き返し帰宅したのは夜半を過ぎていた。長谷峠で外輪を離れた分水嶺は、緩やかに南下して高原に点在する小集落を縫って山都町(旧蘇陽町、清和村）人野の国道210号に至る。

九州脊梁山地を行く

大型連休の4月末、歩きやすい阿蘇を離れ、九州脊梁山地の北端から殆ど登路のない黒峰へのコースを歩く。

起点は山都町大野の蘇陽高校前バス停（605m）—ここが分水嶺中の最低点—少し林道を歩いて分水嶺の尾根に取り付く。踏跡もない尾根は密生したスズタケが踏査班の前進を阻む。「お鈴さんの深情け」と誰かがジョークをとばしたが、予定を遥かにこえて黒峰（1285m）山頂で日没となる。これが九州脊梁踏査の序曲で、以後10回にわたり延べ87名が、この九州最難コースに挑んだ。

一般に九州脊梁と呼ばれる範囲は、黒峰から市房山までとされている。熊本～宮崎県境の五家荘、椎葉、米良荘など九州の秘境に囲まれた奥深い山域である。黒峰から明治10年、熊本城攻囲で破れた西郷さんが山駕籠に乗って越えたと伝えられる一の瀬越し（1150m）を経て、トンギリ山（1253m）小川岳（1542m）黒岩山（1582m）と五ケ瀬スキー場までのコースは、南から北へ逆路を歩いた。

市房山頂直下のヤブユキ

かつては踏跡すらなかった県境稜線に、永谷誠一会員らのグループが丈なすスズタケを伐って、黒峰から向坂山（1684m）三方山（1580m）椎矢峠（1442m）を経て脊梁の盟主、国見岳（1739m）まで縦走路を開いた。さらに五勇山（1663m）烏帽子岳（1697m）椎葉越（1494m）を経て白鳥山（1643m）まで尾根が切り分けられた。かなり風通しはよくなったが、2年続きの台風被害で林道が各所で崩壊し、分水嶺への接近が困難になった。

九州脊梁山地は全て「九州中央山地国定公園」内にあり森林の大半は国有林ということだが、銚子笠（1489m）以南は、日本製紙、十条製紙の社有林、九州大学の演習林（江代山）神宮司庁用林（市房山）などになっていた。余談になるが、脊梁の盟主・国見岳については、1906年刊の高頭式編著『日本山嶽志』では「国見嶽肥後国上益城・八代ノ二郡日向国西臼杵郡ニ跨ル、上益城郡白糸村大字菅ヨリ六里ニシテ其山頂に達ス」と極めて素っ気ない記述で、標高すら書いてない。当時九州では最も避遠の奥山であったことが伺える。深田久弥が“念頭にあった”としながら、登らなかったため『日本百名山』の選に洩れた市房山（1721m）は、九州脊梁山地の南端に秀麗な山容を見せている。

国道（R-388）が通る湯山峠（944m）から二つ岩（1670m）まで登路もない急峻な尾根を直上する。これには60代の精鋭、加藤、石井、安場の3人が挑戦した二つ岩から、鋸尾根と呼ばれる峨々たる岩稜が続く。予定を大幅に超え、17時、残照の市房山頂に立った踏査班は、折からの月明の光も透さない、深い森林の急坂（比高差940m）を飛ぶように降りてきた。

白髪岳山系の分水嶺

市房山南西の尾根から西米良越、牧良山を経て横谷峠に至る分水嶺も藪化した難コースだった。熊本～宮崎県境の横谷峠は、日向灘に注ぐ大淀川水系と八代海に注ぐ球磨川水系

の分水嶺である。往時は十数軒が庇を並べ、峠を越す旅人の往来で賑わったそうだが、峠下に国道219号のトンネルが開通して以来、住民は次々と峠を離れ今は熊本県側の1軒だけになってしまった。ここは湯ノ原山(1056m)花立山(1106m)を経て槻木峠(755m)まで分水嶺に沿う飯盛林道の起点にもなっている。市房山南西尾根から西に転じた分水嶺は、横谷峠から飯盛林道沿いに槻木峠に至り、小市房の異名を持つ黒原山（1019m）を経て白髪岳山系東端の小白髪岳（1184m）に繋がる。

2005年5月4日、あさぎり町のビハ公園キャンプ場を出発して、猪子伏登山口から白髪岳（1417m）へ向かう。白髪岳は、国見岳と共に1等三角点（本点）の山である。

参加者最年長80歳の永谷会員の発声で、12名全員が高らかに雄叫びを挙げる。踏査終了点の合流点（川内川／八ケ峰川）へ廻るサポート班5名と別れ、踏査班7名が国見山(1228m)――分水嶺から南東に200m外れていた――八ケ峰（982m）を経て県境林道(663m）へ下った。

国見山から八ケ峰に向かう深い森の中で、尾根を間違え時間を費やした。県界の両国橋で、待ち侘びたサポート班と握手を交わしたのは17時を過ぎていた。

これでGPS測定点の踏査は終わったが、林道不通のため残されたラインを3回に分けて歩いた。11月20日、2班で、湯山峠から江代山の未踏査区間と、花立山西北尾根を歩いて中央分水嶺の踏査を完了した。

（本田　誠也　記）

分水嶺の峠―三つの峠のメモから

熊本支部が担当した144km（水平距離）の分水嶺には約40の峠がある。既に廃道になり荒れた峠や、新道が開通して昔日の面影を留めない峠もある。だが古い歴史を秘めた情趣のある峠も少なくない。県南部の球磨郡から東の宮崎県に入る幹線道路は、北から古屋敷道、湯山道、米良（めら）道の三本があり、いずれも車道で分水嶺（九州脊梁山地）の峠を越えている。

不土野峠にて

不土野峠―歴史の道

水上村の古屋敷から上椎葉の不土野へ越す峠で、県道142号が通る。戦前は細い山道だったが、峠には茶屋もあり上椎葉から古屋敷へ行く主要な道路として、古くから北の県分越と共に利用されていた。戦後しばらくして脊梁縦走の途次、初めて、この峠を越えた。冷たい雨に行き暮れて、峠西側の平畑（たいらこば）の一軒屋、永田長利さんのお宅にご厄介になった。まだ電気のないランプ暮らし…その夜、囲炉裏を囲んで山の話などを伺ったが、峠は殆ど上椎葉の人たちの通行に利用されており、時折、商人や山師などが越えていたと云う。その後、永田さん一家は山を離れて古屋敷に移り、今は住居の跡もない。

車道になった標高1084mの不土野峠には

北側に熊本県知事の「県境碑」南側に宮崎県知事の「県境不土野峠碑」が建つ。

明治10年4月、熊本城攻囲で敗退した西郷軍は、不土野峠を越えて人吉に入った。翌日、霧立越を踏破した桐野利秋の別働隊も、峠を越えて江代に向かった。人吉での1ヵ月余の攻防の後官軍の1隊は不土野を占領し、薩軍は古屋敷に放火して江代に退いた。不土野峠は近世、内戦の歴史の道でもあった。

横谷峠の県境（熊本県・宮崎県）標識をバックに

湯山峠

水上村湯山から椎葉村の矢立開拓へ、湯山峠（944m）を越して国道388号が通る。昔は越野（こえんの）と呼ばれていたそうだが県界は北東に約1kmも離れた、境谷が矢立川に合流する地点にある。

また本来なら県境線は尾根を通る筈だが、江代山（1613m）から南下した県境線（分水嶺）は、地図上の1464m標高点から南東に折れて境谷に入っている。それで境谷と呼ばれているが、地図上の県境線は市房山・二つ岩（1670m）北尾根の、1154m標高点まで描かれていない。米良も椎葉も、藩政時代は人吉（相良）藩の管轄下に置かれていたから線引きも定かではなかったのだろう。峠から南側の江代山東面一帯は、九州大学演習林になっている。

横谷峠

米良道とは、国道219号のうち湯前から横谷峠（665m）を越えて、宮崎県の米良地方までの道を云う。かつてはヘアピンカーブの難路に悩まされた横谷峠も、峠下にトンネルを掘り新道が開通して以来、住民は次々に峠を離れ、熊本県側の1軒だけになってしまった。

藩政時代は、相良藩が管轄していた米良地方との往来が盛んで、10数軒が軒を並べ、茶屋もあって賑わっていたと云う。ここは飯盛林道の起点でもあり、仁原（にわら）に営林署の事業所があった頃は、終日、木材搬出のトラックがエンジン音を轟かせながら行き交っていた。

電気が通じたのは戦後しばらく経ってからでランプ暮らしが長かった。「砂は黄金（こうきん）」と云う変わった名前の民宿があるが、もう閉めているのか人影もない。民宿の裏から分水嶺の急斜面を登ると、深い落葉に埋もれて大山祇神と源之進大明神の祠が鎮座している。5～6年前、県境の山を歩いたとき、以前、店を出していたと云う老婦人が「昔は毎日登って清掃していた…榊や花を供えて神さんと話しをしていた」と話してくれた。ここは県境を挟んで、湯前側と米良側に家が建てられているが、分水嶺は廃屋の庭先を通り西へのびている。

米良側には上米良家の立派な墓石が建てられているが、時折、私有林の管理を兼ねて墓参に訪れると云う。その上米良家には、大淀川の支流、板谷川の源流から冷たい清水が簡易水道で引かれている。（本田　誠也　記）

南九州地区

八ヶ峰～韓国岳～高隈山～木場岳　約212km

川内川水系――――大淀川水系、菱田川、串良川、肝属川

最南端踏査区間は未知の連続

宮崎支部に任された最南端区間とは、熊本県境の白髪岳に連なる八ヶ峰から、霧島火山群の盟主韓国岳に駆け上がり、天孫降臨伝説のある高千穂峰より大隅半島に南下し主脈高隈山系に続いて、さらに海上自衛隊航空基地のある鹿屋市に下り、冬でも青々とした照葉樹林帯の広がる山々を越え、本土最南端の黒潮洗う佐多岬へ至るものである。

全力を挙げ取り組んだが、計画を示された当初は、会員のほとんどが佐多岬には行ったことがあるものの、区域の大半を占める大隈半島の山々には余り注意を払ったことがないのが実情であった。

荒西山、木場岳など山のガイドブックに収録されている山のほかは、ほとんど初めて聞く名前ばかり、どこにあるのかさえ分からず、ましてや分水嶺としてどう線を引いていけばよいのか、登山道の情報は乏しく町村役場等に照会しても明確な情報が得られない、等々問題を抱えたまま、事前調査に取り掛かった。

南国の山々の樹林帯にはマムシ・蜂・ヒル・ダニ等の危険が潜んでおり、実際の踏査に入るのには冬場が一番安全であるが、狩猟期間と重なるため限られた期間を有効に活用する以外になかった。

不安と喜びが交差

鹿児島県境から大隅半島を南下する方針のもとに調査を開始した当初は、山を見つけ山頂を踏んで帰って来るだけで精一杯の状態が続いたが、未知の山域に踏み込む不安と喜びにはまた格別なものがあった。2004年1月に5名が、ロケット基地で有名な内之浦近辺の荒西山・六郎館岳・四坂岳の調査を行った時には、事前に得た町の情報によると六郎館岳は登山道未設置ということで、2時間かけてよじ登った。ところが山頂に立派な登山道を見つけガックリしたものだった。

高原町から一望する冬の霧島連山

四坂岳の分水嶺は取付きから藪漕の連続でGPSも活躍の場がなく、日没で残念ながら山頂を踏めないこともあった。後日談だが、ロケット発射基地の近所だから[はやぶさ]（「いとかわ」に着陸した探査機）に探索依頼すれば楽勝だったのに・・と参加者から冗談半分、悔しさ半分に出た声が思い出される。

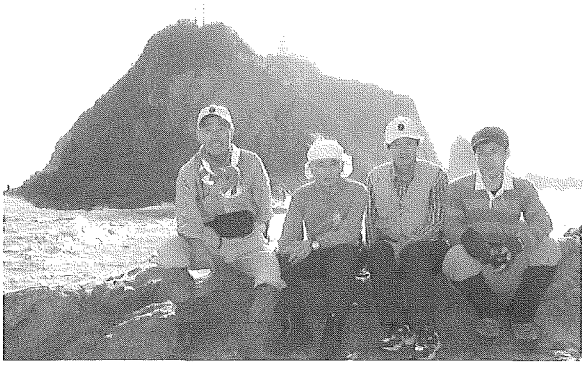
また同年2月、12名で八山岳を目指した時、登山口の林道は施錠され、次いで回った林道は崩壊し通行禁止となっていたため時間を浪費して昼近くになり、予定を変更して高隈山系大箆柄岳の分水嶺を歩いたこともあった。この日は東支那海からの風雪で雪中登山となった。山頂ではおそらく本土最南部と思われる貴重な霧氷体験をした。

内山会員の錦江湾分水嶺

試行錯誤で踏査を実施中に、藤本総務理事（当時）から連絡を受けた。鹿児島在住の内山憲一氏が独自で分水嶺踏査を実施しており、本人が宮崎支部に入会し協力したいとの事。当の内山氏と進捗状況などを確認し調整する中で、基本的に大隅半島（鹿児島県側）は内山氏が主体で踏査し、宮崎県側は我々が踏査すること、大隈半島で会員が参加する部

分は、定例山行に取り入れることにした。

内山会員は土・日を利用して確実に歩を伸ばし、遂に2004年12月10日に佐多岬手前の大泊まで達していた。支部会員4名は、当日大隅半島に入り、荒西山から六郎館岳間の縦走終了後大泊近くのホテルに投宿した。翌朝、眼前の太平洋にこの日を祝福するかのように大きな朝日が昇った。内山会員と合流して、記念すべき山行を共にし、岬の突端に至り、錦江湾分水嶺単独踏査並びに鹿児島県側中央分水嶺踏査を完了！　ひろがる太平洋をバックに一同祝杯を挙げた。



佐多岬を前に

県内区間最後の踏査

明けて2005年、残る宮崎県側の踏査に全力を注ぎ、2月には風雪を突き25名により例会登山の白髪岳、及び踏査班7名による県境を挟む茶屋平～白髪岳までの踏査を行なった。

4月に照葉樹林の六郎館岳縦走を19名による例会登山として行なったが、台風災害で林道崩壊があり、前年の踏査時との変貌ぶりに自然の驚異を再認識させられた。さらに5月には踏査班2名が、マムシを警戒しながら、霧島開拓から台風による倒木で険しさの増した踏み跡すらない甑岳南面を直登し、事実上、本県区間分の踏査を完了した。なお2月には、池島川（川内川水系として東シナ海に至る川）と石氷川（大淀川水系として太平洋に至る）がつながっているという驚くべき新聞記事が出て混乱したが、用水路という結論になり、踏査には支障なしとした。

最終報告区間として残しておいた（韓国岳～獅子戸岳・新燃岳鞍部）の区間を、JAC 100周年記念交流登山コースとして、7月17日に参加者全員により踏査し、中央分水嶺踏査を完了した。

振り返って、情報は少なく手探りで始めた踏査のこと、期間内の完遂が危ぶまれた時期もあった。当初は班別・地区別の分担踏査方式もとったが、未整備区間が多く、歩行時間の予測が難しく、また遭難という事態も視野に入れた厳しい山行対応が必要であった。

例会登山に組み込みこんだポイント踏査方式に変更した区間もあったが、霧島連山や高隈連山には多くの会員が参加して、分水嶺を楽しむことができた。会員の協力により、今まで目が向けられなかった大隅半島の山々の魅力を改めて認識させられたという大きな収穫を得ることができた。

踏査成果はフイードバック

本報告を終えるに当り、この分水嶺踏査によって考えることは、県内の山々を一通り（季節毎に）歩くと、次に県外へそしてアルプスへと飛躍していくのが普通である。しかし通常は県内の登山が中心であるから次第に同じ山の同じコースを何回も登ることになり新鮮味に乏しく、パイオニア精神が薄れ、楽しさは半減してしまうおそれがある。山行も個人のドラマづくりであり子供時代の遠足のように、地元の山で無理なく、もっとワクワク・ドキドキするほど五感をフルに活用出来る方法はないものか。ここに分水嶺踏査の経験を生かした多様な山行方式を模索してみたい。新世紀に中高年の登山愛好者を安全で楽しい登山に導くために、各支部は全国組織としてその受け皿の一端を担うことが必要になってくるものと考えている。会員が今までに培った体験と技術を、次に参入してくる人々のために大いに生かしたいものである。

（児島　実照　記）

本土最南端佐多岬への道

宮崎支部　内山憲一

私は個人で地元の分水嶺を歩いていて、日本山岳会の100周年記念事業である中央分水嶺踏査を知り入会した。自分の個人的な錦江湾分水嶺踏査が、中央分水嶺踏査という大きな事業の最終部分を担えたことは、偶然ながら幸せなことだと思っている。

1.　錦江湾分水嶺踏査

2002年8月鹿児島市在住の私は錦江湾の海岸を散歩していてふと海沿いにある登ったことのない山々が気になり、「錦江湾分水嶺踏査」を思いついた。同年9月30日に薩摩半島南端の長崎鼻を出発し、錦江湾（鹿児島湾）の分水嶺を歩いて佐多岬を目指した。藪漕ぎが多く大変なため、天気の良い週末に日帰りで歩きつなぐことにした。行程の半分ほどを歩いた2003年の秋に「山と渓谷」で日本山岳会の中央分水嶺踏査登山の記事を読み、錦江湾分水嶺の後半が中央分水嶺と重なることから、何かお手伝いできないかと東京のJAC事務局へ連絡をとった。その結果、宮崎支部に入会してこの事業に参加することとなった。延べ47日かけて2004年12月11日無事佐多岬に到達することができた（総歩行距離550km）。この日は宮崎支部の4名の会員も同行して、佐多岬突端で祝杯を挙げることができた。地元ではない鹿児島県の分水嶺について宮崎支部会員が苦労している様子を知り、私が協力できたことは鹿児島の岳人としての喜びを感じた。

2.　アプローチ

薩摩半島は比較的交通の便が良いが、中央分水嶺のある大隅半島は交通の便が悪く、アプローチが大変である。私は自宅が鹿児島市内で大隅半島への玄関口に当たる鴨池港に近く、歩いてフェリーに乗船し、対岸の垂水港駐車場に置いた自家用車で山へ向うことができた。また単独行のため、車に折り畳み自転車を搭載し、一旦下山予定地に自転車を置き、登山口へ向かう方法をとった。実際に下山した場所が予定と異なる場合も多く、下山後登山口まで戻るのにかなり時間の節約をすることができた。

3.　ルートの取り方

分水嶺に道がある場合には問題はないが、核心部の肝属山地はほとんど道がないため、獣道を辿るか藪漕ぎしかなかった。幸いにも山地の南北に林道が通じており、この林道から取り付くことにした。ただ稜線までの登山道はなく登り下りには沢を利用した。分水嶺歩きは午後3時をめどに下りにかかることとして、付近の鞍部から沢を下った。登山の常識からすると避けるべき沢下りルートであるが、藪のひどい山域では一番効率的なルートの選択であったと思う。当然大滝があれば巻くこととなり地図であらかじめ大滝のなさそうなルートを下り無事に通過できた。一度だけ時間が遅くなり沢の中で日が暮れたことがあったが、何とか無事林道に到達できた。どうしても行動時間が長くなるため、まっ暗な林道を歩いたことが何回もあった。

肝属山地の藪のひどさには苦労させられ、それ以外のルートの何倍もの時間を要した。これはこの山域が、一旦原生林を伐採して植林したまま放置したり、植林もせず放置した結果であると考えられる。錦江湾分水嶺を歩いて、整備された人工林が全体のごくわずかであることを再認識したが、交通の不便な肝

属山地の稜線部分は特にひどい状況であること実感した。

4. ダニ対策

鹿児島には熊はいないが猪は多く、分水嶺周辺にもよくねぐらを見かけ、たまには姿を見ることもあった。しかし気が付けば逃げていくので心配は無用だ。温暖な南九州の山での最大の敵はダニ、藪漕ぎの多い分水嶺歩きでは、ダニに取り付かれる可能性が大きいため次のような装備で臨んだ。

・ロングスパッツ・長袖シャツ
・クライミンググラブ
・ダブルストック（蜘蛛の巣払いにも便利）
・虫除け（ディート）

そして帰りには必ず温泉に入って帰ることにした。ところが一度帰りが遅くなり温泉に入れなかったことがあった。ちょうどその時人に言えない場所をダニにやられてしまい、自宅の風呂場で気付き自分で取り除いたが、取り方が悪く頭が残っていつまでも痒みが収まらず、後日皮膚科のお世話になって大変な思いをした。ダニは無理に取らず、温泉等を利用して、死んで自分から離れるようにすべきだと思った。

5. 複雑な地形

25000 分の一地形図と GPS を利用して歩くが、枝尾根が多く展望も利かないためルートを探すのに苦労した。登りは、尾根が集まってピークとなるため迷うことはないが、下りではいくつもの尾根に分かれていくため、どの尾根を下るかの判断が難しい。結局は、ある程度下ってみて怪しければ引き返すという原始的な方法しかなかった。焦りは禁物で、午後 3 時には下ると決めていたため、なかなかはかどらない行程でひどい藪と格闘しながら、「自分は今何のためにこんな苦労をしているのだろう？」と自嘲的な気分になったこともあった。しかしながら今振り返れば、誰もいない藪山で自分一人の力で歩き回っていたこの時間は、充実した素晴らしい時間であったと思う。

6. 終着点佐多岬

鹿児島の人間でありながら山以外に興味がなく佐多岬は一度も訪れたことがなかった。どんな場所か期待して歩き続け、旧佐多町（現在南大隅町）に入ると海の色が明るく、格別に水がきれいなことに気付いた。道のない山は相変わらず藪がひどい所もあり、海が近く暖かい風が吹き、天然記念物の蘇鉄も自生している。分水嶺最後のピーク御崎山からは佐多岬対岸にある大輪島の灯台と太平洋を望み、本土最南端を実感できる。ところがこの山頂には深さ 3m ほどの穴が掘られている、旧日本軍の戦争遺構と思われる場所があった。また祝杯を挙げ記念撮影した佐多岬の突端にも機銃が据えられていたという話も聞いた。平和な南国の風景と戦争の遺構の対比に、人間の営みを包み込む自然の偉大さと平和のありがたさを感じた。

7. おわりに

分水嶺を歩くことは自然の中を歩くというだけでなく、歴史や人間の活動を再認識できる意義深い山行であったと思う。山歩きに限っても、沢登りと同じように地図を読みながら自分でルートを決めて進む楽しさが、山歩き本来の楽しさに通じると感じた。

我田引水ではないが、全国規模の中央分水嶺の後に、東京湾分水嶺とか琵琶湖分水嶺とか様々な地方規模の分水嶺歩きが盛んになれば、新しい展開が拡がると考えている。

資料編

資料１

（社）日本山岳会創立１００周年記念事業

「中央分水嶺踏査登山」

計画書

（社）日本山岳会創立１００周年記念事業実行委員会

中央分水嶺踏査登山実行委員会

（２００３年１０月）

２００５年１０月に（社）日本山岳会（ＪＡＣ）は創立１００周年を迎える。そこで、これに合わせて各種の記念事業が計画されている。本計画書は、その中の一つである国内記念登山に関するものである。具体的には、以下に述べるような内容で、北海道の宗谷岬から九州の佐多岬まで中央分水嶺を踏査しようという試みである。ＪＡＣの現状を踏まえて無理のない範囲で、一つの旗の下に出来るだけ多くの区間をなるべく多くの会員で踏査することを目指した企画である。

１．目的

（１） 出来るだけ多くの会員の参加

（２） 多少なりともパイオニア的精神を生かせること（困難性を含む）

（３） 少しでも参加者の連帯感がもてること（一本の線で結ぶ）

（４） これからのＩＴ時代に相応しい企画を盛り込む

（５） 可能であれば、その他の科学的または文化的要素を盛り込む

２．登山計画

（１） 中央分水嶺のルートとしては、当委員会で検討した案のものを採用する

（２） 各支部の意見を聞いた上で担当区間を確定していく

（３） 各担当区間については調査や予備的登山を通じて、次の３つの区間に分ける

Ａ．登山道が整備されていて、それほどの困難さを伴わない区間

Ｂ．ある程度の藪こぎやザイルの使用などにより何とか行けるであろう区間、または積雪期なら行けるであろう区間

Ｃ．とても歩行は困難な区間

実際には、Ａ区間は 100%歩き、Ｂ区間は可能な限り歩くかまたはスキーで滑り、Ｃは線としては省くが、途中にあるピークや峠は点として可能な限り登る。

（４） 実際の登山は担当の各支部に委ねるが、それぞれの実情に応じて次のような方法から選択するものとする。ただし、詳細な分水嶺のルートは各支部の検討に委ねることとする。

① 自らの支部で全てを実施する

② 支部が中心となって実行するが、実際に歩く者やサポートする者は広く会員から募集する

③ 支部が中心になってやるのには負担が大き過ぎて難しいが、本部が中心になって実行するのであれば出来る限りのサポートをする

④ 今回設定している期間内での実行は困難なので、支部で以前に実施した県境登山などの報告書で代用し、今回は空白区間のみ試みる

⑤ 実情ではとても実行（協力を含めて）は困難

なお、中央分水嶺が通っていない、静岡・東海・富山・石川の各支部は近隣支部との協力などの形で、当計画へ参加することを前提としている。首都圏（本部）は、群馬県などを中心に一部区間を担当する。

３．調査活動

参加者に別紙報告書用のフォーマットに記載して実行委員会事務局に提出してもらう。

（１） 最低限実施すべき事項（必修項目）

① ピークと峠ではＧＰＳを使用して位置と高さを測定する（各支部にＧＰＳ一台を記念として配布する予定。また、これとは別に購入希望があれば一括購入を計画中）。

② 報告書を必ず提出する。参加者の氏名、ピークや峠などの目印となる点での到着日時（コースタイムを含む）とＧＰＳの測定結果などは最低限記入することになる。この最低限の項目は現地から直接または下山後、速やかに本部実行委員会に報告し、ホームページ上に進捗状況として記載する。

（２） できれば実施してもらいたい事項の例（任意の選択項目）

① 周辺状況の観察（自然保護の状況、ピークなどからの展望、分水嶺の両側での顕著な相違点、もしあれば避難小屋や水源の状況など）

② 三角点の保存状況（今後、国土地理院と折衝予定）

③ その他の科学的・文化的項目

（３）広報活動

① ホームページを最大限に利用し、進捗状況を常時公開する。

② 希望する区間があれば、ＮＴＴドコモの協力を得て、現地からの生データを本部に送信し、リアルタイムで実施状況を公開する。

③ 会報には随時報告する。最終的には報告書の形で印刷する。

４．スケジュール

① ２００３年８月：計画書（担当区間を含む）の素案を提示

② ２００３年９月１３日・１４日の全国支部懇談会で協力要請

③ ２００３年１２月の支部長会議で計画書の大筋を承認（この間に支部とのやり取りなど情報交換し、理事会に諮る必要あり）

④ ２００３年９月～２００４年３月：予備的登山及び現地調査実施

⑤ ２００４年３月：計画書の最終案決定（各支部の計画書を提出してもらう）

⑥ ２００４年４月～２００５年９月：登山活動実施

⑦ ２００５年１０月：１００周年記念式典で速報報告

⑧ ２００５年１０月～２００６年３月：登山活動の追加

⑨ ２００６年１２月：最終報告書完成（年次晩餐会で発表）

５．本部の体制：別紙の通り。本部と各支部との具体的な情報交換の方法などについては今後明示する。

６．予算：最終計画書までに確定予定。基本的に登山活動は参加者のボランティア。

以　上

資料２～1)

中央分水踏査担当区間

支部名または区間名	主な山名・峠名
北海道支部	宗谷岬～丸山～知駒岳～ピヤシリ山～天塩岳～北見峠
	北見峠～三国山～十勝岳～狩勝峠
	狩勝峠～トマム山～安平山～樽前山～昆布岳～静狩峠
	静狩峠～ルコツ岳～乙部岳～大千軒岳～白神岬
青森支部	龍飛崎～矢形石山～大倉岳～駒ケ峰～御鼻部山～白地山分岐
青森・秋田混在区間	白地山分岐～発荷峠～迷ヶ平～白萩平～四角岳
岩手支部	四角岳～貝梨峠～安比岳～八幡平見返峠
秋田・岩手混在区間	八幡平見返峠～秋田駒～栗駒山須川温泉
秋田・宮城混在区間	栗駒山須川温泉～花山峠～鬼首峠～軍沢分岐
宮城支部	軍沢分岐～大鏑山～花立峠～船形山～関山峠
山形支部	関山峠～蔵王～栗子山～板谷峠
福島支部	板谷峠～一切経山～安達太良山～中山峠～鎌房山～甲子峠
首都圏Ⅰ	甲子峠～三本槍岳～男鹿岳～帝釈山～鳩待峠
越後支部	鳩待峠～至仏山～平ヶ岳～大水上山～巻機山～谷川岳～三国峠
首都圏Ⅱ	三国峠～白砂山～白根山～四阿山～浅間山～八風山～三国山～三国峠
静岡支部	三国峠～甲武信岳～国師岳～大弛峠
山梨支部	大弛峠～金峰山～小川山～信州峠～野辺山
信濃支部	野辺山～赤岳～蓼科山～鉢伏山～霧訪山～権兵衛峠
東海支部	権兵衛峠～茶臼山～鉢盛山～野麦峠
富山支部	野麦峠～乗鞍岳～宮峠
岐阜支部	宮峠～位山～大日岳～檜峠
福井支部その１	檜峠～毘沙門岳～平家岳肩(井岸山)
石川支部	平家岳肩(井岸山)～屏風山～温見峠
福井支部その２	温見峠～能郷白山～三国岳～行市山～大御影山
京都支部	大御影山～武奈ヶ岳～地蔵峠～佐々里峠～胡麻～中山峠～三国岳
関西支部	三国岳～小金ヶ岳～(石生)～栗鹿山～藤無山～戸倉峠～志戸坂
	志戸坂～那岐山～辰巳峠～人形峠
山陰支部	人形峠～三室山～那岐山～蒜山～道後山～三坂峠
広島支部	三坂峠～(上下)～大士山～阿佐山～大左山～寂地山～平家ヶ岳～仏峠
北九州支部	仏峠～野道山～龍門岳～花尾山～華山～火の山(関門海峡)～風師山～貫山～平尾台(吹上峠)
福岡支部	平尾台(吹上峠)～飯岳山～英彦山～ガラメキ峠
東九州支部	ガラメキ峠～大石峠～福万山～大船山～久住山～(坂ノ上)～瀬の本高原
熊本支部	瀬の本高原～箱石峠～根子岳～国見岳～江代山～市房山～白髭岳～えびの(八ヶ峰付近)
宮崎支部	えびの(八ヶ峰付近)～(茶屋平)～韓国岳～高隈山～八山岳～木場岳～佐多岬

資料２～2)

首都圏同好会・委員会担当区間

首都圏Ⅰ	
山岳地理クラブ	甲子峠～三本槍岳～大川峠
山遊会	大川峠～男鹿岳～山王峠
00会	山王峠～荒海山～安ヶ森峠
科学委員会	安ヶ森峠～田代山～馬坂峠
アルパインスキークラブ	馬坂峠～赤安山～三平峠
山の自然学研究会	三平峠～白尾山～鳩待峠(注)
ゆきわり会	三平峠～白尾山～鳩待峠(注)

首都圏Ⅱ	
つくも会	三国峠～稲包山～野尻峠
01会	野尻峠～大高山～山田峠
丹水会	山田峠～四阿山～鳥居峠
山げらの会	鳥居峠～湯の丸山～地蔵峠
山想倶楽部	地蔵峠～浅間山～国境平
アルパインスケッチクラブ	国境平～鼻曲山～碓氷峠(注)
九五会	国境平～鼻曲山～碓氷峠(注)
緑爽会	碓氷峠～八風山～内山峠
三水会	内山峠～荒船山～十石峠
休山会	十石峠～三国山～三国峠

(注)　当該２区間は時期を異にして２同好会がそれぞれで実施する。

資料３～１)

JAC創立100周年記念国内登山(中央分水嶺踏査)の山行報告書

(1)～(8)は必ず記入してください。(9)～(11)は、気づいた事項があれば記入してください。

(1) 担当支部:		(2)記載者氏名:		会員番号:		事務局整理記入欄			
分水嶺区分				(3)山行日:	年	月	日	(4)天候	

(5)参加者氏名および会員番号　　サポート要員氏名および会員番号

		計	名			計	名

(6)山行記録・位置確認(出発点・ピーク・峠・到達点など、主要ポイントに関して)・所要時間・道の状況

コース概略:

アプローチ:

地点コード	地点名	2.5万分の1 地形図名	経度E			緯度N			高度 m	到着 時刻	出発 時刻	道の 状況	(8)～(11)の特記
			度	分	秒	度	分	秒					
歩行開始点													
分水嶺到達点													
分水嶺離別点													
歩行終了点													
										総歩行時間(休憩時間を除く):			

(7)三角点の位置と保存状況

上記(6)の地点コードを記入してください	点名	等級	方位	保存状況	特記事項

(8)人工施設の現況および地形図との相違点

(9)水および植生に関連した特記事項

(10)その他の特記事項

(11)写真の添付:(有りの場合には、写真説明を記入してください)

写真説明:

資料３～2)

ＪＡＣ創立１００周年記念国内登山（中央分水嶺踏査）の山行報告書記入に当たって

［全般的事項に関する注意点］

① １日の山行に１枚使用してください。

② （１）～（８）は必ず記入してください。（ｉ）～（iii）は気づいた事項があったら記入してください。

③ 書ききれないときは、裏面（２ページ目）を使ってください。

④ 記入は、できるだけWORDでお願いしますが、手書きでも結構です。記入が終わりましたら、メール・FAX・郵送の何れかで以下へ送付願います。WORD版の報告書フォーマットは下記メールアドレスへ申し込んでください。

送付先：森　武昭（分水嶺実行委員会事務局長）

e-mail：bunsuirei@jac.or.jp

FAX：個人情報のため省略

郵送：個人情報のため省略

問い合わせについても、上記と同じです。電話はFAXと同じ番号です。

［個別の記入事項に関する注意点］

(1) 担当支部：山行に際して割り当てられた支部名を記入してください。

(2) 記載者氏名：記載はリーダーまたはリーダーが指名した者が担当してください。分水嶺区分は事務局で記入いたします。

(3) 山行日：西暦で記入してください。

(4) 天候：山行時の天候を記入してください。なお、積雪期には、コース上の平均的な積雪量を記入してください。

(5) 参加者氏名および会員番号：８名を超えるときは、合計欄に参加者の人数を必ず記入してください。超えた分は、裏面（２ページ目）を使っていただいて結構です。

サポート要員：８名を超えるときは、合計欄に必ずサポートした人数を記入してください。超えた分は、裏面（２ページ目）を使っていただいて結構です。

(6) 山行記録・位置確認・所要時間・道の状況：

山行コース上の主要な点（ピーク、峠など）のGPSによる測定結果を記入してください。なお、測定が不可能なときはその旨、明記願います（できれば、考えられる理由も）。①と②、⑨と⑩が同一点の場合には、①と⑩は記入しなくて結構です。測定ポイントが多いときには、裏面（２ページ目）に記入してください。

次に、主要な点の到着・出発時刻を分単位まで記入し、１日の所要時間および休憩時間を除いた実際の歩行時間を記入してください。

道の整備状況は次の中から記載者の主観で選んでください。

（Ａ－１）登山道・道標とも良く整備されていて問題なし

（Ａ－２）登山道はしっかりしているが道標がなく多少の不安を感じる

（Ｂ－１）藪こぎはないが踏跡程度しかない

（Ｂ－２）軽い藪こぎの程度

（Ｂ－３）きつい藪こぎ

（Ｂ－４）積雪期に歩行またはスキーで可能

(7) 三角点の位置と保存状況：三角点の位置と高度は(6)のどこのデータが対応しているか、番号で記入してください。方位は、三角点の南向き（字が書かれている面）のGPSまたはコンパスによる測定結果を記入してください。ただし、コンパスでの測定は、三角点近傍に磁石を狂わせるような金属類が無いか良く確認してから行ってください。

(8) 人工施設の現況および地形図との相違点：分水嶺上または分水嶺を横切っている人工施設（鉄道・車道・林道・送電線・山小屋・アンテナ塔など）に関して、1/2.5万の地形図との相違点がないかなどの現況を記載してください。

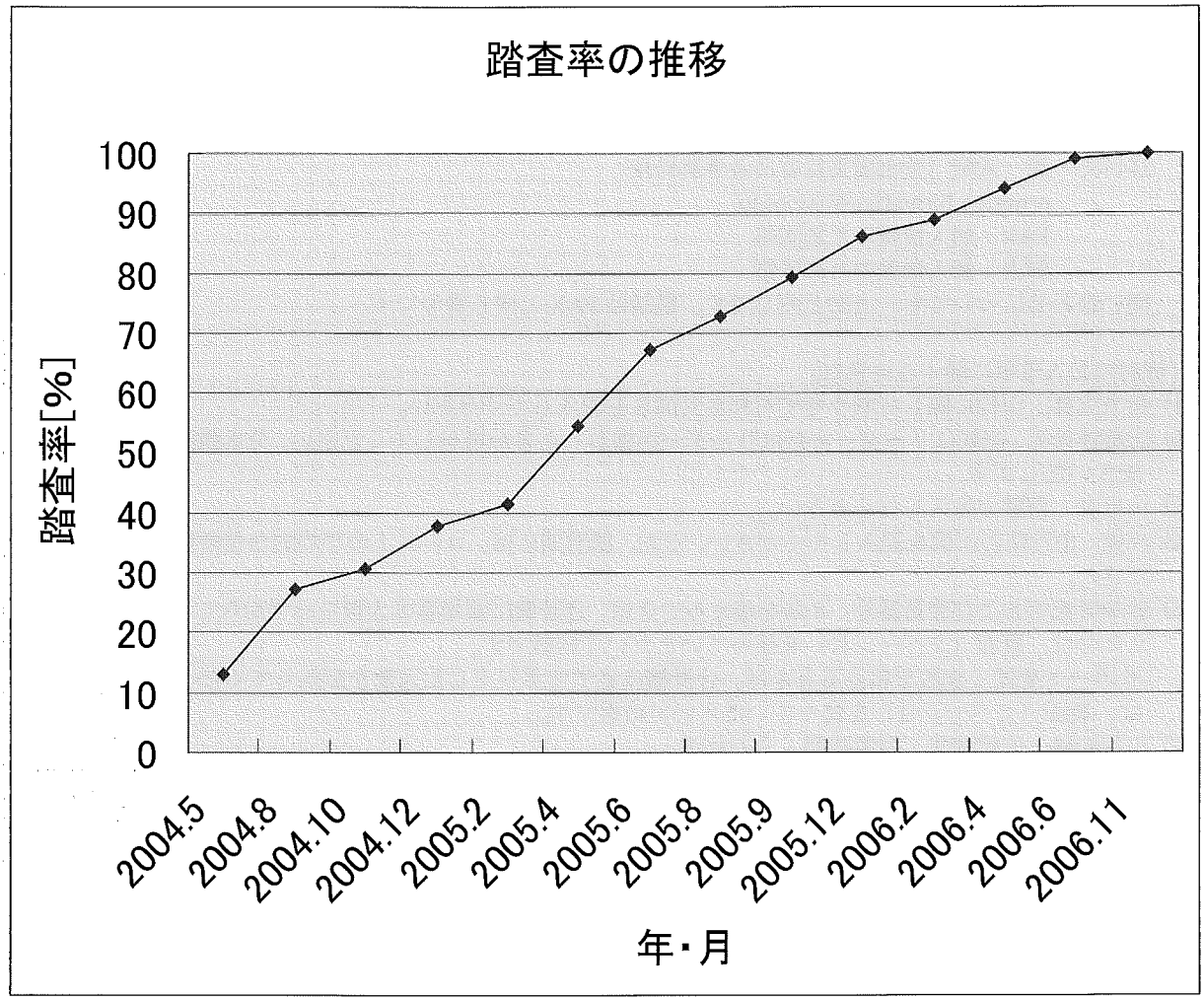
（ｉ）水および植生に関連する事項：分水嶺に由来するそれぞれの河川名など水に関連した特記事項および分水嶺上の植物（特に高山植物）・樹木に関連した特記事項を記入してください。

（ii）その他の特記事項：分水嶺を境とした科学・文化の相違点など何でも結構です。お気づきの点を列挙してください。

（iii）写真の有無：写真がある場合は、簡単な説明文を記載してください。写真は原則として１枚とし、郵送（大きさは原則としてサービスサイズ）または画像として添付ファイルで送付してください。

以 上

資料 4


踏査率の推移
踏査率[%]
100
90
80
70
60
50
40
30
20
10
0
2004.5
2004.8
2004.10
2004.12
2005.2
2005.4
2005.6
2005.8
2005.9
2005.12
2006.2
2006.4
2006.6
2006.11
年・月

測定データの比較表

支部名	基準点コード	点名	報告地名	等級	三角点の座標・標高			測定値			測定差			地形図名	備考
					緯度(° ′ ″)	経度(° ′ ″)	標高(m)	緯度(° ′ ″)	経度(° ′ ″)	標高(m)	緯度(″)	経度(″)	標高(m)		
北海道	6743-11-8901	上頓別	△261.7	3	44 49 35.8	142 14 10.5	261.7	44 49 35.9	142 14 10.5	258.0	-0.1	0.0	-3.7	ペンケ山	
北海道	6742-41-1201	磯桟岳	インサンヌプリ山	1	45 0 40.3	142 9 13.7	581.4	45 0 40.5	142 9 13.9	579.0	-0.2	-0.2	-2.4	磯桟ヌプリ	
北海道	6642-56-5101	珊瑠山	△770.6	3	44 27 59.4	142 45 59.9	770.6	44 27 59.4	142 46 0.3	770.0	0.0	0.9	-0.6	毛鐘尻山	座標系換算
北海道	6542-77-5101	天塩岳	天塩岳	1	43 57 51.7	142 53 16.7	1557.6	43 57 52.0	142 53 16.7	1557.0	-0.3	0.0	-0.6	天塩岳	
北海道	6340-10-8901	雄鋒岳	雄鋒岳	2	42 9 14.3	140 6 59.1	999.3	42 9 14.3	140 6 59.1	999.0	0.0	0.0	-0.3	渡島鮎川	
北海道	6240-31-4701	七ツ岳	七ツ岳	2	41 37 27.2	140 12 50.7	956.8	41 37 27.1	140 12 50.7	955.0	0.1	0.0	-1.8	七ツ岳	
青森	6140-34-9201	袴腰	袴腰岳	3	40 59 44.2	140 31 17.8	627.8	40 59 44.0	140 31 17.0	628.0	0.2	0.8	0.2	大倉岳	
青森	6140-14-9601	梵珠岳	馬の神山	1	40 49 44.2	140 34 37.6	549.2	40 49 43.9	140 34 37.7	549.0	0.3	-0.1	-0.2	大釈迦	座標系換算
岩手	6041-20-6201	水頃	水頃	3	40 13 16.3	141 1 25.0	961.8	40 13 16.3	141 1 25.0	962.0	0	0	0.2	稲庭岳	
岩手	6041-10-8101	戸沢	戸沢	3	40 9 18.8	141 0 36.7	748.3	40 9 18.7	141 0 36.5	762.0	0.1	0.2	13.7	陸奥荒屋	
岩手	6041-10-0001	田沢	田沢	3	40 5 39.8	141 0 11.5	652.9	40 5 39.5	141 0 11.9	651.0	0.3	-0.4	-1.9	陸奥荒屋	
青森	6040-66-4801	赤倉山	954.0	3	40 32 32.7	140 51 15.7	954.0	40 21 33.0	140 51 15.8	955.0	-0.3	-0.1	1.0	温川	
青森	6040-66-3901	高森	911.9	3	40 31 51.3	140 52 2.7	911.9	40 31 51.4	140 52 2.8	916.0	-0.1	-0.1	4.1	温川	
青森	6040-56-3401	鉛山	白地山分岐	3	40 26 54.9	140 48 13.5	997.2	40 26 55.1	140 48 13.5	1002.0	-0.2	0	4.8	十和田湖西岸	
青森	6040-56-0701	猿崎	現頭倉	3	40 25 36.6	140 50 22.2	884.9	40 25 36.6	140 50 22.1	891.0	0	0.1	6.1	十和田湖西岸	
秋田	5940-56-0401	氷倉	横岳	3	39 45 23.0	140 48 18.3	1582.7	39 45 23.0	140 48 18.4	1575.0	0.0	-0.1	-7.7	秋田駒ケ岳	
岩手	5940-46-6301	国見峠	笹森山	3	39 43 24.5	140 47 16.9	994.6	39 0 24.5	140 47 17.4	994.0	0	-0.5	-0.6	国見温泉	
秋田	5940-46-3401	貝吹岳	貝吹岳	3	39 42 6.5	140 48 32.0	992.4	39 42 6.6	140 48 32.0	992.0	-0.1	0.0	-0.4	国見温泉	
秋田	5940-46-2601	上地森	上地森	3	39 41 19.2	140 49 24.5	991.0	39 41 19.2	140 49 24.4	994.0	0.0	0.1	3.0	国見温泉	
秋田	5940-36-7501	五番森	五番森	2	39 39 9.9	140 49 12.9	1048.1	39 39 10.0	140 49 12.9	1044.0	-0.1	0.0	-4.1	羽後朝日岳	
秋田	5940-26-8001	和賀嶽	和賀岳	1	39 34 13.5	140 45 15.3	1440.0	39 34 13.4	140 45 15.4	1444.0	0.1	-0.1	4.0	北川船	
岩手	5840-75-5501	白木峠	白木峠	3	39 17 57.8	140 41 36.4	601.6	39 17 57.8	140 41 36.4	602.0	0	0	0.4	羽後黒沢	
秋田	5840-66-1401	三界	三界山	3	39 10 41.5	140 48 28.3	1381.1	39 10 41.5	140 48 28.4	1391.0	0	-0.1	9.9	三界山	
秋田	5840-56-9201	大森	大森山	3	39 10 7.3	140 46 42.7	1149.5	39 10 7.5	140 46 42.7	1152.0	-0.2	0	2.5	焼石岳	
宮城	5840-15-2001	中沢山	小柴山	3	38 46 30.1	140 37 28.8	1055.8	38 46 30.2	140 37 29.1	1072.9	-0.1	-0.3	17.1	鬼首	単位変更
宮城	5740-64-7601	判森山	半森山	2	38 33 59.3	140 34 30.9	709.5	38 33 59.3	140 34 31.0	712.7	0.0	-0.1	3.3	銀山温泉	単位変更
宮城	5740-54-4901	舟形山	船形山	2	38 27 19.6	140 37 11.4	1500.2	38 27 19.4	140 37 11.4	1505.8	0.2	0.0	5.6	船形山	単位変更
宮城	5740-54-1601	粟畑	白髭山	3	38 26 4.9	140 34 51.2	1284.2	38 26 5.0	140 34 51.0	1284.0	-0.1	0.2	-0.2	船形山	
宮城	5740-44-8501	寒風山	寒風山	3	38 24 40.4	140 34 17.2	1117.3	38 24 41.0	140 34 17.0	1117.0	-0.6	0.2	-0.3	関山峠	
山形	5640-62-4101	栗子山	栗子山	1	37 52 27.6	140 16 11.8	1216.6	37 52 27.6	140 16 11.8	1220.0	0	0	3.4	栗子山	
山形	5640-62-2101	杭甲山	△1111.4m	3	37 51 31.5	140 15 57.2	1111.4	37 51 31.6	140 15 57.2	1113.0	-0.1	0	1.6	栗子山	
福島	5640-51-6901	冷水沢	△865.6	3	37 48 17.2	140 14 27.8	865.6	37 48 17.2	140 14 27.8	871.0	0	0	5.4	天元台	
福島	5640-41-7901	吾妻山	一切経山	1	37 44 7.3	140 14 39.6	1948.8	37 44 7.1	140 14 39.3	1937.0	0.2	0.3	-11.8	吾妻山	
福島	5640-01-2401	笠森山	笠ヶ森山	3	37 21 21.7	140 10 26.8	1012.6	37 21 21.5	140 10 26.1	1021.0	0.2	0.7	8.4	岩代中野	
福島	5540-60-8801	三本木	817三角点	3	37 14 34.1	140 5 59.0	817.1	37 14 34.0	140 5 58.0	817.0	0.1	1	-0.1	新甲子	
福島	5540-60-6601	河内	797三角点	3	37 13 11.4	140 4 20.3	797.8	37 13 11.3	140 4 20.3	800.0	0.1	0	2.2	新甲子	
福島	5540-60-4401	槙	823三角点	4	37 12 31.7	140 3 12.9	823.5	37 12 31.8	140 3 12.9	823.0	-0.1	0	-0.5	新甲子	
首都1	5539-67-1701	旭岳	旭岳	3	37 10 49.6	139 57 35.7	1835.2	37 10 50.9	139 57 29.2	1835.2	-1.29	6.54	0.0	甲子山	誤差大
首都1	5539-56-3501	上海岳	上海岳	2	37 7 4.3	139 48 57.7	1501.3	37 7 4.3	139 48 57.6	1501.3	0	0.1	0.0	栗生沢	
越後	5539-40-5701	丹後山	丹後山	2	37 2 47.5	139 5 28.9	1808.6	37 2 47.0	139 5 29.0	1809.0	0.5	-0.1	0.4	兎岳	
首都1	5539-34-7101	国界	国界	3	36 58 43.3	139 31 5.9	1663.3	36 58 43.4	139 31 5.9	1667.0	-0.09	-0.04	3.7	湯西川	
首都1	5539-33-3501	帝釈	台倉高山	3	36 56 42.0	139 26 27.7	2066.7	36 56 42.0	139 26 28.0	2070.0	0.0	-0.3	3.3	帝釈山	

測定データの比較表

支部名	基準点コード	点名	報告地名	等級	三角点の座標・標高			測定値			測定差			地形図名	備考
					緯度(° ′ ″)	経度(° ′ ″)	標高(m)	緯度(° ′ ″)	経度(° ′ ″)	標高(m)	緯度(″)	経度(″)	標高(m)		
越後	5539-21-8401	至仏山	至仏山	2	36 54 12.5	139 10 23.7	2228.1	36 54 12.0	139 10 23.0	2235.0	0.5	0.7	6.9	至仏山	
越後	5538-17-9401	薬師ケ岳	谷川岳	3	36 50 4.2	138 55 49.1	1963.2	36 50 4.0	138 55 49.0	1970.0	0.2	0.1	6.8	茂倉岳	亡失
越後	5538-17-8001	万太郎	万太郎山	3	36 49 26.9	138 52 45.2	1954.1	36 49 27.0	138 52 45.0	1962.0	-0.1	0.2	7.9	水上	
越後	5538-16-7701	千倉山	仙ノ倉山	2	36 49 2.9	138 50 22.2	2026.2	36 49 3.0	138 50 22.0	2029.0	-0.1	0.2	2.8	三国峠	
越後	5538-16-7601	松出	平標山	3	36 49 4.3	138 49 18.8	1983.7	36 49 4.0	138 49 18.0	1988.0	0.3	0.8	4.3	三国峠	
首都2	5538-05-4301	八軒	入間山	2	36 42 19.7	138 40 0.4	1934.5	36 42 19.7	138 40 0.3	1930.0	0.0	0.1	-4.5	野反湖	
首都2	5438-45-7201	長倉山	留夫山	1	36 23 45.9	138 39 7.4	1590.8	36 23 45.9	138 39 7.3	1591.0	0.0	0.1	0.2	軽井沢	
首都2	5438-45-4201	一ノ字	一ノ字山	3	36 22 22.7	138 39 5.8	1336.0	36 22 22.7	138 39 5.7	1346.0	0.0	0.1	10.0	軽井沢	
首都2	5438-44-9901	大日影	1382.6	3	36 24 59.3	138 37 16.1	1382.6	36 25 24.6	138 37 16.2	1402.0	34.7	-0.1	19.4	浅間山	誤差大
信濃	5438-11-1501	車沢	車山	2	36 6 10.7	138 11 47.8	1925.0	36 6 10.0	138 11 48.0	1935.0	0.7	-0.2	10.1	霧が峰	
信濃	5438-10-5301	今井	高ボッチ	3	36 7 55.6	138 2 25.2	1664.9	36 8 6.0	138 2 13.0	1665.0	49.6	12.2	0.1	鉢伏山	誤差大
首都2	5438-05-4101	木次原	木次原	3	36 2 34.1	138 38 19.4	1821.8	36 2 34.5	138 38 19.3	1825.0	-0.4	0.1	3.2	浜平	
首都2	5438-05-2101	会所	会所	3	36 1 11.7	138 38 45.5	1915.8	36 1 12.2	138 38 45.1	1921.0	-0.5	0.4	5.2	浜平	
富山	5437-14-2401	乗鞍岳	剣が峰	1	36 6 23.4	137 33 13.1	3025.6	36 6 23.5	137 33 13.0	3026.0	-0.1	0.1	0.4	乗鞍岳	
信濃	5437-07-8901	大沢山	最高点	3	36 4 30.8	137 59 25.8	1096.0	36 4 36.0	137 59 37.0	1092.0	-5.2	-11.2	-4.0	北小野	誤差大
岐阜	5437-02-7001	洞山	洞山	3	36 3 59.2	137 14 52.8	1088.6	36 3 59.2	137 14 53.0	1082.0	0	-0.2	-6.6	久々野	
静岡	5338-75-3801	十文字	十文字山	3	35 56 43.4	138 43 51.7	2071.9	35 56 43.0	138 43 52.0	2071.0	0.4	-0.3	-0.9	居倉	
山梨	5338-73-2601	袖先	袖先	3	35 56 38.2	138 27 19.2	1395.9	35 56 38.1	138 27 19.3	1406.0	0.1	-0.1	10.2	八ヶ岳東部	単位変更
山梨	5338-73-0701	八岳屋	八岳屋	3	35 55 27.6	138 28 13.5	1653.0	35 55 24.1	138 28 13.5	1658.0	3.5	0	5.0	八ヶ岳東部	誤差大
信濃	5338-72-6901	赤岳	赤岳	1	35 58 14.9	138 22 12.2	2899.2	35 58 15.0	138 22 12.4	2905.0	-0.1	-0.2	5.8	八ヶ岳西部	
静岡	5338-65-9801	国師岳2	三宝山	1	35 55 3.5	138 43 40.2	2483.3	35 55 3.0	138 43 43.0	2475.0	0.5	-2.8	-8.3	金峰山	誤差大
静岡	5338-65-7501	東梓	東梓	3	35 53 45.6	138 41 31.5	2271.6	35 53 45.8	138 41 31.5	2273.0	-0.2	0.0	1.4	金峰山	亡失盤石露出
静岡	5338-65-4401	国師岳	国師岳	1	35 52 15.0	138 40 22.7	2591.8	35 52 14.9	138 40 22.9	2593.0	0.1	-0.2	1.2	金峰山	
山梨	5338-65-4001	金峰	金峰山	3	35 52 17.4	138 37 31.1	2595.0	35 52 17.4	138 37 31.1	2598.0	0	0	3.0	金峰山	単位変更
山梨	5338-64-9501	南沢	南沢	4	35 54 59.2	138 33 59.8	1657.5	35 54 42.4	138 34 31.8	1658.0	16.8	28	0.5	みずがき山	誤差大
山梨	5338-64-9101	横尾山	横尾山	2	35 55 7.6	138 31 16.1	1818.1	35 54 33.8	138 31 15.6	1815.0	-26.2	0.5	-3.0	みずがき山	誤差大
山梨	5338-64-8901	小川山	小川山	2	35 54 33.9	138 36 44.2	2418.3	35 54 34.0	138 36 44.2	2413.0	-0.1	0	-5.3	みずがき山	単位変更
石川	5336-55-6701	平家岳		2	35 48 35.6	136 43 8.1	1441.5	35 48 35.6	136 43 8.1	1440.0	0.0	0.0	-1.5	平家岳	
石川	5336-55-4501	五現川	五現川	3	35 47 32.7	136 41 44.8	1224.2	35 47 32.8	136 41 44.9	1227.7	-0.1	-0.1	3.5	平家岳	
石川	5336-55-3301	左門岳		3	35 46 54.2	136 40 5.3	1223.6	35 46 54.1	136 40 5.2	1211.6	0.1	0.1	-12.0	平家岳	
福井	5336-54-1101	能郷白山	能郷白山	1	35 45 44.6	136 30 50.5	1617.3	35 45 44.6	136 30 50.6	1617.1	0.0	-0.1	-0.2	能郷白山	
福井	5336-53-4101	布滝	布滝	3	35 47 30.8	136 23 20.3	1046.6	35 47 30.9	136 23 20.4	1045.3	-0.1	-0.1	-1.3	冠山	
福井	5336-52-4901	塚奥山	塚奥山	2	35 47 13.1	136 21 36.4	1227.1	35 47 13.1	136 21 36.4	1227.2	0.0	0.0	0.1	宅良	
福井	5336-42-1401	三周岳	三周岳	1	35 41 1.1	136 18 0.4	1292.0	35 41 1.1	136 18 0.3	1296.7	0.0	0.1	4.7	広野	
福井	5336-20-3601	野口村	野口村	2	35 31 57.0	136 4 38.5	865.2	35 31 56.9	136 4 38.3	856.0	0.1	0.2	-9.2	駄口	
京都	5335-17-9801	野呂尾	大御影山	3	35 30 1.7	135 58 19.8	950.1	35 30 1.1	135 58 19.5	950.1	0.62	0.35	0.0	熊川	
京都	5335-17-7601	山上ケ岳	三重ヶ嶽	2	35 28 55.7	135 57 21.4	974.1	35 28 55.7	135 57 21.5	934.1	0.01	-0.05	-40.0	熊川	
京都	5335-17-2501	赤岩	赤岩岳	3	35 26 41.1	135 56 40.1	740.3	35 26 41.5	135 56 40.2	740.3	-0.42	-0.09	0.0	熊川	
京都	5335-06-9801	寺山	駒ヶ岳	3	35 24 41.7	135 51 11.5	780.1	35 24 41.8	135 51 11.5	780.1	-0.1	0	0.0	古屋	
京都	5335-06-6501	木地山	百里ヶ岳	1	35 23 30.4	135 48 36.3	931.3	35 23 30.5	135 48 36.4	931.0	-0.1	-0.1	-0.3	古屋	
京都	5335-06-2101	三国峠	三国峠	3	35 21 19.0	135 46 6.6	775.9	35 21 19.1	135 46 6.6	779.0	-0.1	0	3.1	古屋	
京都	5235-53-2301	才谷	・398m	4	35 6 27.9	135 24 40.7	398.0	35 6 28.0	135 24 40.0	398.0	-0.1	0.7	0.0	園部	

測定データの比較表

支部名	基準点コード	点名	報告地名	等級	三角点の座標・標高			測定値			測定差			地形図名	備考
					緯度(° ′ ″)	経度(° ′ ″)	標高(m)	緯度(° ′ ″)	経度(° ′ ″)	標高(m)	緯度(″)	経度(″)	標高(m)		
京都	5235-53-1101	三国ケ岳	三国岳	3	35 5 46.1	135 23 13.4	508.0	35 5 45.0	135 23 13.0	508.0	1.1	0.4	0.1	園部	
関西	5235-52-5301	村雲村	村雲村	3	35 7 50.3	135 17 37.3	630.6	35 7 50.4	135 17 36.7	631.0	-0.1	0.6	0.4	村雲	
関西	5235-51-7801	高王山		3	35 8 46.3	135 13 59.4	543.3	35 8 46.3	135 13 59.4	543.0	0	0	-0.3	宮田	
関西	5235-51-4901	御岳山	御岳	1	35 7 38.1	135 14 41.6	793.4	35 7 37.9	135 14 42.2	793.4	0.2	-0.6	0.0	宮田	
関西	5235-51-4101	黒頭山		2	35 7 21.3	135 8 34.0	620.6	35 7 21.1	135 8 32.9	620.0	0.2	1.1	-0.6	宮田	座標系換算
関西	5234-70-6201	宮ヶ谷	△997.4	3	35 18 24.9	134 1 26.9	997.6	35 18 24.9	134 1 26.9	1009.0	0	0	11.4	加瀬木	
関西	5234-70-5501	倉見	倉見	2	35 18 5.6	134 3 53.0	1115.2	35 18 5.7	134 3 53.0	1120.0	-0.1	0	4.8	加瀬木	
山陰	5233-77-6301	牧場	牧場	4	35 18 23.4	133 54 48.5	818.1	35 18 24.1	133 55 17.5	813.0	-0.7	31.0	-5.1	上斎原	誤差大
山陰	5233-77-6201	人形仙	人形仙	3	35 18 15.5	133 53 53.1	1004.0	35 18 15.4	133 53 53.2	1006.0	0.1	-0.1	2.0	上斎原	
山陰	5233-76-6001	半甲山	仏ヶ仙	1	35 18 29.9	133 45 27.4	743.5	35 18 29.9	133 45 27.4	752.0	0	0	8.5	下鍛冶屋	
山陰	5233-75-7801	犬挟峠	荒砥山	3	35 19 2.2	133 43 36.7	648.3	35 19 2.2	133 43 36.7	641.0	0	0	-7.3	蒜山	
山陰	5233-64-7101	田浪	田浪	3	35 14 8.5	133 30 52.9	1218.4	35 14 8.6	133 30 53.0	1223.0	-0.1	-0.1	4.6	美作新庄	
広島	5233-21-9101	保田	790.0峰	2	34 55 9.9	133 8 44.1	790.0	34 55 9.8	133 8 43.9	795.0	0.1	0.2	5.0	帝釈峡	
広島	5233-01-4201	栗山	栗山	2	34 42 33.9	133 9 1.4	606.5	34 42 33.6	133 9 3.7	623.0	0.3	-2.3	16.5	高蓋	誤差大
広島	5132-71-1001	羅漢	恐羅漢山	3	34 35 43.7	132 7 46.8	1346.4	34 35 43.7	132 7 46.9	1345.0	0	-0.1	-1.3	三段峡	
広島	5131-47-0801	大将陣	大将陣	2	34 20 33.4	131 58 44.9	1022.1	34 20 33.7	131 58 45.2	1029.0	-0.3	-0.3	6.9	六日市	
広島	5131-46-2201	白井堂	弟身山	3	34 21 12.2	131 46 40.8	1085.3	34 21 12.1	131 46 40.8	1095.0	0.1	0	9.7	椛谷	
広島	5131-36-9201	小河内	莇ケ岳	3	34 19 56.9	131 46 40.0	1004.2	34 19 56.9	131 46 39.9	1008.0	0	0.1	3.8	莇ケ岳	
北九州	5131-32-8101	長浴	天井山	3	34 19 33.8	131 15 43.5	602.2	34 19 33.6	131 15 43.3	603.8	0.2	0.2	1.6	秋吉台北部	座標系換算
東九州	5031-00-4001	更原	△561.2	3	33 22 40.7	131 0 18.1	561.2	33 22 40.5	131 0 18.1	561.0	0.2	0.0	-0.2	裏耶馬渓	
東九州	5031-00-2301	三尾山	一尺八寸山	2	33 21 35.4	131 2 27.0	706.7	33 21 35.3	131 2 25.9	706.0	0.1	1.1	-0.7	裏耶馬渓	
北九州	5030-77-4701	城山	古城山	3	33 57 28.8	130 58 7.4	175.0	33 57 29.0	130 58 7.2	177.0	-0.2	0.2	2.0	下関	
北九州	5030-77-0601	風頭山	風師山	2	33 55 27.8	130 57 16.9	362.2	33 55 32.3	130 57 11.3	365.0	-4.5	5.6	2.8	下関	誤差大
北九州	5030-67-8701	高知上	168.3	3	33 54 36.8	130 57 38.9	168.3	33 54 37.0	130 57 39.2	174.0	-0.2	-0.3	5.7	小倉	
北九州	5030-67-2301	霧ヶ岳	足立山	1	33 51 34.3	130 55 2.0	597.8	33 51 33.8	130 55 1.6	598.0	0.5	0.4	0.2	小倉	
北九州	5030-57-3201	貫山	貫山	2	33 46 50.5	130 54 33.7	711.6	33 46 50.5	130 54 33.7	711.0	0.0	0.0	-0.6	苅田	
福岡	5030-46-8901	竜ヶ鼻		2	33 44 12.8	130 52 1.0	680.6	33 44 12.8	130 52 1.1	680.0	0.0	-0.1	-0.6	金田	
福岡	5030-46-6901	柳谷浦	△447	4	33 43 39.3	130 52 7.6	436.2	33 43 39.3	130 52 7.5	447.0	0.0	0.1	10.8	金田	
東九州	5030-07-8801	大将陣	大将陣山	3	33 24 38.1	130 58 51.3	909.8	33 24 38.1	130 58 51.3	912.0	0.0	0.0	2.2	大行司	
東九州	4931-70-9801	中ノ原	△712.9	3	33 20 4.7	131 6 31.3	712.9							天ヶ瀬	亡失
東九州	4931-70-9701	野平	△725.6	3	33 19 56.6	131 5 30.4	725.6	33 19 57.0	131 5 30.0	735.0	-0.4	0.4	9.4	天ヶ瀬	
熊本	4831-50-5101	不土野	不土野	2	32 27 45.6	131 0 49.7	1639.2	32 27 45.4	131 0 49.7	1643.0	0.2	0	3.8	古屋敷	
熊本	4831-50-2101	銚須笠	銚須笠	3	32 26 19.2	131 1 11.3	1489.2	32 26 19.4	131 1 11.1	1489.0	-0.2	0.2	-0.2	不土野	
熊本	4830-27-5801	山王山	山王山	2	32 12 44.1	130 59 2.9	1017.1	32 12 44.3	130 59 2.8	1019.0	-0.2	0.1	1.9	免田	
宮崎	4830-07-0201	鬼塚	鬼塚	3	32 0 27.0	130 54 0.2	375.9	32 0 27.1	130 54 0.2	376.0	-0.1	0	0.1	日向大久保	
宮崎	4730-76-5801	甑岳	甑岳	3	31 57 55.3	130 51 33.2	1301.4	31 57 55.3	130 51 33.1	1315.0	0	0.1	13.6	韓国岳	
宮崎	4730-26-5301	鴇岳	鵐岳	2	31 32 45.3	130 47 14.5	885.0							百引	亡失
宮崎	4730-26-2001	高飛	高峠	3	31 31 36.8	130 45 29.8	721.7	31 31 37.0	130 45 29.6	722.1	-0.2	0.2	0.4	百引	
宮崎	4730-26-0401	光石	七岳	3	31 30 23.5	130 47 53.5	881.4	31 30 23.6	130 47 52.8	881.4	-0.1	0.7	0.0	百引	
宮崎	4630-57-8301	餌掛	四枚岳	3	31 9 26.6	130 54 39.8	744.6	31 9 27.0	130 54 40.0	745.0	-0.4	-0.2	0.4	稲尾岳	

資料6　　担当地域別　踏査距離，参加日数，参加人数

支部名	踏査距離 (km)	踏査延べ日数 (日)	参加人数			
			会員(人)	非会員(人)	計(人)	延べ人数
北海道	1 165	253	97	45	142	1 121
青　森	70	24	13	21	34	82
岩　手	(300)	29	27	1	28	153
秋　田	(300)	38	28	6	34	262
山　形	74	22	26		26	162
宮　城	148	18	18	1	19	99
福　島	125	29	34	5	39	95
首都圏Ⅰ	113	44	116	15	131	305
越　後	96	20	29	19	48	85
首都圏Ⅱ	194	53	146	9	155	264
信　濃	128	24	45	1	46	257
山　梨	33	5	26		26	43
静　岡	21	2	12		12	16
東　海	83	26	32	5	37	111
岐　阜	79	14	58		58	226
京　都	77	16	33	11	44	233
富　山	50	7	15		15	44
石　川	32	18	18	1	19	77
福　井	192	38	26	8	34	198
関　西	274	56	39	46	85	402
山　陰	136	39	23	4	27	156
広　島	343	111	48	61	109	618
福　岡	36	8	18		18	58
北九州	221	60	46	22	68	349
東九州	119	32	32	35	67	167
熊　本	144	37	16	9	25	195
宮　崎	212	42	69	1	70	169
計	4 465 km	1 065 日	1 090 人	326 人	1 416 人	5 947 人
番外（青函トンネル内）　30.4 km　3 日　3 人						

註　（　）内は同一地域を踏査

同好会及び委員会

名　称	踏査距離 (km)	踏査延べ日数 (日)	参加人数			
			会員(人)	非会員(人)	計(人)	延べ人数
首都圏Ⅰ						
山岳地理クラブ	25.3	20	22	14	36	123
山遊会	11.6	3	19		19	13
００会	19.2	3	7	1	8	33
科学委員会	19.3	4	28		28	31
アルパインスキークラブ	23.8	8	23		23	79
山の自然学研究会	(13.7)	5	9		9	19
ゆきわり会	(13.7)	1	8		8	8
計	112.9 km	44 日	116 人	15 人	131 人	305 人
首都圏Ⅱ						
つくも会	24.9	15	15	1	16	20
０１会	23.7	4	21		21	23
丹水会	28.7	10	19	7	26	51
山げらの会	9.5	3	15	1	16	20
山想倶楽部	19.1	2	14		14	28
アルパインスケッチクラブ	(17.4)	2	9		9	9
九五会	(17.4)	2	18		18	19
緑爽会	20.2	3	5		5	10
三水会	27	7	14		14	38
休山会	23	5	16		16	46
計	193.5 km	53 日	146 人	9 人	155 人	264 人

註　(　) 内は同一地域を踏査

中央分水嶺踏査のまとめ

踏査開始　2003 年 9 月 28 日（秋田支部）
踏査終了　2006 年 11 月 4 日（信濃支部）
総踏査距離　4 495 km（青函トンネル内を含む）
踏査区間（ポイント間）　1 830 箇所
延べ踏査日数　1 065 日（アプローチなどに要した日数は含まず）
延べ歩行時間　3 740 時間（報告書に記載されたもののみ）
報告書枚数　1 032 枚
延べ参加人数　5 947 人（延べ踏査人数 4 918 人，延べサポート人数 670 人）

資料７

中央分水嶺踏査参加者一覧

北海道支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
3558	中島史貴	10399	高橋桓志	13172	鈴木和夫		山本菜穂子
4440	平山善吉	10687	横内泰美	13214	掛水孝幸		久守弘子
4618	田邊壽	10959	古市進	13216	八木沼陽子		今田美知子
4637	芳賀孝郎	10978	中村喜吉	13234	池昇一		近藤光明
4795	渋谷正己	10981	海川敏雄	13269	大崎勝子		窪田博文
5008	宗實慶子	11162	東山一勇気	13323	宮津公一		富樫正悟
5308	高澤光雄	11427	日向祥剛	13326	齋藤浪子		富樫くみ子
5339	浅利欣吉	11515	西野數之	13345	西山泰正		吉江恭子
5434	高橋正	11883	藤内英夫	13431	佐藤守		高橋富美
5868	新妻徹	11884	平井喜久枝	13442	樋口みな子		国沢悟
6108	長谷川雄助	11955	西村智麿子	13445	高木百合子		佐藤明
6195	安田成男	12093	片岡次雄	13564	横川政行		松本昇
6213	小栗宏	12160	朝日守	13632	横須賀邦子		菊池利明
6227	若林修二	12196	石岡慎介	13645	鈴木貞信		菊池澄子
6372	石田要久	12227	西田進	13657	中谷秀子		鈴木邦輝
6988	金井良碩	12269	芳賀淳子	13757	佐藤英子		奥下五一
7164	秋元笻男	12455	京極紘一	13815	神原照子		幸田昭
7164	島田勝	12582	小野隆央	13923	杉山猛		鈴木千代
7164	斎藤幸一	12660	藤本慶光	13964	芳村宗雄		山岸寿美子
7164	佐藤眞	12850	畠山廸子	13982	鶴岡節子		三野智大
8184	坂本正智	12865	三戸部清文	13996	三野裕輝		日高晃
8325	西孝子	12898	侍園毅	14041	大畑博子		日高洋子
8428	吉田理一	12946	山川陽一	14100	滝沢功		副島紀代子
8477	赤石喜恵子	12995	助田陽一	14113	力丸智子		金沢友幹
8547	中谷絹子	12996	助田梨枝子	14210	海老名名保		田端省三
8618	里見清子	12997	神埜和之		齋藤勝宏		石田真澄
8870	井後幸太郎	13007	清水和男		石田栄子		丹保勝也
9416	河村皆子	13010	八木橋貞美		古城より子		逸見忠助
9500	西川顕	13040	漆崎隆		山本治美		青木道義
9613	野納邦昭	13041	漆崎裕子		鈴木美紀		花田雅昭
9620	森武昭	13044	吉野勝夫		高橋絢子		大徳尚人
9775	森下雅幸	13058	田島祥光		前田靖子		石田泰史
10110	栗村明信	13077	北守清		中野眞紀子		中村たづ子
10306	上島忠義	13103	畠山勝		福田智規		長谷川昭一
10314	米村清一	13155	宮崎初恵		福田貴子		
10384	植田惇慈	13164	小森昭		金曾朗		

青森支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
09062	清野宏	11931	秋村貞文		高橋光輝		松橋由枝子
09268	須々田秀美	13398	田代正廣		高橋牧夫		小笠原孝子
09498	中村勉	13663	鈴木一司		高橋幸子		大西敏子
09816	高橋毅	13861	工藤均		松田勝江		関瑠璃子
10202	竹越恵蔵		吉崎義明		北村和子		下山千恵
10381	大久保勉		長内敏秋		舘章二朗		月舘秀人
11679	木村均		加藤清悦		舘弘子		月舘綾子
11758	小川子野		中村敦子		大阪この		
11778	中村光明		伊藤欣子		木村久子		

岩手支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
6275	菊池修身	9813	佐藤英夫	12384	及川迪靖	13490	平山一宏
7332	中谷　充	11180	中屋重直	12726	高橋　耕	13593	西村幸雄
7370	音石康一	11181	安部陽子	12799	久夛良謙一	13612	松田好子
7793	小野寺正英	11612	内山達雄	12856	林　岩美	13650	平山順子
8632	椚田房男	11765	菅原敏夫	13416	熊谷秀雄	13813	小野寺佐與子
9381	松田和弘	11922	岩舘公子	13417	熊谷敬子	14161	千葉嘉彦
9592	浅野新一	12120	高橋タイ子	13418	高木　弘		干田昭士

秋田支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
4859	長岩嘉悦	10875	大山健助	12826	寺田新一	13988	長岡幸則
5748	佐々木民秀	10971	鈴木幸雄	13120	川口廣志		鈴木茂夫
7585	福田光子	10975	若月　寿	13127	大橋忠雄		山田雪男
8884	佐々木　宏	11280	鈴木裕子	13128	浅野茂春		山崎牧子
9492	今野昌雄	11785	堀井　弘	13275	石川祐子		飛田　勇
9729	小笠原義雄	11788	鎌田倫夫	13635	柴田　勧		堀岡邦男
10024	杉山雄幸	11993	佐藤　博	13709	伊藤秀雄		栗谷幸之助
10276	土肥貞之	12003	高橋忠雄	13884	三浦眞六		
10651	柳田勇悦	12091	深井是之	13894	佐藤安弘		

山形支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
6184	斎藤哲郎	9173	會田茂雄	11348	菅原富喜	12340	佐藤映子
7446	佐藤淳志	9276	菊地俊彦	11517	東海林　敬	12524	菅原恒男
7487	阿部勇作	10673	折原榮悦	11762	田中洋子	12531	推名高夫
7591	大場貞吉	10761	長岡伸恭	12025	長岡昭雄	13272	國井聖仁
7734	木村喜代志	10914	佐藤達雄	12118	梅本幸巳	13911	瀬川　昭
8227	今野秀穂	11145	後藤　彰	12124	志田郁夫		
8362	松田孝一	11193	大沼良典	12190	渡辺　誠		

宮城支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
4817	庄司駒男	7618	千石信夫	11201	佐々木まさ子	13513	本郷佐千子
7018	柴崎　徹	7885	髙橋二義	11711	林田健治	13603	鎌田和代
7211	千田早苗	8813	木皿　謙	11830	佐藤昭次郎	13678	宇都宮昭義
7354	西郡光昭	10005	鈴木晃三	11838	中條俊一		宇都宮令子
7565	髙橋　功	10049	飯塚とみ子	11975	小山　幹		

福島支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
3209	渡辺千代蔵	9033	江花俊和	10462	武藤伸彦	12631	寺田美代子
4319	白石田春治	9269	大谷司	10479	高橋通夫	12649	小林正彦
4319	寺田昭一	9369	大友繁	10481	宍戸次夫	13630	寺田正夫
4428	吉野赳夫	9620	森武昭	10502	堀江誠克	13787	今井秀正
4474	相模八郎	9720	佐藤有	11955	西村智磨子		木村朋子
6087	八巻和男	9879	坂上光恵	12196	石岡慎介		菅野祐子
6823	逸見征勝	10076	斎藤松雄	12264	高田雅雄		西田宏之
6872	石田要久	10107	小野友平	12378	遠山元信		板坂良平
6928	平野彰	10339	小泉静子	12484	黒木史子		須藤鑑
8976	伊藤義男	10414	北野忠彦	12489	近藤義則		

首都圏Ⅰ

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
	山岳地理クラブ		小倉真助	9831	鈴木快信	8394	小松原一郎
6928	平野彰			5788	箕岡三穂	8494	安井康夫
10414	北野忠彦		山遊会	9033	江花俊和	9013	阪下悦子
11265	井上千夏	10986	中澤喜久郎	6372	石田要久	9521	川合周
11321	井上希夫	12097	柴山武	9894	山口悠紀子	9816	高橋毅
11955	西村智磨子	12205	武藤朋幸	6928	平野彰	10244	藪田益資
11962	鶴田實	12210	福原サチ子	10414	北野忠彦	10302	小林義亮
11963	鶴田泰子	12226	辻橋明子	10947	金谷修文	11087	山縣喜美子
12378	遠山元信	12291	高橋武夫	10959	古市進	11088	大田慶子
12489	近藤善則	12309	菅原紀彦	11265	井上千夏	11478	河野直子
13335	松本好正	12319	永田弘太郎	11321	井上希夫	12105	野口いづみ
13336	半田明稔	12338	小山茂男	11620	小林康浩	12185	福岡孝昭
13346	片野スミ子	12378	遠山元信	11657	松村文子	12227	西田進
13347	川村トシ子	12391	山本憲一	11686	大森喜夫	12260	山本以久子
13356	半田由美子	12399	新井昇	12078	奈良千佐子	13677	日出平洋太郎
13426	上田昌子	12894	植木信久	12422	石原康生		
13496	羽鳥和江	12895	植木淑美	12489	近藤善則		山の自然学研究会
13630	寺田正夫	13463	岡田陽子	12529	福山美知子	9732	関清
13631	寺田美代子	13652	牧田一雄	12641	末廣坦	11697	古田寛昭
13652	牧田一雄	13665	土田常次	12652	丸山修一	11757	菊川忠雄
13758	森合孝信	13839	斉藤知茂	12660	藤本慶光	11802	大船武彦
13787	今井秀正	13875	喜多功	12748	織方郁映	12227	西田進
13835	大西攻			13323	宮津公一	12323	舟根章
	渡邊嘉也		00会	13328	向野暢彦	12407	船橋明
	村山昭雄	13203	佐藤允信	13335	松本好正	12576	宮川理一
	中村宏	13243	佐野正之	13720	米倉久邦	13638	小亀真知子
	山下恒夫	13277	本間正士				
	渡部衛	13300	三渡忠臣		アルパインスキークラブ		ゆきわり会
	渡部陣一	13320	大川昭	5718	早川滉	12472	井上隆彦
	湯田芳博	13339	副島一義	6372	石田要久	12520	増田幸雄
	板坂公平	13360	石井孝行	6497	贄田統亜	12523	勝倉達
	湯田勝一		田村利弘	7514	東原進	12572	成合玲子
	湯田良隆			7949	高原三平	12610	三関清
	湯田八十八		科学委員会	8147	福士節子	12676	杉田さかえ
	星清盛	6225	菊池武昭	8187	荻野和彦	12682	山本栄蔵
	星春雄	9742	俵山守男	8273	早川英夫	12734	皆川惠男

越後支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
5021	桜井昭吉	8623	山田智子	13466	佐藤レイ子		鹿野英雄
5403	山崎幸和	8754	坂西徹朗	13506	小林重一		新井智泰
5557	本間宏之	9363	高辻謙輔	13581	浅野亘寛		成海修
5601	南雲克良	10231	桑原一郎	13668	阿部信一		石坂正外
5704	小野健	10786	田辺信行	13682	井春文		浅野初枝
6460	森田健	11464	七沢恭四郎		岩崎敏		長谷川眞砂弘
7159	井出秀雄	12254	斎藤宣雄		横田謙蔵		楡井利幸
8058	加藤明文	12270	横山征平		柿沼美保		小林文子
8188	松井潤次	12277	浜田啓子		五十嵐サツ子		森口高
8273	早川英夫	12883	小野塚高一		五十嵐義明		森田由美子
8275	遠藤家之進正和	12969	治田利治		高橋清治		苗木一徳
8382	加藤紀代子	13352	青木司		山口晋平		柳勇

首都圏Ⅱ

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
	つくも会	13559	大塚忠彦	8618	里見清子	12607	村上直温
4234	原満紀	13565	稲垣哲郎	9868	西本明子	13441	冨樫信樹
11559	西野禎志	14039	椎名キクエ	10339	小泉静子	13605	沼田希一
12196	石岡慎介			10378	小野純江		
12990	諏訪肇		丹水会	10482	柳下棟生		九五会
13019	大槻利行	5136	大森薫雄	10855	中村美津子	9521	川合周
13123	柴山信夫	7510	古谷聖司	10867	佐藤登代子	10482	柳下棟生
13134	徳永泰朗	7751	泉久恵	10905	鈴木裕代	11349	村山裕嗣
13143	鈴木進一郎	7972	和田誠一	11093	足立ふみ	11686	大森喜夫
13176	芦澤敏夫	8896	滝沢芳章	11540	三井吉由江	11921	江口欣也
13189	益田守	9482	山本正基	12489	近藤善則	11946	小野忠道
13203	佐藤充信	9546	込田伸夫		青木稔	11961	田尻一實
13347	川村トシ子	9620	森武昭			12019	木本義雄
13431	佐藤守	9921	乾能尚		山想倶楽部	12035	阿世知義幸
13512	檜山重幸	9945	三好まき子	12196	石岡慎介	12098	手島一郎
13757	佐藤英子	11214	渡邉玉枝	13583	荒井真二	12105	野口いづみ
	及川利明	11524	山下京子	13586	井上功	12147	富田令子
		11525	小島千恵子	13592	向田吉彦	12149	熊本道夫
	01会	12281	國見ゆみ子	13628	中川秀利	12167	廣島孝子
13405	佐藤明夫	12489	近藤善則	13630	寺田正夫	12185	福岡孝昭
13407	上野美裕	13019	大槻利行	13631	寺田美代子	12186	伊豫田滋雄
13425	村松充	13238	綿貫誠一	13638	小亀真知子	13372	勝又一歩
13431	佐藤守	13900	畑島良一	13681	澤田信人	13754	渡辺昌嗣
13757	佐藤英子	13925	渡辺顕次	13693	松村保		
11166	下野武司		関喜義	13731	竹内広弥		緑爽会
13432	下野美穂子		服部善行	13769	中野八千代	9083	横山隆
13441	富樫信樹		上村優子	13765	小林二三子	9303	森恵子
13443	中村光吉		大澤敏子	13601	西田和夫	9831	鈴木快信
13444	七尾一		伊藤敏英			11470	大島洋子
13455	本多博哉		伊藤とも子		アルパイン	11540	三井吉由江
13466	佐藤レイ子		阿部宏		スケッチクラブ		
13477	平井康司			4494	芳野菊子		三水会
13478	平井安乃		山げらの会	4811	笠原健二郎	4932	柴田篤志
13496	羽鳥和江	4756	穴田雪江	6517	木村泰助	5007	川俣俊一
13501	小山内庸人	6928	平野彰	10829	臼田毅弘	7863	砂田定夫
13531	岡田尚武	7669	和田民子	11713	原山恵津子	9086	塩澤厚
13556	柳下忠義	8219	野川初江	12092	菅沼満子	9620	森武昭

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
9811	田中恵美子	12387	成瀬昌基	11489	花澤廣巳	11559	西野禎志
10612	平澤哲臣	12422	石原康生	11499	川畑直美	11598	金井善男
10825	池田和美			11512	本田榮三郎	12892	鈴木秀郎
10959	古市　進		休山会	11524	山下京子	13452	奥田　孝
11826	佐藤正樹	11431	吉田　修	11525	小島千恵子	14002	小宮真理
12211	豊田　茂	11470	大島洋子	11529	松尾美貴子	14099	濱田多喜男
12317	成瀬ヒサ	11481	(故)星野幸太郎	11540	三井吉由江		

信濃支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
4309	保科文人	6457	中島　忠	10327	赤穂　誠	12609	宮島順一
4321	久保田宣夫	6473	塚原賢勝	10351	田中　聡	12660	藤本慶光
4357	井口謙司	6511	金子丞二	10414	北野忠彦	13323	宮津公一
4659	百瀬寿雄	6928	平野　彰	10603	穂刈康治	13501	小山内庸人
4801	田村佐喜子	8768	飯村富彦	11141	石塚克美	13644	有賀良夫
4930	山浦源太郎	9365	清水一郎	11174	古幡開太郎	13646	小口秀男
4987	中野和郎	9447	松林のり子	11265	井上千夏	13684	平林節生
4989	浅輪幸久	9467	垣内雄治	11317	若尾巻広	13990	林　善八郎
6056	宮澤　章	9820	大谷雄次郎	11321	井上希夫	14065	北原孝浩
6219	福井芳隆	10020	鳥橋祥子	12069	長沢　洋		三澤美知子
6372	石田要久	10135	渡辺登司美	12241	下起　始		
6385	原　謙一	10316	宮原岳子	12334	財津達弥		

山梨支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
5023	日本　伸	7728	久保田明宗	11352	小宮山稔	12396	遠山若枝
5364	坂本　桂	7730	内藤順造	11457	菊島芳彦	12430	若月　昇
5499	古屋学而	8565	猪俣鎮夫	11746	小林勝之	12497	平原　守
5644	岩間弘雄	8618	里見清子	12069	長沢　洋	12561	古屋寿隆
5657	清水日出勇	8651	河坂一造	12111	中田一郎	12569	磯野澄也
6653	遠藤靖彦	10920	深沢建三	12196	石岡慎介		
7517	山本　稔	10980	中島雄三	12213	鈴木勝彦		

静岡支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
05027	照内　豊	08230	室伏偉男	10685	榛葉華子	13385	小川正育
05834	大石　惇	09149	山内真行	11586	大村武敬	13453	水野恵子
06737	八木　功	09286	長谷川廣司	12033	赤石秀之	13454	山本久子

東海支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
5283	大口瑛司	11845	石田文男	12797	堀江召浩	13792	吉田俊紀
6730	中世古直子	11903	出原朗	12887	佐野忠則	13962	伊藤武
6797	和田豊司	12421	星一男	12914	梶川あゆみ		佐野美恵子
7259	横田明信	12434	佐野武士	12940	鈴木茂三		寺東郁子
7266	梶田民雄	12739	青木周子	13078	大島忍		平野重夫
7333	安藤忠夫	12746	柴田清康	13273	志賀傳		山下直太
8073	箕浦靖夫	12781	徳島豊子	13301	堀文昭		山本紀子
8875	布目治二	12782	加藤守彦	13433	南川陸夫		
9600	西山秀夫	12783	加藤和子	13769	中野八千代		
10193	辻章行	12785	安藤千鶴子	13775	田中紀		

岐阜支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
5072	平林克敏	9799	朝倉英子	11957	高橋禎子	13296	石崎義昭
5437	白木貞次	9937	水野美代子	12130	若山暢子	13393	小川博
5612	高木碕男	10326	三枝敬子	12164	山本利伎子	13449	小林省三
5613	山本照彦	11008	武田幸男	12359	神山敬三	13457	掛江正通
5626	早田道治	11338	藤田純江	12679	岡田清美	13491	井手尚子
6756	太田義一	11377	池田真由美	12731	戸石二生	13494	大脇美代
7498	佐藤正雄	11533	藤井法道	12744	今峰正利	13516	山本照男
7534	村田正春	11559	西野禎志	12827	林一美	13539	小田幸枝
7550	村橋嘉一郎	11678	高橋妙子	13021	丹羽邦夫	13545	岡田育子
7624	瀬川昴生	11707	堀義博	13208	関本澄子	13723	横田昭夫
7695	平林芳夫	11769	金森嵩	13209	三宅一生	13846	堀田その子
7826	東司	11770	中島眞一	13212	若井登久雄	13995	縄田さかゑ
8016	高木基揚	11797	久野菊子	13217	国定陽之	14145	鈴木寛人
8749	廣瀬正	11799	野村百合子	13220	山本健太郎		
9702	村松哲彦	11891	西条好迪	13249	長屋桂子		

京都支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
5373	齋藤惇生	9903	阪本公一	11599	長宗清司		秋野弥寿子
5917	清水一男	9976	山崎大造	11940	木村芳弘		岩本彩子
6848	横田明男	10165	山田和男	12095	金谷昭		緒方由子
7229	小島一喜	10270	駒井治雄	12101	能田直子		加納由紀子
7257	酒井展弘	10454	山村孝夫	12629	松下征文		小松志信
8187	荻野和彦	10500	高橋修	12764	柏木俊二		住吉朋和
8244	横田和雄	10644	津田美也子	12819	田中昌二郎		堀内潭
8690	田中節子	11122	山本久雄	12822	明井克子		増尾翼
8720	秋野子弦	11263	平木清一郎	12972	伊原哲士		松本儀人
8751	関本俊雄	11776	磯部純	13483	上平武信		湯浅みや子
8938	大槻雅弘	11537	中川寛	13672	池田祥祐		湯浅康夫

富山支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
5791	木戸繁良	9953	相澤増平	11717	森修作	13276	河村靖晴
9055	石浦邦夫	9974	有沢辰彦	11740	平田信康	13399	本郷潤一
9898	高柳清美	10684	近藤晋	12272	谷村正則	13511	道正政信
9899	山田信明	11298	松本睦男	13267	金尾誠一		

石川支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
6327	澤村真治	8116	織田伸治	11967	西嶋錬太郎	13166	西出恵一
6756	太田義一	8749	廣瀬正	12564	植崎滋	14005	中山誠
7137	池内信彦	10870	関本邦晴	12620	前川陽	14015	安田二三男
7459	岡本明男	11108	大庭保夫	12959	前田健進		大庭太洋子
7463	中川博人	11892	村上哲	12674	木原清		

福井支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
10622	宮本数男	12212	小林順子	13424	長谷川直司		山田浩一
10992	安立勝重	12239	志摩茂	13784	牧田正弘		内山りえ
10996	井上泰利	12260	山本以久子	13864	立川義秋		中山勇
10999	関本健一	12429	福田澄子	13871	岸本トシエ		白石初男
11053	松村進	12487	宮前庄三	13872	大和康郎		村中康雄
11087	山縣喜美子	12627	野路哲治	13904	川口宗		山本欽治
11088	大田慶子	12683	江田晃	14091	田路フサ子		野路幸男
11095	舩田洋子	13086	田路繁男	18259	井上彪		
11933	清水秀紀	13219	木村明		福岡八郎		

関西支部

会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名	会員番号	氏名
4079	久保三朗	9708	能田忠明	13932	溝俣美恵		太田由希子
4498	阿部和行	9994	小寺佳美	13960	滝川敏康		川崎安枝
5008	宗實慶子	10380	山内幸子	14159	岩崎しのぶ		衣笠満三
5314	金井健二	10353	城隆嗣		金山チヨ子		小池克彦
5483	清瀬祐司	11111	大津陸郎		田中昭治		土屋興次郎
6038	井谷孝	11474	井関正裕		菅生佳余子		薦田佳一
6095	宗實二郎	11478	河野直子		石田幸弘		清水寛治
6555	新本政子	11547	大塚和子		大谷栄子		竹内広幸
6779	中島隆	12791	松波幹夫		玉田美津子		鴨井克彦
6988	金井良碩	13354	芳村嘉一郎		中村彰利		大野輝雄
7931	重廣恒夫	13459	久保和恵		中村美子		稲垣重明
8488	上中俊治	13528	浦上芳啓		平出雄子		横井清美
8545	中谷絹子	13568	茂木完治		増田文子		広重忠
8673	川戸昭三	13695	星根文子		宮本信夫		中島常雄
9012	阪下幸一	13788	森澤義信		吉田慎平		島田一志
9013	阪下悦子	13840	廣田猛夫		浅野一夫		吉住久美子
9075	柏木宏信	13887	山本一夫		植松尚子		芳村和子
9602	大塚宏圀	13899	須磨岡輯		石部正子		高畑俊生

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
	萩本祐香		前田喜久子		住田源隆		藤尾紀彦
	青木昭		小林優子		須磨岡岳		
	重廣元子		岸本祐太朗		逧田文昭		
	大和紘		小林祥甫		万代達生		

山陰支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
4852	小椋凱夫	6667	柴田嘉彦	10520	岩田惇	12807	早本和佳子
5404	高田允克	7835	佐藤衛士	10823	吉岡淳一	13177	伊澤寿高
5483	清瀬祐司	8228	白根一	11130	影山容子		遠藤佳枝
6613	藤井信一郎	9724	長田健三	11149	遠藤栄子		船越富江
6621	福嶋泰夫	9725	飛田彰	11358	松下順一		佐藤瑞穂
6637	篠原千秋	9726	影山収	11363	吉川明秀		庄司純子
6641	谷野彪	10269	福嶋祐二	12538	林順一		

広島支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
3087	本片山数雄	13125	田中稔靖		弘中和弘		河野一夫
4631	鈴木康仁	13293	松島宏		吉村愛子		益本秀夫
6953	種村重明	13342	田中勝彦		吉村光		後藤昭
7020	平田恒雄	13436	斎陽		堀美岐子		上田史加
7091	八幡浩	13570	国枝忠幹		丸尾真哉		小田良二
8216	吉見良一	13595	三好勇		平城知也		堀内功
11549	吉村千春	13705	佐々木邦彦		稲居道弘		山本房恵
11941	藤川昌寛	13714	井ノ口孝臣		野間みどり		福田美紀子
11953	池本喜浩	13849	野島信隆		森益江		木坂美智子
11958	兼森志郎	13850	坂本豊		三津谷律子		森仁義
11964	岩内秀昭	13853	串田和美		栗栖恒夫		田川正明
11966	岡谷良信	13854	小林敏行		栗栖幸子		中山俊江
11970	新山まゆみ	13879	佐久間智子		久保木修		堺谷信雄
11990	原広美	13914	牟田泰三		田中富恵		平岡ケイ
12662	野間弘	13991	中村昭彦		吉村寛		旗手節子
12663	木村知博	14044	平賀武雄		宇根正経		滝川瑛子
12671	兼森路子	14079	内藤正美		稲垣克磨		常盤純子
12672	杉村功	14080	原野幸男		片山月夫		角光真
12673	長谷川忠彦	14140	八幡紀子		伊藤道子		小野和明
12680	前垣壽男	14285	森茂樹		小田里子		杉本陽二
12689	羽奈傅		谷多佳子		田広典訓		松井富美江
12690	高田晃範		小鷹狩京子		宇根千鶴子		谷断二
12692	山田雅昭		田村貴代子		竹本栄一		白川勝信
12693	佐々木弘磨		加藤弘		奥冨久枝		平田三男
12698	紺野昇		長門聡美		吾郷成子		宮本由美子
12700	豊田和司		石井一行		広田忠彦		
12709	坂本薫		前垣佳代		沢村三奈		
12713	山本和彦		畠山清子		堀啓子		

福岡支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
6222	中馬董人	8140	大石義豊	11763	森山幸美	12988	平山正明
6838	松本康司	8893	川里弘孝	11844	江上清治	12989	淀川雅之
8125	副島勝人	9389	藤野忠臣	12365	塩田重美	13316	松隈　茂
8134	斉田貴典	9506	浦　一美	12920	高木荘輔		
8136	深田泰三	10309	中山　健	12931	竹原隆義		

北九州支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
4325	秦野一彦	13530	浦田和夫	13983	森永義忠		山下定治
9763	伊藤禎洋	13532	馬場基介	13986	室津健次		山下富美子
9765	林　一夫	13533	磯野文雄	13987	宮城尚志		坂本千佐子
10448	江頭精一	13534	舛木　隆	13991	中村昭彦		藤山辰乃
10661	石田隆志	13541	高畠拓生	13992	山田武史		室田安代
11395	大庭常生	13642	末吉史忠	13994	楠田和彦		大井銀子
11427	日向祥剛	13643	関口興洋	14045	池田暁彦		森本信子
11454	井上　佑	13722	藤田　傳	14046	高城季美子		八木　励
11467	篠田勝行	13738	片山俊昭	14051	三木靖子		伊藤トモエ
11990	原　広美	13739	片山礼子	14079	内藤正美		重宗達夫
12364	細川　功	13743	橋本建一郎	14080	原野幸雄		百田道子
13465	大楠益弘	13763	金光康資	14081	塩屋　薫		三木順一郎
13471	板倉健一	13804	横山洋子		三坂武夫		新谷　諭
13499	伊藤久次郎	13810	西村俊二		立野卯三男		弘中留三
13514	橋本美和	13812	吉岡千津子		八木国子		角田政信
13520	西村信子	13819	太田　満		立石サツミ		安富寛子
13523	浜松礼子	13980	中島篤巳		佐藤照美		木村ヤヨヰ

東九州支部

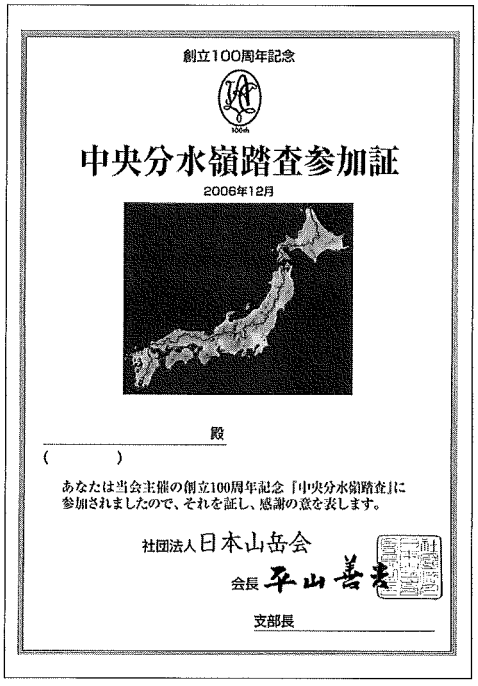
会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
4375	橋本祥案	10912	飯田勝之		安部可人		田畑和顕
5908	梅木秀徳	11305	高橋康利		遠江洋子		西山隆司
6062	佐藤浩幸	11315	佐藤正八		長野珪子		小長和宏
8180	三浦敬志	11425	安藤　幹		得丸芳子		羽田野俊幸
8325	西　孝子	11965	児玉章良		足立喜美子		加藤雅子
8582	星子貞夫	12347	西　あずさ		石川洋佑		米田孝士
8595	首藤宏史	12605	後藤利雄		伊賀真由美		坂元　弘
8614	興田勝幸	12763	菊田匡秀		斉藤晋一		高橋鉄郎
8758	大林正彦	13135	園田暉明		安部　愛		柿本栄二郎
8765	加藤英彦	13141	佐藤秀二		中根　亮		財津正美
8940	甲斐良治	13161	八重康夫		境　卓也		佐藤善則
9196	阿南寿範	13281	福丸勇三		池辺明美		渡部昭三
9193	安東桂三	13997	中野　稔		植木　博		今山アヤ
9275	宇津宮隆史	14024	田所歳朗		藤井啓一		広瀬俊治
9635	荒金通子	14095	後藤　実		大久保成幸		飯田ひとみ
10589	野村芳雄		牧野信江		飯田紘一		ヴィカス・スード
10810	徳永昌弘		安藤セツ		興田　勝		

熊本支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
4439	菅　隆雄	11771	加藤功一	14119	緒方　隆		中根美代子
5421	本田誠也	12100	能田　成	14180	中根俊男		松岡啓子
6659	田上敏行	12101	能田直子		加藤百合子		鎹　百合子
8411	松本莞爾	12909	永谷誠一		松岡栄治		村尾恵子
10080	廣永峻一	13852	石井文雄		鎹　正博		
10422	藤本多加志	13845	加藤　明		椎葉幸介		
11538	丸尾龍一	13889	安場俊郎		村尾保義		

宮崎支部

会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名	会員番号	氏　名
5120	石井久夫	12810	石川悦子	13065	十川むつ子	13781	多田登美子
9666	大谷セツ子	12816	日高研二	13068	日高佐智代	13790	松山幹男
9667	岡本真理子	12817	乾　正太郎	13069	大崎和子	13818	櫻木　勉
9674	井野元繁	12877	永田利昭	13093	松元正明	13820	橋口邦彦
9683	福森利明	13025	松元律子	13098	木村博行	13821	橋口節子
9688	田村哲朗	13027	谷口ウメ	13236	別府正保	13826	緒方路子
9691	児島実照	13029	清水弘子	13253	野中清義	13831	恒吉克範
9878	前原満之	13032	川越典子	13264	中田憲男	13832	恒吉詔子
9973	服部敬二	13033	金丸静子	13298	永友啓子	13833	服部岩男
10480	田村充子	13035	安藤昭喜	13313	矢野亮子	13834	服部澄子
10735	荒武八起	13045	藤井正子	13427	高山　侃	13836	栗林淳子
10965	曽我恒夫	13049	清家順子	13599	長嶺弥恵子	13877	弓削達雄
12057	都甲豈好	13051	藤川弘子	13613	浅井　宏	13989	内山憲一
12062	日高宗平	13054	末永軍朗	13614	山内　覚	14006	武内義雄
12240	川畑康雄	13055	新井律子	13615	黒岩タカ子	14007	武内浩子
12552	永峯麗子	13059	前田龍三郎	13623	酒井保男		篠原栄一
12562	有木重昭	13061	谷口菊美	13662	水永一芳		
12630	吉田直人	13062	谷口敏子	13780	多田周廣		


創立100周年記念

中央分水嶺踏査参加証

2006年12月

殿

(　　)

あなたは当会主催の創立100周年記念「中央分水嶺踏査」に参加されましたので、それを証し、感謝の意を表します。

社団法人日本山岳会

会長 平山善吉

支部長

中央分水嶺踏査参加証

ここに記載した、中央分水嶺踏査に参加した全ての人々に「中央分水嶺踏査参加証」を差上げた。

青い海に囲まれた緑の日本列島の真中に赤い中央分水嶺が通っている図を中央にすえた。

参加者の氏名を会員番号と共に毛筆で記入した。全国の各支部の踏査の参加者には、会長の署名の下に支部長の署名も載せてある。

裏面に各自の踏査記録として、日時とルートなどを記入出来る。当初フィナーレ登山にあわせて平成18年6月に全員に配布するべく準備したが、日本山岳会会長印が反転していたため、再度作成した。

年末の名古屋での年次晩餐会で、北海道の新妻支部長が代表して会長からこの参加証を受取った。この中央分水嶺に参加した全ての人々の記憶に残る記念になることを願っている。

資料８　踏査を報ずる新聞記事

今回の中央分水嶺踏査に関して多くの新聞報道がなされた。

掲載年月日	新聞名	見出し	見出し
2004/ 4/14	日本経済新聞	「日本の背骨」踏破に挑戦	中央分水嶺 5000 キロをリレー
2004/ 6/29	秋田魁新報	東北の“背骨”を調査	県内の分水嶺 300 キロ踏破へ
2004/ 7/ 2	秋田魁新報	奥羽山脈 300 キロ踏査の夢着々	
2005/ 1/ 3	四国新聞	ルートの８割は藪こぎ	中央分水嶺 5000 キロ踏査
2005/ 1/ 6	静岡新聞	ルートの８割は「藪こぎ」	中央分水嶺 5000 キロ踏査
2005/ 1/ 6	東奥日報	中央分水嶺 5000 キロ踏査	ルートの８割は藪こぎ
2005/ 1/ 7	山陰中央新報	中央分水嶺５千キロ踏査	ルートの８割は藪こぎ
2005/ 1/ 7	中國新聞	中央分水嶺 5000 キロ踏査	ルートの８割は藪の中
2005/ 1/12	京都新聞	中央分水嶺 5000 キロを踏査	最高地点は乗鞍岳 最低は新千歳空港
2005/ 1/18	長崎新聞	中央分水嶺 5000 キロを踏査	ルートの８割は藪こぎ
2005/ 1/19	大分合同新聞	ルートの８割は「藪こぎ」	中央分水嶺 5000 キロ踏査
2005/ 1/21 ～ 1/25	山形新聞	山形の中央分水嶺踏査の記録①～④渡辺誠	
2005/ 2/ 2	新潟日報	日本の背骨 全容は？	中央分水嶺 5000 キロ日本山岳会藪こぎ踏査へ
2005/ 2/17	南日本新聞	大淀川・川内川つながっていた	足せば全国６位
2005/ 2/21	宮崎日日新聞	大淀川・川内川つながっていた	小林市に分岐点
2005/ 6/27	大分合同新聞	原点回帰 山への挑戦	道なき道やぶかき分け中央分水嶺を踏査
2005/10/ 6	朝日新聞大分版	日本の背骨に挑む	中央分水嶺 5000 キロを踏査
2005/12/ 7	読売新聞	日本の青骨 5000 キロに挑む	野を越え山越えグリーンも越えて
2006/ 4/25	信濃毎日新聞	分水嶺担当の踏査終える	
2006/ 5/12	福井新聞	“日本の背骨”県内部分 160 キロ 中央分水嶺を踏破	延べ 150 人２年がかり 道なき道こつこつ
2006/ 6/18	信濃毎日新聞	「中央分水嶺」 5000 キロ踏査霧が峰でゴール	
2006/ 6/18	日本経済新聞	中央分水嶺踏破に成功	
2006/ 6/29	秋日魁新報	開始から３年 踏査終える	延べ 256 人総歩行距離は 475 キロ

「日本の背骨」踏破に挑戦
中央分水嶺5000キロをリレー
日本山岳会、100周年事業

日本経済新聞(2004.4.14)

中央分水嶺 5000キロ踏査
霧ケ峰でゴール

信濃毎日新聞(2006.6.18)

野を越え 山越え グリーンも越えて
日本山岳会100年 中央分水嶺踏査
日本の背骨 5000キロに挑む

読売新聞(2005.12.7)

2005年(平成17年)1月19日 水曜日
ルートの8割は「藪こぎ」
中央分水嶺 5000キロ踏査
日本山岳会の百周年事業
延べ約1千人が参加
最高・乗鞍岳 3026メートル、最低・千歳20メートル

大分合同新聞(2005.1.19)

(注) 大分合同新聞，信濃毎日新聞の記事は共同通信の配信による。

資料9

全国分水嶺(界)サミット

このたび日本山岳会が実施した「中央分水嶺踏査」に先立つ十数年前に始まり、第十三回まで実施された「分水嶺(界)サミット」という企画があった。中央分水嶺をその区域に持つ全国の地方自治体が毎年一回集まり、様々なテーマで分水嶺について語っていた。

市町村合併の動きが高まり、それぞれの自治体の状況が異なってきたので、平成12年(2000年)に解散した。合併に伴う整理などのため資料なども散逸し、担当した人々も移動し、今や人々の記憶も薄れつつある。日本山岳会の分水嶺踏査に当たっていろいろとご支援をいただいたご縁もあり、ここにサミットの経緯を記録にとどめておきたい。

この企画を提案し、第一回を実施したのは、兵庫県氷上町(現丹波市)であった。氷上町石生(いそう)は本州の最低標高の分水嶺の地点(海抜95メートル)として知られ、「水分れ」(みわかれ)地点にいろいろな施設を作り、街づくりを実施してきた。水分れ橋があり、「水分れ資料館」では分水嶺をテーマにした多くの資料を見ることが出来る。

氷上町史によると、「水分れのまちサミット(川と野と文化を考えるシンポジウム)」は、昭和63年(1988年)7月29日に氷上町農協会館で29町村の参加を得て開催された。

分水嶺(界)を持つ全国の市町村が共有する優れた環境資源と、それらが育んできた歴史や伝統文化をともに振り返りながら分水界のまちの活性化の方策を探ることをテーマに、豊かで快適な地域づくりについて考えるものであった。

活動母体として「全国分水嶺市町村協議会」が結成され、全国に約500あると考えられた中央分水嶺所在市町村のうちで、40の町村が名を連ね、毎年持ち回りでサミットを開催してきた。タイトルは「全国分水嶺(界)サミット」として毎年各開催地でサブタイトルがつけられて、基調講演やパネルディスカッションが活発におこなわれた。パネリストには関係官庁のお役人や大学の教授などに加えて、直木賞作家の井出孫六氏や声優の大山のぶ代さん、俳優の菅原文太さんなども名を連ねた。毎回、全国から30～40の町村が参加し、開催した自治体も平均して約600万円ほどの費用を費やした。分水嶺を共有する立場から、主として水資源を考え、その保存、活用をテーマとして議論したことがうかがえる。

そうした活発な活動を継続している間に、市町村合併の大きな波が各地方自治体に押し寄せ、中央分水嶺を共有するというテーマでお互いが集まることが困難になることが予想され、2000年に東京に集まって協議会の解散を決議した。解散時に、協議会に参加していた地方自治体は20の町、20の村、計40町村であったが、2006年末現在で同じ名前を持っている自治体は11に過ぎず、13の市、13の町、3の村、計29の地方自治体になった。

名前が変わり、大きな市に合併されたとはいえ、分水嶺を共有してそのことを共に考えてきたことは消えてはいかない。今回の日本山岳会の中央分水嶺踏査をいろいろなところで支えてくださった各地方自治体のご協力に感謝して「全国分水嶺(界)サミット」の経緯を簡単ながら記録にとどめることとした。

次ページに、北は岩手県から南は熊本県にわたる全国各地で、13回まで開かれたサミットの概要を表示してある。

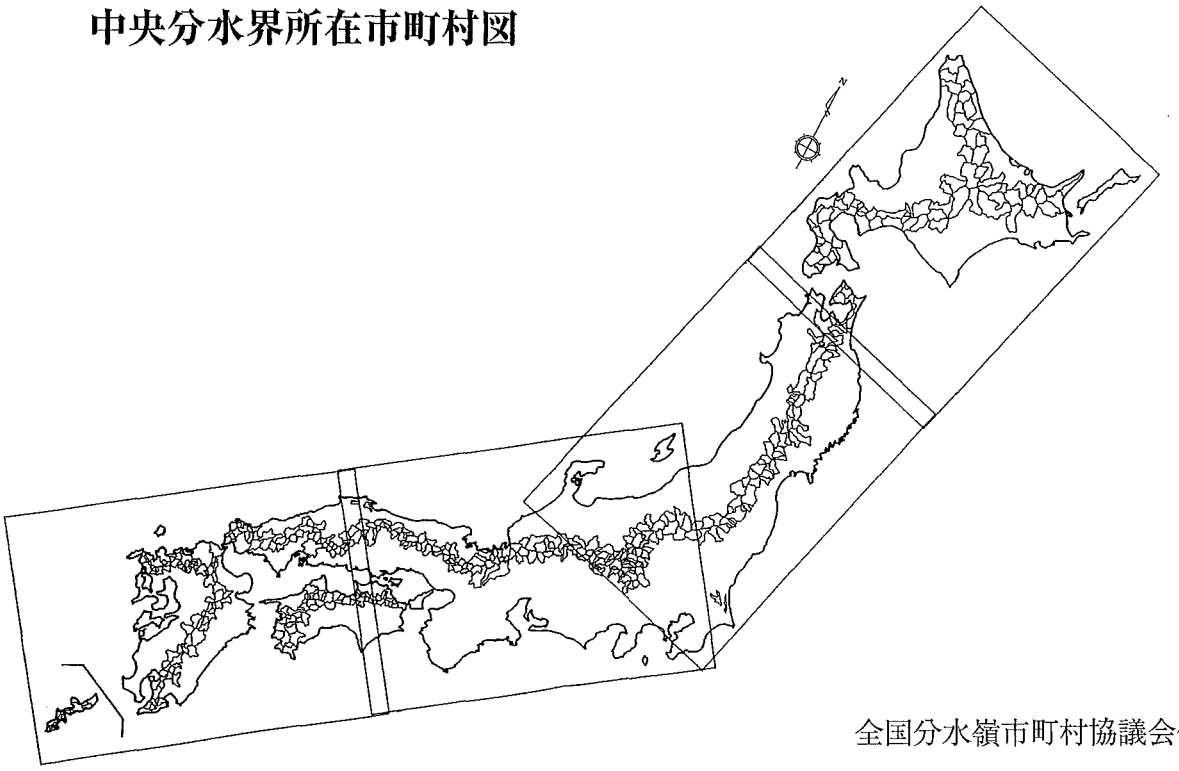
分水嶺踏査委員会　藤本慶光

「全国分水嶺(界)サミット」開催経緯

回　数	開催場所	開催月日	サブテーマ
第一回	兵庫県　氷上町（丹波市）	1988，7,28～29	川と水を考えるシンポジウム
第二回	長野県　楢川村（塩尻市）	1989，7,27～29	水の源　人の故郷
第三回	宮崎県　椎葉村	1990，8，6～7	水の源　人の故郷
第四回	広島県　上下町（府中市）	1991，8，2～3	町づくり、子供や孫への贈物
第五回	岩手県　安代町（八幡平市）	1992，8,27～28	分水嶺から始まるピュアウォーター交流を目指して
第六回	熊本県　高森町	1993，9，9～10	
第七回	岐阜県　高鷲村	1994，8,30～31	長良川水と健康サミット94
第八回	高知県　檮原町	1995，8,28～29	生命を守る森と水　だれが守る森と水
第九回	岡山県　八束村（真庭市）	1996，8,21～22	分水嶺から豊かな未来を考える
第十回	愛媛県　久万町（九万高原町）	1997，9,10～11	森と水と人の関係
第十一回	広島県　神石町（神石高原町）	1998，9，2～2	守ろう自然と緑と水
第十二回	岐阜県　久々野町（高山市）	1999，8,24～25	水と緑と私たち　縄文人のメッセージ
第十三回	熊本県　蘇陽町（山都町）	2000，8，2～3	人と自然の共生　蘇陽風のメッセージ
	東京都　麹町	2000,12，6	全国分水嶺市町村協議会解散決議

注　(　)内は現在の市町村名をあらわす

中央分水界所在市町村図



全国分水嶺市町村協議会作

資料 10

添付した CD-ROM の内容について

中央分水嶺踏査委員会

本書に添付した CD-ROM には、各支部・同好会が踏査した結果を、踏査委員会であらかじめ提示した書式にそって、原則として 1 山行につき 1 枚提出していただいたものを全てとりまとめたものである。記載内容は、各支部・同好会の分水嶺担当責任者の校正をへたものをそのまま掲載している。ただし、書式についてはなるべく統一するように分水嶺委員会事務局で手を加えている。報告書の総数は 1,032 枚である。

各報告書のファイルは、北から南へ、下記の 4 つの区分で、6 ブロックと青函トンネルで構成されている。ただし、北海道と九州は 1 区分 1 ブロックである。

また、区分毎に、三角点・ピーク・峠などにチェックポイントを設けて記号を付けた。その詳細も表で掲載している。踏査にあたっては、出来るだけ、各ポイントで経度・緯度・標高を GPS で測定するように山行報告書記載者に依頼した。

1. 北海道ブロック：宗谷岬～白神岬 [報告書 No.1 ～ No.245]
   チェックポイント；H001 ～ H245
2. 東日本：龍飛崎～権兵衛峠（長野県）
   青函トンネル：白神岬～竜飛岬 [報告書 No.1 ～ No.3]
   チェックポイント；H245, E001
   東北ブロック：龍飛岬～甲子峠 [報告書 No.1 ～ No.155]
   チェックポイント；E001 ～ E321
   関東・甲信越ブロック：甲子峠～権兵衛峠 [報告書 No.156 ～ No.286]
   チェックポイント；E321 ～ E655
3. 西日本：権兵衛峠～関門トンネル門司側
   中部ブロック：権兵衛峠～大御影山 [報告書 No.1 ～ No.94]
   チェックポイント；E655 ～ E659, W001 ～ W143
   近畿・中国ブロック：大御影山～関門トンネル門司側 [報告書 No.95 ～ No.317]
   チェックポイント；W143 ～ W678, K001
4. 九州ブロック：関門トンネル門司側～佐多岬 [報告書 No.1 ～ No.128]
   チェックポイント；K001 ～ K253

ファイル名は、A－(B)－C－D (E) とつけている。各記号の箇所には、次のようなデータが記載されている。

A：上記の 4 つの区分の名称。
B：区分毎に、北から南への通し番号。
C：担当した支部名。北海道については、1 支部で担当したので、記載を省略している。同好会については、首都圏 1、首都圏 2 と記載された中に含まれている。
D：各支部・同好会単位で、提出された報告書を整理するために、受付順に事務局で付した番号。
E：踏査区間を示すために、チェックポイントの番号または地名などを記載している。

なお、広島支部では、担当区間の東半分については、以前に本会会員が中心になって分水嶺踏査を行っており、今回はその区間についてはチェックポイントの GPS 測定のみを行った。そこで、その際の踏査報告書の当該部分（80 頁分）を広島支部のアイコンの中に掲載している。

（森　武昭）

以　上

資料 11

The exploration of the great divide in Japan

In 2005 the Japan Alpine Club (JAC) celebrated the centennial anniversary of its founding. As one of the projects for its celebration, JAC had explored the great divide throughout the Japanese archipelago. Here, the great divide is the name given to the mountainous ridge in which the waters on each side flow to the Pacific Ocean, the Sea of Japan and the Sea of Okhotsk respectively. This divide stretches not just across Honshu (the mainland of Japan), but along the entire route from the island of Hokkaido to Kyushu over a span of 5,000 kilometers. In other words it lies along the topographical backbone of the mountain range of Japan.

This idea for the project originally came from JAC member, Y. Kondo, who wanted to search where the water comes from and where it flows to as well as mountaineering. Having indicated all the peaks, ridges and cols of the great divide, he plotted them on a graph in addition to drainage systems in advance of his proposition to JAC.

The JAC committee for the exploration of the great divide planned for approximately 6,000 members nationwide to join this project. The whole range was split into 27 sections and the 25 regional branches and two groups belonging to metropolitan areas each took charge of one section.

More than 1,100 members and some non - member collaborators worked hard to accomplish the project and managed to mark the whole line of the great divide. At the beginning of 2004 each group started with a preparatory search of the kinds of difficulties that are not encountered on normal mountain trails which are well maintained and fixed with guides. And in fact exploration lasted for almost three years.

As is well known, in Japan almost 70 percent of the land is covered with woods or forests which bring tremendous benefits, both culturally and practically. At the same time, when it comes to exploring ridges along the great divide, those forests make checking the exact line of divide difficult. There are no paths or tracks and obstacles and "undergrowth—thickets of bamboo grass—hinder the way". Therefore, the snow season was often chosen over summer to enable us to explore these areas.

Here, handy GPS receivers (Garmin made) were brought into play. The topographic map (1/25000) was installed in each receiver so that the user's position could be determined along with the direction and distance to a target, by using the navigation system which works even in mountainous areas. We found it very helpful to record the point data as we searched and to confirm our locations as we stood in forests where we could easily have lost our way. The receiver is now considered to be one of the most useful instruments for mountain explorers.

From a topographic point of view the Japanese archipelago does not consist of a single island arc but six connected island arcs. In the individual island arc, mountain ranges run parallel to the axis of the island arc and the great water divide runs on the main ridges of the mountains. However, at the composite part of two or three island arcs the run of the great water divide does not always correspond with the axial direction of mountains. These features are observed in Hokkaido (northernmost island) and in the central Honshu (the main island) as shown on the map (inserted in the review paper at p. 19).

So the great divide does not always run on some of the famous peaks higher than 3000m in the Japan Alps (e.g. Mt. Hotaka 3090m, Mt. Kita 3192m, and Mt Fuji 3776m too.) The highest peak on the great divide in Japan is Mt. Norikura (3026m). And

the lowest point (96m), which is currently open to public, is located on the Isou plateau in Hyougo prefecture. The locals set up "The great divide observatory trail" along which the public can walk on the water divide park and the ridge near by.

Actually the lowest point (20m) really is located in the landing field of Chitose airport of Hokkaido. Regrettably, however, only airport personnel are allowed across. The only prohibited area of the trace is the edge of the crater of a volcano, Mt. Asama which has been active since 1972.

In Japan we don't have any designated trail yet like the Continental Divide Trail in the U.S.

The great divide in Japan not only directs the flow of water, but also has a major impact on several other areas. For instance, it leads to differences in climate features, in vegetation, and in scenery on each side. And local political boundaries in turn generate unique customs and cultures. Disputes about water irrigation rights have also occurred. At one time exchanges were carried out frequently between both sides of the divide through passes of the ridge. Now some of the passes are paved over, and tunnels have been opened under them as part of a national highway across the great divide.

Around passes of the dividing mountains many folkloric and historic questions concerning the passes have been left for future investigation. But we have already made some unique discoveries. One was finding that the divide passed over the green in a golf course. It amused the group, especially after struggling through the thicket. Another very special case was marking over the shooting range of the Japanese Self - Defense Forces. The range was opened to our group for two days as a special favor in order to support our exploration.

In the extra sections, where the water divide runs underwater, we must mention walks in two tunnels: Seikan Tunnel (between Hokkaido and Honshu), and Kanmon Tunnel (between Honshu and Kyushu). Seikan is about 250m below sea level, and about 25km long. Kanmon is about 56m below sea level and about 4km long.

The individual pages on which the data obtained during a trace were recorded with some photos, totaling 1032. All of them are filed on a CD−ROM attached to this booklet.

Finally the whole distance of the great divide in Japan, over 5,000km was entirely traced on foot by the more than 1,100 participants. Here we can now publish this booklet as the result. Thanks to this enormous undertaking, our members have been reminded of the original point of mountain climbing and have been inspired again to nurture the pioneer spirit that the JAC has aimed for since its foundation. Our members feel now the bonds that unite them are stronger, and hope that some part of the Great Divide Trail in Japan will be internationally recognized in the future.

(Committee for the exploration,
Michiko Fukuyama)

あとがき

ここに、日本山岳会が全国的な規模で進めて来ました、中央分水嶺踏査の報告書が出来上がりました。1,000 人以上の会員が、一般参加者の協力も得て遂に、日本列島の大分水界 5,000km 余りを足で紡ぎ、線でつないだ踏査の記録であります。この会員の寄稿による、まさに手作りの報告書をまとめるに当たり、藤本貴也国土地理院院長よりご祝辞をお寄せいただき、まことに有難い事でございます。

分水嶺という言葉のもつ響きは、なかなかに詩情を誘うものですが、踏査の実際は、地形図を頼りに新兵器 GPS を駆使しながら、踏み跡もない径を時には藪漕ぎを強いられ、時には方角を見失うような行程をも含む探検山行ともいえるものでした。この完遂は全国各支部会員の熱意と実力なくしては得られなかったことは言うまでもありませんが、実施に移す当初には無理な企画と危ぶむ声があったことも事実で、その正直な報告も見られます。

しかし踏査の過程で、会員は会の目指してきたパイオニア精神を、登山の原点を、思い起こすこととなり、会員相互の絆が強められ、この経験を今後の活動に活かそうとする意欲までも持つに至っています。支部報告に異口同音に述べられたこうした心情に、編集子はとりわけ感動を覚えたものです。

日本の山岳景観を特徴付けている豊かな森の脊梁山脈に沿って、多彩な日本の風土が息づいていることを認識できる機会でもあり、気候、植生、峠に纏わる歴史などなど、沢山の知りたいこと、調べてみたいことがありました。この冊子内にそれらを余話という形で取り上げてありますが、紙面や時間の都合もあって、今回執筆は少数の方々にしかお願いできませんでした。

また、特異な分水界、例えば、ゴルフ場内、自衛隊の演習場内、そして雨量により流域を変更させる堰などの発見があり、兵庫県の水分け公園に見られるように、分水嶺に関心を持つ地方自治体の存在も知りました。

創立以来百年で初めての試みなのです。3 年有余をかけた踏査となりましたが正直なところ、大分水界上に足跡を印すことで精一杯であったようにも思えます。この報告書のために地学的観点から特にお書きいただいた、小疇尚氏の総説から、編集子は「分水界は生きている」の感を強く持ちました。大自然の営みの環の中で、日本の中央分水嶺は今後どのような変化を辿るのでしょうか。テーマを発展させていく大きな楽しみが将来に残されています。

最後になりましたが、この踏査を通しまして、色々な形でご支援いただきました関係各位に、またこの報告書作成にご尽力下さった方々に、心より厚くお礼申し上げます。

中央分水嶺踏査委員会、編集担当　　福山美知子

創立100周年記念事業
日本列島 中央分水嶺踏査報告書

2007年1月30日　　第1版第1刷発行

編　集　社団法人 日本山岳会
中央分水嶺踏査委員会

発　行　社団法人 日本山岳会
〒102-0081　東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
Tel.03-3261-4433／Fax.03-3261-4441
印刷・製本　技報堂

落丁・乱丁はお取り替えいたします。
本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

価　2,000円